THE CENTRAL REVIEW

中央公論

第廿七年 第五號

第二百七十八號

新廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

綠葉紅花趣味滿誌

文藝倶樂部

五月一日發行 第十八卷第七號 正價廿五錢 郵税二錢五厘 ◉前金十六冊分三圓九十錢

東京本町 博文館 振替二〇四番

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

見よ!! 社會學界の明星現はる

文學士 樋口秀雄先生新著

最新刊

社會學十回講義

菊版上製金文字入頽美本全一册
定價金一圓五拾錢小包料拾貳錢

曰く社會教育、曰く社會倫理、曰く社會改良、曰く社會問題、現代の大問題は社會の根本的智識を俟つて始めて解決すべきのみ。此最急最要の智識を供するものは社會學に非ずや社會學の原理を最も平易に簡明に而かも要を悉して叙述せるものは獨り此書あるのみ而して著者が斯學のオーソリチーたるは敢て贅言を要せず。

文學士 樋口秀雄先生著 ○定價金八拾五錢郵税六錢

社會學小史

上は希臘の思潮に溯り中世を經て近世に至る社會的研究の發展の大觀を叙したるもの。社會學十講と相俟つて必讀すべき好著なり。

奥村亮先生編◉大好評◉定價金壹圓廿錢郵税金八錢

最近政界之眞相

犬養毅、大石正巳兩氏が相携て政界の眞相を說破せる大快著は即ち此書なり。本書を讀まざる者は共に政界を談る資格なけむ。

發行元 東京市神田區錦町一ノ十六 振替口座東京三四〇九番 二松堂書店 電本三七一七

文學博士 南條文雄先生新著

新刊

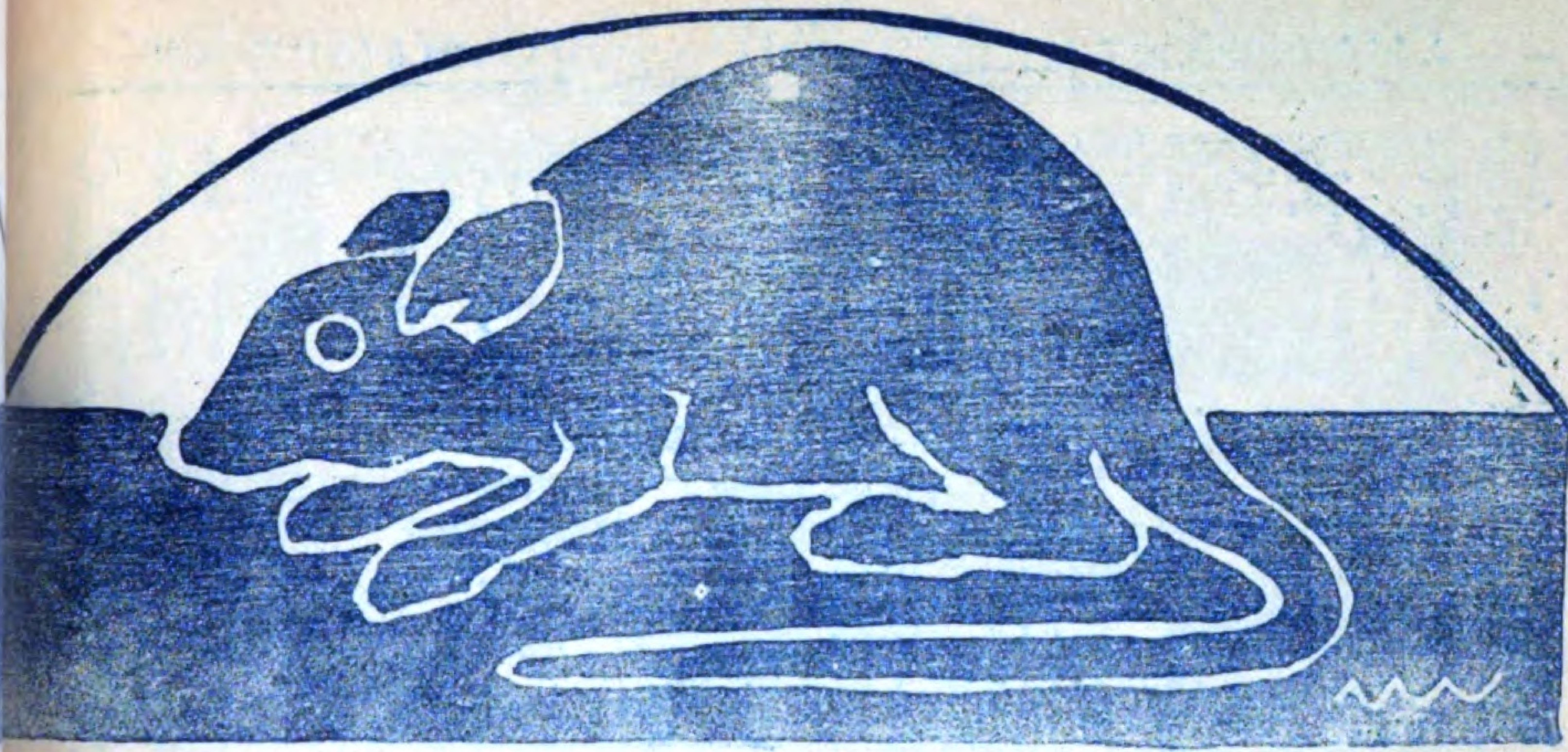
安心錄

◎菊判三百五十頁
天金付頗美本函入
正價壹圓拾錢
送料拾錢

南條博士の安心錄出づ！博士はもと是宗教界、教育界の宿老。教義を布き、教を垂るること既に業に久し。東奔西走、未だ曾て一日も怠らず、足跡國内に普ねき所以のもの、一に高潔の人格と熱烈なる至誠あるがためなり。而して此等は是れ博士胸中の琴線。物に觸れて鳴り、人に觸れて響きたるもの、その鳴るや教訓となり、その響くや感化となる。心に不安あるの人。煩悶あるの人。將又立身を希む者。出世を望む者。速かに斯書に依つて活潑々地の人となれ、又以て速かに人生の歸趣を解せよ。眞に是れ現代人の救世主。

國民必讀、絕好無二の修養書也

東京本郷森川町一番地
文成社
振替東京壹九四六七番



中央公論第二十七年第五號目次



オートストラップ

(自働研ぎ安全剃刀)

何故にオートストラップが理想的安全剃刀なるや乞ふ丸善辯頭の現品に就て見られよ

兒供でも何等の危險なく容易に使用し得て便利と愉快とを併せ經費上にも時間的にも經濟なるは

オートストラップなり

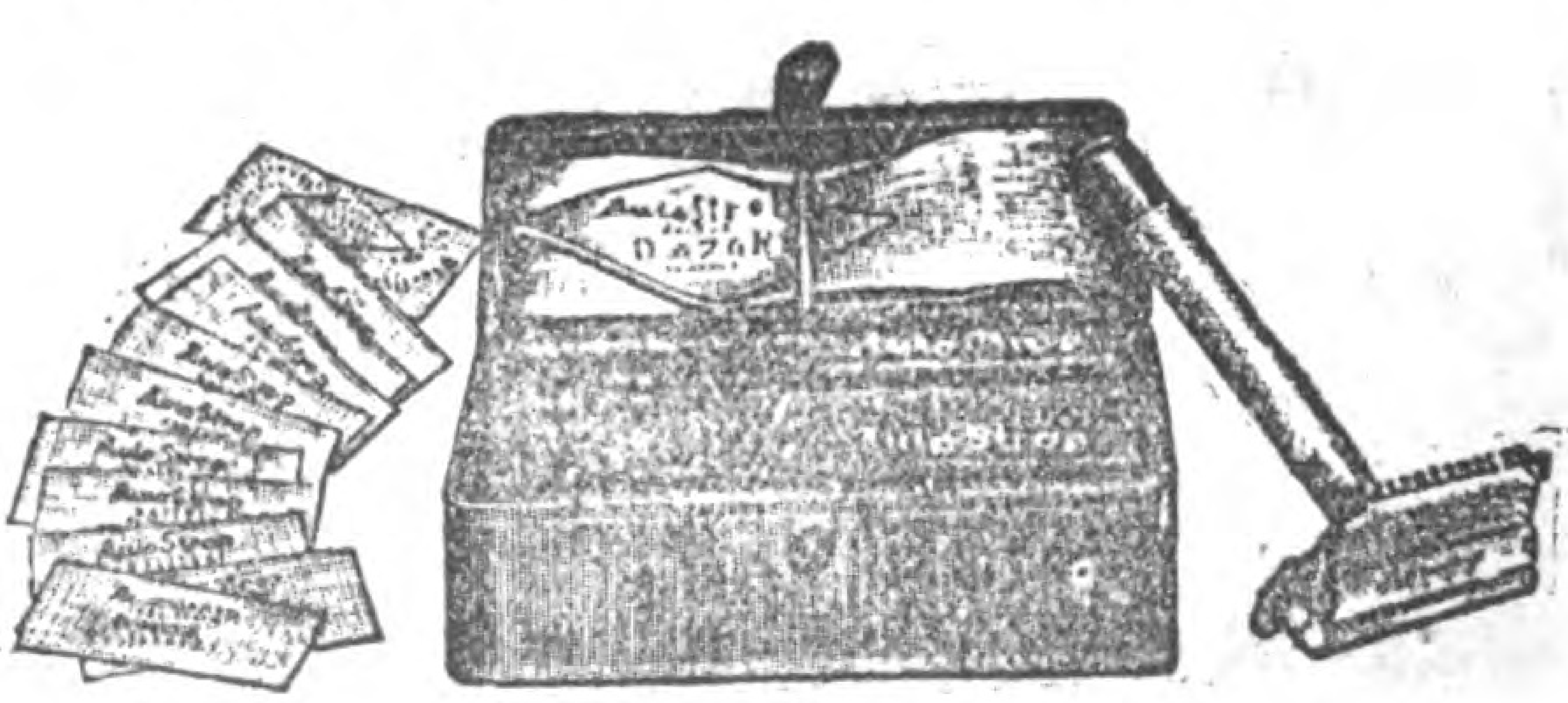
一と度**オートストラップ**を使用したる諸君は皆歎賞して之を使用するの遲かりしを悔ひ玉はざるはなし**オートストラップ**を使用して後初めて剃髯の如何に爽快なるかを知るべき也

革砥及換刃付壹組金拾壹圓五拾錢

送料 内地十二錢 臺、樺、朝、清卅錢

東京日本橋通

丸善株式會社



(説明書御申越次第送呈)

PERUGINI



"PEONIES"

中央公論



第二十七年
第五號
第二百七十八號

多數黨の專恣

(一)

今春の政治季節に於て、吾人は多く議會問題に容喙せざりき、蓋し徐ろに其の成行を凝視して、他日透徹すべき評言を試みんと欲して也、而して今や正に其の機に會す。

今期議會に於て、何ものよりも著るしく吾人の感知したりしは實に多數黨專横の一事なりとす、是れ吾人の特に指摘せんと欲する所のもの也。

但し多數黨の良効果も全く之なかりしに非ず、政府の事業を翼賛し、特に豫算案に對して一錢一厘の削減をも加へず、以て政務の進行に便したりしが如き是れ也、政府が議會に多數を有するの便宜なる、

何人も之を爭ふ能はざる也、然れども政黨にして區々の感情を捨て、至公平正を主とせば、苟くも私利私福に殉する政府にあらざる以上、政黨多數の賛助を得る必らずしも難事ならざるのみ、故に國民の期待する所は、政府が公明忠實なると共に、政黨の至公平正ならんと是れ也、此の義に反するものは、國民の敵にして、吾人の極力排擊せざるを得ざる所とす。

支那に對する我が見解は、朝野共に悉く失敗を免かれざりき、議會に於て在野黨の領袖たる犬養毅氏は、其の語を激越にし、其の言を痛烈にして大に外務大臣內田康哉子の失政を攻擊したりしと雖も、犬養氏其の人も亦支那問題に對しては實に大なる失敗者の一人にして、內田子と相比して少くも兄たり難く弟たり難し、然れども當時の俗論にして多數を占めんか、內田子は當然其の職を去らざる可らずして、我が外政に一層の頓挫を來すのみならず、延ひて內閣の崩壞をも免れざりしならん、唯だ多數黨なる政友會が內田子（寧ろ內閣）を支持して動かざりしがために、政局に格別の動搖を生ずるに及ばす、且つ曲りなりにも其の外交を繼續し得たりしは、吾人之を主として多數黨の効績として稱せざるを得ざる也。

（二）

衆議院撰擧法改正案は、實に當期議會に於ける最大問題なりき、而して此の案に於て、最も多く多數黨專恣の弊害を暴露したるは吾人の太だ遺憾とせざるを得ざる所とす。

吾人の領解する所によれば、前內閣以來內務省に於て調查し立案したりし撰擧法改正の目的は、人口の增加と時勢の進步とに視て、主として其の別表に改正を加ふるにありき、即ち若干の市を獨立撰擧區

たらしめ、又若干の議員數を增加するにありて、總選擧取締の如きも其の枝葉なりき、然るに政友會の領袖原敬氏の入て內務大臣たるや、現行の大撰擧區を改めて小撰擧區と爲し、之を議會に提議せんと欲し、先づ斯道に硏究を積める朝野の有識者及び貴衆兩院議員を委員として、之に可否を諮問したりしに委員會は大多數を以て、小撰擧區制を非とし、特に政友會より選ばれたる委員の多數も、亦明白に小撰擧區制反對を表示したりき。

然れども原氏は尙ほ頑然として其の主張を更めず、政友會中に異論の多きをも百方鎭壓して、竟に之を議會に提出し、政友會をして强ひて之に贊成せしめたるがため、兎も角も衆議院を通過したりしも、貴族院に於ては僅かに二十八票を得たりしのみ、幾んど稀有の小數を以て敗られたること世人の知る所の如し。

原氏は何が故に小撰擧區制を固守せりや、吾人は實に惑はざるを得ず、解する者或は曰く、原氏は之に由て政黨の地盤を鞏固にし、由て以て政黨政治を樹立せんと欲するのみと、若し然らば、吾人は原氏の如き有識者が、今尙ほ政黨政治の如き陳腐なる主義に囚はるゝを憫笑せざる能はず、政黨政治の理想的に發達したる英國に於てすら今や政黨政治の時代遲れなることを唱導する傾向顯著なるに非ずや、我が國古來の歷史に徵するも、黨派政治は常に國務を不振ならしめたりき、蓋し政黨は勢ひ也、理に非ざる也、然るに政黨政治を理想として必らず之を遂行せんと欲す、思はざるも亦甚だし、斯る時代遲れの迷想を株守するは、猶ほ瓦斯電燈の時代に於て、石油ランプを最新式と誇るに同じ。

遮莫、撰擧法改正の骨髓が、一種の撰擧權擴張たるや爭ふべからず、其の別表に於て若干の市を獨立選擧區たらしめ、又人口の增加に隨つて議員數を增加するが如き、明白なる選擧權擴張なれば也、然るに貴族院の之を認めて通過せしめたるに拘らず、政友會が其の小撰擧區制の破れたるがために、併せて其の別表をも否決したるは、是れ枝葉のために根幹を枯らしたる也、皮膚のために骨髓を傷れる也、撰擧權擴張を蹂躪したる也、其の罪實に重くして大也。

小撰擧區制の弊害多かりしは、故伊藤公の屢々經驗したりし處、公は此の苦き經驗に由て現行撰擧法に更めたりし也、現行法また素より弊なきにあらざるも、小撰擧區制に比すれば同日に語るべからず、如何に小撰擧區制の弊害を過小に算當するも、尚ほ大撰擧區制と伯仲の間にありとする以上には割引する能はず、乃ち其の改正の必要は斷じて之を看出す能はざる也、然るに此の不必要なる改正の行はれざるがために、併せて貴重なる撰擧權擴張をも蹂躪し去れるは何ぞや、嗚呼是れ人權の敵也、憲政の賊也。

撰擧法は衆議院の事也、貴族院に容喙の權なしといふこと勿れ、貴族院は實に撰擧權の擴張を是認して、之に賛意を明表せるにあらずや、既に然らば、政府及び政友會たるもの、姑らく忍びても此に同意を表して以て撰擧權の擴張を實行するを當然とす、總撰擧の期近く目睫の間に迫れるに於て最も然り、然るに院議を重んずるを口實として一併に貴族院の決議を否決し、竟に撰擧權の擴張を破壞す、果して何の心ぞや、況んや小撰擧區制なるもの、畢竟政友會一部の私情、殊に原內務大臣の私情に外ならざるをや、然り、政黨政治といふが如き時代遲れの迷想に囚はれたる原內務大臣の私情に外ならざるをや。

（三）

政友會は撰擧法改正案に就て、初めより重大なる誤謬に陷ゐれり、第一本問題たる、全然法律問題にして政治問題にあらず、苟くも法律問題たる以上、其の可否を定むるに方つて自由投票に由るべくして、素より黨議を以て拘束すべきにあらず、若し強いて之を黨議とし、黨の多數を以て之を決せんとする以上、提案者たる原內務大臣の進退を賭して以て其の責任を明白にせざる可らず、政治問題たらしむる理素より然らざるを得ざれば也、然るに其の案の貴族院に於て否決せられ、殊に提案者たる原內務大臣が視て以て改正の骨子と做し、之を公言して百方其の支持に努めたりし小撰擧區制の破らるゝに及び、原氏は恬として其の地位に止つて以て大臣責任の本義を蒙晦ならしめたり、而して自から謂へらく、是れ一の法律問題のみと、果して然らば何故に之を政友會の黨議としたりしや、吾人は先づ之を以て原內務大臣自から其の責任を遁れんとするを卑とせざる能はざる也。

政友會員にして、小撰擧區制を非とするもの、少からざるは、內務大臣の諮問したりし委員會に視るも明白也、純然たる法律問題に於て、徒らに黨議として議員の意見主張を枉げしめ、其の反對の論に屈從せしむるは非也、而して政友會が之を敢てしたるは第一の誤謬也。

政友會が撰擧法改正案を黨議として支持するに決するや、別表を修正するに、主として自派の便宜のみを目的としたりしは事實也、換言すれば自派に於て成るべく多く當撰者を出し、他派をして成るべく其の當撰者を減少せしむる目的を以て、小撰擧區の範域を改めたりしと蔽ふべからず、是れまた一の誤

黨といふよりも、全く横恣に傾むける也。

且つ本案のため兩院協議會を開かんとするや、其の議員撰出法は、各派按分率に由ると從來の慣例たるに、今期に限り、政友會は其の議員全部を自派より撰出して、以て貴族院の決議を破らんと欲し、强ひて投票撰擧を用ひたりしも、また多數を恃みて專恣に流れし明證ならずんばあらず。

夫れ英國の議會に於て議長を撰ぶや、公正にして典例に精しき長者を擧ぐるを例とし、毫も黨派に拘はるなし、始終英國の政黨政治を口癖の如く褒めちぎる政友會が、毎會必らず自派にのみ議長を獨占し、また其の公正なると否と、典例に精しきと否とを問はずして、全然英國の例に反するは、實に議場に於て自黨の便宜を圖らんとするのみ、協議員會の議員撰擧に當り、政友會が其の投票法を用ひて從來の慣例に從はざりしが如き、また議長の地位を利用したるに由る、自派の私を濟すがためには、其の理想とする模範國の議院典例に反して恬然たるに視るも、今の政黨なるものゝ心事や知るべきのみ、彼等の志誰か專ら國家生民にありと爲すものぞ。

凡そ斯の如き專恣は、皆多數を恃みて爲さゞる莫きの致す所のみ、斯の如き政黨をして政治を行はしむ、其の結果の良否多言せずして知るべきにあらずや。

（四）

是非は天下の公にして、一人一黨の私すべきものに非ず、隨つて其の別を紊るべからず、若し之を紊らば、天下の理義何に由て立たん、天下の理義の立つ莫くんば、國家を奈何せん、故に政治事家は苟く

も是非を顚倒す可らず、公議の府と視らるゝ議會最も然り。

　彼の衆議院議員遠藤某なるもの、醉酗して一議員を毆打するや、懲罰附托の動議は出て、而して院議之を懲罰委員に附托したりき、然るに政友會は、某の自派員なるがために、委員の多數を恃みて毆打の事實を不明なりと做し、竟に懲罰す可らずと決定し、院議に於ても亦然からしめたりき、夫れ明白にして一點の疑ひを挾むの餘地なき事實を蔽するに、眞僞不明を以てし、醉酗者狼藉者をすら懲罰せずして止む、是非の公を紊るもまた極まらずや、思へ、前期議會に於て、議員藏原惟郭氏の演說中、過激にして失當の語辭ありしがために、竟に懲罰委員に附し、氏をして公然議場に陳謝せしむるの決議を爲せしに非ずや、心激し情熱して、言語の竟に常を失せるをも捉へて懲罰したりし議院が、醉酗して議員を毆打したりし者を問はざるは何ぞ、果して公正を得たりといふべき乎、若し議員を懲罰することゝ情に於て忍びずといはゞ、何ぞ藏原氏を不問に附せざりしや、一は反對黨に列するがために之を罰し、一は自黨なるが故に之を曲庇すといふ、是非を紊る、實に言語道斷也、然かも一に多數を恃みて專恣至らざる莫き結果のみ。

　更に想へ、斯の如く專恣にして私を濟すに憚からざる黨派の下に、政黨政治を行はゞ、其の結果如何ぞや、政黨政治、殊に政友會の如く專恣爲さゞることなき政黨によりて行はるゝ政治の危險なる、幾んど多言せずして明白ならずや、政黨のため國家國民を犧牲とす、抑も此の光輝ある日本の前途を奈何せん、識慮あるもの深く考へざる可らざる也。

東京市侮辱せらる

(一)

東京市は今や一種の大侮辱を受けたり、事や政治上の重大問題にして、而して世上新聞紙の起て侃諤之を爭ふものあらず、奇の極也、怪の極也。

吾人の曾て屢々論辨し主張したりし市の電燈經營案は、四月八日を以て全く政府より却下せられ、更に電力一萬キロワットを基礎として以て其の計畫を縮少すべき内命を受けたり、是れ啻だ市財政、殊に電車市營の根本を欠壞されたるに止まらず、市會及び區會(唯だ一京橋區を除く)の決議をも無視せられて、全く自治體の面目を蹂躙せられたる也、而して市民も亦當然享有すべかりし利益を逸して、依然として一會社橫暴の下に立たざるを得ざるとなれる也、之を市の一大汚辱といはずして何とか言はん、吾人はまた之を以て憲政上默視す可からざる一問題とす、請ふ順を追て之を述べん。

(二)

東京市が此の頃募集し得たりし外債は英貨額面九百十七萬五千磅、即ち八千九百六十三萬七千九百十五圓にして、此の手取額英貨八百五十萬二千七百五十磅、即ち八千三百七萬九十圓七十九錢とす、此の内より電車幷に電燈資金六千四百五十八萬四千八百五十四圓及び其の利息金九十二萬五千四百六十九圓五十六錢、合計六千五百五十一萬三百二十三圓五十六錢を支拂へば、剩す所金一千七百五十五萬九千六百

六十七四廿三錢にして、此の内より電車未成線敷設豫定費金一千六百七十萬圓を差引くも、尚ほ八十五萬九千餘圓の剩餘あり、兎も角未成線建設は十分に之を成功し得べき見込ありとす。

然れども此の外債額面八千九百六十三萬七千餘圓の五分利金四百四十八萬一千八百九十五圓七十五錢の年額と、其の元金償還は如何にして之を支辨するや、電車最近の純益は年額三百四十萬圓に過ぎずして、未だ利金のみにも引足らず、假りに五ヶ年の後未成線全く竣工したりとするも、其の純益は百八十萬圓に過ぎずして、之を合計するも五百二十萬圓に過ぎざる也、但だ市營たるがために、税金年額七十萬圓を要せざるが故に、之を加へて五百九十萬圓、概略六百萬圓を有するに過ぎず、此の内より四百四十八萬一千八百九十五圓七十五錢の年利金を支拂へば、殘る所百五十一萬八千二百四圓廿五錢に過ぎず、然かも電車改良費の出處なきを以て、此の剩餘を之に充當すれば、幾んど外債の元金を償還すべき資源なき也、或は電車乘客の逐年増加して、收入遞加すべきを以て、改良費を之より獲べしと爲すものあり、然れども今の如く車輛數に制限ある以上、收入遞加は高の知れたるもの也、其れも物價の騰貴に伴ふ營業費即ち車掌運轉手等の給料増加にも充てざるを得ざるが故に、之を元金償還の資源として恃みがたきや多言を俟たずとす。

且つ實際に就て視るに、電車は今や市民愁訴の焦點たらんとす、蓋し車輛不足にして悉く乘客を收容する能はざれば也、吾人の耳にする所によれば、彼の三會社合併の後、東鐵の重役輩は寧ろ電車の供給過多なるを憂慮し、未成の義務線の如きは成るべく之を敷設せざるに止まらず、尚ほ車輛をも節減する

方針を執り、現在所有する車輛一千餘輛の內、眞に運轉に堪ゆるものは八百餘輛に過ぎずといへり、是れ到る處乘客麕至するも、電車の能く之を乘せ得ざる所以ならずや、思ふに市民をして十分に電車を利用するの便を受けしめんとせば、少くも今の電車線路を三倍とし、車輛數を增して五倍と爲さゞる可らず。彼の鐵道院の所有せる山ノ手線電車の如きも、其の敷設當時の計畫として、向ふ二十ヶ年間は四線にして十分の見込なりしに、未だ數年ならざるに早くも六線の必要を感ずると甚だ切なるに至れりといふ、東京市にして眞に市の發達に伴ひ、電車を有效に經營して市民に便益を供すると共に、市自から相當の收入を擧げんとせば、必らずや線路及び車輛を三倍乃至五倍と爲さゞる可らざる也、現在の計畫にては、益々市民愁訴の聲を高からしむるに止まり、殆んど市をして一種の怨府たらしめざれば止まざらんとす、乃ち此の大擴張を爲すの基礎としても、外債償還の資源として少くも百五十萬圓乃至二百萬圓を確實に收得する必要あり、是れ吾人が電燈兼營の必要を主張して止まざりし所以也とす。

今の電車々輛、鐵軌、電柱及び架線の老朽せるもの多きは、苟くも心あるものゝ齊しく認むる所なるべし、乃ち急に多額の改良費を要するや論なしとす、之を得る所以の道も、また市の深く講究を要する點なりとす。

吾人は此等の理由あるが爲めに、市の電燈兼營を目して必須已む可らざるものとし、其の百萬燈計畫の純益（二百五萬五千圓並びに稅金不要額九十二萬圓と合計二百九十七萬五千圓也）より年額二百萬圓を擧げて外債償還の確實なる資源に供せんと主張したりき、蓋し之に由て電車市營の財政を鞏固ならし

め、以て市經濟の基礎を堅實にし、併せて市民に廉價なる電燈（十燭光月額六十錢、五燭光四十錢、門燈二十五錢）を供給して兩者相益せんと欲せしのみ。

然るに此の計畫全く阻止せられて、其の計算根本より破壞されんとす、是れ實に市及び市民に取て極めて重大なる問題ならずや。

（三）

政府が東京市に内命したる條件を視るに、市に許すべき電燈は電力一萬キロワットを制限とす、然れども不時の場合に備ふるがために、一萬キロワットを使用すとせば別に其の二割を豫備と爲し置かざる可らず、即ち一萬二千キロワットの設備を要するに、一萬キロワットを最高限と爲す以上は、實際使用すべきもの八九千キロワットに過ぎざるべし。

假に一萬キロワットを豫備なくして使用すとするも、十燭光三十萬燈に過ぎずといふ、之を十燭二十萬燈とするも別に、五燭光二十萬燈を點じ得て、合計四十萬燈に過ぎず、斯く縮少して收支果して相償ふや否やは疑問也。

然り、其の點燈區域を一小部分に限定せば、或は收支相償ふと言を俟たざるも、區域限定の如きは到底不可能也、今の市の有する所謂山の手のみに由らんか、勢ひ東京電燈の現在燈を悉皆驅逐せざる可らず、然れども斯くすれば激烈なる競爭を以て、所謂政府の民業壓迫を現出するを奈何せん。

且つ三四十萬燈丈けにては、其の收益甚だ少くして、到底外債償還の資源に充つるに足らざるのみな、

らず、十燭光月額六十錢、五燭光、四十錢といふが如き廉價と爲すを得ず、隨つて市に取ても利益なきに止まらず、又實に市民を益する所もあらず、即ち電燈市營なるもの全く無意義のみ。

　更に政府の命令條件を視るに、此の一萬キロワットを基礎とする三十萬燈乃至四十萬燈計畫も、之を三ヶ年に分ちて、毎年均等に其の工程及び工費を制限せざるべからず、此の結果工事材料の購入に損失あるを免かれず、何となれば之を一時に多く買入るれば、比較的低廉なるを得るも、之を三ヶ年に小分するがため、勢ひ高價に買入れざるを得ざれば也、工費また又然り、故に政府の命令は、東京市の手足を緊縛して而して活動を命ずるに齊し、酷也、暴也、詮ずる所市をして全く電燈兼營を斷念せしめ、其の既得の特權を放棄せしめんと欲する者と評するの外なしとす。

　是れ豈市の電車經營を根本より缺壞するものに非ずして何ぞ、市財政の基礎を震撼するものに非ずして何ぞ。

　更に思へ、政府が東京電燈會社に許すに五萬キロワットを以てしながら、市には僅かに其の五分の一を許すは何ぞや、東京電燈會社は一私立會社のみ、其の株主なるものは少數の資本家のみ、之を二百萬の市民を有する市と、二百萬の市民を株主同然と爲す市と、果して孰れを重しとし、孰れを輕しとするぞ、若し一部少數の株主のみに厚くして、二百萬の市民に薄きこと斯の如く甚だしくんば、竟に資本家の横恣を長じ、其の極彼の危險思想を激發するも亦測るべからず、政府は何故に會社に許すに二萬キロワットを以てし、市に許すに三萬キロワットを以てせざりしや、何故に少くも市と會社と對等と爲さゞり

しや、吾人は政府の偏頗の餘りに無遠慮なるを慨すると共に、又二百萬の市民の甚だしく政府より輕視せられ、侮蔑せらるゝを憫まざる能はざる也。

尙ほ更に思へ、一萬キロワットを基礎として僅々三四十萬燈を建設するにも、尙ほ經濟界の趨勢に顧みるといふを口實として、之を三年に均分せしめんとする政府は、日本電燈會社に對しても亦同一條件を强行する乎、東京電燈會社が百五十萬乃至二百萬燈を建設するに對しても、之を十五ヶ年に均分すべき條件を强行せしむる乎、苟くも然らずんば、是れ名を經濟界の趨勢に藉りて獨り東京市を掣肘する也。偏頗也、曲私也、不正也、暴虐也、然り、最惡なる酷政也。

政府の市に對する命令の理由書なるものを視るに、幾んど支離滅裂にして一笑にだも値せず、堂々たる政府の言ふ所、幾んど常識を失せる囈語に齊しきは何ぞ、想ふに政府は始めより東京電燈會社をのみ曲庇して、却つて東京市の計畫を壓伏せんと欲し、其の方針の下に百方して理由を牽强し附會し來れるがために、竟に彼の如き嗤ふに堪えたる理由書を作爲せるに非ざる乎、吾人の仄聞する所によれば、大藏、內務、遞信の三省會議に於て、內務側より遞信側に日本電燈特許の理由を問へるも、遞信側は明答する能はず、其の市の計畫却下の理由として提議せる所も、一々內務側特に水野地方局長に論破せられ、結局古き願書を唯一の楯として、水野氏の作製して條件を以て、市に內命するに至れるなりといふ。果して然らば政府の措置實は言語に絕す、其の命令の無法にして、而して理由書の支離滅裂なる、また素より其の所乎、唯だ斯の如き下に犧牲として橫へられし堂々たる市民は、果して何といふべき乎。

（四）

電燈市營は、既に市參事會員及び市會が一致して之を可決したる所、また一京橋區を除く各區會が擧げて贊成して、其の速成を決議したりしもの也、乃ち市民の輿論たるに止まらず、又實に正式に、合法的に市民の意思を發表したるもの也、的切に言へば、自治團體の意思也、然り、帝城を有し、二百萬の國民を包有して、日本帝國の首都たる自治團體の合法的に彰示したる意思なりとす、然るに一片政府の命令に由て其の蹂躪に委す、吾人は玆に市の輕きこと紙の如く、市民の侮蔑せらるゝこと甚だしきを嘆ずると共に、また憲政上の一問題として默視する能はざる也。

故伊藤公が憲法取調の命を奉じて歐洲に至り、獨逸皇帝に謁するや、帝問ふ「卿の將さに立てんとする憲法、抑も何を以て根本基礎とするや」、公答へて曰く『唯だ地方自治を以て基礎と爲す』、帝後に嘆賞久ふして曰く『伊藤の識慮實に歐洲の憲法學者に齊し、深く立憲の骨髓を獲たり』と、蓋し憲政の基礎は實に地方自治にあり、地方自治團體の安全を鞏固ならしめて、始めて立憲代議の本旨明か也、今の政府者動もすれば憲政のために全力を盡すと稱し、之を迎ふるもの亦其の志の憲政擁護にあるを言ふ、果して然らば、東京市の決議の如き、假令多少の誤謬あるも之を尊重して以て努めて其の成立を期せざる可らず、何ぞ況んや其の決議や、必須已むを得ざるに出でゝ、何等誤謬の點なきをや、

政府が堂々たる大自治團體に薄くして、却つて區々たる一私立會社に厚きすらも、已に明白なる偏私也、特に況んや全然市會區會の決議を無視し、全く自治團體の面目を蹂躪するをや、是れ自から憲政の

基礎たる地方自治を輕んずる也、意を强くしていへば、憲政の根本を輕んずる也、一種の非立憲也、所謂憲政のためにすといふものゝ那邊に在るや、後藤新平男頃者原敬氏を嘲つて曰く『彼れや、腹肚裏に官僚の反古紙を充塡しながら、首に立憲の冠を戴き、足に政黨の木履を穿ちて、手に非立憲の棍棒を揮ふものなり』と、然れども是れ豈原氏一人に止まらんや、今の政府の東京市に對する、また實に斯の如きのみ。

（五）

今の政府には聰明叡智の人多し、而して獨り一の東京電燈會社にのみ厚くして堂々たる市に酷なる斯の如きは何ぞや、吾人實に之を解するに苦む。

思へ、東京電燈會社なるものは、其の内部に少からざる水泡的資本あるに拘らず、尙ほ一割以上の高配當を維持するがために、世界無比、日本第一の不廉なる點燈料を貪ぼりて、以て市民を苦むるものにあらずや、今の政府にして民業壓迫の口實の下に斯る暴戾なる社會を曲庇し、之に與ふるに市の五倍大の特權を以てするは何ぞや、此がため市民をして依然日本一の不廉なる點燈料を支拂はしむるを意とせず、此がため市の電車經營を不安ならしめ、市財政の基礎を震撼せしむるを顧みず、此がため堂々たる自治團體の意思を蹂躙し、憲政の基礎を輕視するを省みざるは何ぞや、嗚呼果して何ぞや。

口惡き京童は耳語すらく、東京電燈會社は數十萬金の豫備費を有す、之を獻じて以て政友會の總撰擧費に供し、且つ多數新聞記者の口を箝するにも黃金を以てしたる、是れ今の內閣の副首相たる原氏が極

力一私立會社を庇護して、他の何ものをも顧慮せず、而して新聞紙また保謗の議、爲さゞる所以のみと。

吾人は素より之を信ぜず、又其の眞僞を確むるを欲せず、蓋し世人は政府の爲す所の何に出づるを知るに苦むがために、竟に諸種の邪推を逞くするに過ぎざらん、然りと雖も心あるものをして、斯る邪推にも耳を傾むけしむるは果して何の故ぞ、果して誰の咎ぞ。

（六）

吾人はまた東京市當局の態度に呆然たらざるを得ず、彼等は政府者より公然不信任の趣意書を公表せられ、其の計畫を破棄せられて、恬として其の責任を明らかにせず、却へて一萬キロワットを基礎として電燈經營案を更正すべく孜々たりといふ、斯の如くして責任を解せざる徒輩に委するに、何等の事業を以てするも抑も何をか成し得ん。

東京市長は第一に責任者として其の分守を明らかにせざるべからず、而して市電氣局長及び電燈部長がまた其の責を引きて自から裁量すべきや論なきのみ、然るに根本の責任を明らかにせずして、其の枝葉たる利害にのみ汲々として、徒らに口舌を以て事を濟さんとす、其の職分單に批評者たらば則ち可也、苟くも市の局に當つて事業を成さんとするもの、斷じて斯の如くなる可らざる也、且つ外は政府に向つて其の非違を糺彈すること能はず、內は市當局を促して其の責任を明白ならしむる能はざる市民も、實に無氣力の極也、然り、自から侮りて而して後他に侮らる、市民は政府より侮辱せらるゝに止まらず、又市當局よりも輕蔑せられんとす是れ抑も忍ぶ可けんや。

（七）

吾人は此の機會に於て、市民の覺醒を促すの當然なるに想到せずんばあらず、私かに市會議員撰擧の狀况を觀るに、別に恒產あるにあらず、都市經營の懷抱あるにあらず、中外の都市の事情に通曉せるにあらず、又素より聲望榮譽の以て重きを爲すあるに非ず、唯だ若干の夤縁情實あり、若干の運動費なるものを作れるがために、所謂運動をさへ巧みにすれば、直ちに市會議員に當選せらるゝを常とす、今回の撰擧に於ても然り、前回に於ても然り、前々回に於ても然り、斯く無恒產、無經綸、無見識、無聲譽の徒輩を擧けて托するに市政を以てす、市の振はざる素より其の所のみ、支那人朝鮮人を以て軍隊を組織せは、其の底弱法懦なる言を俟さだるに非すや。

故に市の不振を振刷して、玆に眞の堂々たる模範市を作らんと欲せは、市民は宜しく第一流の人物を擧けて以て市會議員たらしむべし、金子堅太郎子、伊東巳代治子、末松謙澄子可也、大浦兼武子、平田東助子、後藤新平男可也、澁澤榮一男、近藤廉平男、岩崎久彌男、三井八郎右衛門男可也、安田善次郎、菊池善四郎、柿沼谷藏、中野武營の諸氏も可也、大隈伯も可也、三宅雪嶺博士も可也、増島六一郎博士も可也、北里柴三郎博士も可也、總ての方面に於て、皆第一流の人物を推擧すべし、市民自から一流の人物に叩頭百拜し、以て其の市會議員たることを懇請すべし、苟くも第一流の人物のみを以て議員とせば、市會の重き或は帝國議會以上ならん、政府の之を畏憚するは勿論、百事の經營總て意の如くならざるなく、大に市の信用を高むると共に、其の實力また數十倍し、市政始めて大に擧るべし。

記せずや、市會の始めて開かるゝや、福地源一郎、沼間守一、藤田茂吉諸氏の如く、操觚界に於ても實に第一流の人物を議員としたりしことを、今の市會を以て當時に比するに、及ばざること甚だ遠し、記者の議員たるありと雖も、二流三流のものすら無く、皆其れ以下の徒のみ、市の輕きこと毛の如く紙の如きまた素より其の所ならんのみ。

市は實に自治團體として憲政の基礎を爲すもの也、之をして善良なる方向に活動せしめんとせば、斷して根本的に其の撰出者を一新し、擧くるに各方面の第一流者を以てせざる可らず、今や東京市の輕侮せらるゝこと其の極に達す、此の時に方つて尙ほ覺醒せずんば、是れ幾ど市民として神經無き也。

吾人は去年以來聊か市のために主張せること一再に止まらず、然れども事多くは効なし、吾人また自覺する所なきにあらず、依て筆を玆に擱きて、姑らく市のために辯論を罷め、徐かに市民の覺醒し、市當局の一變するを待たんと欲す、唯だ市に對する政府の措置に至つては、重大なる政治問題として之を保留し、敢て監視を怠らず、思ふに西園寺内閣をして重傷を負はしむるものは、必らず是ならん、彼の財政上の窮厄と、外交上の不振と併せて、其の致命の主因たるものは必らず是ならん。

公論

遺傳に關する論と證據

理學博士 丘淺次郎

「論より證據」といふ昔からの諺通り、世の中には論よりも證據の方を重く視る人もあるが、中には又「證據より論」といふ考の人も無い事はない。之は孰方にも相應の理由のあることとて、單に議論許りで或問題を解決することが出來ぬと同樣に、又單に證據丈けて論を立てるといふ事も、時としては隨分誤ることが無いとは限らない。そこで今、遺傳に關する古來の研究を調べて見るに、論の方は昔から隨分澤山ある。が遺傳を實驗的の方法て研究するといふ事は、比較的近來に遣り初めた事てある。一體遺傳を實驗的に研究するといふ事はなか／＼手間のかゝる事て。之が單に一個體の生物を取つて、其生物の構造を調べ、組織を調べ、性質を調べる丈けの仕事ならば比較的簡單に濟むが、遺傳の研究にはさうは行かない。遺傳の實驗的研究には、先づ第一に親の性質を調べ、第二に子の性質を調べて、親の性質がどんな具合に子に遺傳したかを調べなければならない。又孫の性質を調べて、子の性質が、どんな具合に孫に遺傳したかも調べなければならない。それから其次／＼と順序を追うて、遺傳の狀態を調べた上てなければ、精確な研究は出來ないのてある。それだからして、遺傳を實驗的に研究するといふ事は、餘程年數を掛けなければ出來ぬ仕事てある。隨

つて此面倒な、新らしい研究の結果を寄せ集めて、誰にも分るやうに一冊の本に纏めたといふやうなものは極く少く、辛やく昨年頃になつて其種類のものが一二冊出たといふに過ぎないのである。

遺傳に關する實驗的の研究は比較的遲く初つたのであるが、何故近頃になつて急に世間の注意を惹くやうになつたかといふに、其一つの動機は今よりザツト五十年許り前に、墺太利のブリユンといふ所の基督舊教の僧侶メンデルといふ人が、植物を材料として遺傳の法則を實驗的に研究し、其結果を、ブリユンの博物學會の會報に載せてあつた。けれども其報告が、ブリユン地方の小さな會報に載せられたが爲めに、其後長い間世の中の人が一向氣が附かずに居つた所が、今より十一二年前、偶然にも三人の植物學者によつて、同時に此記事が發見せられ、今まで久しく忘れられて居つたメンデルの實驗的研究法が急に學界の注意を惹くに至つたのである。此實驗的研究法は誰でも遣つて見らるゝもの故、あちらにも、こちらにも之を試むる人が追々に出て來て、現今は此研究がなか／＼盛んに行はるゝやうになつたのである。尙今一つの動機は、ダーウヰンの「種の起源」出版以來、進化論に關していろ／＼の議論があるが、其論爭の最も主もなるものは、遺傳に關する點であつて、此問題については多勢の人が、言葉で激しく戰つた。然し其議論の孰れにも相應の理屈があるので、なか／＼勝負は着かない。其れで之は論ばかりではいけぬ、實驗に照して勝負を決めねばならぬといふやうな考から、最近十年ばかり前から、餘程實驗的方法によつて、遺傳を調べるといふ氣運に向いて來たのである。斯くの如き二つの動機によつて實驗的研究は初められたのであるが、その結果が段々あらはれて來た。今其結果によつて見ると、從來單に議論を戰はして居つた點で、大分解決されたものがあり、又議論が立派であつたが爲めに誠らしいと信じられて居つた事が、誤であつたと分つたやうな事も幾つもある。そこで玆には先づ第一に遺傳に關する議論の方面を近べ、次には實驗の結果について述べて、最後

に、凡そ學術を研究するには議論も要り、實驗も要り、議論實驗相俟つて——論と證據と相並び用ひて行かなければ、動もすれば誤りに陷る心配があるといふ事を述べやうと思ふ。

先づ遺傳に關する論の方を調べて見るに、之は極く古い時代から掲げると非常に澤山あるが、それ等は玆に總て省略する事とし、ダーウヰンの「種の起源」出版以來、學者間に一番矢釜しい問題となつた點丈けを述べることにする。其論は誰の言ひ出した事かといふに、獨逸のフライブルグ大學で、つひ昨年の暮まで動物學の教授であつたワイスマンの唱ひ出したものである。ワイスマンが或説を唱ひ出して、或者は之に贊成し、或者は之に反對し、多數の學者が銘々いろ〳〵の説を吐いて、今日までなか〳〵矢釜しい論爭の種となつて居る。それ故に或意味に於ては、ワイスマンが遺傳論の原案提出者か若くは火元なるかの觀がある。

此原案提案者たり若くは火元たるワイスマンの遺傳論とは一體どういふものかといふに、ワイスマンが遺傳に關する論を初めて發表したるは今より已に三十年も前の事で、其後ワイスマンの考も少しづゝ異つて來、ずつと舊い所と新らしい所では多少の相違はあるけれども、要するにワイスマン説として知らるゝ論の中心點は只一つである。其一つの中心點は何かといふに、親が外界の影響を蒙つて、其の爲めに新らたに得た所の性質は子に遺傳しないと斷定した點にある。凡そ生物のあらはす性質の中には、生れながらに持つて居る性質と、生れて後外界の影響を蒙つて得た性質との二つがある。固より此二つの性質が截然と區別の着くほど明かに分れてゐぬにしても、大體に於て此二つに分つて見る事が出來るのである。生れながらに持つて居る性質といへば親から、或はもつと遡つて言へば先祖時代から傳つた性質であつて。生れて後に得た性質といへば、外界の影響を蒙つて得たものである。例を擧げて見れば、寒い所に生えて居る植物を暖かい所へ移せば、段々其性質が變つて、寒い所にあつた時とは丸で別の種類のやうになるものがある。又濕つた

所に生えて居つた草を乾いた所に移しても。又砂地に生えて居つたものを黒土の上に移しても、矢張り丸て別種の植物と思はるゝ程に變るものがある。詰り植物は氣候により風土によつて變化を來たすもので、一種の植物も場所が變り溫度が變れば、別種と思はるゝ程の相違が出來るのであるが、此等は先づ外界の影響によつて得た性質の變化と見做すことが出來るのである。動物に於ても其通りで、場所を移し食物を換へれば、體の大きさも、毛の長さも、皮膚の色も、丸で變つて了ふものがある。然し箇樣な外界の影響によつて受けた性質の變化は、決して子に遺傳しないといふのが、ワイスマンの論てある。此論の根據はワイスマンの一種の學説から來て居る。其學説は何かといふに、生殖物質繼續說といふものである。つまり生殖物質は引續くといふのであるが、之を稍々詳しく述べて見るには、勢ひ先づ動植物の生殖の事から語らねばならぬ。

いふまでもなく、動植物の生殖法にはいろ〳〵あつて、芽生といつて、芽が大きくなつて、それが親の體から離れて一つが二つとなり三つとなるといふものもあるし、或は又體が眞中からチ切れて二匹になり、其の二匹が二つに分れて四匹になるといふものもある。此等は所謂無性生殖であるが、箇樣な無性生殖は、動物に於ては極く下等な動物に限つて行はるゝことで、吾々が普通に知つて居る所の動物は——人間でも、獸類でも、鳥類でも魚類でも——皆所謂有性生殖のものてある。此有性生殖には必らず雌雄男女の區別といふものがある。親も一個體ではいけぬ。必らず男性女性の親が無ければならならぬ。其兩性の中に出來る生殖細胞が合つて初めて茲に新たなる一個體を生ずるのである。無性生殖の方は暫く措き、有性生殖の方を調べて見るに、之は植物でも動物でも、理屈は同じ事である。人間や獸類を代表者として論じても、其理屈は總ての有性生殖の動植物に當嵌まる。それだから今人間や獸類を例として述べて見るに、其根本の點は即ち、男性の親の體の中に出來る精蟲といふ生殖細胞と、女性

の體の中に出來る卵細胞と、此二つの生殖細胞が合して一つとなる。初まりは一つのものが分裂して二つとなり、四つとなり、八つとなり、次には十六、三十二、六十四といふ具合に鼠算的に殖えて、終ひには無數の細胞が其處に出來る。さうして一つの細胞が分裂して無數の細胞となる間に其細胞の間にいろ〳〵の相違變化を生じ、頭になる部分、手になる部分、足になる部分、或は胃腑とか肺臓とかになる部分といふ具合に、段々變化して構造も複雜となり、終に親と同樣の一個體に發達するのである。之が有性生殖の大略であるが、然しワイスマンの考によれば、其女性の親の中の卵細胞、或は男性の親の中の精蟲といふやうなものは、男性女性の親の體が出來上つた後に、其體の一部分が精蟲や卵細胞になるのでは無くして、卵細胞、精蟲といふものは男性女性の一個體が發生する其初まりからあつたものである。詰り卵細胞、精蟲といふものは、體の外の部分とは別なもので、假りに卵細胞が先づ二つに分れたとすれば其二つの中の一方が段々分裂して體全部を作り、今一つの方が幾つかに割れて其儘卵細胞になるといふ考である。ワイスマンの考によれば、生殖細胞は之を生ずる親の體の一部分が變じて卵細胞や精蟲となるのでは無くして親の體とは發生の初まりから其出立の途を異にして居る。ワイスマンの自ら用ひた言葉を用ふれば、人間や獸類や鳥類などの身體は二つの部分から成立つて居る、一つは體全體であつて一つは生殖細胞である。即ちワイスマンは體全體と生殖細胞とは二つの獨立した別々のもので、其發生の初まりからして全く無關係のものとして居る。今一度繰り返して言へば、卵から一個體が出來る時に、一部は卵として其儘存在し、餘りの部分が體全體を作るといふ考である。さういふ具合の考を人間に當て篏めて見ると、生殖細胞を除いた外の人間の體は發生して大人になつて、そして遂に死んで了ふ、つまり一代毎に發生して一代毎に死んで了ふが、生殖細胞の方は、親から子、子から孫、其れから次の代〳〵へと引繼いで行くといふ事になる、かう考へると、生殖細胞といふもの

は、先祖代々から預つて、之を子孫に引繼ぐべきものであつて、一個體は一代毎に發生して、一代毎に死んで了ふのである。詰り一代毎の一個體といふものは、先祖から預つた生殖細胞を子孫に傳ふる道具に過ぎない事になる。例へて見れば體は入物で生殖細胞は其內容物といふ事になる。重箱の中に牡丹餅を入れたやうなもので、體は重箱、生殖細胞が牡丹餅といふことになる。そこでどんなに重箱に傷がついたり、剝げたりした所で、牡丹餅に變りはないと全じ事で、如何に外界の影響を蒙つても生殖細胞には何等の影響がないから、隨つて次の子には決して遺傳せぬといふ結論に無論なる譯である。即ちワイスマンの遺傳論は其生殖物質繼續說を根據として、親が一生涯の間、外界の影響を蒙つて、どんな新らしい性質を得ても其れは子に傳はらぬといふ結論に達したのである。ワイスマンの說は箇樣に明瞭である故、非常に學界の注意を惹き、之が原案となつてダーウヰン以後進化論に關する最も矢釜しい論爭は實に此問題に向つて開かれたのである。

以上は單に議論丈けを述べたのであるが、此議論の基となる事實が無い事もない。少し生物學專門の話になるが、動物の種類によつては、全くワイスマンの論と一致するものもある。即ち卵細胞が二つに分れて、其一方から體全體が出來、他の一方は生殖細胞になつて了ふものもある。ワイスマンも箇樣な事實から思ひ附いたのかもしれぬが、兎に角ワイスマンの論に當て篏る事實もない事はないのである。然しながら箇樣な僅かの事實から、全體に推論するといふ事は非常な危險な事で、親が外界の影響によつて一生涯に得た性質が子に傳はるか否かは、實驗によつて、もつと深く廣く研究した上でなければ斷言することは出來ないのである。然し從來はさういふ實驗的の研究が少くあつて、偶々あつたものも、それは態々其目的の爲めにやつたのではなく、他の研究の序に偶然にも發見したといふ位であつたが、近頃は段々此方面の研究が盛んになる機運に向つて來た。又箇樣な研究のやりよい事情も出來て來た。日本などにはまだ無いけれども、歐米で

は、其研究の爲めに特に設けられた實驗所が段々出來て來た。亞米利加のカーネギーが金を出して學術研究の便宜の爲めに作つた有名なカーネギー學會では、コールド、スプリング、ハーバアーに、實驗的方法によつて動物の進化を研究する所を建てた。又墺太利のヴインに近く、矢張り實驗的生物學の試驗所が出來た。此ヴインの試驗所では、いろ／＼の動物を飼養する仕掛がなか／＼巧みに出來て居る。例へば溫度を年中低くして置く室もあれば、又年中濕つぽくしたり、乾かしたりして置く室もある。そしていろ／＼の動物を其等の室で飼養して、親の得た變化が子や孫に遺傳するや否やを調べて居る。極く近頃、其研究の結果が報告せられて居るが、それによつて見ると、親が一生涯に新に得た性質が子に傳はるといふことが餘程確められて來た。先づ體と體の中の生殖細胞とは、ワイスマンの考へる如く、入物と內容物といふやうな簡單な關係のものか、或は入物に變化が起れば內容物にも變化を及ぼさぬかといふ事を調べて見るに、之は亞米利加の生理學の教授ガスレーといふ人のやつた實驗であるが、鷄の雛子の時に其卵巢を切り取り、他の雛子の卵巢を其處に附ける、恰度木に接木をするやうなものである。ガスレーは此方法によつて次の如き試驗をしたのである。鷄の中にはいろ／＼の種類があつて、白い種類ばかりで蕃殖さすれば何時まで經つても白い種類が出來、又黑い種類ばかりでやれば何時まで經つても黑の種類ばかり出來る種類のゝがある。ガスレーのやつた試驗は黑の雌鷄の卵巢を取り去り、そこへ白の雌鷄の卵巢を植附けた。さうすると其雌鷄は黑の雌鷄だけれども、中の卵巢は白なのである。夫れ故に若し、親の體と中の卵とは入物と內容物との關係だとすれば、之に純白の雄鷄をかければ、生れる子は、ワイスマンの豫期する所では總て白い雛子で無ければならぬのである。何故なれば其雌鷄の體こそ黑いが、其生殖細胞は白で、又雄鷄は白であるからである。然るに此試驗によつて得た實際の結果を見るに、雛子の中の半分より少く白であつて、半分より多く斑(ぶち)のものが出來

た。其れと反對に白い雌鷄の腹の中に、黑い雌鷄の卵巢を植附け、そして之に黑の雄鷄をかけて見た。此場合にワイスマンの豫期する處は其生れる子は全部黑でなければならぬのであるが、實際の試驗に於ては全部白と黑との斑であつたのである。此等の試驗はまだ數が澤山ないから、幾度もやつた上でなければ動物の總てに亘て其通りとはいはれぬけれども、體からして生殖細胞にも變化を起すといふ事は此實驗によつて餘程確かになつたのである。尤も親の體が、全く場所を貸す丈けで、中の生殖細胞には何等の變化をも及ばさぬといふ例もない事はない。之は亞米利加のカッスルといふ人のやつた事で、兎の白い種類と白い種類とを交尾さして、雌兎の子宮の中で受精の濟んだ卵を取出して、之を別種の黑い兎の子宮の中に移して見たのである。此場合には假りの親の性質——即ち後に移された黑い兎の方の性質は些つともあらはさずして、本當の親——即ち受精した時の白い兎の性質丈けをあらはした。此場合には全く腹は借り物で、子宮に移されてから後、腹の中で滋養分を供した所の黑兎の性質はちつとも傳はらなかつたのである、箇樣な例もない事はないが、然し前に述べた鷄のやうな例もあるから、ワイスマンのやうに、中の生殖細胞丈けが親からの預り物で次の代へ傳はるが、體は入物で、如何なる變化があつても決して次代へ傳はらぬといふ論は、鷄の實驗で破られたものといはなくつてはならぬ。

それから又實際親の體に或變化を起して、其れが子に傳はるや否やといふに、之は蝶の試驗で分ることで、此蝶の試驗は隨分古くからある。一體蝶の類は溫度によつて、其色も違へば、形も違ひ、又大きさも違ふ。日本に産するものでも、春出る蝶と夏出る蝶とは違ふ。最も分り易いものといへば揚羽の蝶などもさうである。之を箱に入れて、卵から毛蟲、毛蟲から蝶となるのを調べて見るに、同種類のものでも、平常の溫度でやつたのと、高い溫度でやつたのでは、出來たものが違ふ。今平常春先に出る蝶を孵化すに一方は天然の儘の溫度、一方は暖めた室でやると、天然の儘の方

は平常の蝶が出來、暖めた室の方は、夏になつて生れるやうな蝶が出來る。歐米では好んで蝶を集むる人が多く、恰度日本人が骨董を集むるやうな具合に集める。其れが爲めに變つた形のものが高く賣れるからして、蝶を養ふ事を商賣にして、變り物を作つて儲けやうとして居るものが多い、其變り物を作る爲めに試驗的に非常に溫度を高めたりして見る。尤も或限度を越えて溫度を高くすれば蝶が死んで了ふけれども、日本の土用よりも少し暑い位にした所で死ぬことはない。さういふ高い溫度の中で蝶を孵化すと、中には天然に無いやうな色なり形なりの蝶が出來る。此等は全く外界の影響を蒙つて出來たのであるからして、さういふ蝶を作つて其れに卵を産ませ、其卵を普通の溫度の所で養ふて見たら、どういふものが出來るかといふに、ワイスマンの豫期する所は普通の蝶で無ければならぬ筈である。外界の影響を蒙つて親一代に受けた變化は子に傳はらぬといふ論法から行けばどうしてもさうなければならぬ筈である。然るに實際此試驗をやつて見ると、さうではなく、親の變化が幾分か卵に傳はつて、生れた子は幾分か親に似た——即ち普通の蝶とは違つたものが出來るのである。此實驗は今日まで澤山の人によつて試みられたのであるが、親の一生涯に受けた性質の變化は、全部でなくとも幾分は子に傳はるといふ事を證明して居るのである。

又此類の試驗で外に面白いものを擧げれば、それは歐羅巴に産する「火の蠑螈」といふものである。「火の蠑螈」といふ名は歐羅巴人の迷信上附けたもので、一體蠑螈は年中其皮が濡れて居る、「火の蠑螈」は一疋居つても、それで火事を消す力があるといふ處から名けられたものである。此火の蠑螈の色は斑で、即ち眞黒と派手な黄色とが大膽な交り樣になつてゐて、極めて華美な色彩のものである。此蠑螈に就いて、墺太利の試驗所で實驗したのは、黒と黄と斑の蠑螈を陸上に於て子供から大人まで育てるのに、黒い土の上で育てると、黒の方が多くなつて黄色の方が少くなる。それから黄色の土の上で育てると黄色が餘程勝つて來て黒の

方が少くなる。此一代丈けで黄色が多くなつたものの産んだ卵を取つて、これを黄色い土の上で育てると、黄色の土の方は黄が益々多くなつて黒い方が殆んど無くなる。此等の試驗を度重ねてやるとなか／＼面白くなるだらうが、今迄報告されたのは二代目迄の變化に止つて居る。然しそれでも外界の影響によつて親の體に變化が起れば、それが子に傳はるといふ事丈けは明かに證明されたのである。

それかして尚同じヴィンの試驗所でやつた試驗で面白いのは「産婆蛙」である。此蛙は一種他の蛙と違つた習性を持つて居つて雌が卵を産む時に雄は産婆の役を勤むるので此名があるのである。日本の蛙は雌が卵を産む時に雄が背の方から抱いて居るのであるが、此産婆蛙は、雌が寒天質の紐のやうな繋がつた卵を産む時に、雄が足で之を引掛けて股のあたりにグル／＼巻き附ける、そして巻附けながら卵を引出すのである。雌が卵を産み上げて了ふと、其卵を巻附けた儘で暫らく石の下でジッとして居る。其卵が發育してお玉杓子になると水の中に泳ぎ出すのである。之が産婆蛙の普通の習性である。此蛙は獨逸の南部あたりに澤山ゐるのであるが、此蛙をヴィンの傍の試驗所で飼つてゐる。試驗の爲めに日本の土用の中よりも高い位の溫度に高めて見た。すると蛙は暑いものだから水の中に入つた。生殖の時機が出たが矢張り水の中で卵を産むことになつた。さうすると雄は雌の卵の紐を足に巻き附けやうとしても、陸上に居るとは違ひ、膠質のものがヌル／＼して足に巻き附けることが出來なかつた。つまり溫度を高めて普通の産婆蛙の習性を破つて見たのである。さういふ具合に、幾度もやつて見た所が此蛙の習性が變つて今度は溫度を高めず、普通の溫度にして置いても水中に入つて産卵することゝなつた。此性質の變つた蛙の卵を取つて、其卵から孵つた蛙を普通の溫度の所で育てゝも、全く産婆蛙の習性を失うて、水中に入つて、水中に卵を産むことゝなつて了つた。此等も外界から影響を蒙つて變化した性質が子に傳はるといふ證據であつて、ワイスマンの說とは大變違つ

て居るのである。之に類する實驗は隨分いろ〳〵あつて、蝶とか蛾とか其他の昆蟲についても面白い話があるが、一々擧げては際限がないから、實驗は此位にして止めて置くが、兎に角親の一生涯に受けた性質が子に傳はるといふ事は最早や疑ふの餘地がない。尤も前にもいつた通り、中には、外界の影響が全く其子孫に變化を及ばさぬ例もない事はないが、概していへば變化を及ぼす方の事實が多いのである。

此等の事を土臺にして考へて見るに、之から我々が遺傳を研究するに、どういふ方法を採るのが適當かといふに、單に理論丈けで進んで行くといふ事は餘程誤つた事で、どうしても先づ實驗の方法によつて研究し、實驗で分つた事柄を土臺にして、更に推論する事も必要であるが、若し其推論が、新たな實驗と矛盾する場合には、早速議論の方を引込まして、更らに別の議論を組立てなければなるまいと思ふ。遺傳に關しては之まで議論は澤山あつて、進化論の中一番矢釜しい問題となつて居つたのであるが、どちらも論ばかりてあつて決着がつかなかつた。或場合には議論の上手な人が勝つたと見えた事もある。例へば哲學者のスペンサーと動物學者のワイスマンとが遺傳に關して論を戰はした時に、勿論どちらが勝つたともいはれぬけれども、終ひには議論としてはワイスマンが勝つたやうな體裁になつて居つた。けれども近來の實驗によつて見ると、ワイスマンの說は實驗の結果と矛盾するからして、到底之を維持することが出來なくなつた。議論と議論では、勝負があつたやうでも本當の勝負が分らぬが、實驗に照して誤りであるものはどうしても之を負けとしなくてはならぬ。實驗によらなければ智識はなか〳〵先へ進まぬものである。

最後に尙進んで、實驗と議論に關して少しく自分の考をいふて見ると、凡そ議論といふものは只それ丈けを聞けば一通り最もと思はれぬものはない。理屈が立たなければ初めから議論として成立たぬので、世間の人が議論として認むる位のものには、幾らか最もらしい點を含んて居る譯てある。それ故に議論ばかりをす

る人は、議論を取上げて、議論で事が決したやうに思ひ込む傾がある。然しながら自然界では原因結果の關係がなか〱複雜で、原因といつても一つの原因のみが働くのでは無くて多數の原因が働くのであるから、從つて結果も亦多數で複雜であるのに、我々が物を考ふる時には、兎角只一筋丈けを辿つて進むやうになり易く、同時に二つ以上を考ふるといふ事はなか〱出來ない。それで自然には同時に澤山の原因が働いて居るのに、我々は其一つ丈けを取つて外の原因は忘れ、從て結果も只一つ丈けを取つて外のものを忘れて了ふといふやうな誤に陷り易い。然し實驗をやると、一本の筋丈けを辿るとは違ひ、忘れて居つた原因も働いて居ることに氣が附くからして、左樣な誤りに陷らぬことが出來る。或一つの議論の結論として豫期したる所と、實驗の結果とは往々矛盾することがあるが、さういふ場合には議論が不備であつたものとして、實驗の結果で正さなければならぬのである。然し又一方には實驗は理論を正すに必要なると同時に實驗も亦萬能でないといふ事を考へなければならぬ、いくら完全なる設備の下に實驗をやつても、我々のやり得る實驗といふものは極く〱の少部分であるからして、實驗によつて得た知識は精確とした所で、之を普遍的のものと速斷して了ふ譯には行かない。實驗は矢張り其實驗した物丈けの値打であつて之を餘り重く視過ぎるといふ事はよくない事である。實驗を何處までも推廣めんとすれば矢張り實驗を輕視するのと同じ誤に陷る。誰かの言つた通り、實驗は研究方法として大事なものだが、恰度兩方に刄のある刀の如きもので、よく切れることは切れるが、矢鱈に揮り廻せば怪我をするのである。僅かの實驗を賴みにして論を立てると、どうしても誤りに陷り易い故、遺傳を研究するにも、或は其他の事柄を研究するにも、理論も偏輕せず又實驗も偏重せず、理論と實際の兩方を道具として、理論の結論を實驗で正し、實驗の結果は實驗の結果丈けのものとして、其上に更らに新らしき推理を組立て、又之を實驗に照し合せて進んで行くといふ事が必要である。實驗

の結果は只實驗丈けのものであるといふ考の本は何かといふに、之れ又經驗の結果であつて、我々が先祖の時代から積んで來た經驗に基いて、物を判斷する標準を得て來たのである。つまり我々人間も他の動植物と同じく、決して初まりから完全なものとして出來たものではなく。生存の必要に應じて、必要の程度丈けに發達して來たもの故、我々の腦髓も我々の生存に必要な丈けしか發達して居らぬ。我々の言葉といふものも、矢張り必要に應じて其數も殖え又意味も明かになつて來たのであるが、例へば遺傳といふ言葉は何ういふ意味かといふに、なか／＼確かな定義は下されない。此言葉無しには我々の考を述べるにも不足を感ずるから、遺傳といふ言葉を用ひて居るが、然し其意味を正確にすることはなか／＼出來ない。矢張り言葉も必要の程度に應じて一歩／＼進むものである。此完全てない言葉を道具として考を述べたり、議論を組立てたりするのであるから、隙が澤山に出て來る。今日でも議論を戰はす場合に、言葉の意味が不明な爲めに無全の論爭をすることが少くない。遺傳に關しても言葉の議論と思はるゝこともないではない。ワイスマンが初まりに言ひ出した時には、親の體が外界の影響によつて蒙つた一生涯の性質の變化は子孫に傳はらぬと斷言したのであつたが、後には、親が外界の影響を蒙つて變化した時に、其變化が生殖細胞にまで及ぶことがあるかも知れない。さういふ場合には生れた子に變化があつたからとて、之を遺傳と名けることが出來ない。ワイスマンに言はせると、親の體に先づ變化が起つて、其變化が生殖細胞に傳はり、其變化を受けた生殖細胞が子になる時に性質をあらはすのでなければ遺傳とはいはれぬといふのである。つまり溫度が高い爲めに親の體に變化を及ぼすのみならず同時に生殖細胞にも變化を及ぼしたものは、其子が變化したからとて最早や遺傳と名つくべきものではないといふのである。此等は殆んど言葉爭（Logomachy）であつて、遺傳といふ言葉を極めて狹い範圍に局限して了つたものである。自分の昔の說を助ける爲めに、言葉の意味を

狹く局限するといふ事は可笑しな事てあるのみならず、若しワイスマンの言葉の意味を是認するとした處て、溫度などの場合には、生殖細胞を變化させたから、遺傳てないとすることが出來るかも知れないが、前に述べた「火の蠑螈」が土の色によつて其子の色が或は黑が多くなり、或は黃が多くなるといふやうな例になると、或は黑、或は黃の土の色が親の生殖細胞までも屆くか屆かぬかの論は隨分疑はしくなつて來る。要するに實驗を重ずる學問を修めて居る人は、どうかすると、實驗のみを重んじて理論を輕んずる傾きになり易いからして、理論に重きを置く人からは自然科學者は理論を顧みぬといふ批難が起り、又自然科學者から、理論ばかりの人を見れば、實驗を顧みぬに過ぎて凡て空論ばかりのやうに思はれる。學問知識の進むことを望むには、どうしても其中間を通つて行かなければならぬ。理論の方面の人は實驗の結果を見落さず、之を自分の考の中に入れて、實驗と矛盾した考は捨てなくてはならぬ。又實驗の方面の人は、實驗の範圍は狹少であることを考へ、實驗のみては學問の成立せぬことを思はなければならぬ。人間の知識を進むる道具は理論と實驗の二つてあつて、此二つの道具を兩方適宜に用ひて行かなければならぬ。遺傳に關して恰度此考に對するよい例がある故に、遺傳の話の序に、平素考へて居ることを附け加へて述べて見たのてある。

(完)

新聞紙論

黑岩涙香

余は四月八日東京地方裁判所に特別の辨護人として出廷し、誹毀の被告人たる朝報社員某々を辯護

した、其辯論が新聞と云ふ營業の性質にも說き及んだ。此事を聞及んだ雜誌中央公論の記者が、其論旨を紙上に掲げたいと所望せられる。けれど彼の論も被告人を辯護することを目的としたので、必ずしも其まゝ雜誌などに載せるのに適當で無い。依て多少の加除を施して自ら記述したのが此一篇てある

新聞紙は何てあるか。殊に個人の名譽に對して何の樣な關係を持て居るか。是は新聞紙を經營する人も新聞紙を愛讀する人も。知て置く可き事柄て有ると思はれる

一見しても分つて居る通り。新聞紙は一面に於て世界の和戰を司どつて居る。新聞紙の記事の爲め又は論調の爲めに國と國とが親善にもなり。互ひに反感を懷くこともなる。其の實例は枚擧に遑あらずてある。却て今日の外交界に於て新聞紙に動かされざる和戰の例を求むることが難い。日本人に適切なる日露戰爭の例を見ても新聞紙は確かに原動力中の大なる一てあつた。日本が米國の或社會から無實の疑ひや。無理なる反感や非難などを受けながら。猶ほ充分の親交を保存し得て居るのは。日本の新聞紙が穩健なる體度を取り。一般の世人を戒めるが爲てある。若しも日本の新聞紙が。力限り煽動的な體度を取つたならば日本の公使さへも米國に居られぬことゝ爲り兼ねぬ。今の世に於て新聞紙ほど大なる勢力が他に在るて有らうか。而して其勢力は文明が進むと共に益々進むのてある。進む一方てある

又一面から見れば新聞紙は國家の內部を取締るのてある。總理大臣の勢力も信用も人望も新聞紙より附與せられて新聞紙に剝奪せらるゝとも云ふ可き場合が多い。國家の政治も新聞紙に妨げらるれば行はれ難く。新聞紙に助らるれば行はれ易い。現に今日。日本の政治に於て。實際に行はれて居るのは。新聞紙の多數が贊成して居るか。少くとも反對せぬ如き種類てあると云ふも過言て無い。新聞紙の多數から冷嘲や熱罵を浴せらるゝに至つては如何なる政治も政策も行はれはせ

ぬ。政治以外の一切の事業とても總て略ぼ同じ程度に新聞紙の力の下に置かれてある

更に又他の一面から見れば。新聞紙は人の行ひを支配するのみならず。目に見えぬ人心をも動すのである。人心を動すからは風俗を制すると無論である。又人の名譽をも掌握して居ると無論である

是等を湊合して判斷すれば、新聞紙の勢力は世界の一切を包括して居る。大も小も新聞紙の勢力より逃れるとは出來ぬ。昔しの言葉に正心。誠意。修身。齊家。治國。平天下と云ふが。此の六を總括して居るのが新聞紙である。新聞紙は人をして心をも正しくせしめ。意をも誠にせしめ。身を修めて家を齊へしめ。國をして治らしめ天下をして平かにならしむるとを總て手の裏に納めて居る。實に驚く可き勢力ではないか

斯かる廣大無邊とも云はる可き大勢力は何から來るのて有らう。他無し事實を報道して僞らず誤らざると。事理を論議するに於て多く私心を挿入せず。少くとも社會先覺の意見を代表せりと視る可き點が多い爲めてある。余は此點に於ては多く例證を要せぬと思ふ。即ち自明の理てあるのだ。今まで多く現はれた新聞紙で。報道の確實と論評の公明とを兼て居る如き者は皆存して。然らざる者は動もすれば廢業の否運に陷つた樣てある。此點から云へば新聞紙は世間を支配すと雖も自個の生存を世間から支配されて居る。新聞紙の勢力が偉大てあるけれども。「世間」なる者の勢力は更に偉大てある

新聞紙の雜報は如何に書くか

爾すれば新聞紙は其の雜報を面白ろ可笑しく書いたとて必ずしも賣れる者ては無い。けれど世間の人は多く其樣に思ふて居る。「新聞紙は面白可笑しく書き立てゝ多く讀者を得やうとするが爲めに。有る事無い事を取り雜ぜて書くが爲めに。自然と人の名譽をも輕んじ。自然と人の內事をも訐き。誹毀の罪を犯すにも至るのてある」とは世人の或る者が動もすれば唱ふる所て。神聖なるべき法廷に於て。神聖なる可き司法官の口からすらも聞く所てある。眞に新聞紙の內幕を知る

者から見れば。殆ど憫笑すべき誤解である。若しも新聞紙が面白可笑しく眞事虚事を取まぜて書いて賣れる者ならば。其事業たるや誠に容易で有らふ。何ゟ事實の眞を得んが爲めに。社員を社會の各方面に派出したり世界の果にまで通信員を置たり。或は高價なる電報を以て報道を取寄せたりする筈はない。尤も今日の如く進歩せざりし時代。假例へば今の東京市長尾崎行雄君などが新聞記者たりし時代には隨分記者たる者が。面白可笑かしく事實を作ることを能事としたかも知れぬ。尾崎君が新聞紙に對する批評の内には何うやら其樣な語氣もホノ見えて居る。けれど進歩した今日の新聞紙には其樣な事は斷じて無い。唯た事實の眞相を害せざる範圍に於て成るべく文を美にすることは勉めるけれど、事實の眞を少したりとも損じては。全く高價多勞を以て採取した實を自ら傷くる樣な者で。今の記者は之をせぬ。之をしては免職せられる。記者の部類に居ることは出來ぬ。又新聞紙として讀者から捨てられる。飽くまでも今の新聞紙が事實の眞と其の早きとを生命とすることは爭ふ餘地が無い。之を知らずして。面白可笑しきことを事實の眞よりも貴ぶ樣に思ふのは。少くとも二十年。時勢に後れた頭腦である。斯かる頭腦の人に評せられ。甚しきは罰せらるゝ事さへありとせば新聞紙は俗に云ふ『遣り切れぬ』譯である

新聞紙は營利の事業なるか

右の如く事實の眞を得んが爲め。而かも早く得んが爲め。世界の果などからも電報や通信を取寄せる程の次第で。猶ほ其爲めに社員も多く使ひ事務も増加する等の爲めに。實際の計算に於て收支が甚だ償ひ難い。余は親しく各新聞社の内幕を窺いた事は無いけれど。賣捌き上の競爭を常に見て居ると何の社に今月は何れほど力が有る。來月は何れほど疲勞するなどと云ふ事が。略ぼ察せられるが。今日に於て。其資本に對し相當の利子を附して行くとの出來る如き新聞社は東京に殆ど稀れである。恐らくは他の地方とても略ぼ同樣で有らう。是から云ふと新聞紙は直接なる營利事業では無い樣である。又今までに。富豪が數十萬の金を掛け

て新聞紙を初めた例も有る、政府筋の人が金力を吝まずに經營した例も有るが、大抵は失敗する。餘り遠からぬ以前に間接に三菱が手を出した新聞紙も有つたと聞くが、是れすらも利益を得るには至らなんだと推量するべき理由がある、尤も歐米には營利事業として成功して居るのも有るかも知れぬが、何うも營利を目的とす可き事業では無いらしい。營利を目的とすれば他の事業と比較にならぬほど薄利らしい

然らば何故に營業する

利益にならずして何故に營業するか。甚だ解し難い樣であるが、前に記した新聞紙の勢力を思ふときは少しも怪むには足らぬ、世には金錢をば何よりも重んずる人も有らうが、金錢以上に勢力を重んずる人も有る。新聞紙を經營する人は多く勢力を得んと欲するが爲めてある、尤も勢力と云つては語弊が有る。適當に云へば志を天下に行はんと欲するが爲めてある。勿論新聞紙には種々の人が居て、其の社員の一切をば天下に志の在る人とは云はれぬけれど、少くとも新聞社の幹部とか主腦とかを形つくつて居る人々は、治國平天下の志が有るのてある、濟民救世を己れの任とするとも云ふ可きてある

斯かる志の爲めに、損をしつゝも新聞紙を營業する人も有る。損をする迄に至らずとも金錢の計算を顧みられぬ場合が多い爲め、自然と新聞紙は薄利になる、薄利ては有るけれど。これを營業と言ひ做すならば、確かに社會に於ける最高等の營業てある。古の人は『丈夫、志を天下に得ざれば退いて辭を修め道を明かす』などと云ひ之を男子の本領として有るが實に新聞社は辭を修め道を明かにする人の據る所てある。聞く所に由ると故福澤先生は、東坡が韓退之の碑文に記した『匹夫にして百世の師と爲り。一言にして天下の法と爲る』との句をヒドク愛誦せられたとやらにて。何かの題辭に『百世之師。天下之法』と自ら書せられたのを余なども見受けたが、定めし先生は百世の師たり天下の法たらんとを期して居たのて有らう。今の世に於ても。匹夫にして百世の師と爲り一言にして天下の法

と爲る如き人が若し有るとすれば、其人は新聞社に居るより外に居る所は無い。新聞社の人が悉く斯かる高き志を懐いて居るとは云はぬけれど、治國平天下の勢力ある營業には他の營利的營業に見るとの出來ぬ志の高き人のあるのは極めてプロバブルな事ては有るまいか。余自ら新聞記者て有りながら憚らずに斯くの如き事を云ふは聊か我田引水にも聞えるけれど、余は自ら新聞記者てあるだけに之を云ふ事が出來る。余が新聞記者として三十年の經歷は余をして斯かるとを云ひ得るだけにまて、新聞社界の知識を得せしめた。新聞記者は多く志の人てある意氣の人てある。生前一杯の酒よりも死後千歳の名を重ずる底の人が隨分ある。少くとも他の營業にあるよりは新聞社にあるが多い。此點から云へば、人が新聞紙を社會の木鐸と云ひ新聞記者を布衣の宰相と云ふは決して新聞社を賞め過ぎた言葉て無い。新聞紙より外に社會の木鐸なる語に當嵌る營業は無く、新聞記者より外に布衣の宰相と云はるべき職業は無い

新聞紙は人の名譽を誹毀するか

何人も他人の名譽を傷くる權利を持たぬ以上は新聞紙なる者が人の名譽を傷けて成らぬのは勿論てある。其れが爲めに、若し誤つて人の名譽を毀損したる場合には、甘じて重き刑に服するのてあるけれど若し、新聞社に、人を誹毀する意志があると云ふ者があれば余は斷々乎として反對する。新聞社は決して人の名譽を傷けんとする意志を持たぬ。新聞記者は世間の水平よりもヨリ高き智識を以て居る。人の名譽の重んず可きを知るとの通例の人に劣らぬ。新聞紙は微力ながらも救世濟民の志を抱懷して居る。人の悲みを悲み、人の傷みを傷むのてある、人の名譽を毀くることを喜ぶ筈が無い

唯だ事實の眞を重んずるが爲めに、事實に忠ならんとして知らず〳〵誹毀罪に問はるゝ場合を生ずるのてある。若しも誹毀の法文より「事實の有無を問はず」との文句を刪り、事實其通りならば誹毀に非ずと云ふ事、乃ち盜賊を盜賊と云ふ事は誹毀に非ずとしたなら

ば新聞紙の誹毀事件は十中の八部を減ずるであらう。今は盗みをした人をも盗みをした人と云はれぬ世の中である。少くも新聞社だけは。盗みをした人を盗みをした人と書くが爲に誹毀罪に落さるゝ條件の下に立て居る。此條件を知らずして新聞社をば誹毀の意志ある者の如くに云ふは。酷に失するのである

殘る二分は何より來る

誹毀の八分までは事實を重ずる爲めに。事實を事實として。知らずに法文に觸るゝとせば殘る二分は何の爲めに法に觸るゝや。是れは新聞紙の事業が。其性質上。非常に急がしきが爲めである。世人は。今朝の新聞紙に。若し曉け方。即ち午前二時頃の火事の事を書て有れば非常に驚くて有らう。實に午前二時の出來事をば。現場へ行きて探知し。歸り來りて文章に綴り。活字を拾ひ。活版に組み。ステレオタイプに取り。機械に掛けて印刷して之を朝の間に配達する。其忙がしさは察するに餘りが有る。斯かる事柄に多少の誤りあるは。或は恕す可きては無からうか。併し。新聞社の内幕に入て見れば晝間の二時頃とても其忙がしさは明け方の二時頃と少しも違ひは無い。之を余の經營せる日刊新聞萬朝報に就て云へば。晝間の二時ならば第一版の〆切時であるから。午後二時の火事を報道するのは午前二時の火事を朝の版に組入れるのと其の至急さが同じてある。午後の四時には第二版を〆切る間に合はさねばならぬ。六時でも七時でも十二時でも常に。其の時の特別なる版に追はれて居る。少しも新聞社には悠々と或る報道を吟味し詮議して居る暇が無い。ヨシヤ前々から定まッて居る續き物の如きとても。毎日他の急用に追はれるが爲めに執筆者が。ヤッと〆切に間に合ふ樣。大急ぎて書き綴る故。唯だ事實に忠實と云ふより以上には何事をも顧みる餘地が無い。而かも其の事實に忠實と云ふが。綿密な吟味の出來ぬ際てある爲め。寸毫の誤謬も無いと云ふ譯には行かず、何うかすると事實と相違することが有る

苟くも事實に齟齬する以上は。書かれた人は容赦無しに新聞紙を責め立てる、假例へば夫婦喧嘩の記事に

女房の年齢が一歳だけ違つて居る。其の夫婦喧嘩は事實て有つても。書かれた方ては單に『此記事は間違つて居る』と言做さふとする。新聞社へ正誤を求むるなどは大抵。其れてある。針ほどの點が相違すれば棒ほどの事實が抹殺される。斯様の所から云へば事實の間違つた誹毀も。時に無いとは限らぬが決して記者が故意に事實を違へる譯ては無い。其れだから若し誹毀罪へ。犯罪の意志無き行爲は罪を爲さずと云ふ汎例を適用すれば。殘る二部さへも消滅する。即ち新聞紙は決して人を誹毀する事は爲さぬと爲る。余は今の進歩したる新聞社が人を誹毀する筈は決して無いと斷言する。新聞社は犯罪の意志無くして罰せられつゝある。けれど是れも致方が無い。犯罪の意志は無くとも。人に迷惑を掛くるのてあるから。或る程度までは謝罪もせねば成らぬ。服罪もせねば成らぬ。けれど。犯罪の意志が有るかの様に。『讀者を多くせんが爲めに面白可笑しく書き立てゝ』などゝ言做すに至つては容易に承服する譯には行かぬ

内事は記す可からざるか

夫婦喧嘩と云ふ如き事は人の内事てある、ヨシヤ事實相違せずとも書くことが宜しく無い。書かれた人に於て其れだけの迷惑を感ずる。從て誹毀の告訴を起す權利が生ずる。法文の事實の有無を論せずとするは茲てある

けれど人が社會の一員として社會に住居する以上は反社會的の決果を來すが如き行爲を爲しては成らぬ。是れを爲せば其れだけ人に笑はれるとか。疑はれるとか。擯斥せられるとか。憎まれるとか。或は侮られるとか。詰り自個の不利益に傾向する反應を受けることを免れぬ。夫婦喧嘩の如きことを爲して人に賞められやうと期待するのは。社會の道德律を知らぬのてある。社會道德から云へば人類の社會に住む以上は社會から監視せられることを辭することは出來ぬ。俗に云ふ『人目の關』と云ふのが社會の監視て有つて。是れが社會の風紀を支へ。惡行を困難にし。惡人を窮屈にすると何れほどて有るかも知れぬ。全く『人目の關』

は法律の届かぬ所を取締るのて。若し之れが無ければ社會が腐敗し墮落するのみては無い。安寧も無く秩序も無く。全く社會を爲さぬまてに破裂して了ふかも知れぬ。若しも社會をば人々の孰れにも安心の出來る者と爲さんが爲めには。成る可く此の「人目の關」を明かにせねばらぬ。新聞紙が即ち丁度其の任に當つて居るのである。眞逆に今の新聞紙は單に夫婦喧嘩たるに止まる如き事柄は書き記しはせぬけれど。「人目の關」たると同樣の功力を現はし能く世を監視し。人々をして社會に安心することを得せしむることは。所謂る救世濟民の小なる一方面てある。少しく社會道德を下落せしむる如き傾向ある事柄は。書かねばならぬと感ずる場合も有る。けれど其の心は誹毀の心て無い。社會に諡す心てある、此の心あるが爲めに、人々の心も正きを失はず。社會の良風なども保護せられて行くのてある。新聞紙が人の內事を書くことを非難する者は。先づ之が爲めに社會の良風の保護せられつゝあることを知らねばならぬ

公けの人は公けの所持品なり

併し實際に新聞紙が人の內事を書くと云ふは。多くは一私人の事ては無い。公けの人の事てある。若し一私人の事ならば必ず憐む可きビクチム（被害者）を助けると云ふが如き博愛的の動機から出てゝ知らず〱其加害者に辛く當る樣な事情てある

公けの地位に立つて居る人に至つては。唯に自分の內事を內事として人より隱すことが穩當て無いのみならず、自分の一身を公衆の所有品の如く誰れにも見ることを得せしめ。殆ど八面玲瓏にして置かねばならぬ。新聞紙たるものは之に向つて容赦すべからざるのみて無く。常に特別に明かなる眼を以て其人を睨んて居ねばならぬ

或は西洋の新聞紙は人の內事を記さぬなど云ふ人も有れど、其れは西洋の新聞を能く知らぬのてある。西洋の新聞は。無論に內事を書く。殊に公けの人に對しては寸毫の容赦が無い。新聞紙にも雜誌にもカリケーチュア（即ちポンチ畵）の出て居ることは餘ほど多い

がカリケーチユーーアとは人を嘲弄するとか冷罵する如き意味である、其の辛辣なることは日本の新聞紙の及ぶ所で無い

一方に於て西洋の新聞紙は誹毀に於て重い刑罰を受けるけれど刑罰以外に嘲笑書の領分に於て、大に人を窘め附けて居る、之れに對して決して日本の新聞紙をば人の名譽を輕ずる者だなど云ふ事は出來ぬ。今は西洋の新聞も日本の新聞も大した相違は無い

曾て倫敦タイムスが、時の大政治家、愛蘭黨のパーネルの姦通事件を訐いた如きは何うである、日本の新聞は是れほどの勇氣が無い、是れほどの決心を起し得ぬ、到頭タイムスはパーネルをして天地に身を容るゝ所なきまでに窮迫し、彼れを政治上から葬つて了つた、有名なヂルクなどもクローフオト夫人の件で新聞紙に訐かれ政治家の資格を失つて再び之を回復するに數十年を費した、のみならず元の如き信望は到底得るとが出來なんだ、斯かる次第であるから場合に由れば公けの人に對して嚴格なるは西洋の新聞紙が優つて居るかも知れぬ、日本の新聞紙の方が其筆鋒に於て多く曖昧であり情實的妥協的である場合が多い、却て妥協的であるのを大人の體度である樣に言做す人も有る、時にも由るて有らうけれど、妥協的情實的の體度は變則である、正則では無い、大は天下國家の治安より、小は一個人の心情行爲をまで規正して、國家の機關とも爲り社會の教育者とも爲り、個人の指導者、慰藉者保護者とも爲るべき本來の責任より云へば記事も意見も、成る可く明晰で、是を是とし非を非とする點に於て疑似を容れぬが本統であらうと思はれる

新聞紙を恐るゝは誰ぞ

斯樣な事を考へて見れば、世に、ヒドク新聞紙を恐るゝ如き人の有るのも無理とは云へぬ、實に新聞紙の勢力は恐ろしいほど強いのである、けれど、幸ひにして新聞記者の多く、殊に其の幹部とか主腦者とかの多くは、勢力の強くなると共に責任の重くなることを自覺して居る、決して強き勢力を濫用妄用する樣な者は無い、若し其樣なのが有れば、社會は其樣な新聞紙を

信用せぬ。其様な新聞紙をして勢力を得せしむることを許さぬ

故に其の行爲に於て自ら耻る所無き人々は新聞紙を恐るゝに及ばぬ。然るに近時。官僚界の大頭連より。衆議院議員の多く。政府部内の有力者など。新聞紙を恐るゝが多い。其れが爲めに。新聞紙に對する法律の壓迫は年々に重くなり。今は署名人の外に。筆者を罰し。猶ほ記者を罰する如き追窮的の手心を現はして來る。若しも新聞紙の品位が年々に墮落するならば取締る手心の年々に嚴重を加ふるは當然で有るけれど。實際新聞紙の品位は年々に向上するのに。取締りが益々嚴重を加ふるとは。即ち公けの地位にある人々の自信が段々に弱くなる證據では有るまいか。公けの地位に居て能く其職に叶ひ。少しも地位を辱むる如き汚行が無いならば。自個の實行を以て自個の名譽を保護して行く。若しも新聞紙が惡し様に書けば其の新聞紙が信用を損する結果と爲る。余は公位公職の人が新聞紙を壓迫せんと勉むるのを社會の健全なる現象とは思はぬ

今日の新聞紙は何の點から見ても社會の實際より一歩進んで居る樣に見える。其の知識でも趣味でも情操でも。社會より一歩先に立つて社會を導いて行きつゝある。即ち社會教育者の任を盡しつゝあるのである。殊に社會的道德に至りては今の社會の有力なる人々と新聞紙との間には雲泥の相違が有るとも云ひ度い。我が社會の公德と云ひ紳士達の品行と云ひ又其の道德的觀念と云ひ。今の新聞紙の紙面よりは殆んど劣つて居る。是れが即ち新聞を恐るゝ所以で有らうが。さりとては情け無い次第である。若しも今の世に新聞紙が無ければ。世の中は全く智識的の暗と爲るばかりで無く。道德的にも暗と爲り。愛國心も慈善心も奮闘心も義務の念も何れほど薄くなるかも知れぬ。斯かる點に於て新聞紙は國家の政治と社會の道德とを双肩に擔ふて居る樣な者である。而かも其の記者たる者は敢て社會から表彰せられやうとも國家から功勳を認められやうとも希望せぬ。眞に國士たるを辱めぬでは無いか。是れ即ち余が新聞紙の爲め新聞記者の爲め。公廷に出

てゝまで聊か辯ぜざるを得なんだ所以てある。但し新聞紙と云ひ新聞記者と云つた所て。偶には羊頭を掲げて狗肉を賣るのが無いとも限らぬ、其れは官吏の中に盗賊が有り商人の中に詐欺師がある様な者てある、止を得ぬ禍てあることを、世人に於て[illegible]恕てあらう（完）

學問と流行

文學博士 上田敏

流行とは唯一時の移氣て、淺薄輕浮の現象に過ぎないと、普通には定めてあるが、よく考へて見ると、さうばかりも言へなくなる。現代の思想が萬物の流轉相を益々痛切に感じ來つて、すべてに對し、靜的よりも寧ろ動的の見方をしてゐる點から見ても物の移り變りといふ事は手輕に打消して了まふことが出來まい。內心を省察しても外物を攻究しても、歷史を大觀しても、人間の思想は常に波動を連續させて、一大リズムを作つてゐる事實が解る。而して其一例として學問を取つて見ると、思想を發表し、又產出する此活動に就いても常に多少の流行があつて、或時は一種の學問が一世の視聽を聳かして、何事の解決も之に仰ぐことが暫時續くと思ふと、何時の間にか他の學問が思想界に重きを爲して來て、終に前者の株を奪ふやうになる。學問界にも無常の風が吹く。流行り廢りは服裝や遊戲ばかりて無く、いかに着實を裝ふ論者が慷慨して、世間の輕佻を罵らうが、論者自身もいつか新しい思想界の時勢粧にかぶれて了まふ。

尤もこゝに學界の流行といふのは、或種の技術を習得しようとする人數の增減に就いて言ふのではない。現今の日本に於ける如く、眞に知力や感情の好奇心即ち知識欲の刺戟に促されて、學問に志す者は極めて少

數てある場合には、大學や專門學校に於ける入學志望者の數に據つて、直ぐさま學問の流行を論じることは出來ない。彼等は其父兄及び自身の願望て、一番食べはぐれの無い職業にありつく爲、現代の要求する資格を得むとする。學問は目的てなく、手段てあるから勢ひ技術の方面に重きを置いて、思想上から言へば其日暮らしの狀態にゐても滿足してゐる。獨創とか發見發明とかいふ事はさまて肝心ては無い。無線電信の原理はヘルツのやうな不急の研究を積む學者に任せて置けばよい、やがてマルコオニが出て來て應用を試みる、そこて日本人はマルコオニの機械を理解する能力さへあれば、交通の便利ある今日、直に之を採用して出來るなら廉い材料か勞銀て之を模造すれば澤山ては無いか。飛行機の如きも要するに金の問題て、一二年の練習と機器の購入費と、飛行場さへあれば甚しい後れを取らずに濟むだらうといふ考が、公言するとせざるとに論無く、一般に行はれてゐるやうだ。もし此の考が永く續いて極端に行はれたら、終には社會活動の源泉が涸れ果てゝ、國家としても萎縮衰頽の悲境に沈淪するかも知れないが、まづさしあたり一方には衣食の方便を求めてやまない多數人があり、他方には現今のやうな社會の諸機關を運轉する實務家が入用てある以上、世間が高等職人を要求するのは自然てある。其數は單純な需要供給の理に支配されて變動する。例へば日本は海國だからと言つて造船の技術を習得する學生が大勢出來てみると、一旦世界造船業の不振に會して急に供給過多に行詰まる。今も多少はさうてあるが、一時法律萬能の信仰が盛てあつた時、むやみに法律の學生が出來たが、今日ては其方面の學校があまり思はしくないやうだ。此頃流行の電氣工學ても醫術ても、いつまて今の盛況を維持すべき、要するに學生が志望する學科の人望は偏に經濟的の原因に左右されるのてある。

吾人がこゝに學問の流行といふのは、隱約の間に隆替してゆく精神上の變遷てある。必ずしも其學問に從事する人の多寡に制せられず、唯何となく一種の學問が人氣を失つて、生氣ある活きた思想の中心や思索の

方法が、他の見方に移つて了まふ現象を指すのである。然れば一季半季の輕浮なる流行てはない、寧ろ世俗人心の波動から生じたリズムてあつて、既に勢力を失してゆく學問や思索法に、たとひどのくらゐの眞理があろうと、大勢の決する所、抗す可からず、自然と一世はまるて異がつた態度を以て人生に對して別種類の解決をつけようとする。この時、問題は理論上の眞僞ではない、氣分の相異てある、社會の情調が一變すると共に、物の考へ方も異がつて來て、必らずしも從前の思想を否定するのでは無くとも、言はゞ焼點が移動したので、興味も、着服もがらりと面目を一新する。此時精神上の習慣に囚はれて、心の筋骨が硬くなつてゐる人が、頑固にも舊來の考へ方をして、生きた問題を論じようとする時、世間は强いて之に反對はしない、否時としては理論上、一々尤もの次第と首肯はするが、實際上には何の影響も蒙らず、感化も受けず、單に冷然たる敬意を表するに止まる。故に時としては理知の方面より見て、多少の缺點があり、論理上の連鎖が判明しない言說ても、もし何物か一世の氣持に通じた生氣を具へる時は、反つて人は其方へ耳を傾けて、實行上の暗示を受ける。生きた學問に近むか、死んだ知識に安んずるか、こゝに岐路がある。過去を復活させる爲てなく、未來を建設する爲に生きてゐる吾人は、どうしても世界のリズムに乘つて一代の情調に共鳴したいものだ。

現代の情調を一言にして蓋へば靜的よりも寧ろ動的といつて可からう。今の生きた學問の人は硬い心の型てなく、嫋やかな心の傾向を有つてゐる。一代の趨勢は漸く唯理主義を離れ、知力萬能を疑ひかけて來て、情意の發動に重きを置いて來た。屋上屋を架し、一見整然たる組織をなしてゐる學說に、人生の指導を仰がない。今日の人は幾多の哲學系統が、それぞれ自己の掘つた溝壑の中へ陷落したのを知つてゐる。外見頗る高遠なる其理論が何よりも大切な人生に深い印象を與へなかつた事も知つてゐる。而もまた永く一所に低徊してゐる譯にもゆかぬ。一條の活路は前進にある、未來にある。道は飛躍と推進とにある。生命の敎へる道が即ち

眞の道であると知つては、力と命とが眞や僞の上にあるを確信してそれを賴みにし、それを發足點として思想を進めてゐるのが、現代の達人が取る所の方針である。

中世に煩瑣哲學があつた如く、近世の一時代に獨逸の形而上學があつた。而して後者も今は其命ぜられた役目を濟ませて思想界の博物館に收藏されかゝつてゐる。獨逸の形而上學が全然謬つてゐる譯では無い、辨證法の天才が畢生の力を籠めて建設した巍然たる大厦は、ゴシック式の大伽藍と同じく後代の感歎する所である。而してまた之に對すると同じく、今日の人は唯感歎するのみであつて、誰も現代の精神を代表する樣式として獨逸哲學を全然採用しようとはしない。さりとて吾人はまた英佛に起つた實證哲學を以て現代精神を代表するものとはしない。何となればそれが吾人が、知力の要求と生活の推進力とを充分に滿足させないからである。吾人は今新しい考へ方を發明して、今まで人があまり重きを置かなかつた方面から思想上の飛躍を試みようとしてゐる。これは今世界の一般の趨勢であつて、漠然たる影響は既に吾國へも傳はつて來た。例へば七八年前までは何ぞといふと、カントのヘエゲルの言つて議論の權威を付けた下らない風習までが今は全く下火になつた事などは、一寸とした變動ではあるが注目するに足りる。藝術の批評に美學を昇ぎ出すことも廢り、人生の議論も今や一層痛切の度を加へて、普通の倫理學者敎育學者の枯淡にして潤ひの無い學說には荷が勝つて來たのは、如何に十九世紀前半獨逸風形而上學が、人氣を失つたかといふ證據になる。

かく言へばとて、哲學が現代に勢力を失つたのでは無い、唯獨逸の形而上學が思想界の焼點から轉移しただけである。丁度文藝にも美術にもさういふ例が多い。希臘の敍事詩も之を模ねた羅馬や、近世に起つた伊太利亞はじめ英獨の敍事詩も實に立派なものである。然し今は誰も「失樂園」のやうな詩を作らうとはしまい。過去百有余年間にも大變動があつた。ゲエテが「ファウスト」を作つたからとて、現代の詩は皆あゝならずとも

可いドストイエフスキイの「白痴」が丁度ゲエテの大作に對する現代の代表では無いか。又現代の美術家にラファエルロやルウベンスの畫を要求する人がゐれば、よほどの解らずやだと非難されて了ふだらう。前代の思想は謬つてゐる爲に除外されてゆくのでは無く、唯燒點の移動に因つて閑却されるのである。

哲學よりも更に專門的の學問に就いて見ても同じ現象がある。例へば言語學の如きものだ。十九世紀の中頃一時非常の勢で文化を説明する學說の中心となつた榮華は今いづこにある。マクス・ミュラアの才筆は斯學の大望を世間に紹介するに力あつたが、今日となつて氏が學説の幾ばくが殘つてゐるか。例へば神話傳説に關する言語學派の説明の如きは人類學社會學の一擊に依つて粉碎されて了つて、吠陀を以て原始人の宗教觀を論じたり、日光神話ばかりで凡べての傳説を解釋しようとする學者が今ゐたら、よほどの時勢後れてある。空の空なる哉すべて空である。學問も亦人間と同じくいつまでも世路に誇る事は出來ない。

萬物の流轉相を觀じてみれば、無常は世の常である。永久の眞理とは永久に眞理を追ふ所にある。人は常に生きねばならぬ。生きるとは變化する事である。故に學問も亦日に日に新らたならねばならぬ。學者にして永く清新の氣を保たうとならば、一代の情調に共鳴しうるだけの生氣を養つて、絶えず青春の嫋やかさを保存せねばならぬ。生命のための學問、知力といふ抽象的のみの滿足を計らず、情意ふたつながらに悦樂を感じるやうな考へ方をして、常にしみじみと身に當る親切な思想を何よりも大事にするが肝心である。斯心だにあらば、變轉して一日も止まること無き思想の興廢に處して、一種の安心は得られる。たとひ從來珍重してゐた思想から脫離せねばならぬ事があつても、よもや平坂の上から谷底に轉じゆく岩石を眺めて、シシュフォス王が嗟嘆する如き悔恨の情は無い、寧ろ海洋の波濤を凌いで、西天に落ちる星の行方を追ふオデュッシウスの心に驅られて後を顧ることは無い。萬物は流動する。地平線も移動する。生きるとは進むことである。

「積極」の競爭より「整理」の競爭へ

松山忠次郎

官僚黨の方でも政友會の方でも、財政方針に於ては兩方共全然失敗して居ると私は思ふ。其失敗したのは何の爲めかといへば、所謂積極的政策の競爭で失敗したのである。例へば鐵道敷設であるとか、築港であるとか、治水費であるとか、若くは河川修築の補助であるとか、近頃の流行言葉でいへば所謂積極方針で以て、政友會と官僚黨とが盛んに競爭して來たのである。現に政友會は近年地方の選擧區に於て、オレの方に入黨すればお前の方に鐵道を敷いてやる。オレの方の代議士を出せばお前の方に築港してやるといふ約束を大分したのである。そこで桂一派の官僚黨は、之を見て更らに其上に出やうとして、鐵道は今后十何億圓の公債を發行して全國に鐵道網を張つてやるといふ、詰り政友會よりもオレの方が鐵道を餘計敷いてやるといふ事を示したのである。又政友會で何千萬圓かの治水事業計畫を立てると、オレの方はモット大きな滿足を與へてやるといふので、何億圓といふ治水事業の計畫を立てる。こういふ具合に競爭をして、人氣取りをし合つたのであるが、其結果は自繩自縛に終つて了つた。官僚政府が昨年倒れたのも畢竟は此積極政策の祟りである。財政困難の結果である。此祟りがなかつたらば、も少し壽命が續いたゞらうと思ふ。政友會の方でも在野黨である時分には矢鱈に約束をしたが、いよ〳〵自分が朝に立つて、之が出來る位置になるといふと、約束の履行を請求さるるのと、片一方には金が無いのとで非常に困つて了ふのである。現に昨年の秋の豫算編成期には、各選擧區からして、約束の鐵道はどうして吳れる？約束の築港はどうして吳れる？約束の河川修築はどうして吳れる？といふので方々から責められた。といふた所で財政上の困難で　所謂無い袖は振られ

ぬので、之に應ずることが出來なかつた。頗る困つたのである。或は他日政友會內閣が倒れる時には、矢張り此積極方針の祟りが大原因を爲すであらうといふことは今から豫想される。で官僚黨一派も政友會も、積極的政策には共に失敗して居るのである。固より日本は議院政治の國である。議院政治の國では多數の人望を博して議院に多數を制する必要が無論ある。そこで政黨が人氣取りをやるといふ事は、之は止むを得ない事である。決して褒め立てるべき事ではないが勢ひ免れないのである。然るに此人氣取りをする手段が官僚黨も政友會も頗る拙かつたのである。若し之に對して桂一派も政友會も、積極政策の代りに整理の競爭をしてさうして人氣取りをしたなれば、其人氣取りも積極政策よりも寧ろ有効であつたと信ずる。さうして自分が責任の衝に當つた時分にも實行が出來て決して困らぬのである。然るに其場限りの無責任の事を言ふたのは本當の政治家とはいへない。官僚黨、政友會双方共人物に乏しいといはなくてはならぬ。

然らば整理の競爭はどうしたらよいかといふに、蓋し租稅の整理の競爭の如きは最も有効なものであると思ふ。鐵道を敷設してやるといふ代りにお前の方の租稅を減じてやるといふた方が人氣取としても餘程有効である。之は何人も異論のない所であらうと思ふが、然らば減稅の財源は何であるといふのに、それは容易く見附ける事が出來る。即ち減債基金の一部を之に用ふることが出來るのである。固より減債基金を減らして租稅を輕減しろといふ事は昨年來大分人の唱ふる所であるが、之まで世間の人が唱へたのには、之が實行上必要なる條件を見落して居るのである。從つてそれが空論となつて行はれないのである。然らば其必要條件は何であるかといふのに、鐵道の建設改良費を減縮する事である。鐵道の建設改良費を減縮しなければ、どうしても今日の減債基金は減ずることが出來ないのである。今日の財政では此二つは互ひに關係して離るべからざるものである。だからして鐵道費を輕減しないて、獨り減債基金を減らせといふたとて、それは無

理な注文であつて行はれることでない。其理由如何といふのに、今日では毎年五千萬圓づゝ既發行公債を減ずることになつてゐるが、仝時に之と仝額若くは夫れ以上の新公債を發行することになつて居る。度々世間の例に引かれて何人も知るが如くに、鐵道の建設改良費に四千萬圓募集しなゝてはならぬ。朝鮮特別會計では千二百萬圓發行しなくてはならぬ。又臺灣の公債は特別に償却の道がついてあるから今いふ必要はないが、治水費の爲めにも數百萬圓の借入金をしなくてはならぬ。之は預金部の金を借入れることになつて居るが、然し詰りは國庫の借金に相違ない。さうすれば毎年約六千萬圓の借金をしなくてはならぬ。減債基金で五千萬圓を償還しても、新たに六千萬圓の公債を發行することになれば、我國の公債は決して減じないのみならず寧ろ増加するのである。斯ういふ計算であるに拘らず、只單に減債基金を減じて、そして其金で租稅を輕減しろといふた所で、行はれる譯が無いのである。若し實行すれば日本の公債は増す許りである。日本の財政は益々不信用になる許りである。こんな亂暴な事はどうしても出來るものではない。故に減債基金を利用しようと思へば、是非共鐵道の建設改良費若くは其他の方面に於て新公債の發行高を減じなくてはならぬ。片一方に於て新公債の發行高を減ずれば、片一方に於て減債基金を減らして之を減稅の財源に轉用しても差支ない事となるのである。例へば鐵道の建設改良費を二千萬圓丈け減じて其れ丈け新公債の發行高を少くし、其代りに五千萬圓の減債基金を三千萬圓として、其二千萬圓を以て減稅の財源に充てるといふ事なれば出來るのである。若しさうすれば地方に於て鐵道の普及は今日のやうでなくなる。が、租稅は減ずる。そして人氣取としてどちらがよいかといへば、選擧人は必らず鐵道の普及よりは減稅の方を喜ぶに極まつてゐる。何となれば鐵道の敷設さるゝ地方は極めて僅かの部分であり、殊に之を利用するものは尙更ら僅かであるが、租稅の輕減といふ事になれば何人も其恩澤に浴するのである。であるからして明かに此方が政黨の

人氣取りとしても有效なものである。そして在朝者として責任の地位に立つて行ふのにも行ひ易いのである。政友會のやうに約束はしたが實行は出來ぬといふ窮境に立たないのである。桂内閣も此方針でやつたならば昨年の如く財政困難の爲めに内閣を抛り出すといふ窮境に陷らなかつたのである。そして國家の爲めに此方が有利である事は申す迄もない話である。近頃田舍に引張る鐵道の不利益なることは明かである。山の中へ鐵道を引くのであるから、建設費は多くかゝる。そして山の中であるからして乘客も貨物も極めて少い。儲かり樣がないのである。殆んど國庫金を濫費してゐるのである。それよりも此金を以て過重なる租稅を輕減して民力を休養することになれば國の利益なることは明かである。近頃政友會内閣では制度調査局を設けて財政の整理を心懸けて居るが、西園寺首相も出來る丈け其効果を擧げるに努めるだらうし、又桂一派の人もオレ達ならば現内閣よりもモツト思ひ切つた整理をして見せるといふやうな口吻で、矢張り人氣爭ひをして居るやうである。して見れば官僚黨、政友會兩者の競爭は、財政上どうも「積極政策」から「整理」に變つて來たやうに思はれる。之は前に述べた通り、國家の爲めに喜ぶべきことであるからして、兩派共充分愼重の態度を以て財政方針の根本から立て直されんことを希望するのである。

露國の東方經營を論ず

法學博士　戸水寛人

何人も知るが如くに、露西亞が亞細亞に於て廣大なる領土を有するに至つた其基礎は、彼の有名なるエルマックの作つた所である。エルマックは元、勞働者であつたが段々身を起して、終には露西亞の爲めに、亞

細亞の西方に於て一つの土地を得た。其得た土地はシビールであつたが爲に其後に得た北方一帶の地にも其名を冠らして西比利亞と稱するに至つたのである。エルマックは後に土人の爲めに殺された。其年代は充分に記臆して居らぬが、確か十六世紀の終り頃と思つて居る。それから以後露西亞人は、段々東方に手を伸ばして來た。どういふ具合にして伸ばしたかといふに、西比利亞の河は概して南から北に流れるが、其枝流に至つては或は東から西に流れ、或は西から東に流れる。露西亞人は即ち此枝流に沿うて段々東方に手を伸ばして行つたのである。

彼得大帝も亦亞細亞に於て雄圖を企て、大いに爲すあらんとしたのであるが、時利あらずして、遂に領土を擴めることが出來なかつた。當時支那は可なり强かつたものであるからして、彼得大帝如何に大才を抱いて居つても、本國から遙かに距つて居る亞細亞東方に於て仕事を爲すといふことは頗る困難であつた。其後十九世紀の上半に於て、露西亞の豪傑ムーラビエフが西比利亞に來て、領土擴張の事業に力を注いだ。此人は年齡僅かに三十六七才の時に總督となつたのであつたが、志大にして才高く、終によく土民を征服して西比利亞東方の土地は略ぼ露西亞の有に歸して了つた。ネーベルスコイが樺太の半島にあらざることを發見した頃は、ムーラビエフが尙西比利亞に勢力を有して居つた時代である。今から僅か百年許り前には土地の探檢が未だ充分に行屆かなかつたが爲めに、露西亞人は樺太を以て半島であると思ふてゐた。然るにネーベルスコイは軍艦に乘つて樺太に來て、初めて半島にあらずして眞の島なることを發見し、驚いて之をムーラビエフに語つた。兎に角黑龍江地方はムーラビエフ時代に千八百五十八年に愛琿條約により露西亞の領土となつたのである。其後又千八百六十年に北京條約により烏蘇地方が露西亞の領土となつた。之から以後は東方に於て露西亞の勢力隆々として上り、露西亞の皇帝は更らに進んで亞細亞を席卷せんとしたのである。中央亞細亞に於て亞細亞を席卷するの基礎を作らんとした

のは有名なるスコベレフである。スコベレフが確か千八百八十一年かにゲオクテッペの戰爭に於てテッケ土耳其民族の本據を粉韲してから後は、中央亞細亞は忽ち露西亞の有に歸して了つた。そこて露西亞人は中央亞細亞に於て長距離の鐵道の布設を企て、千八百八十五年に至つて之が出來上つた。此鐵道は裏海の東岸のクラスナボドスクから起つてパミール高原の西方アンヂジアンまて來て居るのてある。之は昔支那が其版圖を擴めた時代に拓跋魏が當時有して居つた土地の西境てあつて、支那の歷史にあらはれて居る破落那の地方てある。露西亞人の考ては此鐵道によつて中央亞細亞を開拓し、之を基礎として印度を取らうといふ積てあつた。露西亞人の重きを置く所のものは東方にあつては只英吉利人のみてあつて、其他のものは彼等の眼中になかつた。英吉利人の有つて居る領土は、奮勵努力して軍隊の力て以て取るが、其他のものは唯虛喝して取れると思つて居つた。昔時スコベリスに屬して居つた黑鳩公將軍の如きは必ずしもさういふ考てなかつたが、兎も角も兵力を以て印度を取ることには非常に熱中して居つた。其後支那の振はざるに乘じて露西亞人は明治三十三年滿州一帶を占領するとなり、更らに進んて朝鮮をも抱擁せんとした。露西亞人の考ては、日本人の如きは何等の意氣地が無く、少し嚇かせば、滿韓を容易く手に入れることが出來ると思うてゐた。英吉利人は露西亞人に對抗する力があるけれども、日本人の如きは虛喝すればヘコマスことが出來ると信じてゐた。斯くの如き方法を以て亞細亞全體を壓すれば、亞細亞皇帝の冠は容易に露西亞皇帝の頭上に戴き得るものと思うてゐた。處が露西亞人の心が餘り尊大に過ぎたが爲めに終に日露戰爭を惹き起した。單に虛喝してヘコマスことが出來ると思うてゐた日本人は、豈に圖らんや、そんな虛喝て退くものてはなかつた。

此日露戰爭を起したといふ事は露西亞の方からいへば大失策てあつた。此日露戰爭を起す代りに英露戰爭を起したならば、印度は或は露西亞に取られてあつた

かも知れない。日露戰爭の起つた當時に於ては前に述べた中央亞細亞鐵道の外に西比利亞鐵道があつた。然し世界の人は皆此等の二大鐵道の輸送力について疑を抱いて居つた。何故なれば二大鐵道は立派は立派であるけれども、單線であるからして兵隊や糧食を運ぶに、大した力があるまいと思はれて居つた。英吉利人と雖も之に餘り重きを置いてゐなかつた。處が日露戰爭を初めて見ると其輸送力がなか〳〵巨大であつて世界は皆一驚を喫したのである。單線であるからして兵卒及び糧食の運搬に勿論難儀はしたけれども、然しヒルコフの案によつて廻避線を作つたが爲めに、其處のみは複線の用をなし、西比利亞鐵道は忽ち單純なる單線でないやうになつた。之が爲めに輸送力が非常に增して、終には百萬の兵を絶東に持ち來すことが出來た。果して眞に百萬であつたか否や私はよく知らないが、黑鳩公將軍の「回想錄」を讀めば日露戰爭の終り頃には其兵數は百萬に達したと書いてある。斯くの如き大兵を絶東に送ることが出來ることとならば、之に劣らぬ兵數を中央亞細亞鐵道等によつて印度の境界にも集むることが出來た譯である。然らば若し露西亞人が日露戰爭を罷めて其代りに英露戰爭を起し、奮然起つて印度攻略の謀を實行すれば、英吉利人は果して之に對抗し得たか否か疑はしい。印度にある英吉利の兵は二十二三萬であるが、其中七萬ばかりは英吉利本國の兵で、スコットランド、のハイランド地方から來たものが其主もなるものである。此七萬以外の兵は此印度の土民である。而して印度の國内には所謂小獨立國なるものが澤山にある。此等獨立國の人民は英吉利人に對して必らずしもよい考を抱いてゐない。事あれば却つて英吉利人を苦しめんとして居る。夫れ故に若し英露戰爭が起つたとすれば、英吉利は此等小獨立國に對しても兵力を以て之に備へなければならない。さうすると二十二三萬の中、國境に出て露兵と戰ひ得るものは先づ十一二萬しか無いと見なければならぬ。其外英吉利人は船舶によつて本國若くは加奈陀、濠洲等より兵隊を送つても其數知るべきのみである。先年トランス

バール征討の爲めに英吉利は二十萬の兵を送つて、內政上非常の困難を感じた事がある。陸に於て二十萬三十萬の兵を送ることは左程に困難でないが、船舶によつて左様の兵數を送るといふ事はなか〳〵容易の事でない。假りに三十萬を送り得たとした所で、印度の兵と合せて國境で戰ひ得るものは四十萬に過ぎない。而して露西亞は百萬の兵を印度國境に送り得るとすれば、戰爭が起つた日に於て、英吉利が之に對抗し得るや否や疑問である。疑問所ぢやない、到底露西亞に勝つことが出來ないのは必定である。

日露戰爭後、キッチナー將軍が印度に赴き、印度防衞の方策を講じて後は、印度の攻擊は可なり困難になつた。之は重もに器械の力によつて印度を防禦することにしたのであるが、其器械は可なり有力なものである。キッチナー將軍が此方策を講じた以前には印度の境界は甚だ堅固でなかつた。而して右に述べた如き狀況の下に英露戰爭が初つたとすれば英吉利人が印度を守ることは頗る困難であつた。露西亞の皇帝が眞に亞細亞に勢力を得んとすれば、日本と戰ふよりも英吉利と戰ふ方が捷徑であつた。然るに露西亞人は日本を輕んじ過ぎて、日露戰爭に大敗を招いだが爲めに、印度攻略の機會を失して了つたのである。黑鳩公將軍を初め、印度攻略に志ある人々は、思ひ茲に到れば、頗る遺憾であらうと察せられる。

今日に於ては露西亞人は大いに蒙古に注目して居る。私の考では露西亞人は必らず其目的を達し、蒙古を保護國となし、其結果更らに進んで之を自國の領土に收めることになるだらうと思ふ。然し露西亞人は單に蒙古を得るといふ事を以て滿足するや否や。私の想像では露西亞人は更らに進んで、北滿州を保護國にせんとするだらうと思ふ。之を爲すについては露西亞人は日本人の同意を得なくてはならぬ。日本は已に强國となつて、巨大の兵力を擁して居るから、露西亞人が昔日に考へた如く、單に虛喝で以てヘコマシテ了ふといふ事は到底出來ない。露西亞人が此考を持つについて日本人は之に同意すべきや否や。私は世界の大勢か

ら割り出して不利益を蒙らねならば同意してもよいと思ふ。露西亞が北滿州を取れば日本は其釣合上他の領土を取ることが出來ぬとも限らない。之が爲めに日英同盟を罷めるか否かは固より疑問である。私は英吉利を輕んずべしといふ事をいふのではないが、然し露西亞人と親交するのが、日本に取つて利益であるといふ事は斷言するに憚らぬものである。日英同盟論、日露親交論。之は今日に於て日本人の大いに研究すべき問題であると思ふ。

久しく豫告して終に掲載するの機を得ざりし稻葉軍醫正の「勞働者の生活問題」は必らず次號の本欄にあらはるべし。此論文は日本の勞働者の生活狀態を調査し、日本の食料品の精細なる研究を報告し歐米各國の勞働者の生活狀態と比較して、社會問題の解決に堅實なる參考資料を供したるもの、必ずや學界の注意を喚起せん。

日本人の將來發展すべき土地

日本人の將來發展すべき土地

尾崎行雄

一體殖民といふものはどういふ理由で起るものかといふに、之にはいろ／＼の原因があるやうである。例へば英吉利人が亞米利加に渡つて、今日の北米合衆國を建てた事の如きは主として信教の自由を得たいといふ爲めてあるし。又冒險心が盛んて海外萬里の地を踏破して見たいといふ爲めに本國を飛び出すものもあらうし。又只人間到る處青山あり、骨を埋むる豈故鄕の地のみならんやといふやうな考て、一層自由な生活を慕うて他國に移住するものもあらう。が概していへば、近來の殖民といふものは主もに國內の生活難に餘儀なくされて、止むを得ず外國に移住するといふやうなものが多いやうである。殊に現在の我日本人は頗る移住嫌ひの國民であつて、よく／＼の苦しい破目に陷らなければなか／＼本國を去り得ない傾向を持つて居る。之には深い原因のあるとて、其近因の最も主もなるものは德川三百年の鎖國主義の教育である。鎖國を行ふにはどうしても日本を以て最も天惠の饒かな、世界無比の良土てあると教へ込まなければならぬ。何ぞ圖らん、天は左樣に不公平なものてはなく、天の覆ふ所、地の載する所、長短得失多くは相半ばして、世界の廣き、日本以外にも澤山の良土があるけれども、誤れる鎖國主義を行はんが爲めに、日本は世界無比の良土てあるかの如き思想を日本人全體に吹き込んだので

ある。之はもつと研究した上てなければ斷言は出來ぬけれども、私の考ふる所ては、日本人は元來極く移住的性質の國民て、其祖先は恐らく移住民てあつたらうと思はれる。それは日本の家屋の如きを見ても分ることて、日本の建築は總て一時の假小屋の如きものて、之を西歐の建築樣式と比ぶれば、どうしても永久の住居といふよりも、一時の假住居を目的とした建築の樣に思はれる。又上古の國民が不完全な船に乘つて大膽な航海をしたと思はれる記事が歴史にも見えて居る。夫れ故に本來の日本人は、寧ろ移住を好む國民てあつたが、德川三百年の鎖國主義の爲めに、全く保守退嬰の國民となり了り、海外發展の志を抱く人が極めて寥々となつたのてある。此根本の誤つた考を直すには、どうしても敎育の仕方を改めて、世界の實情を明かにし、我日本のみが天の殊惠を受けて居るものてない事を知らしめる必要があると思ふ。

日本人は繁殖力の非常に盛んな國民てあつて、黑奴と支那人を除けば恐らく世界一てあらう。統計學者の言ふ所によれば人口は四十年間に二倍に殖えるといふ事てあるからして明治九十年頃になれば日本の人口は一億萬以上になるのてある。今日五千萬の人口さへも國土の狹隘を告げ、生活難の叫び聲がなか〳〵矢釜しくなつて來たのに、之が一億萬になつた曉には果してどうするか。之は經世家の餘程注意すべき問題てあらうと考へる。九州及び中國邊の人口稠密な事は誰ても知つて居るが、驚くべき事には今や北陸地方及び東北地方も已に土地の狹隘を告げて來て居る。先年私は福井縣に旅行して親しく其實況を目擊したが、如何なる田舍に行つて見ても、最早空地といふものが殆んどない。山と山との間の極く狹い谿谷にても田を作つて居る。又田の畦畔は出來る丈け細くして、只田と田との水を堺する丈けにして人が歩けない程にして居る。さうして稻を一並びても多く作らうとして居る。此例て以て見ても如何に我邦人の生活難が激甚を加へたかを察することが出來る。尤も工業が盛んになれば、いくらか此土地の狹隘と生活難とを緩和することが出來る

譯であるけれども、然し四十年後には一億にもならうとする人口を何時までも此狹い島國の中にのみ詰め込むことはどうしても出來ることでない。それで何とかしなければならぬのであるが、果して何とするか。之が非常の大問題である。

現今日本が本國以外に有して居る土地は、臺灣、朝鮮、南滿洲、樺太南半であるが、一體我日本人は寒さに堪えぬ國民である。衣食住共に寒氣に對抗する準備が少しも出來て居らぬ。極言すれば寒氣に打勝たうとする思想の全く缺けて居る所の國民である。例へば衣服でも住宅でも、風が恣まゝに吹き通ることが出來るやうな作り方であつて寒氣を防ぐ用意は全くない。だから北海道の如きでさへ、夏向きの家を建てゝ住んで居る。數十年間いろ／＼奬勵しても人口が思ふ樣に增さないのは之が爲めである。つまり裸で暮らすことは我慢が出來るけれども、寒さには到底抵抗力のない國民であるからして、樺太の如き處は、いくら勸めてもなか／＼見込があるまいと思ふ。今日の處で臺灣は最も有望で、朝鮮之に次ぐのであるが、南滿洲になれば果して日本人の發展に適するや否や頗る疑はしくなる。私はどうして將來日本人の發展すべき土地はもつと暖かい所でなければなるまいと考へる。

近來我當局者も彼の滿韓移民集中を唱へたに拘らず、南米に向つて多少の移民を試むることにしたのである。私は之は然るべき所置と信ずるが、下手にやれば、又北米の二の舞をやることになるからして、今回は是非上手にやつて貰ひたいのである。上手にやるとは何ぞや。只土地を得るといふ事である。土地を得ずして殖民をしやうとしても、それは只空論であつて、輙もすれば即ち排斥される恐がある。排斥せられぬやうにするにはどうしても自分の土地を有たなくてはならぬ。土地を有つには何も政府に限つた事ではない。會社なり一個人なり自分の土地を有つことが出來れば其處に日本人が移植することが出來るのである。英吉利人が今日世界到る處に有力なる殖民地を有するのは、國家が之を爲すよりも先きに、有爲なる會社や個

人が土地を得たによるのである。國家の力でやつた植民は多くは室咲の花の如く早く凋み、國民のやつた植民は恰かも天然の花の如く其色も匂も久しく續き且つ實を結ぶのである。我邦人もよく此道理を明かにし、自ら世界を家とするの大志を以て日本民族の發展に資する覺悟が無ければなるまい。

日本民族の發展策

田川大吉郎

◎先づ氣持のいゝ課題だ、大變いゝ題をお捉へなさつたと思ふ、例の眼孔豆の如き手合て、議會に出ても、せい〴〵區裁判所か、登記事務のような事しか、提出することを知らない連中の世の中だ、此題は確に一服淸涼劑たるの値を有つて居る、折角、お勉めなさい、而して紛々たる黨同伐異、蝸牛角上の爭ひに病みきつて居る一代の陋風を掃ひ天下晴のしたやうな、曠蕩恢濶の氣字を養ひたいものだと思ひます、

◎然し僕は此問題の今日に論議せらるゝを悲しむ、寧ろ今日に之を論議する必要あるに至らしめた政府の無能、迂濶、喪心、自屈の態度を悲しむ、僕は此點に於ては抑へ難い憤懣、不平、肝癪を有して居る一人です、元來、國を開いて列國に交る、日本國土の到る所を開け放して、外人の來往居住に任せて居るのに、我日本人のみが世界の各地に自由に往つてはならないといふ理窟がどこに在りますか、彼も來ることが自由てあるから、我も往くことは自由である、現にさうとすれば、日本人はどこそこと限り、限られないで、世界のどこにも自由に出入し、展開し、膨脹することが出來る筈です、然るにそれが出來ないから、此誌に此問題が出る、政府に滿韓集中論が出る、米國に非東洋人論がヤンヤと持囃さるゝつゞめて言へば、日本人は今世界の劣等民族で、世界の舞臺に、表て立つて公々然立ち廻ることが出來ない取扱の下に在る、何といふ情けない次第でせう、

◎僕は四十年ころ、所謂、日本學童問題の起つた時

分、同志と共に對米同志會を起して、それに抗議を申込んだ、當時の大統領はルーズベルト氏であつた、僕は或種の人の如く斯人を崇拜することの出來ない一人である、が、既に大統領で、本問題に對する殺活の權を握つて居る人だから、僕は同志と共に斯人に電信を打つた、日本の人民で、一國の公事に關し、米國大統領に直接電報を打つた者は、恐らく僕等が其一番駈けであつたらう、僕等は兎に角、此問題に痛心したものだ。

◎既にして僕は第二十五議會中の一人となつた、時も時、小村外相は移民の滿韓集中策を唱へた、決して僕一人の説では無い、内閣の説である、其方針である、時の内閣は、我移民の米國に入る能はざるを悲しんで、而して之を滿韓に轉ぜしめやうとしたのだ、即ち其外交不如意の始末を、滿韓に轉ぜしむるといふ大旆を掲げて之を糊塗し、抹殺せんとしたのだ、僕は如何にしても其姑息、卑屈、無責任を攻撃せずには居れなかつた、然し當年の議會は意外にも此大問題を等閑に看過し、越へて第二十六議會に至り、稍や矢釜しく之を論議した、政府も政府だが、議會も議會と謂はねばならぬ、何となく其の感受性がのろくて、其働きが間に合はぬ、氣の拔けて居る所がある。

◎僕は今貴問に答へるに、日本人の將來發展し往くべき先きを世界のどこ〳〵と一々其地點を擧ぐることを欲しない、然しながら僕の主意は如上の主意である、僕は世界のどこにても發展し得べきものと思ふ、政府は其樣な目的の爲に働くべきものと思ふ、それが出來ぬ位ゐの政府なら、其政府は有つても甲斐なきものと思ふ、寧ろ早速に罷めて貰ひたいものと思ふ、强ゐても罷めさする工夫をすべきものと思ふ、歴代皆弱腰の政府、これが僕が歴代の政府に反對する所以の證據である。

◎が、此くするためには、日本人の心得ねばならぬ事がある、曰く日本人は資本の無い人民だ、故に、世界の出稼ぎ人民だ、今の世は何といつても資本全盛の時代である、資本家は治者として優越の位地を占めて居

る、而して勞働者は被治者として不本意の多くを忍ばねばならぬ、海外に往く日本人は先づ之を覺期せねばならぬ、されば（一）既に勞働者として出るのだから、日本人は支那や朝鮮には向かぬ、所謂滿韓集中策は氣まぐれの沙汰だ、（二）且、古へから移住は南に向つて行はれて居る、例へば本土から臺灣への移住は輕く出來たけれど、本土から北海道の移住は仲々出來無いて、明治以後、約四十年の努力經營を費して、而して北海道の今日の有樣は御覽の通りだ、されば必らずしも南と限らないが、實に氣候の關係がある、氣候の溫暖にして產物の豐饒、物資の充足、文明の開發して居る所に移るは人情の常だ、日本人の往くべき所は第一に南洋、而して北米、而して南米、而して南亞と爲るのは自然の勢であらう（三）故に日本の政府は、どうしても南に向つて伸ぶべき方策を運らさねばならぬ、即ち太平洋を利用すべき方針の上に諸般の計畫を立てねばならぬ、太平洋は海じや無いか、海に家を立てらるゝかなどとケチな議論を控ねるを休めよ、海は世界の寶庫である、太平洋を正面の庭池として、印度洋を其小脇に抑へて進めば、日本の開展し往くべき先は、チッとも狹いことは無い、そこにズン〳〵伸びて往くべきだ、（四）滿洲をどうするか、十萬の血を流した所じやないかといふ人もあらう、尤も千萬な事じや、然しながらあれはあれて宜しい、あれ以上は不必要じや、僕はあの邊にあれ以上の金を入れ、力を入れ、魂を奪はるゝことに不贊成じや、人民が流れて往くか否やは自然に任するが宜しい、そこに資本の關係がある、事業の關係がある、資本と事業と相當の程度には人も往くてあらう、其以上には人は往かない、僕は其發展の趨勢を小さいとは思ふて居ないが、又大きからうとも想像し得ない。

◎問題は、世界に打かつためにはどうするかといふのてある、其は世界に同化せんことをすゝめる、即ち世界の風俗、民情、理想、要求を看取し、それに異を立てず、進んで言へば、其間に强ゐて日本振らず、能く彼等と協調し得る準備を爲すべきである、北米の人

が、日本人を嫌ふなら、其嫌ふ所以を考へるが宜しい、而して北米移住を其人の爲にも、我國の爲にも利益と思ふなら、政府は北米移住の志望者を何かと訓練するが宜しい、語學も教へたがよからう、語學の出來ないために刎ね返さるゝなど不用意の至りだ、其習慣や、禮儀や、作法や、何ゝ山出しの三助其儘が日本人の面目、本領といふ譯もあるまい、北米のそれを調べて、それを教へ込んだらどうだ、昔、安倍の仲麻呂は唐の政府に仕へたとて悪口されたが、今も尚其様な道念が我識者の胸底に存するや否や、僕は、世界に擴がる者は、世界を家とする者である、世界を家とする者は、世界に施して悖らざる宏大の心胸あり、信念あり、品格あるものだと思ふ、それさへあれば、日本民族は世界のどこにても擴がることが出來ると思ふ、從つて其涵養啓發が今日の必要である、而して其地先を彼此詮議することは此點から言へば格別必要ないじや無いかと思ふ、即ち只モー世界を家として進みたい、而して日本の擴張、日本の發達、日本の榮譽は、ちやアんと其中に在る、それを爲し得ないては日本の發展なるものは無い、

◎僕は所謂新平民を忌む者では無い、僕はどうか彼等にも和らかな言葉を與へて、彼等の心を開き、互に隔意なき交りをしたいと思ふて居る一人である、然しながら不思議に思ふことは、彼等の間に特種なる習慣、儀禮、風俗があつて、百千年を經ても渝らず、誰にても一見して其新平民の種族たることが分るといふことである、僕は其何の必要理由に本づくかを知らないが、馬鹿々々しい極だと思ふ、そんな馬鹿氣た窮屈な思ひをせずに、いつそ、氣前好く、一般の世風と同化した方が新平民の利益であつたらうと思ふ、又それが一般の利益でもあつたらうと思ふ、强ち舊風を墨守して世と共に推し移らないのも、決して褒めた話ばかりでは無い、それには今此様な例もある、無論、これは例の一種だ、僕は敢て此例を直に日本民族の世界化の上に適用せんとするものでは無いが、然し尚鑑みて貰ひたいものと思ふ、僕は、此詰らぬ、而してあまり善例と

も思はない此引例の中にも多少の考ふべき點はあると信する。

◎日本の米は多くとも五千萬石、最早、外國の産を仰がねば足らぬては無いか、其輸出は未だ五億に足りない、一人前、一年十圓の賣出しが出來ずに居るのである、思ひきつて、世界の嗜好を研究せよ、然らざれば此輸出の業は到底進まない。世界の嗜好は、世界の風俗てある、其風俗は自分て同化しない限りは到底分るもので無い。僕は同化をすゝめる、只同化をすゝめる、然れば世界到る處に靑山あり、埋骨何ぞ期せんや墳墓の地、日本の發展は期して待つべきてある。

先づ研究すべき根本問題

伯爵　大隈重信

それは仲々大問題だ。がそれに先つて研究すべき問題がある。此頃では醫學が進んで居るから、物質的に、即ち生理的にも人の健康が保たれ、壽命も延び行くべき道理だが、まだ思はしくはない。日本の兒童の死亡率は隨分多いのである、表面上から見ると餘り面白くない樣てあるが、併し全體を通計すると矢張り年々人口は大した勢を以て增して居る、大抵は全人口の約千分の十二以上の率て增して居る、即ち亞米利加、魯西亞等を除けば、日本は世界に於て人口繁殖の速度の頗る強い國だ。結構だ。が只繁殖するだけてはいかぬ。生存競爭の力の弱いものが多く繁殖するか。強いものが多く繁殖するか。是が民族發展上の大問題である、

　理論上からいふと、日本は今迄封建の爲に早婚が多く行はれて居た。加之此小さな日本が更に三百餘の藩々に分れ、そして其小さな區域内にのみ結婚が行はれたから、從つて血族結婚が盛て、從兄弟姉妹、累從兄弟姉妹等の配偶は甚だ多かつた。斯の如く餘り血の近いもののみが結婚すると如何しても人種が退歩する。是迄研究された所を以てすると宜くないこととなつて

居るが、實際に徴して先づ眞理である、すれば今迄の日本には到底優等な人種の得られぬ道理になつて居たが、今は此境界が全く取れ、何處へ行き誰と交るも勝手と爲る、從つて隨分東北人と九州人とが結婚もする。多少はまだ舊き慣習に捉はれて血族結婚も行はれ居るけれども餘程其數は減じ、國も遠く從つて緣も遠いものが相結婚する狀態となつて居る。是から見ると日本民族の血も今日では大分良くなつて居なければならぬ譯だ。特に心理的にも、是迄階級制の爲に壓迫され卑屈になつて居たものが、今日では其羈絆を脫し自由を得て、氣象が全く變つて居る。又今一つ生理的からいつても階級的制度の所產である座るといふ慣習も少くなり、小供も學校へ出れば椅子に腰を掛ける、そして規則立つた運動をするべく體操をやらさるゝ。その爲に一般人の姿勢が直つて來た。田舍の者迄も姿勢が善くなつた、昔は女子は內足のものが姿勢が宜いとされたので、勉めて變な步き振りをしたものが、それも矯正されて、今では自然の儘に足を運ぶ、又階級制時代には上を向くよりも下を向く方が多かつたものが、今では俯仰隨意である。道を行くにも首を擧げて濶步する事が出來る。それ等が又發育上に影響する所は尠少であるまい。獨り生理的のみならず其心理的に影響する所も決して少くない、斯くも凡てに於て擧動が改まり、從來陰鬱なものが伸び〳〵して來たから、人種も階級制時代よりは變つたものと思ふ、特に醫學上衞生上の進步は著しく、幾多健康の障害を未然に防ぎ、又疾病を驅除するのだから、人種は漸次に改良され行く譯である。

が是は一面觀で、更に一方からいふと、近來は日を追うて生存競爭が強くなり、人の職業を得る事が段々困難になつて居る。澤山な學資を遣つて學校へ入つても、それを出てから何職業をして宜いか、何をしたら獨立する事が出來るか。それが先づ萬人の頭を惱ます問題である。職業は得ない。人口は殖える。生存競爭は從つて激烈と爲る。是れ刻下の狀勢である。一方封建制度の壓迫が無くなつたけれども、一方又生活難の

壓迫がある。加ふるに外國から新しい幾多の思想が流れ込んで來る。それに後れざらんとしそれを消化せんと勉むる、斯くて又間斷なき腦力の消費の爲に神經衰弱も起る。即ち專制政治の壓迫は止んだものゝ、代つて思想の壓迫がある、又生活の壓迫があるのだから、體重は減ぜざるを得ない。其懸け値が漸次に少くなる譯だと思ふ。

日本はまだ斯ういふ例には當らぬけれども、一體文明の程度の違ふものが一所に居て生存競爭をすると。如何しても低い者は高いものに壓迫される。それで相對抗せんとして始終心配し行く結果は大に生殖力が減じ行くものである、幸に日本人は强い人間で、今日の處はまだ其心配はない樣だ。貧乏者の子譯山で年々澤山に小供を生む。けれども貧乏者は兎角生みっ放して善く育てぬ。それ故生存競爭には弱い人間が多い。之を如何せば能く其苦痛を減ずる事が出來るかといふに、何としても生存競爭の範圍を成るべく擴大せねばならぬ、狹い所で競爭すればする程、競爭が激烈を極めて少しても弱いものには早く生存の餘地が無くなる。昔は一國內でも移住は六かしく、大阪へでも江戶へでも容易には出られぬ。それ故狹い範圍にのみゴチャ／＼して競爭して居たので生存の維持が甚だ困難であつたが、今ではそれが自由である、他郡他國何處へ行くとも何等の制裁がない、けれども其自由は猶ほ只我國內だけに限られて居る。一歩海外に踏み出さうとなると仲々色々の規則が八釜しくつて容易には出られぬ。が是は一時の現象に過ぎない。日本人が外國に出て働く事の出來ぬといふ事は左樣長くはあるまい、外國でも疑心懼を去り、此方でも亦外國の事情を知つて彼等に嫌はれぬ樣にと勉めるなら其中には互の意思が疏通して障壁は撤せられる事となるであらう。兎に角生存競爭の範圍を取擴げる事が必要で、是が世界的に廣くなれば、互に長短相補ひ有無相通じて生存し得る餘地を發見する事が多いから、生活上の壓迫より免れることが出來るであらう。兎に角根本問題は第一に日本國民の繁殖力如何、第二に其物質的生理的の力如何

といふ事である、既に繁殖力に富みそして亦體質強健氣力旺盛であるなら實に理想的であつて、是に十分の教育を與へ、豐富な智識と卓越した思想とを加ふれば、其民族は直に世界を雄飛するであらう、而かも斯く世界を雄飛するからには身體も亦强壯を加へ智識も思想も共に大に進むといふ循環因果を示すのである。顧ふに日本は今や牢に居たものが牢を破つて自由の天地に呼吸する身となつたのである、前にも言つた如く、狹き血族結婚の陋習は破れて秦楚遠く相隔たる所のものが緣を交へる事となつて居る。昔は武士そのものが早婚である上に、普通の農家、商家にも亦此弊が多く、大概男は十七八から二十頃迄に學校を止して結婚したのだけれど、今はまだその年齡は學校時代である。二十五才迄は普通先づ婚姻はせぬ、西洋は餘り晩婚で寧ろ其弊に陷つて居るが、日本は女は二十、男は廿七八といふ處が先づ通例になつて居るから、生理上より考へると一番適當である。日本は即ち早婚より延びて今や適當の時代に入つて居る、是から先社會狀態の變化に從つて或は少しづゝ晩婚と爲り行くかも知らぬが、果して左樣なれば其國力は又疲弊を起す事となる。此く考へると日本の今日は甚だ宜い時である。日本が現在强大となつたのは、入牢の境遇より免れて心理上、生理上に幾多の改善を見たに因る事と思ふが、即ち體力は如何しても昔に比し增し居るべく又增し行くべき譯なので、偶ま然らざるものあるとすれば、それには他の原因他の弊害の伴ふ事と思はれる、そしてそれは除くに左迄難くはなかろう。既に此要素を日本民族が持つとすれば、世界に生存地を發見することは決して難くない。今はまだ日本人の移住を喜ばぬ處がある樣だけれど、左樣いふ所は當分避けて喜ぶ所に行く樣にするが宜い、其中には段々教育の力で智識を增し、世界的に競爭し得る體力の上に殖民的の能力をも加へらるゝ事となれば、今日日本人を喜ばぬ所でも次第にそれを喜ぶ樣になるは遠い事でなかろうと思ふ。

中米若くは南米に行けば日本人を歡迎する、そして其境土の莫大なる、日本の五千萬やそこらの人口は丸

切り持ち行いても開拓し切れぬ程である。即ち膨脹した今日の日本と比較しても其五六十倍の全地積のある事であろう。それ程の處へ五千萬の人間を播き散らしたとて何でもない筈だ、氣候風土も大して憚るに足らず、就中アルゼルチンの如きは略ぼ日本と同じ上に、地味も肥沃物産も豊富である。中米地方でも高い所へ行けば何でもない、アンデス山麓でも二千尺若くは三千尺の高さの處には肥饒の地は幾らもある、南洋も宜しい、日本人も現在大分行つて居る。が迚も多くは行けぬから仕方がない。馬來人や支那人が多數に入り込んで居るので餘地が乏しい。それは就中日本人が優等は優等てなり、目下護膜栽培などを盛にやつて居るのたから、此方面へも續々行くが宜しいけれど、顧みて中米南米の地廣く人少く。障壁を撤して邦人を歡迎する處に向ふの利は言ふ迄もない。我輩は邦人の多く此方面に注目するを欲する。

日本民族の今日の繁殖力を以てすれば、今の兒童が獨立し得るに至る頃、即ち二十年後には優に千五百萬を增すべく、五十年の後には軈て一億萬に達する、此過多の人口の吐き出し場がなくてはならぬ。それ故一方教育に於ても大に此殖民政策を加味し、それに協ふ國民の養成を勉むるが肝腎である、困る事には今日の日本人は殖民的には養はれて居らぬ。大體向ふのものに賣るに自分の好むものを作つて行くんでは不向な事は當然である、それを考へずに、不向とは何事ぞ、賣りに行くに賣らぬとは何事ぞ。不都合である。日本の貨物を排斥するとは不親切である。不埒であるといつた所で始まらぬ。左樣いはるゝ向ふに取つては只脅迫に感ずるばかりである。孔子も己の欲せざる所を人に施す勿れといふ、先方の事情も考へねばならぬ、郷に入つては郷に従へてある。西洋流にいふならば、羅馬に入つて羅馬に從へてある。日本人が北米へ行つて排斥されるといふけれども、彼地には大工も不足なら鍛冶もまだ不足である、苟も一藝一能の士にして行くなら大に迎へらるべき筈である。が此方には下らぬ所に尊大に構ひたら、注意が疎かであつたりする所から排

斥の聲を高むるのだ、內地に居る同樣に大胡座をかく、尻まくりをする。そして威張つて居る、向ふのものに嫌はれるは當然である。外國人が此方へ來て我々の坐る場所に泥靴を穿いて上つて見よ、堪つたものでない。其邊を能く考へ、成るべく向ふの風俗習慣を尊重して行くなら。彼等は結構だとて直にも握手するだらう。外國人が日本人を輕蔑して我儘をすれば我々は矢張り嫌ふ、人情は同じ事だ。いや日本の今日は、時代が變じてまだ新しい風俗習慣なるものが出來ぬ時だから、日本人同士の間でも隨分無作法になつて居る、約束も守らず。我儘をしてあばれる、此點を自覺して自ら大に戒めなくてはならぬ。又語學が必要である。是が出來なくては意思が疏通せぬ。世界的民族たらんとするには是から是が非常に大切である。

日本人の發展すべき土地

拓殖局第二部長　江木翼

日本人の發展すべき土地について意見を述べろとの事であるが、私の玆に話さんとする日本人といふのは內地人の事であるといふことを第一にお斷りして置かなくてはならぬ。今日、日本人といへば臺灣人もあれば朝鮮人もある。又樺太には樺太人もアイヌもギリヤークもある。然し今は其等の人についていふのでは無くして、主として內地人の將來發展すべき土地について、漠たる觀察を下して見たいと思ふ。

內地人の人口の增加の割合は如何であるかといふに、之は時に消長あるを免れぬけれども、最近の增加率は先づ、十年間に一割三分二厘六毛といふ割合になつて居る。此增加率を以て歐洲各國の增加率に比べるに日本の方が頗る高いのである。例へば英國の如きは

十年間の増加率が一割から八分七厘の間を上下する。佛蘭西の如きになると、其増加率が非常に少く十年間に僅かに二分二厘内外である。それから稍々率の高い國は獨逸及び和蘭てある。獨逸も時に消長はあるけれども先づ一割及び一割三分といふ間を上下する。和蘭は平均一割二分内外てある。それて日本の増加率は此獨逸及び和蘭と略ぼ同一てあつて、今日の有様からいへば頗る健全なる發達を爲して居るものといへる。米國は移住民が多いのて、増加率も高いのてあるが、從つて死亡及び出産による嚴格なる増加率を知ることが六つかしい。兎に角歐羅巴の各國と比べて、其率の最も高いものと同一の狀態に我日本はあるのてある。

それて此有樣て以て行くとすると、日本人の人口がどうなるかといふに、現在五千餘萬のものが、從來の率を以て推せば明治五十年には五千五百萬餘になる。それから明治六十年には同じ率て以て増加すると六千三百萬程になる。明治七十年には七千百餘萬となる。明治八十年には八千萬、明治九十年には九千百餘萬、明治百年には一億三百萬になる。之は勿論推算てあるけれども今から五十年程の間には一億といふ人口になるのてある。そんなに先のことを考へないとしても、これから先き二十年か三十年になれば七千萬八千萬になる。若しさうなると果して此日本內地の民族は、從來占めて居る所の土地の中に充分に入り切るかどうかといふ事は餘程の攻究を要するのてある。尤も年々人口が四十萬とか五十萬とか殖えた所て、其殖えた人口を悉く外に出さねばならぬといふ必要は現在に於ては無い。明治二十二三年頃には日本の人口三千七百萬といひ、明治三十年頃には四千三百萬といひ、今日ては五千萬というて居るから、二十二三年頃から見れば千三百萬も殖え、三十年頃から見れば七百萬も殖えて居る。此等の殖えた人間は皆、從來占めて居つた土地以外に出たかといへば決して出てゐない。勿論多少、北海道とか、亞米利加とか、朝鮮とか支那とか臺灣とかに行つたものはあるけれども、其れは殖えた部分の一小部てあつて、大部分は從來の土地に居つたのてある

からして、之から先き例へば明治七十年に人口が七千百萬になつた所で、今日よりも殖えた所の二千百萬人が悉く外に向つて土地を占めて行かなければならぬかといふと、さうでない。無論從來内地人の占めて居つた土地を利用し、生計の道を立てゝ行く餘地がないとは斷定が出來ない。或程度までは確かに餘地がある。從つて假りに明治七十年の七千百萬といふ推算人口よりして、現在人口の五千萬を差引き、殘りの二千百萬を何處へ割り振るかの研究はしなくてもよい。又此中のどれ丈けが内地に居られて、どれ丈けが外に出なくてはならぬかといふ事も今日は言ひにくい。然しながら同じ面積の土地を或一定の人口で耕やして生產して行くのと、更らに其れ以上の人口で耕やして行くのと、何れが生產的であるかといふに、成るべく少い人で勉强して餘計に生產することが出來れば之に超した事はない。其點からして考へれば今日日本の現狀といふものは、或意味に於ては寧ろ已に人口が多過ぎると言へるかも知れぬ。例へていふて見れば日本内地で一戶の耕やす農地の面積は明治四十三年に於て一町餘である。此四十三年の統計を見ると僅かに一町餘であるが、之を數年前に比ぶればそれでも少し殖えて居る。殖えたというた所で一町餘である。一町餘を耕やすといふ事は、日本の農法は如何にも小農的であつて又集約的であることを示すと同時に、又日本の農法が牛馬とか器械とかいふ、比較的勞力を少くして他の力によつて効果を擧ぐるといふ法を取らぬかといふ事を示して居る。先づ農民丈けからいへば、一戶の耕す所を、一町五反とか二町とかに殖やして、比較的少い人口で、大いなる人口が耕したと同樣の收穫を得るのが經濟的であるのはいふまでもない。そして農民の餘りがあれば、其餘つたものを或は工業勞働者に、或は商業從事者に廻して、共々に生產に勉むるのが國家として最も取るべき方法である。從つて今日の現狀に於て、五千萬の人口中其五割乃至六割は農民であるが、其耕す所僅かに一戶一町であるからして之を一町五反位にして餘つた人口を外に出したい。即ち北海道、朝鮮、臺灣、樺

太其他海外に移して生產的事業に從事せしむるのが國家經濟に利益であらうと思ふ。それで明治七十年に七千百萬の人口になつた時に、今より殖える所の二千百萬を悉く海外に移さねばならぬといふ事はないが、國家の經濟からいへば、成るべく人口の增加を經濟的に用ひて、新たなる生產につくことが望ましいのであるからして、今實際問題として、日本人口が何處にどの位移住することが出來るかといふ事を調べて見たいと思ふ。

一體日本ては今日まて除り移住といふ事に長い經驗が無い。日本人が自覺的に移住といふ事を遣り出したのは明治になつてからの事である。勿論自然に北に延びて來た事は有史以來の事であるけれども、自覺的に移民したのは明治になつてからの事で、即ち北海道の移民が初まりてある。それて先づ北海道はどうかといふに、玆には人口四百萬を入れることが出來るといひ、或は六百萬を入れ得るといふが、先づ極く大事を取つて假りに四百萬と定めて見ると、現に百六七十萬の人口があるから餘す所僅かに二百二三十萬のものである。北海道が果して日本人の移住に適するや否やについて疑問を抱く人もあるやうてあるが、今日までの經驗によれば、適するといふて差支ない、少し寒くて米を作るには內地程に行かぬが、小麥、大豆等はなか〳〵よく出來るからして充分生計を立てゝ行くことを得るのてある。又氣候といひ風土といひ、日本內地と大した差異がないのてあるから、先づ日本人の適當なる發展地の一に數ふることが出來ると思ふ。

進んで樺太はどうかといふに、其位置が北緯五十度以南といふのてあつて、隨分寒い事は寒い、先づ木の芽の出るのが四月末か五月初めてあつて、冬に入るのが十月てあるから、暖かい月は五、六、七、八、九の五ヶ月しかない。のみならず極く暑い時は非常に短いのである。然し緯度が北に偏つて居る丈け、夏に於ては太陽の日照時が大變に長い。例へば午前四時には夜が明けて午後九時までも光線がある。つまり夏の間は太陽の熱の草木に及ぶ全體の集量が甚だ多いが爲めに、

草木一時に發芽し、發芽後に於ける生長は極めて早いのてあつて、米には不適當てあるけれども、其他の農業には適せぬ事はない。殊に小麥、燕麥、馬鈴薯はよく出來るのてあるから日本人が生計を立て丶行くことが出來ぬ事はない。之を外國と比べて見るに、伽奈陀と略ぼ同緯度てあるから隨分移住し得るのてある。現に已に移住して居るものが八萬からある。然し將來どの位伸びる餘地があるかといふに、將來耕地としてやり得べき所は、今調査して了つた部分ていへば確かな所は先づ十五萬町步餘ある。假りに現在の移住の方法によつて、一戸に七町五反步を無代てやるとすれば、十五萬町步に向つて二萬戸。一戸五人とすれば僅かに十萬人しか入らぬのてある。勿論之は極く確かな所をいうたのて、且つ二萬戸の農民が入れば、又山林や漁獵を業とするもの、及び商人、工人なども入るからして、先づ農民位の數若くは夫れ以上入るものと見ても、二三十萬を越えることがないのてある。北海道は二百二三十萬て樺太が二三十萬。合せて二百四五十萬に過ぎないのてある。それては今假りに明治七十年に七千百萬になつて、今より二千百萬殖えるものとすれば、只單に其十分の一しか入らぬのてあつて甚だ心細い次第てある。

次に朝鮮はどうかといふに、之は氣候の點といひ、風土の點といひ、最も內地人の移住に適して居る。現在內地人の移住したもの二十萬を數へ、多くは商業に從事して居つて、農業をやつて居るものは少部分てある。近來東拓會社等に於て移住を奬勵し、其結果最近調べた所によると、極めてよき狀態にあるのてある。現在東拓會社の取つて居る方法は殆んど模範的のものてあるが、之をザッと話すと、先づ一戸に向つて平均二町步の土地を賣るのてある。それは先づ東拓會社の持つて居る土地を時價によつて賣り、其代價は貸して五年丈けは据置きにし、それから二十年の年賦て返すといふ方法てある。それて二町步の價は幾何かといふに、田畑をつきくるめて先づ一反步三四十圓てある、さうすると二町步て六百圓乃至八百圓てある。移住費

が二百圓と見れば、先づ千圓の負擔に堪へる人は誰ても移住が出來るのてある。千圓の債務を負擔して二十ヶ年の年賦て償却するから一年に五十圓づゝ利子と共に返して行けばよいのてある。二町歩ては可なりの米が出來るから、其一部は食ひ、一部は賣り、優に返金が出來るのてある、東拓會社が此方法てやつた結果は頗るよろしい。此方法てやれば東拓會社ばかりてなく、或は個人の土地についても同じ方法て移住を奬勵することが出來る。夫れ故に會社ばかりに任して置かず、內地の個人も箇樣な計畫を立てることが望ましいと思ふ。扨、然らば、朝鮮に向つてどの位の人間が移住出來るかといふに、之は正確なる數を見ることがなかなか六つかしい。朝鮮の耕地の中其どの位を割いて內地人の移住に供することが出來るかは今容易に斷言することが出來ない。假りに先づ、既墾地といふものを百八十萬町歩と見て、其十分の一丈け入ることが出來るとすれば、十八萬町歩を內地人の移住に使へ得る譯てある。假りに一戶二町歩とすれば九萬戶。一戶五人とすれば、四十五萬しか入れない。又朝鮮には別に未墾地がある。其面積も甚だ曖昧てあるが、先づ百二十萬町歩と積算して餘り大いなる違ひがあるまいと思ふ。かう假定すれば一戶二町歩として六十萬戶。一戶五人家族として三百萬人。前の四十五萬と合せて三百四十五萬人入る譯てある。然し未墾地なるものは、多くは林野の傍にある多少傾斜の地とか或は直き川の緣にある所の干潟とかいふものてあつて雨が降り水が出れば直ちに作物が流されて了ふ恐れがある。此等の未墾地即ち俗にいふ荒蕪地を充分に利用出來るやうにするには水害豫防の設備、水利灌漑の便を開かねばならぬ。それが今日出來て居らぬから、いよ／＼之を利用するとなると、所謂治水工事、灌漑工事が出來てからてなくてはならぬから、五年や十年ては出來ぬ。若しそれが出來たとしても精々三百五十萬人てある。さうすれば前の北海道樺太の二百五十萬と合せて六百萬人てある。明治七十年には今より二千百萬殖えるとすれば過剩人口の三分の一も移すことが出來ぬのてある。尤も前に

もいつた通り過剩人口を悉く移さなくてはならぬ譯てないが、移した方が經濟的てあるとすれば、これから先きどうするか、非常の問題てある。今いつた通りの次第てあれば六百萬以上のものは、今日日本の持つて居る領土に入れるといふ事は餘程六つかしい。

それて次に臺灣の事をいはなくてはならぬが、臺灣は內地と違ひ、所謂亞熱帶てあつて、物の生產について其力の大なることは內地人が殆んど想像が出來ぬ位てある。例へば米の如きは全島に亘つて二回出來る。それから熱帶的の植物として亞麻、樟腦、護謨、バナヽ、其他あらゆる亞熱帶の植物が出來る。又近頃は政府の奬勵の結果、砂糖がなか／＼多く出來る。然しこヽには已に三百餘萬の土人が居る。土人も今日は日本人てはあるが、元來支那民族てあつて、民情風俗を異にして居る。而して此土人は殆どあらゆる耕地を耕やして居る。勿論之に向つて日本人の發展する餘地が全くないといふのてはない。例へば臺東方面ては從來生蕃の住まつて居つた土地が少しも開墾してない。又今日既に移民して一二の村落も出來て居る。或は宜蘭なり、阿猴なりに於て移民の計畫があつて多少之を實行して居る。然し今日にては未だ極めて微々たるもので、且つ將來も餘り多い數を望むことが出來まいと思ふ。それて先づ臺灣に十萬か廿萬入るとしても、尙こヽに千四五百の過剩人口がある譯てある。其れ等のものは固より何處へても行かなくてはならぬ。伸び得る處へ伸びなくてはならぬ。然し今迄いつた以上の事は、外國の事になるが、私は各方面に亘つて研究した譯てはない。然し私の見た所て滿洲はどうかといふに、今日の狀態ては直ぐに澤山の人を入れる餘地があるや否や斷定することが甚だ難い。然し滿洲に人を入れることは絕對に不能てあるといつて居る論者もあるやうてあるが、之は充分の講究を得ないからてないかと私は疑つて居る。今日直ちに滿洲移住不能と斷ずるのは尙早い。充分なる農法の研究其他の調査熟慮の上てなければ極めることが出來ぬと思ふ。然し現在の狀態からいふと、どうも甚しく多くの人を入れるといふ事は出來

ないといふの外はない。

然らば其他の外國の方面は如何といふに、亞米利加には移民の制限があるといふし、濠洲も相當に六つかしい、或は南米には相當に出來るといふが、之はまだ大いに進んで行くといふ狀態に進んでゐない。

が、要するに、日本民族といふものは非常に繁殖力の旺盛なものであるのに、前述べたやうな狀況にあるからして、今後之を如何にすべきかは實に重要問題であるけれども、先づ差當つては北海道なり、樺太なりに多少發展の餘地あり、殊に氣候に於て、風土に於て最も內地と酷似して居る朝鮮は少しの工事を施し、設備を整へさへすれば二三百萬を入れ得るのであるからして、玆數年は先づ朝鮮の開發々展に力を入れんことを切に希望するのである。若し新に朝鮮について百萬なり二百萬なりの內地人が移住して、それが新附の同胞たる朝鮮人を開發し、產業狀態を改善して行つたならば日本の經濟を益することが、なか／＼大きからうと思ふ。例へていへば、現在の朝鮮人の農作法では、一反步僅かに一石內外しか收れぬ。然しいろ／＼な調査によつて見ると、朝鮮の土地が必ずしも瘦せて居る譯ではなく、耕作の方法を改善し、肥料を施し、良い種を用ふれば內地と收穫を異にすることなからうと思はれる。若し朝鮮の各地各方面に內地人が十戶なり廿戶なり入つて、同胞の朝鮮人を指導し、改善すれば忽ちにして收穫を增進し、僅かの間に非常の良結果を見ることが出來ると思ふ。現在の朝鮮の米の產額は約七百萬石から八百萬石であるが、假りに三割の增收が出來て一反步一石三斗とすれば二百四十萬石の增收で、全體で千萬石の收獲となるのである。內地の平均はザットー反步一石八斗ばかりであるが、內地程に行かぬにしても、內地と朝鮮との間にすることは難くないのである。さうすれば其利益といふものはなか／＼大いなるものといはねばならぬ。

以上は大體農業的移民について述べたのであるが、工業や商業に從事するものも何れの方面にも相當に伸びられぬことはない。然し今迄の狀態に於ては此方面

に於て非常に澤山の人が移住するといふ事は豫期し難い。又日本人の資本的發展についても考があるけれども、それは他日に讓らう。要するに、何とかして澤山の内地人が各殖民地、殊に朝鮮方面に發展して朝鮮の開發、國家富强の途を講じたいと思ふ。

日本人の發展と南半球

文學博士　井上圓了

南半球といへば濠洲、南亞、南米の三方面がある。其外所謂南洋と稱へる部分があるが、それは小部分であつて、大體は先づ今言つた濠洲、南亞、南米の三つである。此三つの中で、濠洲と南亞とは異人種排斥、東洋人排斥を唱へて居るが爲めに日本の勞働者は入ることが出來ない、若し土地の面積と人口の比較から言ふときには、濠洲が最も人口の比例が少い。日本の如きは一哩四方に三百人近くの人口があるのに、濠洲では僅かに一人半程の割合になつて居る。其點に於ては濠洲に行つて働くのが一番仕事が多からうと思ふ。土地が廣く人口が少いのであるからして仕事をするには此上なく都合がよいのであるが、兎に角今日は東洋人を入れない。其入れない原因はいろ〳〵あるが、第一の原因は、濠洲人は一つの理想を持つて居る。其理想は何かといふに、濠洲の面積は歐洲の面積より少し小さい丈けて先づ殆んど歐大陸に匹敵するのである。そこで濠洲人の理想は、將來南半球に於て、新らしい歐羅巴、第二の歐羅巴を作らうといふのである。其理想を實現させる爲めには支那人や日本人や印度人を入れてはいけぬ。歐羅巴人丈け、白人種丈けの世界を作らうとするのが大體の理想である。勿論其他いろ〳〵間接直接の事情があるが、兎に角今日は日本人が入られぬ事になつて居る。

それから次に南亞弗利加の方面、之は濠洲とは事情が違ふ。濠洲のは新歐洲を作らうとする理想が第一原

因てあるが。南亞の東洋人排斥は內部の事情から起つて居る。其內部の事情といふものは南亞には黑奴が多い。之は純粹の土人てある。其黑奴にもいろ〳〵の種類があつて、言葉て區別しても八通りもあるといふ程に種類が多い。總ての下等の勞働は皆此黑奴が引受けて居る。そこへ印度人が澤山入つて來る。そして印度人が矢張り黑奴と競爭する。印度人の數は何十萬と入り込んて居る。も一つは支那人て是れも亦全體ては十萬近くも入つて居る。トランスバール丈けても五萬人から居るといふ話てある。此支那人印度人と土人との間に激しい競爭がある。其結果印度人支那人を排斥するといふ問題が絕えず起るのてある。それて南亞は大抵英吉利の殖民地てあるけれども、殆んど獨立國同樣の組織を持つ所の國會て何事をも議するのてあるから、若し土人と印度人支那人との間に軋轢を生じて互に排斥し合ふ場合には、政府の方面ては、土人は其國民てあるから、どうしても土人の肩を持つことになり、又國會も其方に贔負になるのは自然の勢て、其結果矢張り東洋人を入れないといふやうな事に及んだのてある。右の次第て、濠洲も南亞も、日本人が入つて勞働することは出來ない。恰度北米合衆國に於けると同樣てある。然し南亞の如きは若し日本人が入ることが出來たとしても、格別勞働するの餘地が無いかも知れない。といふのは黑奴が多數てあつて、之と競爭することは餘程困難てある。右の次第て濠洲と南亞に於ては日本人が發展することは今日の所餘程六つかしい。

然らば問題は南半球に於て、只一つ殘る所の南米はどうかといふ事に歸着するが、南米は頗る有望てある。只其中て日本人の移民を歡迎する所と、せぬ所と分れて居る。南米の四大國なるブラジル、アルゼンチン、チリー、ペルの中て、ブラジルとペルとは日本移民を歡迎する。アルゼンチンとチリーとは全く排斥するてはないが歡迎せぬ傾がある。然しそれとても、こちらから相當の旅費を持つて、あちらて相當の仕事に從事する丈けの準備さへあれば少しも排斥されずに自由に就職することが出來る。故に只今の處ては南米は

日本人が入つて仕事をすることの出來る所と見てよろしい

之まで日本人の南米に入つたものゝ大數を擧げて見れば、ブラジルには二千人、ペルには六千人である。之は皆移民として入つたものである。アルゼンチンにも五六百人居るに違ひないが、之は直接に日本から入つたのではなくして、ブラジルやペルからこぼれて入つて行つたのである。つまりアルゼンチンは比較的賃銀が高いからして、自然に流れ込んで行つたのである。又チリにも二百人位居る。之もペルから流れ込んだものである。それから其他の南米の國々へも。ペル、ブラジルから流れ込んだものが多少はある。

南米中金の一番多く取れる所はどこかといふに、ブラジルの北部アマゾン地方である。之は護謨の產地て非常の利益がある。然し此處は黃熱病の最も激烈な所て、他の方面から此處に入るものは、十人の中九人は大抵此病氣にかゝる。そして此病氣にかゝつたら最後、十人の中九人は死ぬのである。だから如何に金が取れても、金が欲しいか生命が欲しいかといふ境てあるからしてウカと行くことは出來ない。それからブラジルの南部と唱へる部分、こゝには日本人の勞働者が入つて居る。南部は主もに珈琲の產地て、日本人の移民して居るものに就いて調べて見るに、夫婦共稼て年に三百圓位は殘る勘定になる。けれども若しあちらて病氣をすると、醫者の診察料が非常に高いから、病氣が長びきてもすると、金を殘す所ぢやないが、無事て行けば年に三百圓は確かに殘せる。勿論之れは共婦連の話て、あゝいふ所てはどうしても夫婦連てなければならぬ。若しそれに働きに堪へる小供でもあると四五百圓は殘せる事になる。

それからペルの方ては日本人は多く砂糖黍の栽培に從事して居る。之は精細に調べて見なかつたが、矢張りブラジル程の收入があるだらうと思ふ。それからペルても矢張り山の中へ護謨取りに入る。之は最も危險な仕事ださうだ。然し此方は大分金が取れる爲めに近來そこへ入るものが多いさうてある。

それからアルゼンチンでは一體に勞銀が高く、南米では第一等の地位を占めて居る。こゝは農業耕作は少くあつて、多くは牧畜である。日本人は餘り牧畜に慣れて居らぬから、多く其方面に從事して居らぬやうである。然し日本人の仕事し得る範圍は種々雜多で、或は鐵道工事、或は建築、或は旅館の給事、商店の使用人などをして居る。その中でいくらか日本で大工でもやつて行つたものは大變割合がよいといふ事である。ブラジルに居るものゝ話であるが、アルゼンチンで少し大工の心得でもあれば一日先づ三圓から五圓位の金が取れるといふ。尤も大工の仕事のある處は主として都會であるから從つて生活費も多くかゝるけれども、隨分割のよい事である。

私の考では、南米の移民といつても、今まではホンの移民で、一時働いて金を儲けて歸るといふ風であつたが、之からは移民といふよりも寧ろ植民をやつた方がどうかと思ふ。將來他の土地に勢力を持つには、どうしても、其土地に永住する日本人が出來ないと駄目である。土地を持ち、財産を持ち、家を持つに至つて初めて日本人の勢力が其處に据るのである。今までは只金を取つて、其金を日本へ送るのをよいとして居つたが、今後はどうしても向ふに不動産を持ち、勢力の根據を作らなくてはならぬと思ふ。さうすれば後から行く日本人の爲めにも便利である、又日本との貿易上にも助けになると思ふ。

今其適例を擧げて見ると、今まで布哇に行つた日本人の數は可なり夥しいもので、支那人の二倍三倍にもなつて居る。然るに其實際の勢力は支那人の方がずつと多い。といふのは支那人は不動産を有して居る。支那人は金が餘れば土地を買ひ、家を建てる。といふ風である。日本人は金が餘れば本國へ送る。土地も買はず、家も建てぬ。といふ流義である。夫れ故に支那人は日本人より少いけれども、大いなる勢力を有して居る。此頃になつて漸く日本人が其處に氣が附き、支那人の眞似をし出さうとしたのであるが、もう後れて今では地價が、支那人の買つた時よりも何十倍となつて居る

し、又よい場所も已に他に取られて了つて居る。

斯ういふ有様であるからして、南米に於ても一時稼ぎといふ事でなくして欲しい。日本人は如何に永住しろというても、終に本國に歸る人民であるからして、始めから歸る積りならば、もう直ぐ歸つて了ふ。永住しろといつて恰度よい位であらう。

それから今一つの希望は、下等の勞働者ばかりでなく、中等の教育を受けた人間を送つて事業に就かしむるといふ事も、日本の政策として極めて必要の事と思ふ。今日中學校を卒業しても日本内地に相當の職業がなく、無職の中等階級が年一年に增加しつゝある。此等の人間は何をするかといふに、田舍に歸つて鍬鎌を持つて百姓仕事をするのも嫌であり、さればとて望むやうな仕事はなし、兎角懷手をして世の中を渡つて行かうといふ氣になり易い。處が懷手をして食つて行く方法はなし、中學を出て相當の智惠はあるから、其結果良民を騙して金でも取上げやうとしたり、それが出來ぬと所謂社會黨のやうなものになつて、世を騒がせ、人を害するといふやうな事になる。一方で中學校專門學校の教育を勸めるのはよいが、之に相當の仕事を能ふる途を講ぜぬといふ事は、國家として甚だ感服の出來ぬ事で、かゝる人間を若し海外に送りて相當の職業に就かしむることが出來れば、獨り本人の爲めのみならず、日本の内治の上からも、海外發展の上から喜ぶべきことゝ思はれる。歐洲の如きも五十年若くは七八十年前には矢張り中等階級の無職者を持て餘した事がある。近來さういふものが無くなつてから道德も進み、公德も盛んになつたのは、主として海外に向つて發展したに依るのである。若し歐洲人が今日まで海外へ出てずに自國内にのみ止まつて居たら、全く仕樣のない狀態になつて居つたに違ひない。處が幸に海外の領地が續々出來たが爲めに今日の如き發展を遂げ得たのである。我國は一方教育が進んでも、一方に仕事が無い故、此儘にして置いては實に憂ふべき結果を來さぬと限らない。夫れ故にどうしても之を海外に出して仕事をさせねばならぬが、其海外といふのは今日では

南米より外にはないのである。

南米に赴くについては日本に居る間に南米の語學を少しやらせねばならぬ。他國に出るにはどうしても其國の語に通ずることが必要である。本當の勞働移民ならば語學の知識が無くても濟むかもしれぬが、それとてもあるに超した事はない。然し商店の使用人とか、建築土木に從事するとかいふ事になれば、之は是非共語學に通じなくてはならぬ故、どうしても少し南米の語學を教へる必要がある。固より中學に於て教ふる必要はないが、南米に行かんとするものには中學卒業後南米語を教ふる方針を採りたい。南米語といつても之は西班牙語、葡萄牙語である。之は外國語學校に於て教へて居るが、それ丈けでは不足である、外にもつと其方の學校を作りたいと思ふ。

それから今一つ、アチラに行つて直ぐ職業に就いて月給を取るについては、何か一つ技術が無いと都合がわるい。其技術として南米に必要なものは、土木建築である。こちらで少し測量でも覺えて居るとか、或は中學卒業後、家の設計が出來るといふやうな事でもあると、大變都合がよろしい。それから或は寫眞術の如き或は一通りの醫者の技術の如きがあると直ぐにも金が取れる。尤も何をするにも言葉が先きに立つ故、言葉を先づ稽古して、それから少しの技術があれば、いくらも生活の途がつくのである。

一體南米に於て高等學校や大學の教育を受けて居るものは法學と醫學に多い。文學の方面は極く幼稚で、文科大學といふやうなものは、中學校の教員を養成する位のもので、先づこちらの高等師範の如きものである。それから新開地である爲めか哲學の如きは其必要を認めて居らぬ。宗教は別に學校があるので、文科大學といふものは甚だ振はない。又理科も工科もあるが之も極く幼稚である。さうして南米では此方面の必要が非常に多い。新開地であるから、工業が起り、或は鐵道を布くといふ事になると、其方面の人の需要がなか〳〵多い。然るに南米人は數理の能力が少くあつて、此方面の事は甚だ不得手である。從つて此方面には歐

洲人の手々多く煩はして居るが、歐洲人の月給はなかなか高い。夫れ故に若し其方面に日本人が從事する事になれば、南米人、日本人双方の爲めに都合のよい事になる。つまり日本の工手學校のやうなものを盛んにして、之に南米語を敎へて、あちらに向けることにしたならば大いによろしからうと思ふ。

それからもう一つ勞働者についても私の考をいつて見ると、之まで日本移民の評判のわるい點を聞けば、あちらの風俗を知らぬ事に原因するのが多い。例へば夏、女が裸になつて行水するといふやうな事は、外國では甚だ不評判である。夫れ故に千人二千人といふ移民を連れて行く時に、南米までは二ヶ月もかゝるから、其の二ヶ月の船中生活の間に、海外の事情に通じたものが、それ等の移民の敎育をしてやる。あちらに居るものゝ、成績や評判や。又あちらの人情風俗を話して鄕に入れば鄕に從ふといふやうな事を敎へる。又言葉も單語や極く必要な程度の事位を敎へる。又日本人があちらに行つて、氣候の相違に不注意であるが爲めに病氣にかゝる。例へば夜寐る時に暑いが爲めに裸かで寐ると、夜中から急に寒くなつて熱病にかゝるといふ類て、日本人の病氣などは大抵氣候の相違を知らぬに原因する。さういふ點もよく注意して置くと、向ふに行つてから、非常に都合がよく、日本人が南米に發展するの途は追々開けて來るだらうと思ふ。

前號久米博士の論文中「李生」は「李成」。「崇神帝」は「崇峻帝」の誤に付訂正す。

大陸巡遊日記（一）

漱石生



大陸巡遊と言ふと大袈裟かも知れぬ。實は佛蘭西、瑞西、伊太利、獨逸、和蘭、白耳義の六ヶ國を飛歩るいたのに過ぎぬ。日記とは書いたが、都合で一日や二日飛ばすかも知れぬ。その代り、僕の感興を牽いた事物は不釣合に長く書くかも知れぬ。適當な表題を考付かぬので、先づは大陸巡遊日記として置く。

九月一日

倫敦はチエアリング、クロスの停車場へ地下鐵道からせり上つたのは午前の九時廿分であつた。十時の急行て先づ巴里へ行かうといふのである。

貧乏書生のことゝて、何處へ行つても中以上の宿屋へは到底泊まれぬ。固より馬車で宿屋へ乗込むなんてこ

とは出來ぬ。從つて旅中の手荷物も自分の手で運び得らるゝ輕るさ大きさてなくてはならぬ、てもシャツの着換も要る。靴足袋の穿き換も要る。カラアも一ダアスは有つて出なきやならず。化粧道具も入用、佛、瑞、伊、獨、和日とベデカアの五冊も納れなきやならぬ。が、とても外套や着物の着換なんかは持ち出されぬ。今は暑いが十月の末になれば余程涼しくなる。そこで九月の初は暑過ぎるのを辛抱し、十月の末には涼し過ぎるのを辛抱することにして、紺の間着の背廣を着たきり雀にすることにし、雨降りの用心兼寒さ凌ぎにと、防水の、毛の、薄い雨外套だけケエスに入れた。でも普通の大きさのスウト、ケエス一つと小さからぬ手提カバンとに、かれこれ荷が一バイになつた。

今日も朝から無類の快晴だ。手荷物を兩手にさげて歩るくと二三十間ではや額に汗がにじむ程だ。

汽車は正十時發車。倫敦を離れてからはケント州を東南指してひた走りに走る。海峽の此岸のフオオクストンまで何處へも停車せずに走るのだから氣持がいゝ。

日本を出てから一度も俳句といふものを作らず、俳句といふもの作る氣にもなれなかつた僕が、今日はどうした動機か不圖俳句心が動く。窓越しに沿道の景色を眺めながら、即景の句が出來る。時は今九月だが、句は春夏秋とお構ひ無しだ。たゞ見えた景色とその感じを十七字にした迄のことである。

大小の柵牛羊若草に

牧童の角笛か遠く聲うらゝ

牧場十里遠き並木や渡り鳥

牧場限る石垣嫁菜花繁く

花あらばと思ふ櫻廣野や草淸く

牧場分つ小川や映る雲長閑

ホプ畑も隣る牧場も廣くして

道やあるポプラアの並木野の潤さ

汽車は正十一時四十五分にフオオクストンの波止場へ着いた。倫敦から七十一哩あるのだ。金澤から米原迄七時間半を要するのだが、此の汽車てなら三時間足らずて行くことが出來る、など考へる。

ブウロンヌ通ひの連絡船は汽車の眞下に、波止場に横付けになつて居る。手荷物を兩手に提げて甲板上の人となる。

倫敦から巴里へ行くには道が四通りある。ドオバア經由て對岸のカレイから汽車て行くのが一つ。それは海峽を越える時間が一時間て、一番短いが、汽車道が長いのて、倫巴間八九時間を要する。次の道は、僕の採つたのて、海峽通過に一時間半餘り費すが、汽車道が短いのて、倫巴間七時間餘りだ。第三の道はニユウ、ヘヴン、チエプ線て、海に四時間内外、陸に五時間内外を要する。最後のはサザンプトン、ハアヴル線だが、海峽だけに八時間もかゝり、倫巴間十三時間以上かゝる。僕は船賃汽車賃の一番廉い第二の道を採つたのてある。

船は正十二時に纜を解いた。海は頗る平穩だ。此のドオヴア海峽は、冬の荒れる時分などは連絡船が通ひかぬる程の荒波を起こすのだが、今日は纔かに漣波を漾はして居るに過ぎぬ。

甲板に手荷物を椅子にして卷煙草ふかしつゝ四方を展望する。船の進むに連れて海風が冷やかに感ぜられる。ふり返つて英國の海岸を望むと、音に聞く白堊（チヨオク）の絕壁が斷續して壘壁の如く見ゆる。テニスンのイノツク、アアデンの中に、此處の海岸を ghostly wall と書いてあるが、未明に遠くから見たなら、確かに ghostly だらうと思へる。フオオクストンの町家が、その絕壁の絕間に、マツチ箱を並べたやうに見える。海鷗（シイガル）が眞白な翼を飜して岸邊を高く低く飛んで居る。

英國の海岸から佛蘭西は山影も望むことは出來ぬ。然し三十分と船の進まぬうち、その海角が見え出す。一時前十五分頃には、英國と佛國との陸地が、同じ高さに——二三寸の高さに見えるやうになつた。

二時前にブウロンヌの波止場へ着いた。又も手荷物を兩手に提げて、直ぐ前の稅關へ入る。そして檢査を受ける。さあ、これからいよ〳〵佛蘭西語を使はなきやならぬことになる。

思ひ出したことがある。船が英國の海岸に居る間、ま

た海峡の途中まで來る間は、乗合の人が殆んど總て、——佛人が英人に向つて、佛人が佛人に向つて英語を話す。それが途中でいつの間にか英語が勢力を失つて來て、ブウロンヌへ着いた頃には、乗合の人が殆んど總て、——英人が佛人に向つて、英人が英人同志、佛語を話すやうになつてるのに氣が付く。英語を使ふ國から佛語を使ふ國へ來たことだから、理の當然だが、一寸奇妙に感じられた。

稅關の檢査は形式的だつた。『課稅品があるか』と訊ねたら

「ジユ、ネイ、リアン、ア、デクラレ」

と答へやう、『此の下は何んだ』ときいたら

「イル、ニア、リアン、パア、デッスウ」

と言はうなんと、頭の中で考へてたが、『酒は?』『リアン』、『煙草は?』『リアン』で濟んでしまつた。

稅關の構内に汽車は待つて居る。すぐ乗込む。いつもの節倹主義からして、倫巴間はとりあえず三等切符を買つたので、初めて佛蘭西の汽車の三等室へ乘つたのだが、乘つて見て驚いた。

客車は、一方の窓際だけ少し明けて、木のベンチが脊中合になつてゝ、丈長程の板塀がその脊中合せのベンチの間にしつらえてある。掃除が惡るいか、ベンチも床も汚いこと夥しい。

僕は窓に接してベンチの端に坐を占める。すると僕の横へカソリックの僧さんが來る。向側へは鼻髭を生やした勤人風の五十恰好の男とその細君が手籠を提げて座る。その隣へ頰から顎へ二三分はある粗髯を生やした婆さんが來る。その横へは竹の長い杖を手にした、油にぎら〳〵したボロ服の、土方らしいのが座つて一パイになつた。三等だから不平も言へぬが、いやになる。

途中食物が買へさうにないから、車室を出て、プラトフオオムの物賣から佛蘭西一流の大きなサンヰチと麥酒一罎買求めた。歸つて見ると、僕の側の、反對の窓際には、倫敦へ出稼して居たらしい白首と思へるのがいやにすまして座つて居つた。

二時十五分頃發車した。僕は腹が空いてるので、すぐとサンヰチをぱくつく。ネヂパンの長さ六寸許りのを縦割りにして、中に分厚のハムが入つて居る。麥酒を喇叭飲にして、パンにかぶりつく。向側の夫婦者も手籠から大きなネヂパンとハムとを取出して、小さいナイフで切つてはぱくつく。

鬚面の婆々は頻りと夫婦者に話しかける。八釜しくて仕方が無い。そのうち、僕のことを何んだか彼だか話し初める。

「向側に座つてるのは支那人でせうかね。日本人でせうか。小さいね。顔が實際黄色だね。」

とか言ふのが判る。僕は知らぬ顔して窓外の景色を眺める。田舎の景色が英國とは大分違ふ。

英國には芝の野原が多いが、佛國には畑が多い。英國では林といふと、下草は芝許りの、喬木の林が多いが、佛國では日本に見るやうな、雑木の林が多い。枯枝採りの女も間々眼に映る。砂地の、雑草の茂つた小山に、小松の處々生えてる處もある。土壁の、二階無しの瓦葺の田舎家も見える。人間が日本服て居れば、日本の何處かかと思へる程だ。ふと車室の方をむくと、かの鬚面の婆々が、新聞を僕に差し出して、

「之れあげやう、陳分漢て分らんだらうが」

と卑しいグタ〳〵笑をする。かの夫婦ものも、ニヤリ笑ふ。いま〳〵しい。

「私しや、佛蘭西語は少しも話せませんが、佛蘭西語で書いたものは讀めます。有難う」

と、佛蘭西語で言つてやつて、それぎり默つて其新聞をあちこち——實は察し讀みして——讀む。婆さん一寸恐縮の體てあつた。ルウヴルの名畫紛失事件、獨逸の軍事探偵事件が詳しく書いてあつた。

暫くして、婆さんの左隣の土方らしいのが婆さんに何か話す。婆さん、大袈裟に肩をゆすぶつて

「私し英語は分りません」

と答へる。するとその男が今度は僕に向つて英語で

「此の汽車は何時に巴里へ着くでせうか」

と尋ねる。

「五時二十分と時間表にはあります」

と答へてやる。

「さうですか、有難うございます」

と言つたが、やがてまた

「今何時で御座いませうか」

と訊ねる。時計を出して見て

「今三時十分です」

と知らしてやる。蒼ざめた、病氣らしい陰氣な顔の男だ。暫くすると、更に又僕に向つて

「何か食べるものを惠んで下さいませんか。昨日の朝から何も食べんので、眼が眩みさうで御座います。」

といふ。僕は、先刻買つたサンキチは食べてしまつたし、何も持合が無いから、之れでもと、飲み殘りの麥酒を與ると、一息に飲んでしまつた。そして僕の向側の夫婦者に向つて、物を口へ入れる手眞似して

「マンゼ、マンゼ」

と食物を請求する。少しは佛語が判ると見える。夫婦も夫れと察して、手籠の中から、三寸角大のネヂパンを長さ四寸許りに切つて二タ切れと、ハムを少し出して與つた。

「ボオクウ、ド、メルシ」

も言ひ終らぬうち、奪ふ如くに手にして噛ぢり初めた。味も何も知らぬらしい。嚥み下さぬうちに噛ぢりつく。炎天の砂庭へ如露で撒いた水といつた風だ。憐れだつた。

僕の左隣の坊さん、職掌柄默つても居られぬか、その土方らしいのに話しかけた。土方先生、佛語は出來ぬが、獨逸語は話すといふ。坊さんは英語は皆目分らぬが獨逸語なら話せると言つて、二人は獨語で話し出した。僕は能くは聞きとれなかつたが、

「自分は元は獨逸の者だが、英吉利に長く船渠の日傭て居た。二三ケ月前、ブウロンヌにいゝ仕事があるといふので、來たが、どうも思はしく無い。巴里に居る友人が、巴里へ來たらと言つてよこしたので、これから巴里へ行つて何か職を見付ける

考だ。金が無いので、ブウロンヌから巴里までの汽車賃も、仲間の者が出し合つてやつと調へた。』といふ意味の話だといふことは分つた。坊さん頻りと巴里の勞働社會の話をしてきかす。

かの白首らしいのは、流行の、裾のすぼんだ、空色のスカアトを着けて、白キッドの肱までの手袋なんかて、小さいオペラ、バッグを膝にして、つんと澄して居る。二人の話を——若し了解つて居るなら——何んと思つて聞いて居るてあらうかと、僕は考へたりした。

汽車は、ヂャンクションになつてる、小さな某驛て一度停車したきり、巴里指してトンネル無しの平野を走る。

五時半頃、ガアル、ド、ノオルの停車場へ着いた。地下鐵道を利用すれば廉く行けるのだが、まだ地理不案內なので。奮發して、巴里一流の、合乘の人力の低いのを馬に曳かしたやうな馬車を傭つて、豫て手紙て部屋を明けて置くやう依賴して置いた、ボオ、ロイヤル町の素人下宿屋へと急がせる。頓て「オイ」と言つて置いて、

『ボオ、ロイヤル、クアトル、ヴン、サンク』

と言つてやると、巴里初見參だとも氣付かず、唯々として運んで行つて呉れるから可笑しい。

宿の婆さん、お愛想よく、

『お待ちして居りました。お部屋へ御案內しましよ。お荷物を持つてお上げ』

と、一所に出て來た下女に指圖して、明けて置いたといふ部屋へ案內する。

『娘が二人居りますが、二人とも英語は上手に使ひますから、御便利て御座いましよ』

と、肥太つた胴體を持てあつかひにくさうに、呼吸を切つて話しながら先に立つて行く。

部屋はと見ると、餘り上等ても無いベッドが隅にあつて、片隅に洗面臺がある。三方は壁て、東向きの壁に大きな窓が一つしか無い。その窓近くに粗末なテエブルが一つあるきり。何の裝飾も無い部屋だ。氣には入らぬが、豫約して置いたことだから『結構てす』と椅

子へ、疲れた腰を下ろした。

下女が手荷物を持つて來る。

「顔や手足を洗ひたいから、お湯を澤山に持つて來て呉れ。それから、夕食は此の家で食べるのか、それとも他處へ出て食べることになつてるのかえ」

と下女に話す。それが旨く通じ無い。佛蘭西語は話すことは勿論のこと、讀むことも久しく途絶へて居る。大學ぢや、一週六時間づゝ、三年の間正課として修めた。モリエエルも讀めば、ラシイヌも讀んだものだ。それで居て、これ位のことが旨く話せぬのかと思ふと情無い。

「アッポルテ、モア、ロオ、シオオド。クエル、ユウル――ヂネエ」

と、なるべく短く話すと通ずる。扨てこつちの言ふことは通ずるが、下女の言ふことが今度は此方に通ぜぬ。全體佛蘭西人は早口だ。下女のことだから、訛もあるだらう。通ぜぬのが當然かも知れぬと自ら慰めても見る。が、どうやら用事は便じた。然し、後來用事があつたら、娘に英語で話して、下女なり主婦なりに通辯して貰ふことに心で決めた。

七時に夕食は始つた。八時前に終つた。疲れては居るが、近處の町の樣子を見やうと思つて、ボオ、ロイヤルを左に、右へサン、ミシエルの大通りを散歩する。そして右へ入れば正面にパンテオンのある横丁の角の、タヱルヌ、ド、パンテオンといふ酒場へ入つて、野暮かも知れぬが、葡萄酒を注文せずに、英吉利ビイルを注文して、大グラス二ハイに渇を醫した。九時半に歸宿してすぐ床へもぐりこんだ。

九月二日

七時半に眼がさめる。ブラインドを絞り上げると、はや高く上つて居る朝日が部屋の半分以上も暑さうな光線を射込む。空は眞青に晴れて居る。

僕の部屋は、ボオ、ロイヤルの街路に接した、五階建の大きな家のキングにある。凹の字を右へ九十度廻した形の家だ。各階を幾つにも仕切つて、その各仕切に

別々な家族が住居つて居る。地階から最上階への大きな階段を上つて行くと、階段の上り口毎に、正面に二つ、左右に一つづゝといつた具合にドアがある。貸長家を五つ積み重ねたやうなものだ。僕の部屋は二階の、或る一と仕切の裏庭に面して居るのである。

裏庭には、品といふ字を左へ九十度廻したやうに、小さな、二階建の家が三軒建つて居る。各々生垣を繞らした小さな庭を有つて居る。此の生垣の外は、僕の居る家の裏庭全體、碁盤目に大きな瓦が敷き詰めてある。處々椽臺を据えて、花物の鉢が載してある。僕の部屋の窓の直下には、一坪大の、四角な板箱に、大きな莢竹桃を植えたのが置いてある。その紅い花がまだ暑さうだ。

顔を洗つてから、窓の日蔭へ椅子を移して、煙草ふかしながら、その裏庭を眺める。裏の三軒の家は、まだ起きないらしい。靜かだ。

やがて、僕の居る家の地階の裏向きの部屋に居る家族の一人であらう、鍛茶の土耳古帽をかぶつた老人が出て來た。碁盤目の瓦敷のその庭へ、如露で水を撒いて、草箒の長いので庭掃除をする。

八時半にやつと下女が朝食を盆に載して持つて來た。

大陸では朝食が至つて輕少なことは御存じの讀者もあらう。

英吉利では、朝食には先づポリヂが出る。燕麥のお粥だ。それへ牛乳を澤山かけて、砂糖を入れて食べる。次に、普通は、ポオチト、エッグの二つ載つたベエコンか、魚かゞ出る。それを副食物に、唯のパンかトオストかを食ふ。茶——紅茶——を飲みながら食ふ。副食物が足りなきや、ヂャム又はマアメレエドをつけて食ふ。兎に角充分に食ふ。處が大陸では、朝食は、日本の普通の煎茶々椀大の茶椀に珈琲が一パイと、親指ほどの小さなネヂパンが三つ位、それきり外に何も無い。パンは英吉利のより旨いし、珈琲も英吉利のより旨いが、少しも腹にこたえぬ。慣れぬ間は誰も之にはよわる。

パンを噛りながら、今日は何處へ行かうかと、ベデカ

アを讀む。

「初めて巴里に來り、市街の第一印象を出來得るだけ強く得んと欲せば、ルウヴルよりプラアス、ド、ラ、コンコオド迄遊歩するに如くこと無し。コンコオド橋に立ちてセイヌ河を眺むるもよし。佛王の舊居を東にしてチユイレリイ花園より、西北シヤン、ゼリゼエの、末遠く凱旋門に終る並樹道を望むもよし。」

など丶書いてある。この通りやつて見やうと宿を出る。ボオ、ロイヤルを右へ、ゴブラン街迄あるいて、ルウヴルの横を通る二階付の乘合自働車に乘る。二階が下等で、下が上等なさうな。

倫敦の乘合自働車は、二階も下も賃錢は全じだ。そして決して汚く無い。巴里のはどれも汚なささうだ。そして二階にあるベンチは、倫敦のは、街路と直角に附いて居るから、町の見物が爲易い。巴里のは、街路と平行に、背中合せに左右一脚づ丶しか無い。見物するには不便だ。

この乘合自働車の通る街路は裏通が多いので奇麗ぢや無い。でも、セイヌ川を渡つてからは、又セイヌ川の兩岸には宏壯な建物が多い。初めて巴里へ來て居るといふ感じがする。

ルウヴルの横で下りてぶら〱歩るく。正午近い日光が眩しい程道の砂を射返す。

ルウヴルを正面遠く見るプラアス、ド、カルウゼルの廣場をぶらつく。三方を圍む建物の壯嚴、僕等田舍物の度膽を拔くに足る。倫敦ぢや到底見られぬ宏壯なものだ。

此の廣場の中央に、千八百五年の那翁の勝利紀念の凱旋門がある。門の表裏左右に大理石への大浮彫がある。アウステリッツの役とか、チルシットの平和條約とかを表はしたものだ。

此の門とルウヴルの正面との中途に、後ろに小花壇のある、ガムベッタの大銅像があり、尙ほ一層ルウヴルに近く、四方花壇に圍まれたラフアエットの銅像がある。

ルウヴルを背にして、右の凱旋門をくゞつて、チャルダン、デ、チュイレリイの園囿へ出る。南北にテレエスがある。或は花壇、或は芝生、或は喬木と路の左右に區劃正しく均齊に在る。花壇の中央、或は芝生の隅、或は大樹の下に、其處此處に、左右相對して、大理石の大裸體像が在る。暑いから、樹蔭〳〵と傳つて西へ進む。周回二丁半の八角の泉水がある。子供が大勢、汗を流しながら、糸につないだ小い帆船を浮ばして遊んで居る。

此のチャルダンを出ると、プラアス、ド、ラ、コンコオドの廣場になる。廣場の四方に佛蘭西の大都會を表はした大石像が八つある。そのうちストラスブルヒは黒布に蔽はれて居て、喪の花環を捧げられて居る。獨逸にアルサスを奪はれて居るからである。哀れだ。廣場の中央にオベリスクが屹立して居る。埃及から持運んだものだ。赤い御影石の一本石だ。高さ十三間許り、その台石の高さ二間餘り。この方尖碑の左右に圓形の池がある。直經九間。池の中心に高い銅の水盤があつて、その水盤の中に更に小さな水盤が立つて、盛に噴水を噴き上げて居る。

此の廣場から西が、音に名高きシャンゼリゼエの大並木道だ。幅三丁はある坦々たる大道をば、四列の大樹の並木が車道人道と限つて居る。長さ十八町あるといふ。車道の正面遙か遠くに、夏霞にかすんで大凱旋門の聳えて居るのが見える。さすがは巴里だわいと首肯される。

晝食に宿へ歸つて、午後全じ道を通つてルウヴルの横て下車。初めて中へ入つて見る。

ルウヴルの全部は到底二日や三日では見終られぬ。部屋〳〵を休まずに早足で歩るいても二時間ぢや通れぬと聞いて居る。

地階には彫刻物がある。古代大理石彫像部、亞細亞部、埃及部、中世及文藝復興期彫刻部、近世彫刻部と五部に分れて居て。各部が幾室にも分れて居る。

第一階(日本ていふ二階)が主として、かの有名な繪畫の書廊になつて居り、第二階には十九世紀佛國繪畫、

支那部などがある。

僕は地階の大部分を後日に期して、一階の畫廊に入つた。畫廊といつても幾十室に分れて居る。畫の數が三千點許りある。斯んな日記に一々紹介の出來るもんぢや無い。レムブラント室、ヴン、ダイク室、ルウベンス室と分れて居ることを考へても、如何に名家の畫が多く蒐集されて居るかゞ分るであらう。

十四五世紀の伊太利畫工に就て言つて見ると、フロレンス派のものには、ギオットのがあり、フラ、アンゼリコ、ダ、フエソレの「メリイの戴冠」があり、ベノッツオ、ゴッツオリの「聖トマス、アクイナス」があり、フラ、フイリッポ、リッピの「マドンナと幼子」があり、ドメニコ、ギルランダイオのもの、サンドロ、ボッチセリのもの、ロレンツオ、ヂ、クレヂのもの、と數々ある。ウムブリア派のものには、ペルチノの「マドンナ」もあり、アンドレア、マンテニヤのものも多くある。エニス派のものには、アントネロ、ダ、メシナのもの、ジョヴンニ、ベリニのもの、シマ、ダ、コネリヤノのものなど、之も數々ある。

十六世紀の伊太利畫家としてはレオナルド、ダ、ヸンチの大作が幾つかある。有名な「ラ、ジオコンダ」の畫はつい此間盗まれた。

ルウヴル程ラファエルの名作を蒐集して居る處は無いと言はれて居る。初期の作「セント、ヂョオヂとセント、ミカエル」もあれば、中年の作「ギエルジユ、オウ、ヂアアル」もあり、盛時の作「カスチリヨネ伯」の肖像畫もあれば、晩年作の「神聖なる一族」もある。コレジヨのは二品ある。チチアンの宗教畫は傑作ばかり十は確に在つた。「茨冠の基督」だの、「マドンナと兎」だの、「基督の埋葬」だの。

西班牙名家のでは、ヱラスケッの肖像畫、ムリロの「子供乞食」、「清淨受胎」を始めとして、近代のものもある。

フレミッシユのものでは、アイク、メムリング、エエデン、降つてはルウベンスのもの、ヴン、ダイクのもの、テニエのものが數多くある。ルウベンスのマリ

イ、ド、メヂシの一生を描いた二十一枚の大幅など、すばらしいものである。

十七世紀のダッチ派のものは、和蘭の諸畫堂にある程澤山には無いが、でもレムブラントのが二十二枚もあるので、他は推して知るべしである。

獨逸初期と英國派のものとは數は少いが、でもホルベインのもあり、ゲンスボロオのもの、コンスタブルのもの、レエバアンのもの、ロオレンスのもの等、日本に一品でもあればと思ふのがあるのである。

僕は畫堂に入る前に、地階では「ミロのヱヌス」――セオフイル、ゴオチエがHow great, how beautiful and noble is this Venus!.... What a vague and divine smile rests on these parted lips; what a superhuman glance is shed by this sightless eye! 云々と述べて居るルウヴルの珍寳を見、「ホオマアの頭首」、「ボルグエズ、グラヂアトル」、「ガビイのヂアナ」、「フオオヌ、ア、ランフアン」など、傑作中の傑作と稱せられて居るものほど見て、直ぐと畫廊へ上つたのであるが、此處でも、名作中の名作と唱へられて居るものほど熟覧して、それでその全部を見終ることが出來なかつた。

足が棒のやうになつた。閉門の鐘を聞いてから出て、ルウヴルの裏通りの、とあるカフヱヱへ入つて、脚も休め、渇も醫やした。

英吉利には、巴里のカフヱヱ風な家が一軒も無い。此處巴里では、飲食店は、窓の外部の、敷石の人道へも卓と椅子とを出して居る。人間の通路を邪魔して出して居る。卓の上も、椅子も、街路の砂塵で白くなつて居る。それへ平氣で腰かけて、大道を――車道を眺めながら、車道を通る人に眺められながら、ゆつくり構込んで、ラムネを飲んだり、麥酒を傾けたりして居る。レモン水一パイ取つて、卓を一つ占領して手紙を書いて居る男もある。白首らしい女二人を左右にしてトラムプをやつて居る、髮の長い畫工らしいのも居る。リキユウらしい小盃を横に置いた儘で切りとドミノをやつてる差し向ひの男も居る。

夕食後、宿の庭で、全宿の獨逸人、娘二人と話す。英

語が上手だといふ娘が變妙な英語を使ふ。英國ではどうも旨くしやべれぬが、英語の下手な外國人を前に置くと、妙に旨くしやべれる。相手を呑んでかゝるからだ。全體僕は餘りにシャイだ。

夕食の折飲んだワインの醉が醒めかけたので、寢る前に、近處の酒場へ行つて、地酒をコップで三バイ飲んで歸つた。佛蘭西は葡萄酒の廉いので羨ましい。

九月三日

日曜だ。今日も朝から暑い。

竪琴とヴイオリンの音で眼が覺める。僕の部室の窓近くきこえる。寢衣の儘ブラインドを絞つて見ると、大道音樂師が二人流行唄を彈いて居るのである。三階の或る部室、四階の或る部室からと、銅貨を投げ與へる。僕もポケットから十サンチイムの銅貨を一つ投げてやる。チャリリン／＼と石敷の庭に響く。二三曲彈いてから去つた。

朝食後、宿に遠からぬサン、ヂャックの寺院へ朝の勤行見に行つた。坊さんは髮の大部分を剃つて居るし、金襴の袈裟をかけて居るし、祭壇の莊嚴が佛壇めいて居るし、祈禱の節がお經節なので、今迄英吉利の寺ばかり見て居る僕には妙だつた。

少し風邪氣味だし、眼も痛めたので、午食後、暑いのを我慢して、床へ入つて寢てしまつた。でも夜になつてから少し具合がいゝので、酒場を二軒飲みあるいた。

今日は餘り書くことが少いから、巴里の下宿の食事のことを話す。

英吉利では朝食が分量の多いことは前に言つた。晝は極めて簡單だ。夜のヂナアも、普通の下宿ぢや、スウプの次に魚のあることがあり、無いことがありで、殆んどお定に出るのは、馬鈴薯と何か添はつたロオスト、ビイフだ。その次にサラドの出る家は少い。飲料は、自分で麥酒なりワインなり取らぬ限り、水に――アダムス、エエルに定つて居る。

佛蘭西ぢや、晝も夜も馳走がある。僕の居た下宿は、中の下か、下の上位の處だつたが、着いた晩には

ポタアジユ、マカロニ。大きな角切りの牛肉の煮

たのに胡羅蔔と馬鈴薯。胡瓜の酢もみ。チサ。プヂン。果物（梨、グリンゲエチ、葡萄）。

今日の夕食は

コンソンメ。マカロニ。小鰕。ロストビイフ。レッチスのサラド。ライスプヂン。果物。

であつた。晝も大抵品類は同じだ。英國よりも野采を多く使用する。料理が上手だ。そして晝も夜もワインは飲み放題だ。意地汚い話だが、多く水ばかり飲んで居た僕は大に有難く思つた。

九月四日

今日も無類の快晴。

地下鐵道の乘換が了解出來たので、今日はそれを利用して、バスチイユへ下車した。

佛蘭西革命の爆發は、此のバスチイユに在つた牢獄の破壞に始ることは誰も知つて居る。千七百八十九年七月の十四日！　今はその牢獄の痕跡だも探ることが出來ぬ。四方に大厦高樓の聳えた廣場て、中央に、千八百三十年七月の革命に仆れたものの紀念碑が立つて居る。高さ二十五間餘。頂に鍍金の自由の神の銅像が立つて居る。右手に文明の火把を高くかざし、左手に束縛の斷鎖を提げて居る。バスチユからボン、ダウステリッツ橋まで歩いて、橋向の動植物園へ入つて見た。倫敦の動物園植物園を見て居る僕には小さな規模のものであつた。

午後はノオトル、ダアムとパレイ、ド、ジユスチスとを見た。

ノオトル、ダアムの正面は如何さま壯麗だ。寺院正面建築の模範とされて居たのは尤もだ。扣壁て縱に三段に分れて居り、塔を除いて三層になつて居る。門は三つあるが、三つとも初期ゴシックの彫刻て飾られて居て、中央のは「最後の審判」が表はしてある。二階に當る層には、二十八の壁龕があつて、それにイズラエルとジユダアの二十八王の像が安置してある。その上に大欄干があつて、中央には天使を從へた聖母の像が立ち、その右にアダム、左にイヴの像が欄干に立つて居る。

次の三層目には中央に菊形窓、左右に二重窓がある。菊形窓は直徑七間(けん)に餘る大きさだ。

次の四層目はアアチを上にした、高さ四間(けん)半の細い柱て成つた廻廊(ガレリイ)て、この廻廊の上に、欄干付の物見臺(バラストレエド)がある。その欄干の上に、かの有名な怪物の像が巴里を俯瞰して居るのてある。この物見臺の上に、左右二つ、高さ九間許りの方形の塔がある。塔の上も欄干付の露臺になつて居る。巴里市街は愚か、遠く郊外數哩四方を見渡すことが出來る。こゝ迄あがつて風に吹かれた心持つたらなかつた。

餘り月がいゝので夕食後散歩に出る。サン、ミシエルから乘合自動車てグラン、ブルヷアル迄ゆき、夕納涼の人の織るが如き中を、推され〱歩るく。何處のカフエも溢れる許りの人だ。キイネル、カフエといふのて一バイ飲んだ勢に乘じて、十時過に馬車を走らしてバル、タバランへ驅けつけさした。

板敷の半圓形の踊場を圍んて三方に棧敷がある。二階にも棧敷がある。棧敷には通れぬ程小卓と椅子とが並べてある。やつと二階の空いた卓を見つけ出して座る。正面にはプラトフォオムがあつて其處て二十人許りの樂師が舞踏の樂を囃して居る。踊場には幾十の紳士(?)が美服を纏ふた婦人——尤もいかゞはしい素性の婦人と相擁して盛んに踊り狂ふて居る。天井から色電氣を踊場へ浴びせかける。色が時に紫、時に緑と、色々に變る。婦人の頸飾、指環、衣物に縫ひ込んだ寶石が綺羅〱光る。ワルツ、ポルカ、クワドリイルと、何時果つべしとも思へぬ。

更けて、——と言ひたいが、實の處、東が白んてから自働車を走らして宿へ歸つた。

大陸巡遊日記は數ヶ月に亙つて本誌に連載せらるべく、其寫生的敍述の如何に趣味多きかは回を重ぬるに從つて益々明かなるべし(編者しるす)

花下語

黒頭巾

◉其一

◉飛鳥山の花も既に葉櫻となりぬ。江戸趣味の花見の場所は、唯今、唯だ飛鳥山あるのみ。電車線路の延長が、此の風景を全滅せしむるの問題は漸く綠蔭にかくれゆきぬ。また來ん春の花を奈何にせんや。

◉飛鳥川を描くもの、古來概ね王子に向へる花の崖を舞臺とす。司馬江漢の油畵の版畫に、則ち街道を描く。茶店蕭疎として、櫻樹二三本、飛鳥山の野趣樂むに足るべし。電車線路を延長せんとせしは、則ち此の路筋なり。

◉飛鳥山十二景詩歌並碑の一册、享保年中、大學頭林信充の題詩と書とを錄するもの、蓋し、飛鳥山公園の創立を去ること僅かに六七年に過ぎず、則ち此の山、荊棘を芟り、草莽を平かにし、野趣の尚ほ茂れる間に栽ゑし千本の櫻の花新たらしかりし頃の風景を偲ぶに足る。

◉飛鳥山は展望太だ空濶。十二景は、眼中遠景をも採錄す。鴻臺秋月も亦た其の中に入る。成島道筑の歌に、「はるゝ夜の眞間の入江に汐みちて、月さしのぼる岡の上の松」といふ。鴻臺は長江に俯瞰して、崖樹、亂松多し。臺上、今、練兵場となり、馬塵滾々として空に漲る。處々、櫻花、風塵の氣を帶びず、江水に映じて花彩、帆影を染む。

◉此の册子、すべて野趣の詩味を帶ぶ。瀧の川を描くもの、碧澗潺湲として、山間の落日眞紅の光を放つ。今の瀧の川に比ぶれば、隔世の思あり。

◉吾輩の駒込の書窓は、染井に近し。染井の夜雨にいふ、「平蕪斜接大原邊、微雨夜來更可憐。明日遙瞻千里目、農郊幾處作晴烟」と。今の染井は人家相望む。閑雅の新建築日々に多くして野趣減ず。野趣は却つて駒籠の中にも殘れり。

◉吾が書窓に、途を隔てゝ茅屋あり、太だ書趣あり。碧樹、林を爲し、其の間、櫻花多し。花の高きものは屋を過ぐ。風吹けば、木葉、花片、紛々として吾が書

窓に落つ。如何なる人の住めるにや、鶯語に、琴聲の交りて聞ゆ。

其二

●吾輩、水戸の好文亭に往き、水戸學者勤王家の遺墨を觀、轉じて霞浦に遊び、春湖の書趣を賞し、到處、浩蕩たる風光に醉ひて歸り來れば、眼前の小景、却つて人を沈靜せしむ。酒後の茶の趣味無くんばあらず。須叟にして、客の門を叩くあり。白坊主の支那より歸り來れるなり。

●白坊主は好青年也。天草島の人。才鋭に、文章に覇氣あり。少小にして新聞記者となり、大成を期して、中途にして笈を負ひて都門に入る。南淸の風雲動くに及び、一劍飄然として、南京に遊び、淹留六旬。其の歸來するや、心中、得るところあるもの丶如し。

●主客、卓を圍みて、落花に對して語る。彼は袁世凱の人物に及び、曰く、之を博士高田に質せば、公桂の才を、惡るく發展せしめたらんようの人といふ。頭山滿に叩けば、袁の手腕、却つて公桂の上にあらんといふ。

●彼は、多く革命軍の名士を見來る。孫逸仙を輕しとし、黄興を小なりとす。ひとり袁を見ざるを以て恨とす。蓋し、電報を以て能く天下を取りし者、袁世凱の外、古來、未だ之あらざる也、最近の淸國共和政の趣味は袁の人物に在り。

●孫は、大統領に就任するのとき、自から席上に斡旋し、客に倚子を薦む。最後に新大統領の坐席無きに至る。彼は餘りにハイカラなり。彼は、支那人にして、支那人を御するの術に暗らし。

●黄興は寛洪にして能く讓る。勇を以て聞ゆ。彼が袁の新內閣に入らざるは、彼に、出色の人物を以て許すに足る。然れども彼や識度、小、一代の人物を以て彼を推すには尙ほ遠し。

●聞說、黄は西鄕南洲を敬慕すと。世間、或は彼を以て、南淸の南洲に擬する者無きに非ず。

●白坊主の黄を見るや、黄の風貌、魁偉といはざるも、甚だ豐滿。眼は紫電の爛々たるものある無く、稍細長くして、半ば眠れるが如し。彼が黄より更に大人物の印象を得ずといふ。

●南京の市街は荒れて、活氣少く、石頭城は、また雄風を起す無し。滿目の山邱、皆な禿して、到處、盆栽あり、草木無し。彼は、眼前の樹影花影に、感興を煽られつ丶語る。彼の眼は輝けり。

●吾輩は黄を識らず。彼の細長き眼は、人相に所謂鳳眼といふものには非ず乎。支那には目光の炬の如きもの千古極めて稀也。鳳眼の人、能く人の上に立つを得る。

●維新三傑の眼を見よ。西鄕も木戶、大久保も眼光爛々。威風すべて眼中より來る。

●袁は、近來、威容頓に加はる。眼窩張り、頰肉湧き、支那のビスマークの如し。彼は一世の才物、其の質は虎豹にあらず、鼠のみ。巨鼠、志を得れば、蓋世の氣を生ずるなり。

●或はいふ、漢口の陷るや、黃興、民家の樓上に在り。樓下誤つて短銃を發すると聞き、色を失ふと。劉玄德、雷鳴に箸を落せしは恐らくは故意には非ざるべし。

●支那人は血を見るを恐る。古來、血戰の勇士稀也。「斬レ人如レ艸劍無レ聲」の句、彼に在ては勇士の夢なるべし。吾に在ては尋常茶飯の事のみ。

●支那の戰爭は、旌旗の競進會たるに過ぎず。李光弼は千古の名將軍、而して史家其の軍容を記して旗幟精明といふ。支那人は、古來、旗幟を以て戰へり。四千年來、武器の、更に、一進步を爲さゞる所以にあらずとせんや。

●風雲劉際の際、乾坤一擲の大戰爭は、旗幟の戰なりし也。古來、英雄、旗幟を以て天下を取りし也。袁世凱が、電報を以て天下を取りしは、旗幟戰に、一機軸を放出せしものたるを失はず。彼は、確かに支那史に特筆さるべき英雄兒也。

●袁、孫の優劣、初より定まる。蛇と雀とは、遠くより相睥睨するも、雀は、終に、睨み落されずんばあらず。此の二人者の妥協は、電報交換の前に成立せしといふは穿ち過ぎたる說のみ。電報交換中に、次第〳〵に形勢は移りゆきたる也。

●北伐軍といふもの、漫に旌旗を擁して血を見ず。張勳は男らしく思はれしも、遂に張巡の亞流には非ず。而して戰は砲火に決せずして電報に決す。

●北伐軍の將帥柏文蔚は、小劉備を以て目せらる。革命前に大佐たり、一躍して大將となる、柏大將の名聲、南北を動かす。彼に奇聞の錄す可きものあり。

●柏大將を招宴するものあり。從卒二人、其の左右に隨ふ。宴時、從卒は別室に待つに、絕えず、ポケットより小さき飴菓子を取り出して口に啣みつゝあり。大將の從卒にして此の如し、北伐軍の精兵といふもの知る可きのみ。

●輓近、袁の聲望、漸く南方に加はる。人民、彼を以て共和政の木鐸と爲すと。彼は、戰はずして終局の勝利を得たり。孫子の所謂上の上なる者に非ずとせんや。

●袁や、孫や、黄興や、必ずしも大人物にあらず、而して悉く、不朽の人物となり了れり。其の中、袁は、公桂に比較して評論せらるゝを見れば、稍、他の二人とは同日の論には非らず、然りと雖も、彼に、政治の主張、經世の識見の特記す可きものあるにも非ず。畢竟、不朽の人物、必ずしも大人物に非ず。

●暮色至る。主客、窓を開き放ちて、前方の茅屋を見る。春烟碧樹を籠め、茅屋の軒の下なる、椿花の濃紅なるが、特地に建仁寺垣に映發す。

其　三

●茗溪の語、甚だ雅也。江戸名所圖會に見る茗溪の圖は、如何にも其の名に適切らしく思はる。茗溪といへば、月を描かざるは無し。今は、風塵の衢となり、月色も朧ろなるらし。

●名所圖會の畫家、長谷川雪旦は、筆力超凡といふべし。嘗て彼の旭日舞鶴の圖を見るに逸氣あり。而して彼は專ら名所圖會を以て名を成し、其の他の畫は、好しといへども價高からず。

●昔は、茗溪は螢の名所たり。堤高く、谿深くして鵑聲月中に聞ゆ。小舟を浮べて過ぐる者、仰いて月光の堤樹に騒ぐを見るのみ。今の人は則ち茗溪の詩趣を想像し易からず。

●ニコライは茗溪の名物たり。其の人沒して其の塔尙ほ存す。吾輩も、昔年、其の塔に上りしことあり、執事、唯だ鄕國を聞いて、姓名を問はず。彼は訪問者の分布觀を樂しみしならん。

●ニコライは在留外國人の雄者たりし也。教は、唯だ人に依つて行はる。彼の沒後は、鐘聲も漸く力無し。茗溪の爲に惜むべし。彼の愛せし花壇に、今年の春は如何なりし。

●茗溪を飾るものは、聖堂也。聖堂の春は、櫻花國香を薫ず。孔子像も日本流なるが殊に似つかはし。

●聖堂の一部に高等師範學校の、多年、經營されしに依つて、茗溪は赤門に對して、教育界の一大勢力を象徵するの語となる。今の茗溪の印象は、風景にあらずして人物ならずんばあらず。

●吾輩、嘗て、茗溪の繪葉書の絕奇なるもの一枚を得る。斜めに、溪間を寫して、碧樹の上にニコライの塔見ゆ。瑞西の山中も、かくある可くや。蓋し、紅塵の

衞も、唯だ、奇警の一觀察に依つて、趣味の風景を看出すを得可きなり。

其四

●七十年前の「雅びの栞」といふもの、東都郊外の花の名所を舉く。中に就て、杉田の梅、閑雅に、御殿山の櫻、ことに豊滿にして艶麗なり。此の二者ともに、今は滄桑の變を感ずること深し。

●昔の御殿山は、爛漫たる花下に、毛氈を敷き、東京灣を見渡しつゝ、歌舞すべし。花は玉缸を打ち、白帆を打ち、春酒香ばしく帆影香ばし。御臺場も未だ見えず。房總の山、未だ烽火の警を見ず。波平かに花靜かなりき。

●御殿山の土を海に投じて品川の御臺場を築き成す。土を投ずるは金を投ずる也。御殿山の土、未だ盡きず、幕府の力既に盡く。時勢一變して、御殿山の花下、富豪の町を現出す。御殿山の花と土と金とは、自から三題噺を爲す。

●今の御殿山には貧人無し。軒を並ぶる者多くは萬、十萬、百萬の富を有す。花は少くして金は多し。碧樹の尙ほ存するもの、亭々として樓閣を過ぐ。葉陰に、東京灣を望めば、興國の氣滿つ。

●御殿山の人物を列擧せば、趣味ある月旦を爲すに難からざるべし。吾輩、其の一例を擧ぐ。小波山人の御伽文學に於ける、日比翁助の三越經營に於ける、益田孝の碧雲臺を營みて、應擧壁畫の室を移し來れる、移民事業に於ける森岡眞の如き、槪ね代表とすべきものに屬す。

●日比翁助は、翁を名として、つねに若き心を有す、精悍の人物。去年來、神經衰弱に罹り、病牀に呻吟すると聞く。斯人にして、斯病あるを見るは、惜むべし。吾輩は、彼の精力主義を益發展せしめて、靑年を鞭撻するあらしめんことを期せり。然れども、彼や、秋風に病蘇するの時、捲土重來の日あらん。

●現代、精力主義を標榜する者、必ずしも少しとせず。而して細かに見來れば、其の多數者は、神經衰弱の病者ならずんばあらず。流行兒といふ者は、一人にして八人藝を演じつゝあり。非常の偉器たるに依る乎。或は、人物拂底にして、自から少數者の八面鋒を必要とするに依る乎。

●神經衰弱と糖尿病とは、現代の二大病なり。明治の人物、先づ神經衰弱に罹りしは松菊先生也。彼や、西歐の文物を觀察し、吾國人の力、急に及び難きを憂へ、

身心の過勞、即ち此の病を得る。爾來四十年、先生の靈、帝國の激甚なる發展を知るや如何に。

●神經衰弱は、興國の病也。吾が帝國の幾多の大人物、苦心經營の爲め、神經衰弱に陷るに至らずんば、帝國の大發展は望む可らず。健闘者の神經衰弱は、將來の日本の爲に、當然の犧牲也。戰功者は金鵄勳章を得る。神經衰弱者は、「二十世紀の靈」に向つて、一箇勳章を要求するの權利あらん。

●御殿山の花は知るや。今、此の地帶の大地主は、當年御殿山の英國公使館を襲撃したる志士なりし事を。因果は、めぐる小車也。花は、攘夷の爲にも開き、開國の爲にも開く。唯だ能く國香を薫ずるは人物の力に依る。

●御殿山には、尚ほ一箇人物の特記すべきものあり。其の人、今は既に沒す。伯佐野常民也。

●伯佐野の赤十字に於ける勳業は、此に言はず。彼や人格の人、佐賀人物中の一異彩とす。彼、佐賀の長老にして、流石の伯大隈と雖も、彼の前には氣燄を吐かざりき。

●吾輩、嘗て、伯佐野を御殿山の邸に訪ひ閑談せし事あり。偶々、伯大隈夫妻、馬車を驅つて來る。短小にして肥えたる佐野、魁偉にして廣長舌を揮ふ大隈、夫人は、其の間に坐して、謹んで兩者の快談を聞く。海風、園樹を吹き、快濶の光景、尚ほ眼前に在り。

●伯佐野は、客を款待し、好んで御馳走を爲す。玄關の書生の友人來るも、自から注意して、菓子を出さしめ、食事を供せしむ。彼の説にいふ、余が如き不肖の人物をも相手にして來る人の厚意に、御馳走する位は、寧ろ當然の事のみ。

●彼の園林は、御殿山の名所たるを失はざりき。彼、薨じて餘財無く、負債あり。此の巨邸を賣つて償却に充つ。彼には大なる道樂あること無かりし。彼は、清廉の人物なりし也。

●彼が書生をして、他に使せしむるときは、仙台平の袴を穿たしめ、佐野の定紋の羽織を著し、威儀を正して往かしむ。彼曰く、君は書生に非ず、佐野常民の代人也。

●彼の體格は堅實にして事に堪えしを知る。彼が、最近の吾が文明史に貢献したるの功績は沒す可らず。而して、其の成功の要素は、精力の利用に在り。彼は精力を濫費せざりし人也。彼は、宵に寢、夙に起き、家人をも督勵す。玄關書生の愚眠する者あれば、自から來

りて、呼び起し、ステッキを以て、其の頭をコツコツと叩く。

其五

●春雨の日なりき、春草の遺墨展覽會を美術學校に見たり。車を驅りて上野公園に入る。雨中の花は重く垂れて、雨にも清香あり。煤煙は飛び來らず、老木の翠、洗ひ出して更に翠也。

●精養軒を過ぎ、左折して、東照宮の森に入る。此の入口の眺望こそ春雨の上野に冠たるものなれ。老樹森々として、樹間の花は遠く朧ろなり。森の戶に、大なる石燈立てり、石燈を框として、めぐりて進み行けば、樹の間の花は、次第に浮び出づ。光線劇を見るやうに。籬の中に見えし朧の花は、染上りの友禪模樣の如く、雨に染まりて、クッキリと浮び出づ。

●東京の公園の花、上野の殊に賞す可きは、花と樹との色彩の調和に在り。動物園の前の櫻、夜櫻の電燈に映發するは、一段の奇觀を縱まゝにせしも、今、動物園に櫻花を增殖して、園の門は、花に埋まる。花を穿ちて、動物園を覓む可きなり。這般の風景、細雨に染めなさるゝとき、一箇、花草の裝飾畫の艶麗なるものを織り出す。

●吾輩は、俥上、ゆく〳〵春草の畫を想像す。上野の雨中、花は、裝飾畫なり。此の中、最近の裝飾畫の新奇なるものを展觀す。感興更に深からん。

●春草の學生時代の畫を見れば、彼の力を得る所以のものを知るべし。其の狩野流の筆意、殊に芳崖に私淑するもの、勁[illegible]の氣あり。溪谷、猿樹と、寡婦との圖は偏へに芳崖に似たり。晩年、端麗の筆致は、這般の素養より來る。

●春草の畫風は三變す。狩野一變して、歐洲畫となり、再變して光琳との調和となり。三變して、春草の一家を爲す。學生、美術院、五浦時代を通觀し來れば、すべて、代々木時代の爲に準備畫たるの感無くんばあらず。晩年の畫は一箇々々に新意あり。概ね傳ふるに足るべし。

●彼が準備時代の畫風には、常に多少の缺陷あるを免れず。全然、油畫に模擬するものゝ如き、模擬に非ずとするも、其の筆、泰西畫の亞流を出でず。彼をして、這般の範疇を出ること無かりせば、彼は江漢、田善の後塵を趁ふに留まりしならん。

●彼の筆は勁雄の氣少し。彼が江漢を壓し、光琳を翔するを得ざる所以は此に存す。

●枯華微笑の圖は、名高けれども、嫌味あり。彼の傑作は、落葉と黒猫となるべし。單に、其の題材のみに就て言はゞ、此の二者に於けるは、彼の獨得の舞臺たらずんばあらず。

●彼は努力の人なり。眞面目に、畫に獻身す。彼は、容貌、婦人の如し、白皙にして柔美なり、大聲せず、壯語せず、笑つて評論を言はず、其の中には、儼として奪ふ可らざる操守あり。滿身の氣力を擧げて畫に傾注す。

●彼は、觀山、廣業、大觀、栖鳳と對峙して、其の才を以てすれば、必ずしも優らず。唯だ、彼が、一意専心、默して畫を作るの態度は、彼をして一頭地を放出せしむ。

●彼は少年にして既に頭角を拔く。然れども蒲柳の質、活動して以て博く題材を取るに便ならず。晩年、會心の作の、專ら花草、鳥猫の狹き舞臺に劃られたるも、半ば、其の體力の薄弱なるに起因するならん。

●彼の構圖の才は潤澤ならず。例へば、貓を描き三羽の小鳥を描けば、姿態すべて一律なり。彼の得意は色彩の調和に在り。柏葉に黒猫、栗葉と栗鼠を配するもの、如き、渾然として自得の妙境に入る。落款の位置も亦た不自然ならず。

●「落葉」の出品せらるゝや、博士藤岡は推して光琳以上とす。光琳以上といふは、吾輩は與みせず。色彩の調和美は、彼、或は光琳に讓らず、其の筆致も亦た相似たり。線の曲がれる中に、光琳のは力あり。春草のは弱し。而して豪宕の氣、此、彼に及ばず。春草の規模、光琳に一著を輸する所以也。

●吾輩は、彼の黒猫は、彼の愛猫なりしかを疑へり。彼は猫ほど嫌なものは無しと云へりと聞く。彼は、猫は陰佞にして人を人ともせず、用ある時に柔聲を以て恩を求む、家畜の中、尤も排斥す可きものなりと云へり。

●徽宗皇帝の猫は畫史に名あり。然れども古今、猫を畫くの多くして且つ巧みなるは春草を推さずんばあらず。彼は、性格に於ては、猫を悪み、畫題としては猫を愛せしなり。

●彼の猫は、初には赤、白斑を描き、最後に黒猫を描く。而して黒猫尤も著聞す。猫の形態美は、柏葉黒猫を以て厭卷とは爲す可らず。竹下の黒猫を以て妙なりとせん。

●抑も、彼の黒猫、落葉の圖多きは、必ずしも彼の畫

題の、此に偏局するにもあらず。寧ろ、世間の罪也。世間、愛書者流、評判の畫題を以て作家に注文し、責め落さずんば已まず。彼は、駄作せず、多く描かず。稀に作るの畫、則ち、展覧會を占領するに至る所以なり。

●落葉に於けるも、亦た黒猫と同じ。落葉は、文展のよりも、却て、細川侯の藏幅に屬するもの逸氣の賞す可きあり。黒猫に於ても、才華の愛す可きは、玉椿に猫の一幅に在り。然れども氣格の大なるは、柏葉の黒猫とす。柏葉の大にして金色なるは、黒猫と映射して、稍、高渾の印象を與ふ。此の如き圖、光琳の想到せざりし所也。

●春草の寡婦は、美術學校の卒業製作として紀念す可きもの、此の畫、今に於ては吾輩の鑑賞に入る。聞く、當時、教授、皆、之に零點を附す。雅邦ひとり百點を與ふといふ。芳崖鍾馗の圖の落第と共に、並せ録して、以て明治美術眼の變遷を徴す可きなり。

●當時、諸教授、雅邦に迫りて、百點の理由を聞く。雅邦曰く、吾輩と雖も説明すること難し。然れども吾輩をして、試みに、作らしむるも、これほどのものを作る能はざるべしと。

●春草の人物畫は出品、甚だ少し。彼、當年、力を人物に注ぐ。王昭君を始め、世評に喧炙するもの必ずしも少しとせず。然れども吾輩を以て見れば、人物畫は彼が畫史に地歩を占むる所以のものに非ず。

●春草は、當年、展覧會に出品するの畫、自から燒棄てたるもの少からず。彼は、他年の大成を期し、惡作の江湖に流傳するを恐れたるに依るといふ。

●春草の展覧會には、彼の代表作とす可きもの必ずしも網羅せられず。世人、若し、こればかりを以て彼を月旦せば、彼は、地下に苦笑するならん。遺墨展覧は、果して故人の幸乎、不幸乎。

●吾輩、此の展覧會に多とするものあり。春草の畫の時代別を爲せし事也。發起者の勞、また以て謝するに餘あり。然れども、其の作畫に截然として時代を劃し得るは、春草の春草たる所以ならずんばあらず。縦令、彼の傑作は網羅せられざるも、春草の聲價は、之に由つて、能く一場の中に發揮せらる。また以て蓋棺の評とするに足らずんばあらず。

●彼は一筆々々を惜み、席畫すらも描かず。如何に小さき疎畫も心血を濺ぎ盡す。獅子、兎を搏つにも全力を用ゆるもの、故に彼の畫傑作たらざるも佳作たらざ

るは無し。彼の書には、一箇々々に新意あり。彼の書、悉く傳ふべし。

●彼は、つねに進境あり。彼の書は進みて已まざりし也。彼の知友、或は五浦を以て代々木に勝れりとする者あり、また一隻眼を具す。然れども吾輩は、晩年を以て、彼の最高境とし、少くとも更に一生面を開くの準備期たりしと爲し、併せて彼の早世を悲む。

●彼の五浦時代は、氣鋒横溢す。彼の大膽なる書面の開拓を見るに餘あり。彼は、遺憾無く其の才を試みて、「明治の光琳」といふ事に想到し、自家の天分を認め得たるならずんばあらず。

●春草の畫、豪華無きも端麗到り、沈著にして氣品あり。明治の畫史に、一角の地を占斷す。日本畫の將來、裝飾畫に向つて發展すとせば、沒後の彼の影は、次第に、偉大に印するならん。

●抑、春草の畫の狹きは、彼をして、精力を集注せしめたるの結果にして、天が、弱き彼を寵する所以也。然れども彼より見れば、專精努力の報酬として、永遠に傳ふべきものたり。

●吾輩は、彼と語ること僅に二回。初に、彼と三越の樓上に逢ひ、後に、文展に逢ひて、精養軒に語る。彼が審査員を命ぜられ、黒猫を齎らし來りし時也。彼の遺墨を見るに及び、袴、羽織に、白足袋に雪駄を穿ち、風采、端美、すべて髮髯無く、やさしく笑つて、靜かに語りし彼を聯想せずんばあらず。彼は、年僅かに三十六七、惜しかりし哉。

其六

●總選擧は、眼前に來れり。今年の花の下は、選良の人物論にあらざるは無し。吾輩は、新選擧に幾多の新人物の輩出するあらん事を祈る。

●關東は到處櫻花國也。停車場の在る處に櫻あり。驛前、多くは櫻花のトンネルを設く。選擧運動の有志家、カバンを挾みて忙はしく往來す。花は、滿地に開いて、長閑かに美し。

●花白く草緑り也。生々の氣、平原に滿つ。時々、菜花の眞黄なるが、車窓に返照するあり。菜花は、夕陽に金波を湧き立たせて、晩春の夢を壯大にす。

●新選擧に、新人物と目せらるゝ者、中橋徳五郎、鶴原定吉、福澤桃介、町田忠治、早川鐵治、田中隆三等あり。福澤と早川とは、多く自から語る。吾輩、此に紹介するを要せず。中橋と鶴原とは、また既に著聞す。

●中橋と鶴原とは、大臣たるを得べし。中橋は、或は

男後藤と好取組ならん。二人者は、共に新意あり、新智識を求めて怠らず。

◉福澤、早川の外、四人者は、大阪勢力を根據とするは注目するに値す。町田は、山口銀行に成功し、田中は、鑛山局長より出て、藤田組に地歩を占む。中橋、鶴原の才、共に大阪に試みて精華を發す。男藤田の沒後は、中橋は、儼として大阪鎭臺也。

◉町田と田中とは、秋田の新人物とすべし。此の二人者は、互に別種の面目を發揮す。田中は常識的にして平面的に、町田は立體的にして深し、田中は表面に活動すべく、町田は黑幕の異才たらん。

◉田中は出世の速かなりし法學士也。彼は少年時、苦學生たり。靴下を穿たずして學校に往きしほど也。彼が、今に於て如才無きは、半生の閲歴中より來る。

◉田中は官途に出身し、町田は多く民間に在り。共に秋田中學を出身して、僅かに一年の遲速あり、年齒も亦た相若く。田中は政友會に、町田は國民黨に投ず。秋田の添田飛雄太郎、齋藤宇一郎、近江谷井堂及び榊田淸兵衛も亦た稍著はる、新たに、此の二人の好對照者を加へば、秋田の代議士は振はん。

●齋藤は德望、榊田は勢力、井堂は豪傑を以て、其看板を爲す、添田は中學校長より出づるも、其の才、凡物にあらず。言を發して往々、奇警の句あり。

◉町田は、第一流の銀行家を以て自から任ず。山口銀行を十年間に、十倍の發達を爲さしめたるは、彼の手腕に負ふといふ。然れども、彼や、無愛嬌にして、圭角あり。苟くも圓轉滑脫の言を爲さず、或は、故らに、娟介自から喜ぶ。其の才、固より大阪の銀行家の何人にも讓らず、而して俄かに其の上に出る能はざる所以。議會に立つと雖も、表看板としては武富時敏の下に立つを免かれざらん。然れども、其の財政に干する智識は國民黨の嚬歎に、少からざる影響を與ふるならん。

◉町田は、伯大隈の帷幕に屬し、犬養、豊川と因縁深し。彼は當年、河上、鶴原等に隨つて日本銀行を去れる一人也。彼は、大隈系といふよりも、寧ろ三菱系ならん。

◉彼は報知、朝野の主幹を歷て、一轉して財界に投ず。華々しき境遇を經過し來りて、些の華々しき態度を有せず。議會に立つの晩も、人氣役者とはならざる可し。然れども、彼の實力は認識さるゝの日遠からずして來らん。

其七

◉山ノ手線は、觀櫻列車なり。郊外の青綠、平蕪に連り、麥綠菜黄の間、櫻花を點綴して、薫風、人面を吹いて淸快を覺ふ。蓋し、東京を環ぐるに、花草邱原の繪卷物を以てして、山ノ手線は、繪の中を貫きて奔るものならずんばあらず。

◉晴暖の春晴に、駒籠の里を發し、山ノ手線に搭して高輪に向ふ。公毛利邸堂七十祝賀會に列席せんが爲なり、早く既に車中に、魁軀美髯の客あり。手に四尺許りの奇異の杖を携ふ。薙刀の頭を切り捨てたる形也。自から云ふ、是れ吾輩の青龍刀也。問はずして知るべし、客は所謂蒙古王なり。則ち佐々木照山なり。

◉照山と稠人の中に語れば、滿室の注目を惹くに足る。彼、高聲放言、傍若無人なればなり。紳士も淑女も、張膽して吾等の面を見る。

◉去年、古島一雄、東京市の補缺選擧に打て出て、易々として當選す、彼は操觚者也。此の事、近來の一快事と爲す。今、彼、再び打て出づ。彼は既に前代議士也。

◉古嶋の初めて起つや、彼の名、未だ著はれず。豪傑、鈴木天眼の如きも、亦た首を傾けていふ、彼は有名ならず。蒙古王曰く、世間初より有名の人ある無し、吾黨、彼をして有名ならしめずんば措かずと。古嶋を擁立する者は浪人組也。

◉下谷に、古島の勁敵現はる。オイチニの出身にして頗る金力あり。浪人組、之に書面を贈りていふ、苟くも選良たる者は政見無かる可らず、請ふ吾黨と立會演說を爲さん。オイチニ恐れて退く。此の如くにして、彼等は一錢の金を費さずして、對抗者を壓伏したる也。

◉浪人組の古島を推薦するや、議決し、席上に奉加帳を廻はす、寄附の申込、實に六百四十餘圓を算す。而して現金の即坐に集まるものは六圓四十二錢也。古島、此の金を懷ろにして錦輝館の樓上に據り、選擧事務を開始す。同人、惡戰奮鬪、僅かに一週日を以て大勢は決し、彼は殆んど滿點を以て月桂冠を得る。由來、浪人の痛快に成功するは、東京の舞臺なり。

◉蒙古王は甚だ氣燄を吐く、彼の言の如くならしめば、古島を成功せしめたる唯一の殊勳者は彼なり。必ずしも彼一人の力に非ず。然れども、彼の選擧區に於ける活動を見れば、彼の舌、稍、恐るべし。

◉彼は得々として、逐鹿の快事を語る。彼は、長州の人、旬日の中、まさに大岡育造と選擧區に戰はんとする也。彼はいふ、金も青龍刀も要らず、僅に三寸の舌

あれば足れり。吾輩はいふ、恐らくは四寸五分位は有らん。此の時、隣席の丸髷の美人、面を掩ふて笑ふ。

●照山は、長州の政界には珍らしき男なるべし。彼は才子也。豪傑にあらず。然れども彼に三分の稚氣を帶ぶるも、彼と語りて爽快を覺ゆ。

其 八

●新議長は、何人の手に落つ可きや、大岡は再選せらる可きや彼の政友會に於けるは功勞無しとせず。然れども、彼は、到處、人に嫌はる。嫌はれつゝ彼は地歩を占む。彼は小人物たるに過ぎずと雖も、其の渡世才は杉田と同日に非ず。

●杉田は田舍漢たるを失はずと雖も、稍、國士の風を帶ぶ。彼は越前の人、三十年前彼の全盛時、其の鄕國に在るや、越前の國士第一を以て推さる。今に於て、彼が振はざるは、戇直にして無學なれば也。

●侯西園寺が、杉田と江原とを擧げて勅選議員となせるは、兎も角も、憲政發達史の名士を優遇する所以たるを失はず。

●杉田と江原は、共に議長の候補者たるを失はず。此の二人者、勅選に入るの後ち、大岡は、恐らくは眼前、勁敵無からん。

●議長官舍は葉櫻の中に在り。仙洞、氣閑かなれども、主人公の胸中、恐らくは閑日月あること無し。大岡は、再び來らん春の花を待ち詫びつゝあるや、如何に。

●最近三議長を比較せん乎。杉田は尤も訥に、融通利かず。長谷場は殊に活脫にして才あり、大岡は巧慧に過ぎて小智なり。杉田は、飾氣無く田父野人にも伍して高ぶらず、他の二人者は、傲然として匹夫に驕る。

●試みに官舍の守衛の議長觀を聞け。長谷場はシガーを吹かして嘯ふきつゝ人を屑ともせざる面構、やゝ癖に障る。然るに、彼の夫人時に、自から雉子、鴨等を携へて守衛に贈る、曰く、是れ良人遊獵の得物なり。大岡に至つては、漫に嘯ふくのみ。頭を叩くばかりにて背を撫するの手段無し、長谷場は、大岡より一枚上の役者なりと。

●歷代の議長、能く威張りて能く散ずるは星なり。粹にして通なるは長谷場なり。禪の未だ徹底せずして、稚氣の伸ぶるは河野なり。大岡は利是れ事とす。人品尤も下る。然れども、若し能く開悟せば有用の才たらん。

其 九

●吾輩、事に依つて水戸に往くの日、新陸軍大臣男上

原、告別式を擧げんが爲に來る。近時、彼の聲名、内閣の新精采を爲す。其の當任に於けるも亦た聲價揚がる。

●吾輩テニスの友、才、櫻の如き人、志、石の如き人、吾輩を環翠樓に招きて、水戸の花を観るを得しむ。樓は環翠を以て名づくと雖も、老翠の間、櫻花漲り、見渡せば城中、花の隙間に鐘樓あり、縣廳の報時鐘也。鐘聲、花海を波立たせて夕陽浮沈す。此の中、趣味を説き、人物を論ずれば、興趣湧きて已ます。飛花、一片、窓より入つて、舞ひて膝に上る。

●男上原、此の日、偕行社に、官民連合の送別會にのぞみ、直ちに旅館に歸りて宿し、一切の用務颯々として片付く。戰地引揚げの敏捷なるに似たらん。

●彼、嘗て、垂揚亭に飲む。彼言ふ、吾に三好物、三嫌物あり、諸君、試みに命中せしめよ。旅團長、聲に應じていふ、第一、女ならん。彼手を禿頭に加へて曰く、中れり……、次は酒、次は、吾が愛馬也。三嫌物とは如何。彼、一笑していふ、第一に藝者屋の女將也……

●水戸の夜櫻を見るは、水戸の節こそ善けれ「水戸を離れて東に三里、浪の花散る大洗」蓋し大洗には、浪に花あり。人に花無し。人の花は水戸に在り。

●或はいふ、水戸は、櫻花の外、解語花あり。花は小さけれども、起ちて顧み、坐して歌ひ、楚々として風情を爲す。油の乗り來つて一笑するとき、能く水戸を傾く可し。此の花、櫻の西、梅の東に在り、あやめ也。

其　十

●樗陰來る。窓前の花木、茅屋を指して、やゝ話に耽る。鳥、花の中を出て、卵を啣み、飛び來りて茅屋の屋根に留まり、茅を穿ち、卵を埋めて去る。

●樗陰いふ、野人語るらく、鳥は、雲影を目印るしと爲して卵を隠匿す、久しくして、雲影移り、鳥歸來りて、其の處を忘ると。

此の稿を草し畢るのとき。急雨一下。翠樹研々として。殘紅皆活く。吾がペンサキを握れる鬱屈を一洗して、眼、忽ち新たなり。

四月十九日、　駒籠の里に於て、黑　頭　巾記

博物館のいろ〳〵

理學博士　坪井正五郎

私は昨年七月の初め横濱解纜の船で歐米旅行の途に就き九ヶ月の時を費して去る三月の末歸朝したので有りますが、其間諸所に於て多くの博物館を見ましたから、夫れ等に關して思ふ所を記して見ようと考へます。通過した道筋の大略を云ふと先づ日本郵船會社の船の寄港する所へは一々上陸し、時の許す限り横道へ入り込み、ポルトサイドで、是れ迄の船に別かれ、エジプトに居る事二週間、ポルトサイドに戻つて他の船に乘り込み、地中海、ビスケイ灣を經てロンドンに着。夫れからフランス、ドイツ、スペイン、諸地方を巡つてモナコへ行き、イタリーを彼方此方歩いてブダペストに赴き、一走りに走つてコンスタンチノープルに達し、ヨーロッパの中央に引き返し、ウイーン、ミユンヘン、スタツトガルトからスウイツツアーランドに入り諸所寄り道をし、パリスを經て一且ロンドンに戻り、ケンブリジ、ヲクスフヲードを巡つて又ロンドンに歸り、サウサンプトンから船に乘つて大西洋を横ぎり、アメリカでは、ニユーヨーク、フイラデルフイア、ワシントン、ボストン、セレム、シカゴ等へ立ち寄り、シアトルから船に乘つて元の横濱へ歸着した次第で有ります。ヨーロッパの北の方、アメリカの南の方共に脫けて居るので有りますから廣く歐米の博物館に就いて云ふ事は出來ませんが見て來た丈の事でも總括して考へると各の特徵やら相互の優劣やら種々面白い事に氣附くもので有ります。

成り立ちから云ふと博物館には皇立が有り、國立が有り、市立が有り、大學附屬のものが有り、又富豪の私立も有ります。

內容と建て物の關係では、(一)本來の性質上一ヶ所に有るべきものが種々の事情の爲め何ヶ所かの別の建て物に置いて有る事も有り、(二)特殊のものが獨立の建て物に收めて有る事も有り、(三)類を異にするものが一つの建て物に入れて有る事も有ります。ミユンヘンの博物館の如きは第一の例、モナコの海洋學博物館、スタツトガルトの土俗博物館、カイロのエジプト古物博物館の如きは第二の例、パリスのトロカデロ博物館の如きは第三の例で有ります。現在の狀體から云ふと斯く三樣の區別は立つもの丶、一ヶ所に有るべきものが何ヶ所かに別かれて居ると云ふのは主として地面に付いての事で有りまして、組織の上から云へば博物館は大學と同樣、單獨と綜合との二樣に別かたれるので有ります。

單獨の類で幾らも例の有るのは美術博物館、博物學博物館、綜合の方には單に數科に亘つて居るロンドンのブリチシミユーゼアムの樣なものも有れば廣く諸科の物の網羅して有るマルセールの博物館の樣なのも有ります。

博物學と云ふ名の負はせて有る博物館に鳥獸其他の動物標本が有るのは定まつた事で有りますが、スウイツツアーランドのベルンに於ては此の他に金石類が加へて有り、ロンドンに於ては更に植物が加へて有り、ウイーンに於ては、植物が無くて諸人種の風俗を示す物品と太古遺物とが加へて有る。パリスの植物園內には元地質動物の標本を置いた博物學博物館と骨骼其他諸人種の體質を示す標本を置いた人類學博物館とが有つたので有るが今は此二類の物が三階建ての新館に移され、下の方に地質學的動物學的のものが置かれ、上段に人類學的のものが置かれて有ります。

土俗品即ち諸人種の風俗を示す物品はウイーンやニユーヨークに在つては博物學博物館の標本として扱はれ、ベルンに在つては史學博物館の標本として扱はれ、ローマに在つては人類學標本、スタツトガルトに在つては土俗學標本として夫れ〲の博物館に置いて有る。シカゴのフイールドミユーゼアムの列品は博物學

上のものと人類學上のものとに別けて有るが、人類學部は諸人種頭骨、土俗品、歴史的標本、古代遺物等を含むので有る。要するに土俗品の所屬は未確定の姿なので有ります。

建て物の見掛けの重々敷いのはブリチシミユーゼアム、立派なのはモナコの海洋學博物館、位置の好いのはウヰーンに於て王宮の前に相對して居る博物學と美術との兩博物館、館内の區分の便利に出來て居るのはスタツトガルトの土俗博物館て、此所では下が何所、二階が何所、三階が何所と云ふ風に夫れ夫れ地方別けに成つて居て、普通階段に由つて上がり下りする様に出來ては居るが、昇降機の備へも有つて、是に由つて何所へても行かうとするには何階へと云はずにアフリカとか太平洋諸島へとか云ひさへすれば運轉者が夫れ夫れの所へ送つて呉れるので有ります。

天井や壁の美麗なのはパリスのルーブル博物館て有るが、これは幾分か列品を蹴落とす嫌ひが有るし、床の滑いのはモナコの海洋學博物館て有るがこれは滑か過ぎて縦覧者に危險の感を與へる。

廣くても館の作り方が單純て列品を通覧するのに都合の好いのはパリスの博物學博物館、多數の室が色々に繋がり合つて居て縦覧者が兎角途を迷ふのはロンドンのケンシントン美術博物館。

ベルリンの土俗品及び古物の博物館は標本の數が夥しく特別の研究をする者の爲めには資料を得るに都合が好いが餘りギシギシに並べて有るので普通の觀覧者には何が何やら解かり惡い感が有りさうに思はれる。

ボストンの美術博物館には品物がバラバラと置いて有るので誠に見易い。

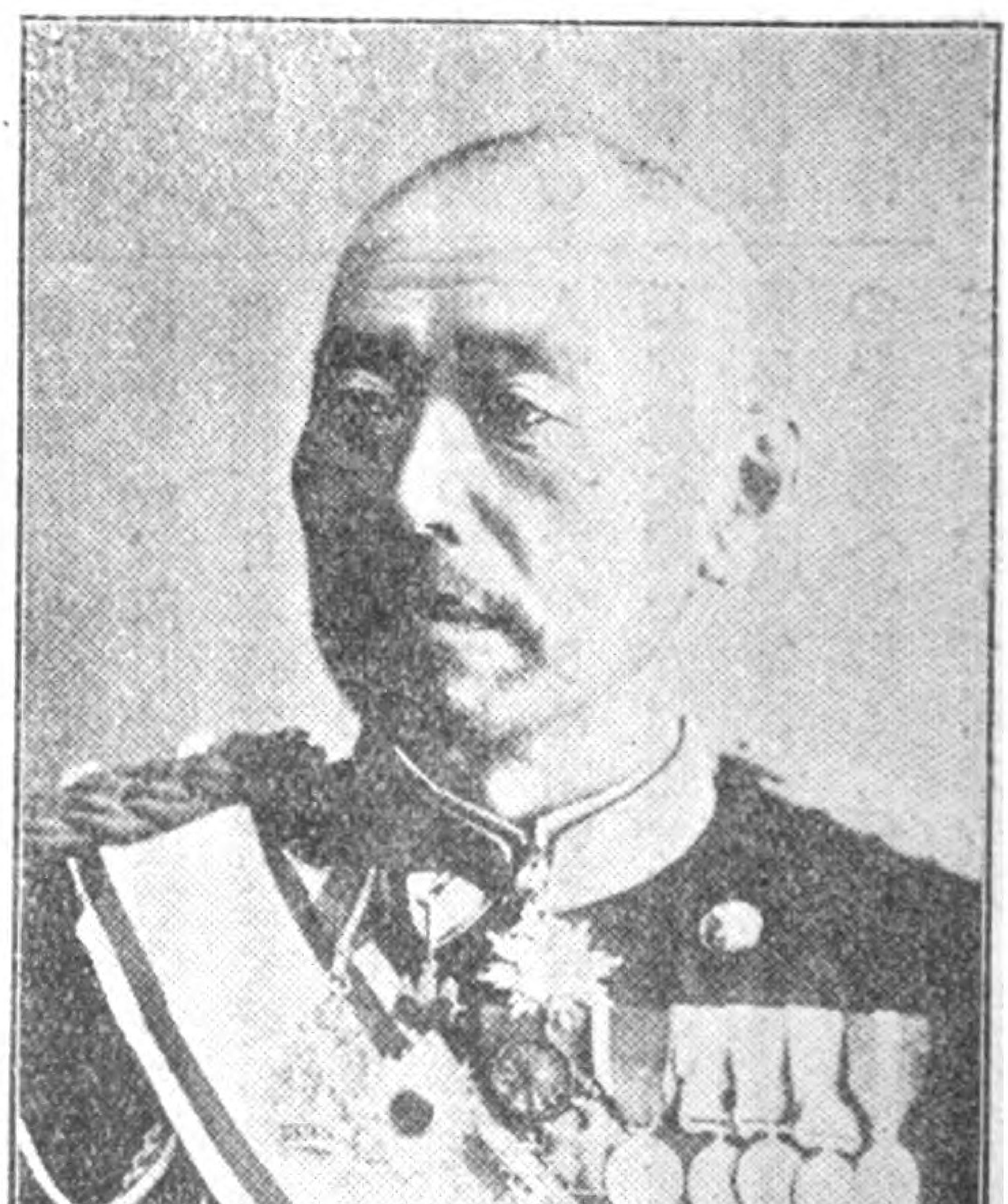
カイロのエジプト古物博物館ては標本の種類別なり時代別なりが好く整つて居り、モナコの海洋博物館では諸事實の現はし方説明の方法に特に意が用ゐて有る。

尚ほ記し度い事が有りますが、今は執筆の暇を有しませんから遺憾ながらこれて止めて置きます。

近頃は大分博物館の事が話柄に上ぼる様て有りますが以上の簡單な記述も何等かの參考に成れば誠に幸て有ります。

人物評論（二十八）

上原陸相論



△上原新陸相

田川大吉郎

◎上原新陸相は、僕の知つて居る人の中で一番笑顔のいゝ、いつもにこ〳〵笑ひに滿つて、氣象も、談話も亦それに叶ひ、流暢にして快適、一點の凝滯する所が無い、餘程才識の秀でた人である、然し同時に頗る勝氣の人で、きかぬ氣の人で

言語が稍々せわしい、只、十二分の才識、其せわし過ぎる物の言ひ振に、何等の圭角を立てず、善く人を惹き着くるやさしい、しんみりした所がある、而して其當ににこ〳〵して居る笑顏愛嬌、要するに武骨張の軍人て無いことは、其顏付を一と目見たばかりて分る。

◎此人が陸軍大臣と爲つたがために、何か此人が、長州人を目の上の敵と心得て、大に長州株を切つて除け、而して猛然軍備縮少とでもいつた如な一と幕を演ずべく囃しかくるのは、頗る付のおかしな話だ、上原將軍はそんな樣な人ては無い、況してそんな樣な手に乘る人ては無い、そんな心持て將軍を迎へて、將軍の手腕を迎へやうとすりや、其結果は失望あるのみだ、今の嘖々として將軍を稱する者は、軈て日ならずして將軍を咀ふに至るてあらう、僕はそんな事を將軍に期待しない、僕の見た所ては、寺內前陸相は割合に交情の深いだけ、交友の範圍の狹い人で、武頑といふことは必らずしも寺內子の理想てはあるまいけれど、世は寺內子を何となく頑固一點張の爺父の如く目して居る、此時、上原新陸相の愛嬌と潛懷、八方に周旋して略ぼ凝滯なきの才氣を以てす、僕は陸軍省の門戶が、頓に廓開せられて、天下の武人は固よりの事、文吏も熙々として陸軍の門に入り、學者も、美術家も、實業家も、市民も、果ては猫も、杓子も、心易げに、陸軍の周圍に徘徊するに至らんことを期待し希望するのてある。

◎日露戰爭が、日本の浮沈に大關係のあつた事は言ふ迄も無い、而して其成績は彼の通りに爲つたが、然も其開戰が日本百年の利益を齎したかどうかは、僕は今に於ても尙重大の疑問として居る、其開戰前に多少の非戰論のあつた間に、僕は上原將軍も亦非戰論者の一人てあつたやうに聞いて居る、眞僞は知らないが、其樣な噂を聞いた、凡て軍人といふ軍人は皆血に渴して戰ひに逸る、特に露西亞に對しては、日本人は皆宿世の怨を構へて居る、何日か一度は必らず此怨みを晴らさうと祈念して居たのだ、況んや赳々武夫に於てをやだ、然るに將軍が果して非戰論を抱いて居たとすれば、そこに必らず特得の見地が無ければならぬ、僕は其見

地に就て聞いたこともたゞしたことも無いけれど、其和して同ぜざる一道の意氣を高しとし、而して滔々たる主戰論以外に別幟を立てた濶達の態度を窃に欽仰せずには居られなかつた、

◎日露戰爭中の事てある、僕は第四軍に從軍して將軍の配下に在つた、當時、平民新聞といふものがあつて、盛んに戰爭の慘禍を說き、種々の運動をして居た、其社中には僕の友人が居たので、時々其新聞を從軍先に送つてくれた、僕は見古したるそれを、讀み物欲しさに尋ねて來る陣中の誰や彼や、知れる人、知らぬ人に、他の册子と一緒に、貸してやるを常として居た、無論、それを返して貰はうとは思つて居ない、陣中の事、讀み古したものを誰かに持つて往つて貰へば、それて跡片付が出來て、結句結構てある、ところて律義な人があつて、一日、其數册子を返すに際し、彼の一葉の平民新聞は、先から先に又貸しして、未だに返つて來ないから、返されないと斷つて來た、僕は、よせばよかつた、今から思へば輕はづみな譯てあつたが、其平民社の同人に年始狀を出す時、其趣を書き加へ、意見は意見、主義は主義、折角御勇戰なさいと申してやつた、

◎其後、一ヶ月も經つてから、不圖、上原將軍の前に呼び出された、それが即ち平民社に端書を送つたそれの祟りてあつた、然も僕の社會主義、社會政策、一般政治に對する見解は、既に、幾度か將軍に語つて、將軍は善く承知して居る、だから將軍はそれに就て、今更疑ふ所も無ければ、詮議立もしないて、最も淡泊に其職分に叶ふ注意を沙汰された、而して驚いた事には、將軍が社會主義の書を讀んで居る、頗る廣く其類の書を讀んて居る、一體、君はどんな種類の社會主義の書を讀んだのかと、社會主義の分派から、沿革から、變遷から、其目的、其主張、其運動まて、將軍は細かに知つて居る、聞けば平和會議に赴く時、それを殊更に調べたのだ相な、固より將軍は佛蘭西通てある、其社會主義の研究も、蓋、主として佛蘭西の書に據つたのてあらう、と思はるゝ節はあつたが、其名を聞くだにも身震ひをして、而して蛇蝎の如く其徒を忌み嫌ふ一

流の人々とは、遙に、遙に、選を異にして居る、流石は軍人中の一異彩ある人だと、僕は、此時もそゞろに其人と爲りと、其用意の深さに敬服した、彼は決して尋常の軍人では無い、

○モー一つ、僕が一本參つた事を話さう、矢張、其從軍中の事である、奉天が落ちて、第四軍が開原に進んだのは四月頃でもあつたらう、其四月か五月の頃、將軍からちよいと呼びに來た、例のにこ〳〵した顏で、側近く引き寄せて、どうだ、何をしちよるかといふ挨拶から始まつて、時に一つ、君を大明神にする工夫がある、ホンに骨折つて見給へ、田川大明神樣々に祭らるゝ立派の仕事だよ、モー氣に着いちよるかも知れん、氣に着いちよるかどうかいと釣にかゝられた、然し僕には何の思ひ付も無い、イヤ何にも目着かりませんて、ホンにぶら〳〵して居ますと曰ふと、どうだ一つ靑木昆陽先生に爲つては、彼の芋さ、彼の芋を日本に植へることを敎へてはと曰はれた。

○手短に曰へば此うである、奉天の北開原、其極寒の地たることは言ふ迄も無い、そこに彼の薩摩芋を植へ付けて居る、將軍の知る所では、我東北には其薩摩芋が無い、北海道などでは之を態々内地から輸送して居る、從つて品不足で値段が太だ高い、氣候が寒いから育たないと曰ふのである、然しながら旣に開原で出來る、して見れば北海道にも出來る筈である、東北あたりて出來ぬなどゝ云ふ譯が無い、若し東北以北にそれが出來ると爲れば、非常の人助けだ、何ぼう東北の土地の潤ひに爲り、其產業を助け、其地益を增すか知れない、故に僕に開原地方ではどうして、其薩摩芋を植へ付けるか、其方法を緻密に調べて、之を東北人に知らすがいゝ、是れ實に濟世經國の大業であるといふのである、僕は成程これは面白いと思ひ、自分が且窃かに今迄氣付かなかつた不覺を感じ、急いてそれを調査して、將軍にも見せ、而して時の農務局長酒匂常明氏に贈つた、酒匂氏はそれを日本農業雜誌かと思ふ、其樣な名前の雜誌に掲げてくれ、而して其雜誌を陣中に贈つてくれた、此樣な事があつた。

◎尙又之に似寄つた話は、犬の皮の敷蒲團である、アノ邊ては一般に之を敷物にして其寒さを凌いて居る、將軍は此製法をも調べて內地に知らするがいゝと僕に注意し、僕はそれをも取調べて報告した、無論、それには何かの秘法があるといふことてある、それて極詳密なのは分らなかつたが、大凡の程は分つた、而して將軍はそれに止まらず、尙其滿洲の犬を二三頭も率ひて歸られた相な。

◎以上の瑣談、以て將軍の襟懷、態度を略ば察知すべきてあらう、僕は人の謂ふやうな、陸軍に對する撥亂反正的作用を將軍に望む者てはないが、乃ち將軍の如き人に由つて、陸軍と國民の間に不可思議にも永く立てられたる忌はしい陣壁を、自然に撤去されんことを希ふものてある、秋霜の威、春風の和、僕は其和を將軍に期する者てある。

△上原の人氣

南木摩天樓

▼寺內が韓國統監になつて、專任陸相を置くの置かないのと云ふ時分から、陸相の候補者として上原の名が木越、長岡、石本等のそれと共に屢謠はれたのを聞いたが、世間では其時分から上原が一番陸軍大臣として適任だと云ふ風に評判して居た。適任だと云ふことが偉いと云ふことてもあるまいが、長岡とか石本とか云ふ人々から見ると、上原の方が何處となく厚つぼい樣な、重みのある樣な、稍底の知れぬ所のある樣な感じがする。これは尤も幾らか薩摩人に共通のタイプから來る感じかも知れない。

▼今の西園寺內閣の出來る時分にも、上原の名は頻りに喧唱せられた。而して當時陸相候補者中の最も人氣ある者であつた。けれども所謂長州閥で取り固められた陸軍部內に、薩州出(實は日向なれど藩の關係から云つて)の上原は到底入れられる余地がないと云ふ樣な理由て、世間は彼が爲に不遇を憫れむと共に、山縣、桂、寺內等の狹量を嘲罵したのだ。然るに其實は當時旣に山縣、寺內等は上原を拔くことに一決して居たのであつた。それが都合よく運ばなかつたについては、桂が連りに木越を推挽して讓らなかつたからだと云はれて居る。蓋し木越は桂の第三師團長時代からの幕僚で、常にその恩顧を受けて來た人である上に、其の性格

に於ても深く桂に私淑し、桂も亦よく其の力量手腕を認識して居るのであるから、夫も十分理由のある譯である。兎も角も今度上原が陸相の椅子に倚ることになつたのは何も突發的に起つた事ではない。假令石本が病に斃れずとも、陸相の地位に交迭が行はれる樣な時機があつたとすれば、其何れの内閣たるを問はず、上原は少くとも第一次の陸相候補者たるべき行懸りになつて居たのである。

▼一體陸海軍の事と云ふとよく單純に藩閥關係ばかりから判斷されて行く樣な傾向があるが、維新匆々の時代は兎も角も、所謂明治も四十五年て各方面とも人材が天下雲の如く簇出し來て居る今日、假令藩閥の先輩連中に自家の郎黨のみを以て城を堅め樣とする舊式の慾望を今日尙抱いて居る者があるにしても、そう／＼露骨に許り振舞ふ譯にも行かぬと云ふ筋合もあろう。殊に上原とか木越とか云ふ實際に識見あり材能あり又相應に經綸もある人物として、夙に天下心を寄するものゝ多い俊秀に至つては、長閥中途に彼等に超えて有能の材と認めらるゝ者の見えない限り、之を拔いて軍政料理の任に當らせると云ふことに不思議はない。之を目して或は西園寺侯の異常の果斷の如く言ひ做し、若くは長州軍人の思ひ切つた放れ業の樣に思ふのは、寧ろ閥族本位の舊套に泥み過ぎた考と云ふべきである。

▼上原が陸相となつて異常の人氣を博したのも一は此の非長閥的感情から來て居るのであらう。曾我子は上原の士官學校學生時代に校長をして居て、能く上原の爲人に熟して居る人であるが、此間斯んな事を云つて居た。上原中將は實際俊才で今の陸軍部内では第一流の人物には違ひないが、何も世間が噺し立てる樣に飛び放れて偉い人間だと云ふ譯ではない。餘りに騷ぎ立てられて上原も實は迷惑に思つて居るであらう。その實世間が長州閥と云ふものに飽き／＼した反動が偶々上原の上に顯はれた迄のことで、何も薩摩の上原だからと云ふのではなく、畢竟長州臭ひのせぬ者でさへあれば誰がなつても世間は矢張り囃し立てたのだらうと。石本になると爰が大分違ふ。

▼石本は播州人には違ひないが謂はゞ寺内の子飼ひの人で、長い間寺内の幕僚をして居た間柄であるから、その長州臭い點に於ては純長州人たる長岡などよりも寧甚しい位に思はれて居た。故に彼が寺内の後を受けて陸相になつても、世間は唯だ次官が大臣と改名された迄の事で、本當の大臣は矢張り朝鮮總督府に控へて御座る位にしか思つて居なかつたのだ。其の實軍政にかけてはあれほどに精通した者は差當り外にはなく、又相當に抱負もあり經綸もあつた樣であるが、それを敢て實際に施し得るに及ばずに、空しく寺内の代官呼はりの間に易簀して仕舞つたのは氣の毒のことである。

▼石本が寺内を通じて長州軍人に親密なるが如く、石川の出たる木越は桂を通じて長州軍閥内の人となつて居る樣な觀がある。然るに上原は薩州藩だからと云ふ譯でもなからうが、偶然にも從來長閥とは全く因緣がなかつた。とは云へ何も陸軍部内の一部の非長閥黨の如く、無闇に不平を抱いて彼等に反抗を試みたと云ふ譯でもないが、謂はゞそう云ふ閥族

關係と云ふ様な事には天で頓着して居なかつたのであらう。夫にも拘らず屢々陸軍大臣とか參謀次長とかなど云ふ取沙汰をせられつゝ、或は旭川に或は宇都宮に、常に田舍廻り許りさせられて居る様な形があつたので、長閥の奴等が何ても故川上系統を虐遇するとか、上原が長閥に對して不平滿々だとか、色々に噂せられて來た、その事が益々上原の人氣を引き立たせる所以ともなり、陸相としての上原が馬鹿に歡迎せらるゝ所以ともなつた様だ。其の實石本が全く寺內の前立の様に扱はれることの彼に取つて聊か氣毒であつた如く、上原の長州陸軍閥顚覆者の意味を以て歡迎されることも、本人にとつては嘸迷惑千萬なことであらう。

▼されば上原を以て是迄如何にも逆境に置かれた人の如く考へるのは大分見當違ひてある。彼と同期の卒業生（士官學校第二期）には村木、楠瀨、內山、藤井、秋山、落合、依田等の人材が中將で居るが、就中最も早く中將に任官したのは三十九年の上原てある。青木宣純とか柴五郎とか云ふ人々も同じく第二期の出身で居ながら未だに少將で居る上に、彼れの先輩で未だ中將に任官せられない者さへ幾らも居る。一體が上原は極めて八釜しやの野津に見込まれ、人才本位の川上に重用せられた程の人物であるから、若い時から、拔群の材幹もあつたらし、夫に非常に几帳面で、又珍らしい勉强家で、常に新知識の吸收を怠らないと云ふ風の人であるから、昇進も亦從つて早かつた譯であらうが、是が若し長州出の人か若くは所謂長州臭い質の者であつたら、或は他との權衡上、長閥の專橫曲庇と目される材料の一に數へられて居るかも知れぬ。

▼夫に上原は參謀本部には大分長く居り、士官學校、大學、或は砲工學校等の教育にも携はりて居たが、軍政方面には初めから一向關係がなかつたのに、一躍して陸相の椅子に付いたと云ふ事が近來では餘程の異例である。大山とか西鄉とか高島とか云ふ人達のは別として、桂以後の陸軍大臣は、兒玉にせよ寺內にせよ石本にせよ、次官とか局長とか皆相應に軍政上の經歷を有つて來たものである。上原と共によく引合に出される長岡でも木越でも皆そうであるが、獨り上原のみは斯う云ふ經歷は一つもない。何も師團長よりは陸軍大臣の方が偉いと云ふ譯ではなくとも、之を拔擢とすれば餘程異例の拔擢である。此の點に於ては藏相山本と同型で、ともすれば抑て幸運兒とか何とか曰はれそうな所である。

▼斯う云ふ工合で、上原の任命が世間の豫て期待した様に、長閥陸軍の打破とか何とか云ふ意味から出たものでなく、本人とても何も長州と喧嘩する積りで乘り出して來た譯のものでもないだらうから、上原が出たからとて急に陸軍がどうの斯ふのなど〻過大の期待をするのは早計である。成程川上沒後又高島失脚以來、陸軍の首腦部が多く長閥の占むる所となつて居る事は事實として何人も認むる所であるが、其の長閥が突き崩されて假りに薩閥らしいものが之に代つたとしても、帝國軍政の上に夫が利であるか害であるか知れたものではない。要するに長とか薩とか云ふ封建的の齊埒から離れて、人物本位に有爲の士を有爲の地位に据え、國家の軍政を根本から振肅し從來の情弊を廓清して行くことが國民の期待である。上原も一旦起つ以上勿論相當の成竹あつての事ではあ

うが、彼に期すに單に長閥打破などを以てするなら、夫は餘りに彼の志を小にするものと云はればならぬ。

▼閑地にある某將軍は、上原の陸相に就いたと聞いて兒玉以後絶えて見ない名陸相を得たといつて讃嘆して居たが、何にしても上原の人氣と云ふものは素破らしいものだ。マー徐ろにお手並の程を拜見したいものだが、夫にしても内閣の壽命がどうあらうか。これが若し石本の壽命の樣に思ひ掛けもなく早く終る樣なことがあつては、折角の所謂名陸相も案外詰らぬ事に終つて仕舞ふかも知れぬ。

△上原陸相論

子爵　曾我祐準

上原陸相は故の石本陸相と同じく、幼年學校の出身て正則の陸軍教育を受けた人てある。日本に兵學の學校を置かれたのは明治の初年からてあるけれども、正則の陸軍教育の機關の整ふたのは明治八九年後のことて、石本君は士官學校第一期生、上原君は第三期生てある。日本も維新以來段々年數を經て、正則の教育を卒へた、其筋の知識學殖に富んだ人を陸軍大臣に採用するやうになつたのは甚だ喜ぶべきことてあつて、明治の政界も追々稚氣を脱して來たといふべきてある。

彼は何人も知るが如く、舊鹿兒島藩都の城の産てあつて財部次官などゝ同郷てある。子供の時から俊秀の聞え高く、故野津大將（道貫）の識別する所となり、生徒の時から世話になり、卒業の後も其愛顧を受けたと思ふ、頭腦明晰、思慮周密にして且つ氣象が快活なる所からして衆の推す所となつて居つた。

今度陸軍大臣となつたについて、一般の人の歡迎する所となつたのは誠に結構な事てある。我々は石本君の死を悲むと共に新大臣の就職を喜ぶのてある。彼は實驗に富み、學識に富み、且つ人格が高いからして必らず大いに見るべきの成績を擧げるてあらうと思ふ。今日日本の軍隊といふものは、戰爭の餘弊が之よりして生ぜんとするの時期に際會して居る。側かに聞けば獨逸の軍隊なども餘程以前より種々の弊害が出て來た相てあるが、日本も或は之より左樣な傾向をあらはしはせぬか、否私は幾分か巳に生じて居るぢやないかと思ふ。今日の陸軍大臣の最も勉むべきは此點てあ

らうと信ずる。勿論日進月歩の世界に於て――殊に陸軍は澤山の生命と財産とを抛つてやる仕事であるからして、何れの國に於ても新知識を求め、新科學、新學術を應用して一歩でも他國に先んぜんと競爭して居る世の中であるからして、かゝる形而下の事に於ても勿論世界の進歩と伴ふて、世界に後れを取らぬやうにせなければならぬのは言を俟たぬが、而し形而上即ち精神上に於てはどうしても我日本が世界第一でなければならぬといふ事に意を注ぐのが最も大切の事と思ふ。

形而下の問題は畢竟金の問題に歸するのであるが、日本の今日の財政には殆んど餘裕が無い。世間が新大臣を迎ふるのは誠に結構であるが、若し此形而下に於ける方面で希望を囑するなら、上原君如何に智力ありと雖もさう非常な事が出來やう筈がない。さういふ意味ならば、或は餘り歡迎さるるのは本人が却て迷惑とするかも知れない。私の考ふる所によれば現今日本の陸軍大臣の眼は兩方共利かねばならぬ。右の眼では軍事を視ると同時に左の眼では經濟を視なければならぬ。上原君が如何に右の眼が利いても左の眼が利かねば實際の働はなし得られまいと思はれる。

新陸相たるものよく此點に注意せられ、第一には精神上世界第一たらんことを期し、形而下の事も世界の進歩に後れぬやう心懸け、而して左右の眼を軍事と經濟とに同時に働かせんことを希望するのである。就職せられてからまだ謦咳に接せぬのであるが、貴社の需に應じて一言自分の思ふ所を述べたのである。

△上原陸相論

鷺城學人

上

現内閣は首相西園寺を始め内相原敬といひ、法相松田正久といひ皆な佛學派に屬し、其人物の輕快にして思想の何程かリベラルなる、之を前内閣の桂、平田、後藤、小松原等の徹頭徹尾官僚式にして窮屈なるに比すれは、前者の概して獨逸趣味多きに反し、後者は佛蘭西的色彩を帶ぶる處に對照（コントラスト）の妙を認むべし。殊に治外法權の位置にありと稱せらる

軍大臣までも前には獨逸派といふよりも佛派に近き石本新六あり、今亦た佛派の錚々たる中將上原勇作の其後を承けたるが如き、偶然とはいへ奇と云はざるべからず。上原の新任に就ては恰も軍部に於ける一種の福音の如く、彼を知ると知らざるとを問はず一齊に之を歡迎せるの狀は、往年高島鞆之助が第四師團長より一躍陸相の印綬を帶びて世上の人氣を一身に集めたる時にも過ぎたり。斯るは上原の人物手腕を認むるが爲めなること勿論なれども、半面の理由としては何程か感情も加味せざるにあらず。輓近薩の凋衰し長の勢ひ大に軍部に張れるは隱れもなき事實なれば、人情强者を憎み弱者を憐れむに傾くこと、猶ほ政友會の橫暴を鳴らして一方國民黨の逆境に同情を寄するもの多きと其揆を一にす。上原にして長閥の出若くは長閥の系統ならんか、其陸相たるは當然の事として特に側目驚異する者なかるべきも適々薩閥より入りしが故に、反抗心と同情と相錯綜せる一種の心理作用を起して上原を謳歌せる結果となれるのみ。今上原を論ずるに先づ事の順序として聊か陸軍に於ける薩閥失勢の由て來る處を叙せざるべからず。

　征韓論の破裂より西鄕南洲を中心としたる多數有力の軍人は相率ひて野に下り、續いて西南の亂に殆んど戰沒したるも、尙大山巖、野津道貫、黑田淸隆、高島鞆之助、川上操六等ありて先人の扶植したる地盤を守り、一時は陸軍の要路を悉く薩人の手に收めて其勢ひを跼張したる、恰も今日長の薩に對すると同一の實情にありたれば、長の武人は切齒憤慨して竊に非薩同盟を策したるも、計破れて薩人の激怒を買ひ、狡獪なる桂の如きは中途其同盟より脫し、三浦梧樓、鳥尾小彌太等は最後まで志を渝へざりし爲め終に失脚するの餘儀なきに至れり。斯くの如くにして明治十八年內閣制度實施の時より日淸戰爭後三四年に至るまで陸軍大臣の椅子は薩人の手に歸したるも、政治上の失敗に加ふるに宿將相亞で簀を揩てたれば、長人は之に乘じて著々勢力を挽回し二者の位置全く顚倒するに至れり。殊に川上操六を失ひしの一事は薩に取りて打擊の最も甚しきものとす。蓋し川上は久しく長人の爲めに隱然一敵國を爲し、山縣と云へども憚りて一指を染むる能はざりき。況んや桂、寺內、長谷川の屬に於てをや。後年彼等が川上系を軍部より一掃するの策に出でしは復讐の意に外ならずと稱せらる、其他間接直接の原因を數ふれば多々なるべきも、禍の根本は自ら別に存するものゝ如く、其根本の原因と部分的の原因と相合して今日の衰運を馴致したるもの、即ち其主因は當然爲すべきを爲さゞりしの罪に歸するの外なし。何をか爲さゞりしの罪かと云へば、軍部の先輩の冷淡なる後進の養成を怠りたると、松方侯の如きは薩人の最も不得手たる殖産興業を奬勵して鄕藩の子弟を之に向はしめたるより軍人を志望する者歲と共に減少し、後繼者を出すの途を杜塞したる結果となれり。之に反して長閥の先輩は長く陸軍に於ける權勢を保維するの根本主義より別に基本金を積蓄し、長防二州の子弟をして一人にても多く軍人たらしむるの方法を講じ、又後進の面倒を見たれば獨り將官に於てのみならず、佐尉官を通じて尙多くの員數を占むるも、薩は佐官以下に至らば殆んど絕無にして稀れに見るのみ。最近大佐より

少將に進級したる町田經宇を以て恐らく最後の一人なるべしと稱せらるゝが如きは心細き次第にあらずや。故に公平に論ずれば長の陸軍に伸ぶるは伸びざるべからざる理由なるも、薩の勢を失ひたるは止むを得ざる自然の數と謂はざるべからず。

中

上原は薩の支封にして百二都城の一なる日向都の城に生る。本姓ば辰岡氏に出でゝ上原家に養はれ、十二三歳の交を以て鹿兒島造士館に入りしも、上京の念止み難く學業を卒ふるに至らずして東京に出で、鄕人某の紹介を以て故野津道貫の家に寄食す。當時齡ひ纔に十八、玄關番、庭掃除を日課とし時には有名なる野津の肝癪玉に觸れて鐵拳を喰ふことありしも克已忍耐して忠實に事へ、暇あれば書籍に親しみたれば野津も彼の篤學を愛し外國語學校に通學せしむ。去れど當時誰か上原を以て異日帝國の軍政を主宰すべき大立者たるべしと豫想せんや。彼の志軍人となるにありしを以て間もなく語學校より陸軍幼年學校に轉じ二年の後ち陸軍士官學校に入る。中將、木越安綱、楠瀨幸彥、秋山好古等と級を同うし、成蹟一級に冠たりしを以て時の生徒隊長たりし寺內は此時より彼の前途に囑目したり。西南戰爭は在學中の出來事なりしを以て戰線に立つを得ず、唯だ西の方鄕國を蔽ふ戰雲を望みて徒に腕を扼するのみ。十二年業を卒ふるや直ちに工兵少尉に任ぜられ東京鎭臺に あること二年、時に第一期生の俊秀なる者を簡拔して、歐航せしむるに當り、上原も其選に入りたれば四年間佛國に留學して專ら工科の學を修め、歸朝後暫く士官學校に教鞭を執り、或ひは東京砲臺建築のことに從事し、二十二年中將小澤武雄に從ひて再度の洋行をなせり。既にして日淸戰を交ふるや、彼は初一戰より最後まで第一軍の帷幄に參し、平和克復の翌年特派大使に扈從して露帝戴冠式に參列したり。これより先き彼は川上の信愛する處となり其露國行の如きも主として川上の推薦に出でしが、歸朝後參謀本部に入り久しく第三部長を以て第四部長を兼ね川上の軍事計畫を佐けたり。露國皇帝の主唱を以て萬國平和會議を海牙に開くや、駐英の林董駐佛の本野一郞は我邦の代表者として參列したるも、會議の問題は主として軍事に關したれば陸海軍よりも參列員を派するの必要ありとし、當局者は其人選に苦心したる末上原を陸軍の代表者たらしめたり。蓋し彼は再三再四歐洲に航して其形勢に暢曉するのみならず、佛語の造詣も深く加ふるに頭腦明敏にして材幹の傑出するあり、川上は一に彼を以て此使命を托するに足るとしたればなり。果して平和會議に於ける彼の働き振りは水際立ち、川上の鑑識に背かざるの實を示したり。其後工兵監として又砲工學校長として特科隊の爲めに貢献あるは軍部の認むる處、就中工兵の演習を從來の小規模より今日の大規模に進めたるは其最も著大なるものとす。蓋し各兵監は聯隊長より何程か尊敬を拂はるゝも、謂はゞ陪臣の閑職に外ならざれば、概ね陸軍省に頭の擧がらざる有樣にして其管掌內の豫算の如きも當がい扶持を受くるに過ぎず。然も上原の工兵監となるや卑屈盲從に陷らずして軍務局長を說破し、陸軍省をして計畫を實行するに必要なる經費を支出せしめたり。斯くの如きは

是まで掘兒扱ひされたる工兵科の爲めに氣を吐きたるものと謂ふべし。

上原が軍人として手腕を實際に發揮したるは日露戰爭の時にあり。當時の參謀長は第一軍の藤井茂太といひ、第二軍の落合豐三郎といひ、第四軍の伊地知幸介といひ皆な特科の出身なるが、第三軍の上原も亦工科に屬したるを以て日露戰爭は恰も特科將校の智惠くらべとも云ふべき程なりき。殊に第三軍司令官は外父野津なりしを以て單に私情よりするも功を擧ぐるの意切なるものあり。況んや彼の戰略は夙に川上の鑑識したる處、太孤山上陸の當初より作戰機宜に適し殊に遼陽戰に於ける奇功は彼が渾身の智略を傾倒したる結果に外ならず。戰後薩の諸將は黑木爲楨の現役名簿より除かれたるを筆頭として大迫尙敏といひ、鮫島重雄といひ伊地知幸介といひ皆な馘首の刑を免れざりしに、獨り上原の長閥全盛の陸軍に容れられたるを見て必ずしも不遇にあらざるを說く者あるも、若し閥觀念を去りて直に高材逸足を擧ぐるの意ならば、上原の如きは夙に參謀次長となりまた陸相たるの當然なりしなり。而も薩閥凋衰の影響を受けて權力の中心より遠かり、殊に野津の沒後は志を得ざるの著しく、久しく北邊の師團に遷されて殆んど存在を忘れられたる形なきにあらざりしも、昨年宇都宮に轉ずるに及び漸く世人は此英才に向つて記憶を喚び起したるが如し。

川上門下にして寺内の爲めに馘られたる者の中俊豪として見らるるは中將東條英教を第一とし、少將黑澤源三郎、伊豆凡夫、恒吉忠道等之に亞ぐ。東條は獨人メッケルをして獨逸の陸軍に入らしむるも第一流の參謀官たるを失はずとまで驚嘆せしめたる程の戰術家なれども、餘りに狷介にして學究的に過ぐるが故に多衆と調和するに適せず。嘗て寺内に反抗し長谷川を論難して長閥の爲めに忌まれ、黑澤は戰術家として又韓國通として名あるも人格上指彈さるべき缺點あり、伊豆は大言壯語したる程に聯隊の成績擧らず寺内の爲めに睨まるゝこと年あり。上原は品性高く議論に伴ふに實行を以てし、又東條の如く嚴格一方の窮屈家ならず、執れかといへば融通の利く方なり。さりとて八方美人主義にあらず氣骨の見るべきものあれば長人の使令に甘從せず、今日に至るまで長閥の專態を憤り、又自家の不遇に對して平かならざるありしも、他の不平家の如く之を言動に現はすが如きなく、到底大勢に抗すべからずとし、氣を下して雌伏したるが如し。斯るは彼の人物の稍々大なる所以にして東條黑澤等の遠く及ぶ所にあらず。殊に自信力の强き一旦口にしたる以上は斷乎として枉げざるの概あるも、去りとて頑冥といふにあらざれば說くに道理を以てすれば翻然として之に服從するに躊躇せざるなり。彼が朝野を通じて評判好く、長閥内にも彼に推服する者多きは獨り卓犖の幹能を認むるが爲めのみならず、又武人として尊敬すべき人格を具ふればなり。人或ひは上原の今日ある外舅野津に負ふ處少からずと爲せども、斯るは尋常一樣の駙馬を以て目する者、縱令野津なしとするも當世に顯はるべき天分あり。初め彼は軍人無妻論者なりしを以て各方面より結婚の勸誘を受けたるも應ぜず、漸く三十五歲の時野津の舊恩に絆されて其女を娶りたるなり。

下

非長閥派の上原を陸相に擬したるは已に久しき以前よりのこと、現に昨年内閣組織の時にも石本の就任を諾せざるに於ては彼を擧ぐべき内議さへありたり。蓋し長人の意成べくは同系中より陸相を得んと欲せるも容易に適任者を發見せず。中將宇佐川一正は器幹具はらざるにあらざるも、一旦陸軍を離れて前垂掛けの身となりたれば此椅子に据え難く、長岡は山縣の寵あれども寺内に喜ばれず。木越は桂の信用あれども本人自ら大臣たるを好まざるのみならず、一部には彼の節度に服するを欲せざる者あり。是に於てか餘儀なく軍部を通じて久しく定評のある上原に落札せざるを得ず。殊に上原は日清戰爭の時第一軍參謀として司令官山縣を佐け、又士官學校時代にも佛國留學時代にも寺内の教導監督の下にありたれば山縣も寺内も上原に對する感情は他の薩人に對すると少しく異り一概に謀叛人視せるにあらざるらし。世間にては上原の入閣を以て一に西園寺の英斷に出でたるものゝ如く稱揚するも、斯るは政府の實情に迂なる者の見のみ。武人萬能と稱せらるゝ今日、殊に情意投合の繼續を聲明して事毎に長閥の承認を得ざれば決行する能はざる西園寺が、自由意志を以て陸相を選叙するが如きは其有り得るべからざること、現に昨年内閣組織の時其選擇を山縣、桂、寺内の三人に一任したるに徴するも明かならずや。斯くの如く上原と山縣、桂、寺内との關係は直接なるも西園寺とは間接なる以上、唯だ良陸相を得たりと云ふまでにして政府と陸軍省との關係は石本の時代と毫も異る處なく、上原が西園寺侯の眷顧に報ゐんと云へるは表面の辭令に過ぎざるのみ。

世人の口を揃へて上原の器幹を稱するは可なるも、恰も革命家を迎へたるが如く一擧にして軍部の積弊を除くを得べしなど、餘りに多くの期待を屬するは眞に上原を親する所以なるか、若くは贔負の引倒したるか、上原自身は恐らく有難迷惑に感ぜん。勿論上原は軍政上の識見を有し又久しく參謀本部にあれば中央の事情にも暗からず、殊に輿望を負ふて立つ以上歴代の大臣に劣ると稱せらるゝは不本意なるべく、彼にして眞劍に利器を試むれば一廉の事を爲し得るの自信あるべし。去れど今の陸軍に大斧鉞を下し、眞に根本的刷新を遂げんとせば先づ要路の長人を逐ふて代ふるに閥外の適材を以てするの大決心なかるべからず。尤も彼の背ろに或る强大なる後援的勢力ありて忌憚なく自由手腕を揮ひ得るの立場にあらば必すしも不可能の事にあらざれど、薩摩系は政治の上にも又陸軍部内にも殆んど全滅し、さりとて薩以外に彼を盟主に推すべき程の纏りたる勢力あるにあらず、殊に四國の事情は容易に急激なる改革を許さゞるべし。若し强て手を下さば事の結果は人を斬るの刄を以て却て自らを殺すに終らんのみ。上原の大勢に通ずる如何に長閥を惡むも、左る革命家的の考ありとは思はれず。況んや山縣なり桂なり寺内なり初めよりさる異心なしと安心して彼を推薦したるをや。蓋し彼等の意を忖度するに長閥非難の聲歳と共に高まれる今日純長人若くは長閥網に入れる者を大臣とせば、益々世人の同情を失せんことを恐れて中評的に雅量を示し、一面に於ては薩人の反感を緩和するの策に出でたるもの、一時姑

くするも岡市之助、田中義一、大井菊太郎、大庭二郎等の近き將來に大臣たるべき英俊の控ふるあり、軍部に於ける長閥の位置は貧乏揺ぎもせざるべし。長人の情偶斯くの如しとせば、上原は畢竟薩閥の殿後を飾るべき一輪の名花と見るべきのみ。されど一時的にもせよ上原の如き異系の人材が軍政を宰するは始めより宰せざるに優り、上原の力縱合ひ長閥の根本勢力を覆すを得ざるまでも何程か爲す處あるは前任者の全然柔順無爲の傀儡なりしに比して勝れりとすべし。

△新陸相の人物

陸軍中將　東條英教

拜復上原陸相に對する小生の所見御問合了承致候氏は學識經驗共に十分なるのみならず頭腦緻密理解明截にして又その活動の機敏なる點に至つては實に敬服すべき人に御座候又氏は御承知の通り薩閥に縁故ある人なれども藩閥力を頼んで野心を遂げんとするが如き世の卑劣漢とは撰を異にしその志想の崇高なること故川上將軍の面影有之申候然し氏は他に對して圭角あるの人にあらず寧ろ極めて洒脱にして公明敦厚又眞摯なる人に御座候但しその中に凧かに冒すべからざる氣骨を認め申候

凡そ軍政整頓など形式に屬することはその向きの手腕家なれば出來るものにして又從來陸相に其人なきにあらざりしも立派なる軍人精神の涵養に至つては陸相其人の權力や手腕などの必ずしも出來得ることには無之從來我國はこの點に於て果して軍政といふ形式的進歩に伴ひ得たりしや寧しろこれと逆行しつゝありしにあらずやといふ點に於ては小生は大に疑問を抱き居たる次第に御座候而して小生は今や上原氏の陸相たるを見て大にこの點に望を屬するものに御座候若しも氏にして長命ならばこの點に於て必ず國民に滿足を與ふべく存申候それ故小生は國民と共に氏を陸相として大に歡迎致し度きものと存申候但し慢性の病氣は治癒に多くの時を要するものなることをも覺悟致さゞる可らずと存申候

右御回答迄草々

△上原陸相觀

暗後生

新時代の將帥

從來帝國陸軍の高等司令部に於ける人才の配置程不都合なものは無かつた、即ち老朽無識のもの上に蟠踞して榮職を占め實力あり技能あるもの其下に在つて上長たる無能老朽者を輔翼するてふ一事が夫である。此の理窟から、師團長は實際參謀長にはトテも才幹伎倆が及びも付かぬ、某の大將は何々の榮職を辱くして居るけれども實際の仕事は參謀長が一手引請けで若し參謀長無かりせば當然職務の遂行に支障を起すと云ふの實狀であつた。

此不都合なる現象は陸軍に於ける眞の人才をして中心甚しき不平を懷かしめたのであつたが、逍かに世界の强國たる露國と戰ひ眞に世界的陸軍として列强と角逐せざるを得ざる時代に立至つたので此の病的人才の配置は一日も放任を許さゞるの時期に立至つたので寺内前々陸相は鋭意部内の陶汰に取りかゝり頭腦非科學的にして時代の要求する知識を有せざるもの、若くは徒らに大言壯語するも實力甚だ沸底なるもの何時の間にか不相應の蓄財を爲し因由非武士的行動に出るもの其他帝國陸軍の向上發達に害ありと認めらるゝものをドシ〳〵馘首して其數は意外の多きに達したので、實力者は眞に其の驥足を伸べ得るの時代を現出したので、師團長の如きも學校出のチヤキ〳〵たる、整然たる科學的頭腦と組織ある系統的學問をして來た人物を以て其過半を網羅し得るに至つたのである、

總率者としては如何

然るに彼れは全然帷幄の人にして單に其の屬する司令官に獻替輔翼するの參謀的人物たるに止り統率者をしての價値低廉なるかといふに決して然らざるなり大に然らざるなり。彼の唯一の特長は統率てふ一點に於て其最高度を發揮すと云ふも不可無し此意味よりせば師團長として適任なり兵監として適任なり參謀長として適任なり陸軍大臣とするも亦適任たるを失はざらむ。

石本前陸相と、我上原新陸相の如きも亦當然此伍伴に列する將帥である所謂新時代の將帥である。

寧ろ作戰家

上原陸相が陸軍大臣として如何に其の才幹を發揮し經綸を行ふへきかは今日に於ては未知の數であるが併しなから彼の將器將才否な上原てう全體の人物性行を審按して彼をも作戰家として陣頭血を喚ぶの雄器を立案せしむるに適當か將た又た法令法規を解釋し人事を綜覽し經理衛生の事務迄も統轄する所謂陸軍行政の長官たるに適當かと云ふの質問を提供すれば彼れは行政長官たらむよりも寧ろ作戰家たるに恰當する人物てある。

事務的才幹は石本に劣る

作戰家として適任なり統率者として亦た適任なるも彼の事務的才幹は決して卓越せるものに非す。

見よ彼か平生其僚友に致す書簡の如き如何に露骨一直線にして而かも甚た粗大なる事を此粗大なる書簡露易なる文章の書き方は彼の才能が細かく働く事無くして微細なる事務家の器に非るを知るに足るべし之を前陸相に比較するに石本は眞に次官らしき人なりき大臣としては事務家的なりき而かも新陸相に至ては然らず事務の一切は屬僚に一任し唯た大綱を採て謬らさる底の大臣たるに止るなり然れども賢に任じ能を驅使して相當の事功を樹立するは疑ふべかべす陸軍の榮譽を増進し日本陸軍の威望を中外に重からしむる事亦必然ならむ。

凡人か非凡人か

結局彼れは凡人なるか將た非凡人なるか

吾人は想ふ、彼は非凡人にも非す亦凡人にも非すと・

凡人に非る點は茫漠汪洋として愚なるか如く賢なるか如く一寸人の眞似の出來ぬ點にあり非凡人に非る點は野津の女婿たり天保錢のチヤキ〳〵たりしがために存外早く江湖に名を馳せたるも之れを今の内山中將、大木喜久藏、山根武亮、若くは松川敏胤、長岡外史等の將官に比し格別偉大卓越なる人物とのみ見るを得さればなり、否な偉大として力めて之を見むと欲するも其偉大非凡なる點を發見し得ざればなり。

△オダテ過ぎてはいけぬ

陸軍中將　原口兼濟

私は後備役であるけれども、まだ陸軍大臣の支配を受けて居るものであるからして、私の口から大臣の評をするといふ事は出來ない事である。然し上原氏が新陸相になつてから、世間の評判——世間の評判といつても主もに新聞の評判であるが——を聞くと、大層新陸相をオダテ上げて居るやうである。之は多分久しい間陸軍大臣は長州からばかり出て、鹿兒島から出たのは暫らく振りて、つまり珍らしいからの事てあらうが、そんなにオダテ上げる事は私はよくない事と思ふ。尤もいくらオダテ上げられた處で、其オダテに乘るやうな人でもないし、又オダテられたからとて、遣らうとした事を遣らぬやうな人てはないからして、よいやうなものの無暗にオダテ上げて置いて、さうして自分等のオダテた通りにならぬというて失望するやうな事があつては餘り感心は出來ない。

私は新陸相と勤務を一所にしたといふやうな事がないからあの人の性行について餘り深くは知らない。只私があの人を知つて居るのは、あの人がまだ士官學校の生徒であつた頃の事である。尤もあの人は工兵科の生徒で、私は歩兵科の中隊長かであつて、兵科が違ふから學問や何かの事は知らないが、人物は極めて快活にして磊落、兎に角生徒間でも一頭地を抽いて居つた人のやうに思ふ。

故の石本陸相などとは性質は丸で違ふやうだ。石本氏は頭腦が極めて緻密で、數理に明かな人だ。人の話であるから眞僞はよく知らないが、何でも數學は士官學校時代から第一等で、西南戰爭の時に一期生が出征して其半分ばかりは死傷したが、石本氏は數學がエライので、大野津（鎮雄）が之を本營の方に置いた爲めに怪我もしないで濟んだといふ話である。さういふ算數などにかけては石本氏に及ぶまいが、人物は……さアさういふと何だか批評になるやうだが、まア一言にしていへば剛毅果斷で、決斷力に富んだ人と思ふ。

△上原新陸相

某將軍

私は歩兵科の出身、あの人は工兵科の出身で兵科も違ふし、又あの人と一所に在勤したといふ事もないから、私には兎てもあの人を評する資格はない。尤も滿洲あたりで逢ひもしたし話もした事があるが委しい事は一向知らない。只工兵科の遣手といふ噂は聞いて居つた。又物の計畫を立てゝ、一旦計畫が立てば、押し切つて何處までも遣る人だといふ噂も聞いて居つた。兎に角なか〳〵嚴格に、物事をピシ〳〵遣る人のやうに思はれる。

話し合つた時に物の言ひ振りがどうであつたといふのかい？左樣、別に辯舌爽やかとも思はなかつたが又不辯舌であるとも思はなかつた。先づ中等といつてよからう。又あの人の態度も左樣で、ひどく傲慢だとも思はないけれども、また非常の謙遜家とも思はない。之も矢張り當り前といつてよからう。

世間では今度の新陸相が思ひ切つた事をドシ〳〵やるだらうなどといふ噂も見えるやうだが、私にはよく分らない。陸軍大臣にしろ、海軍大臣にしろ、兵隊は增したいだらうし、船も增したいだらうが、金が無ければ出來ぬ仕事だから、さう思ふやうに出來るものではなからうと思ふ。尤もあの人は出來る範圍に於ては出來る丈けの事を誰にも劣らずやるだらうと思ふ。

陸相に對する希望はないかといふのかい？ 左樣、陸軍はどうも金を多く遣つていかんといふ非難もあるやうだから、出來るならば成るべく冗費を節減して貰ひたいものと思ふが、然し私に、何をどうしろといふ具體的の案がある譯でないから深くいふことが出來ない。

△薩摩軍人中の第一人

早川鐵冶

一體薩摩人には餘り知つた人がない、向ふて知つて居る人が或は有るか知らぬが僕の方から知つて居る人は其樣なにない。上原も僕は知らぬ。が只一度上原とは斯樣いふ事があつた。僕が新婚旅行をして故郷へ歸る時の事だ。遠州濱松の實業家に僕の知つた人があつた、當時僕は農商務省の役人をして居たので少しは其方面の事で普段面倒も見てやつたので、其人が君は此度新婚旅行をする相だが、日比御厄介になつて居る事でもあるし、何は無くとも遊んで行つて貰ひ度いから、濱名湖の景色でも見がてら是非濱松へ降りて貰ひ度いといふ。で京都から汽車に乘つて出向いて來たが岐阜から頗る男振の惡い男が一人乘つた。誰だか分らぬ、其頃岐阜には曾我部道夫が居つた。是が相當に男振が惡いのだからそれかと計り思つて見たが、曾我部よりは少し若い樣だ。兎角する中に名古屋に着いたが如何も非常に客が込んで居る。處へ西洋人が獨り入つて來て、態て私の傍に置いた荷物を卸し代りに自分の荷物を載つけ樣とした、之を見た私は赫と腹が立つた。忘れもせぬ。時はまだ明治二十七年の三月である、日清戰爭前の事とて外人の一般に日本人を輕蔑するといつたらない。それて此樣な事をする。が僕は許さぬ。對外硬の人間である、て突如其西洋人に向つて、何をするか。不都合だ。如何に外國人といつても帝國の汽車に乘る以上は帝國の規則に從はねばならぬ。其樣な勝手は許さぬ。僕は自分の拂つた賃金に對して自分の席だけの占有權を有して居る。それを犯させる事はせぬ。さあ如何なりしろ。一寸たりとも僕の荷物を下へ卸したら了簡せぬぞと怒つてやつたら、西洋人は何かブツ〳〵言ひ乍ら止して仕舞つた。でも豐橋迄は

互に睨み合つて行つたが、其處迄て行くと向ふから僕の所へ來て、何だか先刻から貴下の感情を損ねて居る樣だが、實は自分は斯う〳〵だと溫容を以て辯解を試みた。僕は君が左樣溫容を以て紳士然たる態度に出るなら赦してやる、僕も自分の席以外の處に荷物を上げて置くのは宜くないかも知れぬが君も亦自分の席以外に同じく荷物を上げ樣とするのでないか、すれば何も人の先に置いたものを迄御して自分のもの丈を載せ置く法はない、須く前者の占有權を認むべきだ、が斯う譯が分れば宜い。お互に半席を分つて荷物を置かうぢやないかといつてやつた。けれども西洋人は、いやもうそれに及ばぬといつて遠慮して仕舞つた。其座には前の無男の男が居つて此光景を見て居たが、僕は相變らず一介の書生風て居る。而かも其僕が日本服を着て居ると來ては如何に田舍じみた樣子に見えたてあろう、濱松へ着くと其處には出迎の準備が整つて居つて、高張、提燈てワア〳〵騷いて居る。一日其地へ滯留して翌日江尻へ赴き、浪人して居た齊藤脩一郎を訪ひ、明くる日東京へ歸つた、當時の大臣には秘書官が二人居つたもので、其一人に市來政方といふものがあつた。今は宮内省に居て式部官をして居る。留守中の事は萬端それに頼んで行つたのだから歸て會うと、市來は君は此度來る時濱松に降りはせなかつたかと問ふ。左樣だ、降りたといつたら。それでスッカリ分ッた、君に違ない、おらの國のものに上原勇作といふ若い軍人がある、それが今度岐阜から汽車に乘つて東京へ來たが、君に違ない。汽車の中で大に西洋人と喧嘩したといふのはといふ、新婚旅行の花聟さんが癇癖を起して汽車中で西洋人と喧嘩したのが人に見られたといふ話なのだ、市來は、慥に君だね、上原が來て大喜び、日本人も進んだ。今日では田舍の者迄進歩して來た。何でも察する處濱松邊の物持に相違ない、年も相應に見える田舍臭い大男だつたが、併し連れて居だ妻君は島田に髮を結つた若い女だつた。それが西洋人が不埓をしたとて棄て置かず、流暢な英語でやつ付けてやつたが、實に愉快で堪らぬといふから、私は直ぐ君の新

婚旅行を憶ひ出し、僕の同役に早川といつて、色の黒い大きな男が居る、それが今旅行して居るがそれてないかねと言つたけれど、上原はいや左様ぢやないらしい、如何も田舎者らしいと言つて居た。ては矢張り君だつたねといふ。左様だそれは僕だ、僕に違ないといつて笑つたが、僕もそれて彼の汽車中の無男が上原だつたといふ事を初て知つた。斯くして上原の名も聞き、上原の顔も見たのだけれど、それきりて爾來何等の交りもない。顔だけは其後も見た事がある。遂此間對馬に出陣した時にも同じ汽車に上原は乘つて居たが、別に必要もないから依然默つて別れて仕舞つた。が其頃からして僕の西洋人と爭つて遂に屈せしめた事をそれ程に喜び、友人間にも觸れ廻す程の人だから自ら其氣質の程も察せられる、即ち今より二十年前に於て既に決して外國人に負けてはならぬ屈しはせぬといふ氣象を持つて居た事が知れる。

此間偶然にも對馬て山根武亮に會つた、鷄知へても行くのだつたらう、荒木といふ旅館て落合つたので、僕の名刺を山根の前へ置くと、山根は之を見て、ハヽあ、君は今度此樣な邊鄙から代議士に討つて出るのか、政黨員から役人になるのも隨分骨だねといふ。左樣だよ、ずつと官界に居續けるなら少くも僕だつて遣外大使位にはなつて居る筈なのだが、僅の間に妙に前後するね、今度上原は陸相になつたが、君はまだ師團長ぢやないかといふと、大きに左樣だ。上原は我輩の後輩なのだ。我輩は第一期の士官學校の卒業生だが上原は第三期の卒業生てあつた。致方ない、君等も斯うして選擧を爭ひ、對島界隈まで來て田舍者に頭を下げるのは骨だねなどゝ、互に述懷談をやつたが、其折上原の人物を一寸聞いて見た。仲々頭腦が好く、それに行政思想もあり、何といつても薩摩ては先づ上原だといふ事てある。

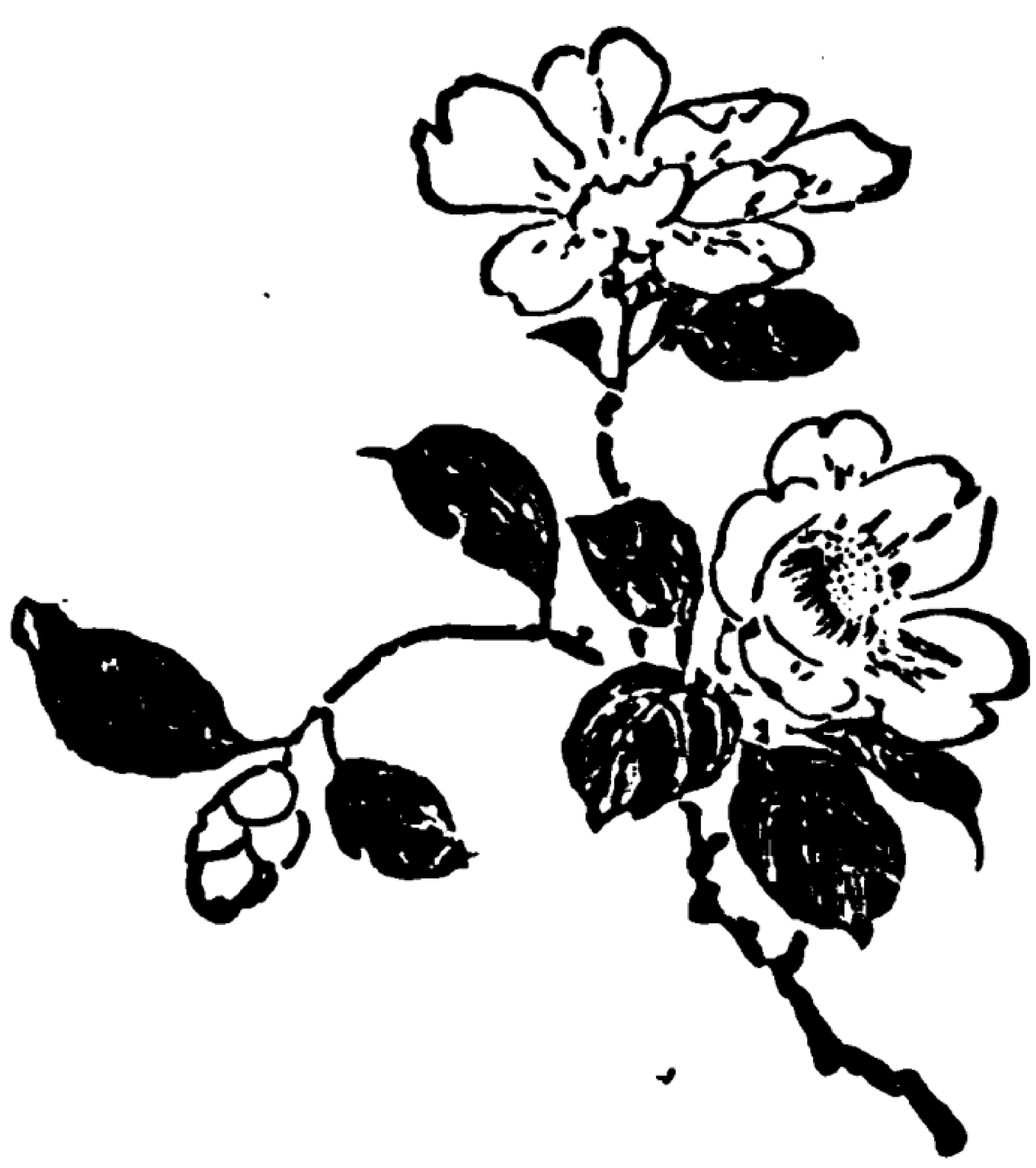
陸軍にはまだ人物ないてはない。楠瀨幸彥などは頗る賢く、行政思想にも富んて居るが、出身が土佐て薩長とは緣遠く、それに餘りに切れ過ぎるので却て用ひられぬ憾がある。之に比べては山根は長州人である、

年輩も上原等よりは上て性質も怜悧、否怜悧過ぐる位、政治思想もあるから器の上からいへば陸軍大臣には持つて來いの人物、特に西園寺さんの外國に居た時に山根も獨逸に留學して居たので相親しい仲、今石本の後を受けて大臣と爲つても然るべきてある。けれども上原が出た。それは無論上原の頭腦は透明で行政思想にも富んで居ろうが、それのみてはなく更に別な理由のあつたてあらう。即ち薩長の權衡とか何とかいふ譯が籠つて居たに相違ない。

が上原も仲々腕がある、曾て福島安正と共に朝鮮に居つて大院君を誘き出し、遂に軍隊を出す事にもしたのてある、特に外交思想を持ち、外國と是非對等に行きたいと考へる、又實際長く外國にも行き居り其事情にも通じて居るので、薩摩には今人物は無いが、獨り上原は其薩摩人中有數な人物てある。無論陸軍大臣には適任者てあろうと思ふ。野津大將の聟て青山邊に住んて居るが、何ても中尉時代に野津に見込まれて左樣なつたのだから、早くから頭角を顯はした人なのだ。併し師團長として兵隊を率ゐ、戰場に現れて偉功を立つるといふよりも、氏の長所は別な處に在る。薩摩人は・武辯一偏て見た所つまらぬ樣ても戰陣に出ると實に偉い。名は言はぬが、僕の友人も只見ると如何にも馬鹿大將てある。彼れが如何して彼樣な重任にと初中終疑つて居るものが居たが、或る時或る新聞記者に逢つて談此事に及ぶと、新聞記者の曰く、それは平時の事だ、私共も左樣思つて居たが從軍して見て驚いた、偶々大砲の聲か聞こえる。すると之を聞いた大將は敵は退陣だといふ。傍に居た若い參謀が何とかいふけれども。譯はなく。我は只左樣思ふんだといつた切りだつたが、果して左樣だつた。物は言はぬけれど仲々能く分る人物だと、矢張り伏見戰爭、奧羽戰爭により經驗を積んだ逍れの武將てある。薩摩には一種の戰爭好きな偉い强い人が多い。が其中に上原は稍型が違う。其點に於ては寧ろ長州士官に似て居る。機敏てある、怜悧てある。故に千軍萬馬の間に咽啞叱咤し廻る武將よりも、參謀士官といふが適任てある、入つては謀を幃

幄の中に運らし、出ては兩軍の間に折衝するといふのが其長所である。が僕は親しく自ら氏を知つて居る譯でなく、只事蹟に就いていふのみだから、是迄の人物評の如くハッキリとはいへぬが、大概誤なかろうと信ずる。

此迄の人では高島鞆之助が先づ薩摩人中政治思想のある軍人だつたろう。二度迄も陸相と爲つたが、併し子分に雞鳴狗盜の士のみ多く、晩年甚だ振はなかつた、上原は之とは違うてあろう、即ち高島鞆之助に教育を與へた人である、高島位の政治家は今の世には早や後れて居る。世の中は進んで來て居る。最早や其働くべき舞臺はなくなつて居る。併し乍ら上原はそれに文明の教育の加はつた人間である丈に其將來は有望であろう。



和歌

尾上柴舟選

○ 椚垣青花

いきぐるし櫻の赤くつぼみたるひるの木の間のはやき脈搏

櫻咲く夜のおかるみに泪をばじつとたゝえてひとりあるかな

日がくれて人おもふさへ淋しきにふくらむ櫻そぼぬらす雨

雨ふりて野の嫩草の萌ゆるころ耳鳴りおぼえたえず眩く

○ 内田月城

あはれさや麓の原にさく花をはりあひもなく旅人のつむ

高山のならぶあはひにさやかにも青む五月の海ひらけたり

君かへるうしろすがたに霧ふりて林檎の花の白きあけがた

春の日のあかるき巾をゆくふたりふたりの前をとべるタンポヽ

○ 安井竹美

しなやかに肩にのせたる汝がうでの血のぬくもりのかよひくる夜

思はれてあると言ふのがなつかしく夜あるきのくせがつきし春かな

このごろを泣くも二人となりし身のなつかしいかなあはれ春の夜

汝は今思ひつかれてうつとりと眼をばとづらむかなしき夜かな

あひ思ひされどたがひにいひかぬるこの心こそたふとくありけれ

○ 若木花次郎

しばらくを春のまひるの背戸による青麥畑の風にふかれて

泣きぬれて蒲團の縞も見へざりし夜の明方の室の灯

少年の切なき悲哀せまり來ぬ草もゆる野にゆきて泣かまし

かにかくに君十六となりたまふ少女こゝろの悲しさおもふ

みづからの心とがむる夜もありき離れて住めばうたがひもすれ

○　　　關本梁村

いつもよく涙のうかぶことかなと汝のことのわすれ難かり

ときに浮きときに沈みて泣くことをよくしたりしがおもひおこさる

このまれに晴れたる晝におちつかずとりとめもなくものおもひする

一條の莨の煙にまつはれる春のゆふべのさびしきこゝろ

○　　　齋藤微花

さら／＼と春雨ふればうす光る柳の芽にも夢あそぶなり

吹きいづる風のましろささわ／＼と櫻のうごく春のたそがれ

○　　　井田葉歌

夜となりぬ小名木の川を下る船わが立つ下を音もなくすぐ

泪々はてなく落ちよ大海のはてにむくろを持ちて去れかし

興奮の後の心の寂しさをいだきて咲くか野邊のたんぽゝ

シャツ脱ぎし肌やはらかく風の吹く夕暮時はものゝうれたし

○　　　町田不破

刺激よき彼の東京の朝風呂を思ひぞ出づるかなしき長崎

春來にけり錦魚が麸などすする如吾等も街に日を吸ひに出む

はからずも物の中より振ひ出てし電車切符よ都戀しや

○　　　日柳朝街

花もてる棕櫚をば透きて射しこめる午日靜けきなかに寢覺めぬ

潮鳴の冷たき夜の野の暗さ赤く煙草を吸ふ人のあり

冷やゝかに九年母匂ふ朝雨の窓の食後を人思ふ哉

○　　　訥鷗軒

事おほき日なりきとのみ日記つけて初春の夜を、疲れ臥しけり

君は雄とわれは雌たれとねがひける子鷄はつひに雄となりしかな

梅干の味こゝちよく舌にしむ花咲く頃の朝がれひかな

○　下浦潭水

小さなる籠にかはれて小鳥なくあはれ木の芽もすてにめぐみぬ

涙をば浮ぶる眸をことさらにさけたるまみもくもりけるかな

やゝしばしポストの前にためらひてなげ入れにけり一葉のふみ

○　松島落果

山の空はれたるゆふべ靜なる玻璃戸のそとにちる櫻かな

つとゝべる小鳥をながめ野をながめやがてさびしきわれをみいてぬ

しづかにもねざめて居れば今日の日のわがつめなど思はるゝかな

○　苗加白光

はなやかにランプの花は咲きてゐぬ君待つ室のわが前にして

別るゝ日逢ふ期しらずとわが前の十歩の君をまた呼びてみぬ

涙なくふたり別れぬ相うとみ氷のごとも胸の冷えし日

川底の小石そだつる水の聲さやかにきこゆ春の夜の月

○　宮内白涙

建まへの音ゆるやかにきこえくるわか草の上の日なたぼこかな

見まはせどわが齒のいたみまぎらさむ一冊の書もあらぬさびしさ

○　金子秋川

夜來れは若き女のさゞめける家に隣りて住むがさびしき

淋しけれと戀のなき身は春の夜を瞳をふせて安らかにねる

○　高添銖

わが病うつる病ぞしばらくは離れてあれと言へばさしぐむ

さかしげにみゆれどあはれ女なり神詣りなどふるきことといふ

○　　　　　　　　　　　　　菊池一紅

眞紅なる椿のはなにふりかゝる雪をながめて君と夕餉す

○　　　　　　　　　　　　　山本春久

うす若き胡茶の味の口にあり心ゆたかにうぐひすをきく

忙がしき身をもちながら手をくみて春の微温のなかにたゝずむ

○　　　　　　　　　　　　　白川茂吉

うらぶるゝこのさびしさを君ひとり知りて居ますがいとゞわびしき

○　　　　　　　　　　　　　佐藤辰雄

木の白き皮をむしりて投げやれば驚くさまに春の水てる

雪どけの川べりに來て石をなげ足らはぬ心なくさむるかな

○　　　　　　　　　　　　　池永青桐

にほはざる草さきみだる曠き野のなかに一つの牛の唸りをり

晝すぎの風にやなぎの裏ひかる狗ころの毛を撫てゝやる庭

○　　　　　　　　　　　　　伊藤錄

われひとりの家にかへるはしのびざり若き心のゆくかたのなき

ひとりなれば今宵ぞ神の祈らるゝまこと心のしづかなるかな

○　　　　　　　　　　　　　村手晃陽

我れこゝに在りてふことを誰れか知る祇園の夜の雜閙の中

○　　　　　　　　　　　　　藤本香夢

夕暮の黑き海見てたゞづめる我神經の淋しき微動

夕暮の黑き海邊にのがれ來て別れし人の俤に逢ふ

○　　　　　　　　　　　　　二宮芝川

花色の衣きて待てる幸福の前に一ときすねて見し子よ

○　　　　　　　　　　　　　蒯田黃昏

村童にまじりて立てる吾が姿大人びたるが淋しかるらむ

ふちとりのらんぷのほやをみつめつゝ三人は悲
しかたることなし

〇　冬咲く花

妻とよぶ若きやさしき女ありひねもすわれをお
びえつゝあり

三味線のあまき悲しきメロディーを平然と聞く
男なりしが

〇　三木海鳥

新緑のすがすがしさに打ちしめり霧あけそむる
山の手の朝

〇　宮本藻花

あゝ今日の涙の中に强きこと强ひて言はれし母
まづみゆる

紅き花なかに交れる黑き花ことさらそれを摘み
しならねど

〇　小豆澤蘆影

垢付きし衣物の襟を氣にしつゝ春の街ゆくさび
しき男

〇　大木多喜男

春來ればふと云ひしらぬ喜びの胸に湧く日のま
さり行くかな

醉さめて夢追ふ如く吾がなせし事などたどる頃
のはかなさ

〇　稲田雲城

二日立てどなほ故里の山の見ゆわが悲しみのは
なれざること

〇　太田忠太郎

灯ともせばひとを思うて泣きぬるゝわれの姿の
はづかしき夜

さりげなく君のうしろをみてあれは街にほのか
に灯のともりけり

〇　森青栗

朝夕(あさゆふべ)ことともなき身はいつしかにあづまみやこを
思ふわりなき

〇　石井直太郎

人を思ふわれの心にふれもせて冬はしづかにめ
ぐりぬるかな

春まひるとほくながむる川岸にわれらさびしく
仰ぎける山

〇　北里誠夫

芹の花白く咲く野にある水のにぶく光れる四月
の晝かな

○　岡谷天芥

見るも倦みぬ語るも聞くも皆飽きぬかくして我は何を求むる

ときれたる話の後の寂しさを味ふ身とはいつなり果てし

○　伊藤蓮二郎

死を讃美す純なる心いえぬまに死よわれにみまへわれにみまへ死よ

○　西村孤舟

人々の話もそれとうなづきて聞かるゝ人となりし我かな

つみとれどおくる人なき我なれば花なき冬の淋しさに生く

○　横田湖峯

ぐん／＼と腦が痛みて明け方に少しまどろみ夜明くる悲しさ

○　吉川宙斗

水仙の色に出てたる晩冬の悲しみはよし君と別るゝ

やはらかき悲しみを鳴くかなりやの籠に日のさす春の夕ぐれ

○　德永萍

つと去りし昨日のことの思ばれて黒髪をすくうらさびしきよ

○　山本春久

淡雪のとけてあかるき雨の日は紺蛇の目などさすべかりけり

青白き大あめつちに抱かれて我れの少さきに泪ながるゝ

○　林小翠

芝やけばちよろ／＼燃えぬ地の底にかすかに過ぐる冬の聲して

○　島翠花

夕されは石のつぶてを新坂の藪に投ぐるが常なりしかな

○　田上勇太郎

楠の葉に未だ餘寒の風そよぐ宵はしみ／＼星のつめたき

○　八百村夜調子

枯草のそよげる中に身を擲げて靜寂にしばし抱かれてあり

○　小林薫葉

よろこぶにあらずなげくにあらずただとりとめもなき日をすごすかな

○ 山本渚の貝

湯がいりのほてる素足に春雨のしづくをおとすうす藍の傘

○ 中山華光

ほのじろき玻璃戸の外の夜ふけ月小さき木の葉も中にそよげる

いづこより來しやかもめの羽ばたきにゆれてはひらく船のともしび

○ 米田菊

露臺より浪華の街をながめやるきさらぎの夜の星あかりかな

○ 森一雄

かごしまよその青空よいつまでかわが泣き言を聞きてあるべき

○ 大眉一末

春先きの輕き帽子をしなやかにかつぎ林に口笛を吹く

○ 酒井廣治

灯をうけてパアの女の關節鳴らすしろき指こそなまめかしけれ

○ 小川流葉

云ひ知れぬ物のはかなき哀れさがしつとり濡れて春は來にけり

○ 石井保

一日のつとめはたして淋しくも海を眺めに立ち出てしかな

○ 渡邊紅影

春の海その明るさにえたへてや寂しき兒らは口笛を吹く

○ 山根義夫

霜どけの小草可弱く背をのして涙ながらに春の氣を吸ふ

○ 小林薫葉

ひねもすをうたひつゞけて天地のたえざるさまをよろこべるかな

○ 内山久夢

淋しさに此頃やゝと吸ひそめし煙草の味のにがき宵かな

○ 星野秋雄

おん母よ心靜かに寝ねたまへ子が乘れる船やす

らかに行く

○　　　　小林薫葉

ひねもすをうたひつゞけてなほあかぬ雲雀にわれをことよせてみぬ

口繪の說明

本號の口繪"Peonies"の筆者C.E. Peruginiは其生歿及び生年月共に不詳なるも蓋し近代の畫家なるべし。氏は平凡なる何物をも忌み、其畫題として採べるもの、常に理想的の美を發揚するに都合よきもののみなりき。而して氏の柔かくして整へる筆は最もよく其題材と調和し、人をして恍惚として美に醉はしむるの魔力を有す本圖の如き其代表作の一也。



俳句

若鮎

高田蝶衣選

茶にも言ふ水の甘さや上り鮎　へき生
小鮎減り云ふや躑躅も流るゝに　同
瀧のよな二タ瀨つゞけり上り鮎　同
若鮎の句も村醪に媚ぶる意を　同
風に消ゆる裾切れ虹や小鮎汲む　同
篝火燃えて鮎上る瀨を明るうす　同
一溪の奇に惚れ住みて鮎汲めり　同
月に光る小鮎など草を越す水嵩　摘星辰
小鮎汲んで草塘に出ば霧裂く旭　同
水荘に酌む酒や家士は鮎汲めり　同
小鮎汲むや松林鹵蒲の顚はるゝ　同
草鞋きて人思ふ鮎汲み疲れ　同
小鮎時を舊出城に修覆あり　同
双塔赤き森眉上に暮れぬ鮎汲めば　同
旗亭なれど旅籠めく若鮎の味　鎮西郎

若鮎に新筍に厨裾湯も沸けり　同
宿は內溫泉あり若鮎に海も見て　同
鮎上る瀬渉れば雲雀牧場なる　同
上り鮎葎の雫淵となり　同
若鮎の淵寺や治水の泣評議　公子樓
若鮎や日の暈尻に舟掃除　同
燕返しと謂ふ風吹きぬ彌生鮎　同
若鮎や瀬鳴響かす宮柱　同
啼き倦みの藪隱れ鳥や小鮎汲む　同
洲草根に毒ある一期上る鮎　寢覺草
木瘤蹴る大嘴鳥や上り鮎　同
歌を悲しうす夜雨を若鮎の宿　同
若鮎の漁一期鵜相場占ひて　同
川海苔の香に出づを鮎汲む唄に　同
御遺跡に一樹なし若鮎の里　花馭史
鮎汲み場來し人か水車外し居る　同
鮎上る日や紡ぐ苧の伸び易に　同
印撿す筏止め場や春の鮎　同
海苔砧きくゆたか若鮎を燒く　同
若鮎や珍ら來し溫泉場の夜の雨　石羔
若鮎を汲む啜繭に晴るゝ雨　同

新衣成りしを若鮎に行樂の里　同
小鮎肥ゆ今日閑机耕織の多事　同
若鮎に凪の波をいたみけり　禾人
春を又寒き日に逢ふ小鮎かな　同
若鮎の宿て果てたき女かな　同
鮎汲むや瀬鳴おびゆる崖の樹々　宙斗
小鮎やく草廬春興書詩に在る　同
甕は賣らて隱るゝ閭裡に小鮎汲む　同
若鮎や水明う蟬早き里　紫浪
大炊寮今日若鮎の御庖丁ある　同
藤に泊りしが小鮎よき參宮途次の宿　同
喞筒試しある松原や鮎若き里　吐櫻樓
小鮎誘ふ碧竹も敷く川底や　同
材木市果つ潮あげ時を小鮎賣　同
水明り鮎汲を得て春景整へる　銀竹
貧厨たま〳〵の小鮎も帶の內宴に　同
遠來を犒ふに鮎汲むもよけん　不寢庵
不急土木に怨嗟あり鮎上る頃　同
(身延)一水峽に入りて靈所や上り鮎　同
花茶屋や曉寒の一爐小鮎燒く　紫禽
上り鮎急流所々に光して　同

古りし酒壺に退隱の賦や小鮎燒く　志鶴運
山廬訪ひし歸るさや苞に小鮎など　同
溫泉烟の冷えて雨ふる上り鮎　芳葩
若鮎や峯頭雨意船の苫濡れて　同
夜の風は瀨泣に泌みて小鮎汲む　三石
夕露に汀草揺れて小鮎とぶ　同
增驛の沙汰ある國や小鮎肥ゆ　青輪子
若鮎や舟車なき宿の峯おもふ　同
廢れたれど街道の名に小鮎賣る　十寸穗
峽の地に思はざりき來て若鮎の味　同
紙所楮芽時を小鮎かな　二溪
年々や若鮎御漁に案内の身　同
川柔の碑と見つ鮎も汲み晴れて　麻呂
火伏せなどある里神や若鮎頃　同
札立てゝ賜田とよ鮎汲の主　楚丘
芝笹の伐り榮えに鮎若き知る　夢雪
若鮎寄せうつ餌蒔川柳晴る　雨霽人
草かぶれに足痒し若鮎の味　葛雨樓
婢（をんな）名を云はず卓上の若鮎や　湖峇
有明けて若鮎の川景移る　國郎
旅情わびし若鮎汲みに供借りて　烟山人

難所旅を酌む宿や小鮎の聞えある　更二
公用に來て私になりつ鮎の客　青栗
義人一人に成る大塘や上り鮎　青爾（丹花改）
鮎上る鄕思ふ奉命の忙　松葡
若鮎に社殿起工の酒酌めり　琴水
松濃きを映つす河艶小鮎とぶ　紫樓
きゝ酒のあと若鮎に景も指す　詩泉
土手草の色つけ雨や上り鮎　胡鬼子
瀧壺を雁行に出入る鮎小し　神風
蠶室の明け惜む戶や小鮎村　美田
笹道をきて瀨もひゞく若鮎の亭　羊子
若鮎や此處魚止めの瀧のあり　杏太
若鮎や膓に聊藻の香あり　旭洋
酒旗雨に古驛に小さき鮎得たり　馬の骨
雅客長座も若鮎の香をなつかしみ　柳子
若鮎や霜婁の桑圃つゞく里　白靑
小鮎川へ掃捨て花や宮掃除　紫雨草

課題　初夏　五月十日締切
　　　薔薇（芙）　六月十日締切
規定　淡路國假屋在釜口高田蝶衣宛
　　　一人卅句限▽用紙は半紙の事

評論

墺洪國の難局
（洪牙利獨立黨の活動）

一

洪牙利議會の陸軍案反對は近來珍らしき物議を醸し、紛紜又紛紜、前月上旬に及んて、漸く落着を見るに至りき、落着とは他無し、議會がフランツ、ヨセフ皇帝の大詔降下に接して、澁々なからも其反對を撤回したること是也、吾人は之を見て、伊藤内閣が第十五議會に於て、貴族院の處置に苦しみ、遂に案出したる窮策を想起せすんばあらず。

左れど顧つて想へは、我國と墺洪國と相並へて説くは、比倫を失するも亦甚しきもの也、國家組織の性質、皇室對臣民の關係、到底同日に論じ難し、是洵に墺洪國の爲めに悲む可し、唯其事實なるを奈何。

抑も三月洪牙利議會の問題となりたる陸軍案は、皇帝の洪牙利豫備兵召集權を完全にするものなりき、同議會は之を以て益々兵馬の權を墺國に支配せらるゝものとなし、右召集權を制限するの決議をなしぬ、是に於て乎墺國政府は狼狽せり、皇帝震怒、洪牙利首相へデルワリー伯を召し「洪牙利議會本決議案を固執せば、朕は退位するの外無し」と説き、へ伯が板挾みとなり斡旋力めたるも成らず、幾度か骸骨を闕下に乞へりき、而して三月三十日皇帝遂に洪牙利議會に詔勅を下し、四月二日同議會は明かに陸軍案反對を撤回したりき、

經過を記すれは、略ぼ斯くの如し、皇帝の退位威喝洵に是異常也、然かも墺洪政界の異常は果して茲に終了したりと言ふ可き乎、

二

何ぞ其れ然らん、吾人は寧ろ墺洪軋轢の勢、今後益々激成せられて、絶大なる難局遂に發生せんことを豫想せすんばあらず、

何ぞや、洪牙利人就中マッヂャ民族の理想は洪牙利

の獨立に在り、一八四八年の叛亂の如き實に此理想の實現を志したるものなりき、一八六七年に至り墺洪間に協定成り、洪牙利の主張大に貫徹し、外交、軍事等共同事項の爲めに聯合政府を組織し一般內政は墺洪各々別箇の政治を行ひ半獨立的狀態を見るに至れりと雖も熱狂的愛國者は之に安んずるを得ず而して此傾向は年と共に減少せずして益增加するの狀あるにあらずや。

試みに思へ一昨年一月へデルワリー內閣成立を促せる原因は如何、是れ洪國獨立派が其主張を實現するの一手段として洪牙利財政獨立を主張し、墺洪合同銀行制に反對したる結果、一九〇六年以後任職せるウエケルレ內閣も墺帝と議會との間に板挾みとなり、辭職せる爲にあらざりし乎洪牙利の難問題たる軍隊マッヂャ語使用問題共同國費問題等の如き皆獨立派が自己の目的を貫徹するの手段として主張せる所にあらざる乎、

然かも吾人が憂ふる所は、墺國が年を經るに從ひて洪牙利を支配し得ざることを示し來れるの一點に在らざるを得ず、

三

見よ、墺帝の勢力は是迄偉大に、人心を得給ふとも亦深かりき、黒黃旗を嫌惡せる洪牙利人民も溫顔なる八十歲の老帝に對しては、敬意を拂ふに吝ならざりき、然かも一軍備案の爲めに退位を以て威嚇せすんば、其志を成し難しとせは、帝の勢望が墺洪關係に累せられて、昔日の如くならざるを知る可し、然かも最も悲む可きはへデルワリー伯の勢力失墜によりて最早滿足に墺洪關係を處理し得可き政事家無きを示し來れると是也。

蓋し方今洪牙利政界を見る、コスートあり、ユーストあり、極端なる獨立論者にして、望むに墺洪調停を以てし難し、チサ伯才ありと雖も、斷と略とに缺く、獨りへデルワリー伯、久しく前途有望の政事家を以て目せられ、クロチヤ知事として果斷と善政の聞へあり、一九一〇年一月內閣に起ち、同年六月高壓手段に依りて總選擧に勝ち、ビスマルクの再來なりと稱せられ、墺洪調和、此人の手に依りて遂行せらる可しと思惟せられたるに、今や其志を成す能はず、一旦議會內反對黨と妥協し、墺國政府の反對に會して、窮餘屢々辭表を捧く、嗚呼墺洪國遂に一人の大政事家無し、誰か邦家の前途に想到して、憂懼せざるものぞ、

(以上の文を艸したるの後三日外電あり洪牙利議會依然强硬の態度を捨てす又へデルワリー首相の辭職聽許せられ藏相ルカチ首相となる旨を報し來る、以て益々我が所論を强うするを覺ゆ)

獨逸軍備擴張

四月十五日獨逸陸海軍擴張案、帝國議會に出づ、其の軍費增加額の内容を檢すれば下記の如し、

	陸軍	海軍
千九百十二年度	七千九百萬馬克	千五百萬馬克
千九百十三年度	一億〇百萬馬克	二千九百萬馬克
千九百十四年度	七千八百萬馬克	三千九百萬馬克
千九百十五年度	五千八百萬馬克	四千萬馬克
千九百十六年度	六千二百萬馬克	四千四百萬馬克
千九百十七年度	六千二百萬馬克	千八百萬馬克

陸軍擴張最も大なるも、少焉らく問はず、唯だ對英關係上、看過す可からざるは其の海軍の增加となす、即ち獨逸は既定の海軍擴張費以外に、更に向ふ六年間に一億八千五百萬麻（約九千萬圓）を投ぜんとす、其結果として、今後每年ドレッドノオト二隻宛建造の筈なりしもの、一變し、此外に向ふ七年間に戰艦三隻、巡洋艦二隻、潛水艇等の建造を見るに至る可し、又海軍兵員も每年平均將校七十五、兵士一千六百を增加するに至る可し、然らば則ち我が同盟國は果して如何にして之に對せんと欲する乎、

三月中旬英國海軍卿チャーチル氏、海軍豫算を議院に提出するや、說ひて曰く、英國は獨逸海軍を相手として之より六割の優勢を持せんことを期す、今回の建艦計畫が隔年にドレッドノオト型戰艦四隻と三隻と宛を建造す可く定めたるは、獨逸の每年ド型二隻建造を標準となしたるのみ、獨逸の計畫にして變更せん乎、我が計畫も從つて變化せんと。

讀み來つて覺悟の瞭々たるものあるを見る、恐らくは英國も追加海軍豫算を提出するに至る可き乎、於是切りに想ふ、軍費制限協定談の夢想に過ぎざるを、

愛蘭自治案

愛蘭自治案、四月十二日英國下院に提出せらる、其内容を傳ふるもの曰く、愛蘭議會は上下兩院より成り、上院は四十名の勅選議員より、下院は選擧に依る百六十四名の議員より成る、其權限は前回自治案に規定せる除外諸項を維持し、專ら愛蘭內政に關する立法事務を司る、政府は議會に對し責任を負ふ可きものとす、而して英議會に於ける愛蘭議員數は、之を半減して四十二とするも、投票權につきては何等の制限を加へずと、

前回自治案即ち一八九三年のグラッドストン案に所

謂除外諸項とは言ふ迄も無く條約、外交、陸海軍、宗教等の問題を一切帝國議會に屬せしめたる規定なる可く、新自治案が之を維持せるは至當のみ、就中信教問題除外の如きは舊教徒多數なる愛蘭に於て新教徒を保護する所以の良策たらん、(ハ)次ぎに其英國議會に着席す可き議員數を半減せるも當然なり、唯だ其投票權を制限せざる爲め、英人には愛蘭の內治に干渉するを許さゞるに係らず、愛蘭人のみは無關係なる英倫の內政に容喙するの奇態あるは、止むを得ざることならんも、失當の謗を免る可からず、

左れど、愛蘭自治案の論議は之を他日に讓らん、何となれば、其財政に關する規定の內容は不明了にして疑惑を抱かしむるもの多ければ也。

希臘の總選擧

希臘新代議院議員選擧終了す、現首相ウエネセロス派百四十七名、テオトキス派八名、サイミス派三名、ラリー派八名、マウロミカリス派七名より成る、而してラリー氏自身は落選の悲運に會したり。

幸運なるかな、ウエネセロス首相や、已に前首相元老政治家連を壓服し、民心之に歸すると斯くの如くならば、天下の事何ものか成し難からんや。然かも何ぞ知らん、ウエ君の幸福は是れ希臘帝國の幸福なることを。他無しウエ君の執政は三箇の利益を希臘に齎らすものなれば也。

三箇の利益とは何ぞ、曰く希臘帝政の繼續を見せしむると共一(蓋し數年來希臘民間には皇室反對熱勃與したるが、最近善政を布き上下を調和し來れるはウエ君の功績たり、從つて其政治の繼續はやがて同國革命を防止する所以ならん。)曰く、腐敗せる內政改革の遂行其二曰く、一方に勃牙利以下諸國との交際を親善にするを得ると共に、クリート問題につき列强との衝突を避け得べきこと其三、

斯くの如くして紛紜と騷動とを特色とする希臘は、當分太平を樂むを得ん乎。然かも其永續如何は依然疑問也。

吁嗟ステッド氏逝く

四月十日は如何なる惡日ぞ。大汽船タイタニック號、北米ニュフアウンドランド州の近海に於て氷山と衝突

し、船體と共に水中の藻となるもの千六百名。而して文人ウキリアム、テ、ステッド氏も亦た其中に在りたりき。

嗚呼ステッド氏、其死際の麗はしかりしは、恰かも其文章の麗はしきが如くなりき。婦人小兒の短艇に移り行くを助けたる君は、遂に助けられずして、衆人號泣の裡に、泰然自若、死に望みしとかや、今君が傳を略記すれば左の如し。

「英國評論之評論記者ステッド氏は一八四九年を以て生れ十四才の時商業を學はんとして中止し、二十二歳操觚者となり先づノーザン、エコーの記者たり次てペルメール、ガセット記者に轉し、四十一歳の時英國評論之評論誌を起す、米、濠兩國の「評論之評論」誌亦氏と關係あり、夙に平和主義を稱道す、一種の文體を以て、金聲玉振、天下を風動し、後進論文家、競ふてその體に倣ふ、一九一二年四月太西洋上に逝く」

願くは其餘りに簡單なるを咎むる勿れ。吾人は此時に於て多く筆するに忍びざる也。

厄介なる親友

露西亞と言ふ國あり、三箇年前は波斯政府に說ひて曰く癈帝に年金十六萬五千圓を供給せよ、然らば我れ癈帝を歐洲に去らしめ、歸國する無きやう斡旋せんと、然るに二年の後癈帝に說ひて曰く陛下兵を擧げて、現政府を攻擊せよ、歸途我領土を通過するも、默許す可しと、而して癈帝兵を擧げて敗北するや、再び波斯政府に說ひて曰く、癈帝に對する年金を癈する勿れ、我は波斯の親友として勸告すと。

斯くの如き親友を有する波斯帝國も、亦た迷惑千萬なるかな。

（備考最近外電によれば露國が波斯癈帝のみならず叛亂に與せる皇弟に對しても年金を附與せんとを波斯政府に勸告せりと）。

新刊批評

▲明治維新三大政治家

池邊吉太郎述　新潮社發行

大久保、岩倉、伊藤三公の史論を本文とし、大隈伯、山縣公、井上侯、西園寺侯、桂公以下現代の名士廿數氏の評論を附錄としたるものにして、明治四十一年より本年に亘つて、皆一度本誌上にあらはれたるもの也。池邊氏の文章は一見放膽的にして瑕疵も强いて掩はざる如く見ゆるも、中になかく細心なる注意と、精緻なる觀察とを寓し、反覆誦讀すれば、其滋味の却て益々加はるを覺ふ。殊に本文の三大史論は、氏の最も力を注げるものにして、何れも當時の讀書界を驚かしたるもの、澁澤男、仲小路氏の如き名士も大久保公論を評して近來の讀物なりといひ、正宗白鳥氏、谷崎潤一郎氏の如き小說界の大家も、小說よりも面白く讀めりと評したるもの、以て如何に本書の價値多きかを知るに足るべし。附錄中にも大隈伯論の如きは出色の文字にして、伯の辯論を評して「坐つてゐて兩手を擴げると片一方の手では亞米利加を掴み、片一方の手では歐羅巴を握るといふ有樣である」といひ伯をもう三十年若くして支那に持つて行つて支那の財政を整理せしめたしといひ、「もう五十も若くして今から新聞記者に仕立てゝ見たならば、日本中は愚かな事、どうかすると歐羅巴でも亞米利加でも、あの位吹ける人間はゐないかも知れん」といへるなど觀察面白く、又あの端嚴自ら持せる山縣公を評するに「誰に對しても帶紐を解かない」といふ俗語を用ひたるなど妙いふべからざるを盡す。(定價七十五錢)

▲近代文學十講

厨川白村著　大日本圖書株式會社發行

多趣味にして篤學の聞え高き厨川文學士の新著にして、最近約五十年間の文藝思潮を一々作物と實證を舉げて講述したるものにして、近來此方面に於ける、最も眞面目にして價値ある著述なりと斷言するを憚らず。吾人は篤學なる著者の眞摯なる著述に向つて滿腔の敬意を表し、其內容の批評に至つては他日精讀の上を期す。(定價一圓二十錢)

▲和譯春秋左傳・(上下二卷)

田岡嶺雲譯註　玄黃社發行

吾人は漢文の和譯といふものを一向に好まざるものにして、大抵の書は、出來る丈け漢文にて讀まんことを推奬したしと思ひ居れども、左傳に至つては、極めて難讀難解にして、餘程の漢學の素發ある人にあらざれば、卒讀して其文の妙を味ふこと能はざる也。今此書を取つて見るに、讀みにくき文字には極めて懇切に訓讀を附し、解しにくき箇所には極めて周密なる註釋を附し、一讀して左傳の文意を解するを得せしめたるは其效沒すべからず。平常漢文の和譯に餘り敬意を拂はざりし吾人も、此書には中心より感謝の念を抱かざるを得ざる也。(定價各卷一圓廿錢)

▲リヤ王

坪內逍遙譯　富山房發行

沙翁の戲曲の價値に疑問を抱く人近來漸く多きを加へ、殊に現代の日本人が翁の作より幾何の暗示と啓發とを受け得べきかに至つては、更らに多くの疑問を抱かざるべからざるも、若し我國にも沙翁の飜譯は是非共無ければならぬとすれば、其譯者は我坪內博士を以て最適任者となすこと何人も異存なき所とす。今此の篇を讀むに、譯者の譯筆いよく圓熟の域に達し、左程讀みにくき箇所なしに此悲慘なる運命に弄ばるる老

王の胸中の悶々を味はしむる所、博士の現舞臺といふべきか。（定價一圓三十五錢）

▲不良少年

小鹽高恒譯
警醒社發行

英國ウキリアム、ドクラス、モリソン氏の原著を譯せるものにして未成年の犯罪者の生理的、心理的、社會的狀態を研究し、其處遇改善の法を講じたるもの、社會人道を憂ふる著者の眞摯熱誠なる態度、一々實例に照して毫も浮華誇張の態なき研究法。漫ろに敬歎に値するものあり。我國に於ても追々不良少年の問題の矢釜しき折柄、參考となること極めて多し。（定價並製九十錢上製一圓廿錢）

▲返らぬ日

鈴木三重吉著
春陽堂發行

嘗て「讀賣」に出でたる「一枚の瓦」を改題して「返らぬ日」とせるを卷頭とし、本誌に出でたる「女帶」「鏡」。及び新小說。ホトヽギス等に出でたる「小猫」「民子」「黑血」の數篇を集めたるもの。著者が現文壇に於て獨自一箇の境地を開拓し、而かも其境地たるや何人の追從をも許さゞるものにして、あどけなき、夢幻的らしき叙述の中に、細かく顫ひ動く神經の閃きと、鋭く物を睇めたる寫生家的の態度を持せるは氏の獨壇にして、此篇に收められたる一つ〳〵に、皆其特徵あらはれたり。只時として其あどけなき、夢幻的らしき所が多少の反感を起さしむることあり、又情調を作るに類似の語句を幾回も繰り返す所讀むに多少の倦怠を起さしむることあるも、讀み初むれば必ず氏獨得の詩境に人を誘ひ行く力あるは驚嘆に値す。（定價一圓）

▲見學餘餘

星野行則著
警醒社發行

著者が一年近くの外遊間見聞せる制度文物、人情風俗について所感を述べたるものにして實驗篤學なる著者の面目篇中の何處にもあらはれたり。「土京雜感」「英米獨產業經營方針の相違」「歐米資本家が勞働者に對する態度」「英人氣質」「獨逸產業發達の現狀及び其の由來」「資本供給國としての佛國」「米國人の仕事振」「英國植民政策の將來」「米國の排日運動と其解決」等皆經世有用の文字也。（定價七十錢）

▲親分子分

白柳秀湖著
東亞堂發行

秀湖氏の文則に一家を爲す。此篇明智光秀、信長に背く所より筆を起し、德川末期に至るまでの主從の關係を經濟的看點より論究したるものにして、氣鋭なる著者の面目全篇に躍動す。「武士道は武士の生活の途てあつた」と喝破して、世の慣習的淺見を笑へる所など痛快ならずとせず（定價八十錢）

▲社會問題救恤十訓

小河滋次郎著
北文館發行

小河博士の社會問題について講究せらるゝことの深くして且つ懇切なるは人の皆知る所、此篇救恤問題に關して博士の懷抱せらるゝ意見を述べたるもの、當局者は勿論一般世人を啓發する所多し。（定價八十錢）

▲新譯伊勢物語

太田水穗著
博信堂發行

伊勢物語を言文一致體に譯したるもの、原文の體を失はざる所譯者の手腕を見るべし。中に氣の利いた短篇小說を讀むやうなものも少からず（定價五十五錢）

▲選擧法改正論

寺田、栗山合著
一屋社發行

今年の議會を賑はしたる選擧法改正を論じたるものなるが、選擧法の問題は決して一時の空騒ぎの問題にあらずして實に立憲國民にとつて重大にして眞面目なる問題也。心ある人の一讀に値せん(定價六十錢)

▲圓滿生活論　堀田、村田合著　東亞堂發行

圓滿生活と各種の心理活動との關係を說けるものにして、圓滿に世を渡らんとする人の參考となるべし(定價七十錢)

▲命の洗濯　關寛著　警醒社發行

八十三歲の老齡を以て、北海道は十勝の國、斗滿川畔の牧舍に於て、壯者も及ばぬ元氣充ち滿てる一代の奇人、白里、關寛翁の著述にして、收むる所「命の洗濯」「命の鍛錬」「旅行日記」「めざまし草」「關牧場創業記事」「斗滿漫吟」の數篇也。皆身讀體達したる天然の養成法を說述したるものにして、文明病にかゝれる人士に取つて一服の淸凉劑たるを失はず。二木博士、松村介石氏の序文、德富蘆花氏の跋皆面白し(定價不詳)

▲儲けばなし　金々先生著　東亞堂發行

金儲けの談義にして一寸洒落れたもの也。中に奇抜なる觀察もなきにあらず。(定價四十五錢)

▲新譯自助論　山縣悌三郎譯　內外出版協會發行

スマイルズ翁の「セルフ、ヘルプ」を譯したるものにして、中村正直翁の西國立志論と同一著を新たに譯せるもの也。(一圓五十錢)

▲物言はぬ顔　小川未明著　春陽堂發行

現代文藝叢書第十篇にして「物言はぬ顔」「薔薇と巫女」「死」「奇怪な犯罪」の四篇を收む(定價廿五錢)

▲晩近倫理思潮の傾向　千葉鑛藏譯　警醒社書店發行

英國ケムブリッヂ大學の敎授ソオレー氏の原著レセント、テンデンシース、イン、エシックス」を譯したもの、第一章に於て十九世紀の歐洲に於ける倫理思潮の特質を概說し、簡明なる批評を加へ、進んで第二章第三章に入り、中に一大溝渠を作つて相對峙せる二潮流、即ち進化論に本づく倫理說と觀念論に本づく倫理說とを併せ揭げ詳述精評して居る。著者の意見は此二潮流を調節せんとするに存するを示して居るが、何れかといへば「此宇宙的秩序の意識が人生に充滿する時に到つては、道德は最早宗敎に化したものである」といふ最后の一句に於ても窺ひ知らるゝ如く、既に有神論的觀念論の境域に入るものらしい、併し說明の此積極的方面は缺けて居る。兎もあれ日本現在の倫理思潮は泰西と同じ波動を示して錯亂を極めて居るのだから、此際斯ゝる論據に立つ晩近倫理思潮の批判に接せしむるは頗る有益であろう。譯筆亦譯者の公言の如く信憑すべきものだ。(一定價金壹圓)

▲問題叢書　第二篇「國家と宗敎政策」　惠美光山著　大勢社發行　定價卅五錢

▲仝　第三篇「財政整理要論」　武富時敏著　仝上

▲學生文庫(二十八)「四書」　至誠堂發行　定價卅錢

▲仝(三十)「源平盛衰記」(三)　仝上

此の廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

新刊特價提供

東北帝國大學講師
第二高等學校講師
文學士 登張信一郎著・紙數貳千三百七十頁

新式獨和大辭典

▶本書の最も誇る特色◀

一 語數の多きこと空前
二 連語と根語とを問はず凡てABC順序の編成なること
三 外國語は凡て網羅せること
四 主要なる語には英語を加へ獨逸語の說明を附せること（依て三體辭典の用を兼ぬること）
五 發音を一々明確に記し語源語根の解釋を附したること
六 地名人名等の固有名詞を載せ悉く其發音法を明記せること
七 成語熟語の多きことと是れ又空前語の用ゐる方格の支配等を一々豐富なる文例を擧て明記し特に內容多き語は四五頁に涉りて詳解す本書を有すれば熟語辭典の用なし
八 活字は弊店特製の新七號を鑄造し用ゐ方巧妙を極め一目瞭然たり
九 譯語は凡て現代語を標準とし多く口語體となして一々斬新適確此の點に於て斬然時流を拔く

本書は獨逸文學獨逸語專攻文學士登張竹風先生が其文學語學の文才學才を披瀝し前後六年の星霜を費し斯界の爲め熱血を注ぎ獻身的に新譯編纂に從事せられたる大產物模範的獨和大辭典にして今や全く大成し釘裝を凝し玆に獨逸語學界空前の光明となりて出現す

■語數拾萬言以上◎送本 製本完成着金順

壹萬部限（新形總クロース箱入美製全一冊）正價金參圓 郵送料內地金十二錢 朝淸各四十二錢

■特價金貳圓四拾錢

登張信一郎 山田大黑 著 ●新和獨辭典 價九十五錢 郵稅金六錢
登張信一郎 藤井信吉 著 ●獨逸熟語新辭典 價一圓六拾錢 郵稅金八錢
野村泰亭 著 ●新佛和辭典 價金貳圓 郵稅金八錢
松井知時 上田俊一郎 著 ●新和佛辭典 價金貳圓 郵稅金八錢

進呈（內容見本往復端書にて申越あれ）

東京日本橋區 大倉書店發行 振替口座二三 貯金東京八番

（中付の四）

吃逆

鷗外

「君が倒さにして見ても同じ事だと云つたあの書が賣れた。あの時僕はタアナアの書が實際倒さに懸けられた例があると云つて、自己を辨護するために歴史を引合に出すと云ふ、最もいく地のない窮策に出たのを、君はまだ記憶してゐるだらう。此報道を見たら、君は誰があれを買つたかと問ふに違ない。その買手が實に振つてゐるよ。方々の電信柱にペンキで名前の廣告してある成金だ。僕の藝術のお得意が parvenu だとは面白いぢやないか。かうなると、僕は又窮策を繰り返したくなる。バイロイトの劇場が始て開かれた時、新しい音樂を聽きに寄つて來た客は、豫期せられた、頭の新しい、物の分かつた人間ではなくて、諸國の物見高い金持共だつたと云

ふ話がそれだ。僕はあの書に直ちに Sujet の分かる題を附けて置いたことを後悔する。あの題かなかつたら、ストリントベルクの高原の景色を酒代の代りに貰つて壁に懸けてゐて、荒れてゐる海だと客に說明した酒店の主人のやうな滑稽が生じたかも知れない。但これは名高い人を例に引いたやうでも、上手な書てない丈罪が輕いかも知れない。笑談は大概にして置く。實は此手紙は請待狀なのだ。久し振に書の賣れた祝をするのだ。お相客はエナから歸つた幣原だ。是非來てくれ給へ。」

五條秀麿は綾小路の此手紙を卓の上に廣げて、ぼんやり眺めてゐる。末の方に場所と時間とが脚本の初のやうに二段に註してある。場所は築地の或る待合で、時間はもうそろ〳〵出掛けなくてはならない頃である。

秀麿は手紙を卓の上に置いて、椅子から起ち上がつて、エランダ越しに庭一面に薄綠の若葉を疊ねてゐる山もみぢと、その向うに厚い薄紅の氈を敷いたやうに、輪の儘て花の落ちてゐる椿とを眺めながら、室内を二三度歩いた。わざ〳〵自分を呼んでくれた友達の好意を思へば、行かなくてはなるまい。ベルリンて往來したことのある幣原が、新にオイケンの所から歸つたのにも、逢ひたくないことはない。けふの午後は天氣も暑くなく寒くなく、埃を起てる程の風もないから、外へ出ても好い。併し、併し待合へ往くのは詰まらないな。藝者が料理屋の座敷て器械のやうに動いてゐる間は猶忍ぶべしてある。それが待合の小座敷て、客に遠慮をしない所、乃至所謂「遊ばせて戴く」と云ふ風を裝ふ所となると、それを見て面白がるには、己なんぞより、今少し遲鈍な神經を持つた人間か、又は神經の上に肉慾が sourdine の

やうに働いて、幾多の不諧音を消してゐる人間でなくてはならない。己のから感ずることを、綾小路は多少察してゐる。それに己を待合に呼ぶには、神經に治療を加へてくれようとする、好意が交つてゐるかも知れない。若しさうなら、隨分有難迷惑なわけだと、思ふのである。

秀麿はもう四五日火を點し已めた瓦斯煖爐の上の置時計の前に足を駐めた。もう五時前である。たゆたひながら電鈴の控鈕を押して、小間使の雪を呼んだ。

「綾小路に晩餐に呼ばれて參りますと、奥へ申上げて置いてくれ。」

「はい」と云つて、雪が出て行つた。その時秀麿は始て自分が宴會の招に應ずるのだと云ふことを、はつきり意識した。そしてまだヨオロッパにゐた頃の習慣が拔けないので、手丈洗つて支度をした。

「あの、お車が參つてをります」と、雪が知らせに來た。

秀麿は帽と太い籐の杖とを攫んで、急いで部屋を出た。

* * * * *

格子戸の前で車を降りて、秀麿は花崗石の塡めてある敲きの上に立つた。

「入らつしやいまし」と、女中が緣側に膝を衝いた。

「綾小路からさう云つてある筈だが。」

「只今お一人樣お出になつてゐます。」

舞踏場のパルケットのやうに滑る廊下を、八疊の間へ導かれた。

女中の障子を開けた時見れば、先に來てゐるのは綾小路ではなくて幣原である。のん氣な主人はまだ來ないのに、ヨオロッパで時間の約束を嚴しく守る癖の附いてゐる幣原が來て、しつぽく臺とか云ふ卓の向うに据わつてゐるのであつた。

「や。暫く。君歸つて來たさうだね。オイケン先生はどうしてゐるね。」秀麿は嬉しさうに聲を掛けた。

「なか〳〵元氣ですよ。あの白髮の倒さに立つた、幅の廣い頭は、物を考へ已めると云ふことがなくつて、あの鋤鍬でも持ちさうな、太い手は、書き已めると云ふことがないのです。我等は猶クリスト教徒たることを得べきかと云ふのをつひこなひだ出しました。」幣原は、秀麿がどんなに對等に話をしようとしても、少しづつ敬語を使ふことを廢めない。そんならと云つて、秀麿の方で同じやうに敬語を使つては、親みの感情を殺がれるやうになる。秀麿は心苦しくは思ひながら、矢張綾小路に物を言ふと同じ調子で話す。これはヨオロッパにゐた時からの事である。

「さう〳〵。廣告を見たつけ。クリスト敎とは云つても、詰まり宗敎廢すべからずと云ふやうな論になつてゐるのだらうね。」秀麿は幣原が床の間の前を避けて据わつてゐるのを見て、自分も避けて、幣原の向ひに坐を占めた。女中が茶を運んだ。

「無論さうです。神が歴史の或る時期に人間の形を現したと云ふことは、學問上ばかりでなく、現代人の思想には一般に容れられないと云つてゐます。それから原罪とか贖罪とか云ふ思想もさうです。人間の罪を神が怒つて、自分の子の血で贖はせると云ふことは、現代人には想像せられない。それからクリ

ストが神と人間との間に、紹介者のやうになつて立つてゐると云ふことも、現代人は却つて迷惑に思ふと云つてゐます。その位ですから、歴史上に根據のない、カトリック教のペトルスの鍵なんぞに、神と人間との間を隔てて貰はうと、現代人が思ふ筈もない。プロテスタント教のやうに山のあなたの世話焼を卻けたところで、永遠に動かない眞理として聖書を立てて置くことに同意する筈もないと云つてゐます。それですから、クリスト教維持と名告つてはゐるやうなものの、詰まり宗教維持と廣く云つても好いことになるでせう。」

「さうだらうね。そこで宗教が棄てられないと云ふのは、あの人のこれまでの著述にもあるやうに、中世に人生の歸趣を置いた宗教、ルネッサンス以後に人生の歸趣を置いた內在的理想主義の跡を繼いで、新しい人生の歸趣を造らうと云ふのだらう。」

「さうです」と云つて、幣原は卓の上にある、蓋を開けた葉巻の箱を秀麿の前へ押し遣つた。「これは綾小路さんが屆けて置いたのださうです。その人生の歸趣と云ふやうな事を、オイケン先生は新しい聯結と云つてゐます。Zusammenhang と云ふ詞を使つてゐます。」

「なる程。新しい聯結。」秀麿はかう繰り返して、葉巻を一本取つて、火を附けた。「さうだねえ。所謂人智の開發時代から、ヨオロッパの人がスピノザの汎神論なんぞに據つて誰でも神を自己の中に持つてゐると思つて、理性を恃んで働き出したのは好いが、さう云ふ人と唯一の神との聯結は次第に弛んで行くばかりだ。學問が起る。藝術が起る。經濟が起る。それがどれもはつきり道義との縁を斷つて發展する。

學問藝術の方面では、自然科學が優勝の地位を占める。經濟の方面では、社會問題が起つて來る。畢竟どちらも人間が人間として個個別々の發展をするに過ぎない。その結果は、手廣な事業にも深みがなくなる。賑はしい活動にも安心が伴はない。そこでどうにかしなくてはならなくなる。それをどうにかしようと云ふことを、先生は新しい聯結を求めると云ふのだらう。今こつちで所謂自然主義や所謂個人主義が行けないから、どうにかしようと云ふのと、同じ事だね。」

「さうです。さうです。Comme chez nousですよ。」幣原は短く笑つた。

此時廊下の側の障子が明いて、綾小路が寢惚けたやうな顏をして、のそりと這入つて來た。跡から三十を二つ三つ越したらしい藝者が一人附いて來て、皆に會釋をした。骨と神經と皮とから成り立つてゐるやうな女である。但しその皮は幾多の星霜を閲して來るうちに、惜むらくは稍暗色を帶びて同時に幾分か彈力を失つてゐる。

「遲くなつて失敬した」と無造作に云つて、綾小路は寬いジヤケツにも窮屈を感ずるらしく、卓の入口に近い一邊に、ぺたりと胡坐を掻いた。

「まあ、ひどい烟ですこと。少て開けときませうか。」藝者は起つて、幣原の背後にある丸窓を開けた。屋根と物干臺とに限られた、薄曇の空がtrapèzeのやうな不正な形になつて見える。座敷に溜まつてゐた青い烟が、鴨居の下を潜つて靡いて出て、簷端で消える。

「好く机の傍が離れられたね」と、綾小路が秀麿に言つた。

「いや。實は餘り急で驚いたよ。」

「それはさう云ふ計畫なのだ。世間並に來何日なんと云つて遣らうものなら、君が考へて見ておつくうがつてことわるかも知れない。電話で言ふと、そんな問題に就いて考へるのを面倒がつて、考へずにことわるかも知れない。そこで實際になつて、使に手紙を持たせて遣つたのだ。」

「それはどうも恐れ入つたなあ。」

幣原が詞を挾んだ。「なか〱五條さんをさそひ出すのはむつかしいと見えますね。」故らに平民的にしてゐる綾小路にも、矢張敬語を使ふのである。

「なんでもこんな風に計畫どほりに行くと好いのだが。」綾小路はかう云ひ掛けて、藝者が何か囁くのに耳を借した。「今に別品が來るさうだ。」

「來てゐるぢやありませんか」と、幣原が云つた。

「まあ、お世辭がおありなさること」と、綾小路と秀麿との間に据わつた藝者が云つた。

女中が杯盤を卓の上に運びはじめた。

幣原が「ちと柄になかつたかな」と獨言のやうに云つて、ふと思ひ出したらしく、話し出した。「お世辭と云ふものも、うつかり言へないものですね。僕の友人に藝者にあなたと云ふ人があるのです。ところが、それを藝者が厭味だと云つてゐるさうです。その人の心持を察して見るのに、藝者でもなんでも人間扱に丈はしたいと思つてゐるので、別に藝者に氣に入らうとか、好い子にならうとか思つてゐるわけ

ではないのですが、その心持が先方には分からないのです。」
綾小路は笑つた。「それは分かるまい。藝者を人間扱にすると云ふことがあるものか。」
「隨分だわね」と藝者が云つた。
綾小路が秀麿に言つた。「さつきは大ぶ話がはずんでゐたやうだつたが、何か面白い事があつたかね。」
かう云つて置いて、前にあつた杯を一息に飮み干して、藝者に遣つた。併し丁度女中が何か取りに立つてゐないのに、自分でお酌して遣らうともせず、采の目のやうに切つた鮪の刺身を二切一しよに口に入れた。
「あら、お酌はして下さらないの」とは云つたが、幣原が取りさうにする銚子を、藝者は奪ふやうに取つて、手酌をした。
綾小路に、「相變らず理窟つぽい事を言つてゐたよ」と云つて置いて、秀麿は幣原との對話を續けた。
「一體オイケン先生は何か積極的に建設してゐるのかね。」
「さうですね。人間が現在の地位に安んじてゐて、內在的宗敎を持つてゐると云ふやうな事は、先生は取るに足らないとしてゐます。宗敎と云ふ以上は或る、より高い物を向うに望んで、目前の抑制に打ち勝つて行かなくてはならない。勿論學問藝術でも、その外の物でも、自己のために遣つてゐるうちに、いつかそれが新しい性命を求める手段になる。それで文化が時代を逐つて建立して行かれる。此中には既に隱れた宗敎がある。それを普遍的宗敎と云つても好い。併しこれにも滿足することは出來ない。眞

の宗教と云ふ以上は、人間が文化の建立の奴隷になつてゐないで、人間の靈が現在の矛盾の中から救ひ出されなくてはならない。それには超世間の性命がいる。それが有つて、建立せられる文化が始て有意義になる。併しさう云ふ境地は啻に概念的に解しにくいばかりではない。感情的にも觸れにくい。個人に取つては、その感情は稲妻のやうに、閃き過ぎてしまふだらう。それを護持して行くには是非共宗教的共同生活がいる。寺院がいる。さうなれば、特質的宗教だと云つてゐるのです。」

「むつかしいな」と綾小路が嘴を容れた。

美しい、二十前後の藝者が二人這入つて來て、お辭儀をした。暫く脚本式に第二、第三の藝者と名づけよう。

第二の藝者は弔るし猫と云ふ仇名が付いてゐる。その顔の琥珀色に赤みを帯びた皮膚の下には、厚い脂肪がある。仇名は言ふまでもなく、眉が目尻と共に弔り上がつてゐるから附いたのである。第三の藝者は、藍色の靜脈の透き通つた、薄い顔の皮膚が蒼み掛かつた色をしてゐる。髮の色もさう云ふ女の常として稍明るい。

二人共どこに据わらうかとためらつてゐるのを、綾小路が構はないので、秀麿が「あつちだよ」と床の間の前を指ざした。

弔るし猫が素直に先に立つて、幣原に近い方の上座に着いた。髮と膚との比較的明色な女が弔るし猫と秀麿との間に介まつて据わつた。

弔るし猫はつんとしたやうな姿勢をしてゐるが、高慢振つてゐるわけでもない。遠慮もないが、饒舌もしない性らしい。

明色の女の目が据わつてゐるのに、秀麿が氣が附くと同時に、第一の藝者が「少し召し上がつてゐるが、まだ半端だと云ふやうね」と云つて、誰も飲まずにゐた麥酒の瓶の側にあるコップを出して、麥酒を並々と注いで遣つた。

秀麿が稍驚いて第一の藝者の顔を見ると、第一の藝者が「行けますの」と説明するやうに云つた。果して明色の女はぐびぐびと音をさせて、息を衝かずに飲み干して、「あゝ、せつなや町」と、なんだか意味の分からない語尾を附けて云つたが、顔色はせつなさうではなかつた。

第一の藝者は又一ぱい注いだ。

「こん度は助けて貰ひや町」と云つて、明色の女は弔るし猫を顧みたが、弔るし猫は知らぬ顔をしてゐる。

「そんなら頼まないや町」と云つて、明色の女は又それを飲み干した。そして突然吃逆を一つした。

秀麿は驚異の目を睜つて明色の女を暫く見てゐたが、忽ち心機一轉したと云ふ風で、又弊原に向いて云つた。「それでは寺院はいるが、ロオマの寺院でも、ルテルの寺院でも行けないと云ふ隨分むつかしい注文だねえ。」

「不可能でないと信じてゐると同時に、むづかしい事は先生も認めてゐるのです。兎に角寺院を眞理の事實所にして、神よりも福音よりも寺院を信ぜさせようとしてゐるカトリック敎は、どんなに現代主義

者を排斥して、自己の勢力を維持しようと努めたつて、未來を有してはゐない。淨められた福音を不具の眞理としてゐるプロテスタント教も、どんなに文化を一時流行の物に見落して、新時代の影響を受けまいとしたつて、未來を有してはゐない。プロイセンでは先づプロテスタント教を國教だとしてゐるのを廢めるが好い。國民の宗教思想が區々になつてゐるのに、國家と宗教との分離が行はれないと、勢國家が依怙贔屓をするやうになる。そんならと云つて、公平振つて折衷しようとすると、矢張どの宗教も滿足しないから駄目だと云つてゐるのです。」

かう云つてゐる間、明色の女は正しい間隔を置いて吃逆をしてゐる。

「分らないわ」と、吊るし猫が云つた。

綾小路は第一の藝者と何か話しながら、秀麿と弊原との對話にも耳を借してゐる。そして卓の上に出る丈の料理を片端から綺麗に食つてしまふ。

秀麿が暫く考へて云つた。「それでは在來の宗教を總べて用に立たないとしてゐるのだから、百年前にギヨオテが空想て、Mont serratの巓に催すことにした諸宗教合同會議のやうな物は、無意味になるわけだね。それからこれもギヨオテが卒業論文に書いて印刷させずにしまつた國家對諸宗教論のやうに、政策に合一する限、どの宗教をも容れて、その範圍外の事を排斥すると云ふことも、ヨオロッパでは青年の空論だつたが、そんな事の出來る國ではしても差支ないかも知れない。併しそんな事では宗教の前途をどうすることも出來ない。今の矛盾の中から人間を救ひ出す、新しい聯結として、宗教を求めると云

ふ以上は、どうしても或る目前の障礙を排し、或る目前の抑制に打ち勝つて、向うに新しい生活を望むものでなくてはならない。過去に拘泥しては駄目だ。現狀維持では駄目だ。佛教の淨土のやうな、クリスト敎の樂園のやうなものがなくてはならない。無論それは彼岸には限らない。此岸でも好い。いや。此岸でなくてはならない。さう云ふ物は是非いる。社會主義者でさへ utopia は持つてゐるのだからね。一體オイケン先生はクリスト敎の國にゐるから、未來のクリスト敎だと云つてゐるのだらうが、どうもそれでは、考が狹いやうだ。先生はその點をどう思つてゐるのだらう。」

「それは先生だつて氣が附いてゐます。ヲルテエルでしたか、何も人間がロオマに生れたので天國に往かれる、メツカに生れては往かれないと云ふ筈はないと云つたのを引いて、地理上に限ることを無意味だとしてゐるのです。」

「なる程」と云つて、秀麿は又考へてゐる。

明色の女が吃逆を一つして、誰に言ふともなく、「わたし兄弟になつて貰ひたい人があるのですがねえ」と云つて、懷から名刺形の寫眞を出してぢつと眺めた。

誰も相手にならない。

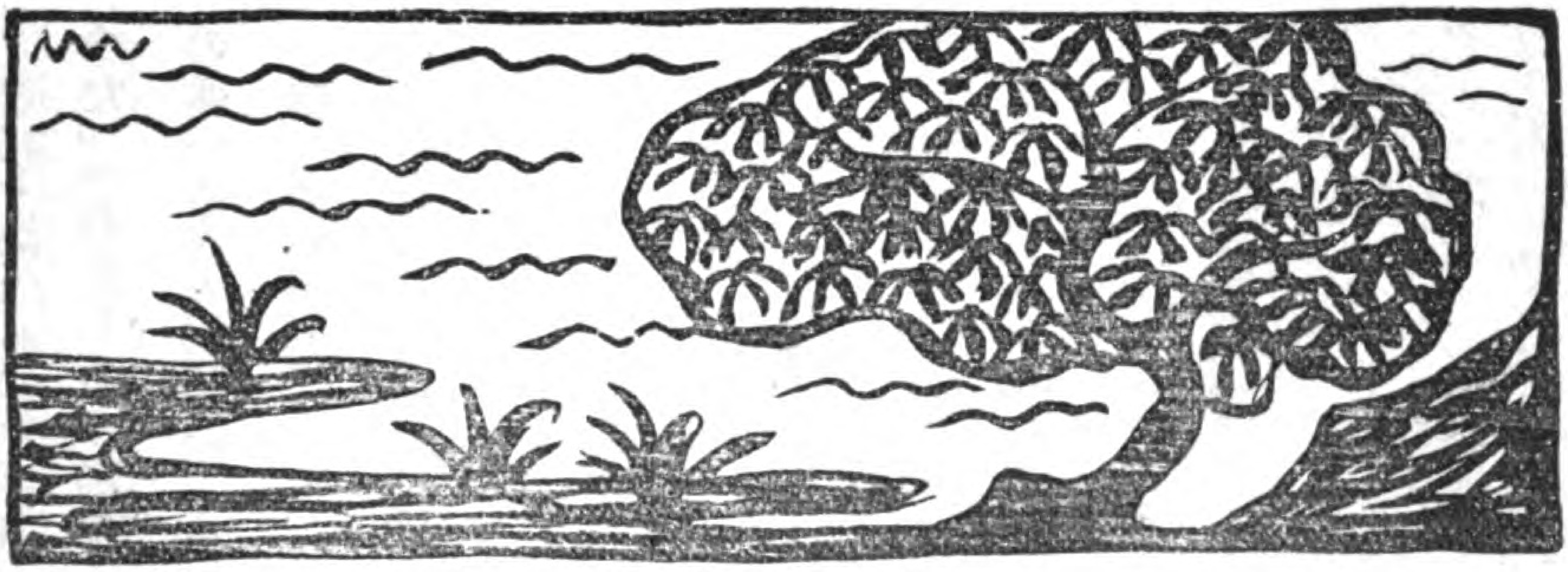
明色の女は寫眞を秀麿の前に出した。「ねえ、あなた、好い男でせう。寒玉子よ。」

「うん。苦み走つた好い男だ。」秀麿も矢張藝者を人間として丈は扱ひたいと見えて、眞面目に返事をした。但しあなたとは云はなかつた。

「さうてせう」と云つて、女は寫眞をしまつて、つと立つた。そして座敷の出口に往つて、ぺたりと据わつた。「わたしもう歸つて寢ますわ、さやうなら」とゆつくり云つて、兩手を疊に衝いて膝を据えて、影の薄いやうな體を暫く動かさずにゐた。

第一の藝者が「あゝ、お歸り」と云つた。

明色の女は最後の吃逆を一つして席を起つた。(完)



狐の巢

水野葉舟

一

その日、山村住三は退刻時になると會社の門を出たが、心がどんよりと濁つたやうになつて居た。自分の身體を何處に向けると言ふ當もなかつた。午後の、埃を含んだ日の光が、泥のやうな色をして、澱んで居た。町がぼつと重つくるしい汚れた色をして、如何にもだるい心持をさせる。彼はその中を電車に乘つた。電車に腰をおろすと、今にも身體が、苦しい昏睡に襲はれようとして居るやうに感じられた。たゞすつかり疲れて彈力を失つて居る筋肉で、無理に、それに反抗しようとして居るやうな、苦しさが起つて來た。息が苦しく、手も足もが擽られるやうな、緩い痙攣が起つて來るのであつた。住三は目が潤んで疲れ切つたやうな顏をして居た。

電車を降りると、彼は激しいメランコリーに墮ちて行くやうに、力の無い足どりをして、家に歸る道を歩いて來た。一日と二晩、あの箱のやうな二階で暮し居た間に、全身が痲痺して來たやうであつた。

彼はその力の鈍くなつた頭の中に、自然とこれから歸つて行く家庭が思ひ浮べられて來た。すると、心の中が油の煮えるやうに成つて來て、やるせないだるい、悲しい、寂しい心持が壓するやうに、襲ひか丶ッて來た。彼は愛さねばならない自分の妻子に向つて、愛する事の出來ない自分の心持が、心底悲しく思はれる。自然と失望し切つてしまつた人のやうな心持がして、彼は自分が全く力の無い人になつてしまつたやうに思はれた。

丁度、矢來町に突き當る道の坂を上つて來た。道には自分と同じ方向に歩いて行く、焦茶色の背廣を來た四十恰好の肥つた人の背と、商人らしい縞の羽織の背とが見えて居た。雜音が其の周圍を取り圍んで居るやうに聞えたが、彼はその中を、無意識に歩いて居るのだつた。

「何もかもから逃げよう。」卒然として斯う言ふ心持が浮んだ。

「死にたい……」と、自然と重い昏睡の中に引き入れられて行くやうな氣分になつて來た。親も、家族も捨て丶、自分獨りでこれから人を離れた林の中にでも入つて行かうとして居るやうな心持になつて居た。そして、自分の背には、お節と——あの白目の處が靑ずんだ、汚れかへつた皮膚をした女と、あその薄暗い二階の室とが附いて見えて居る。

「おれも、明るい日光の中には出て來る人間では無いんだ……」と思はざるを得なかつた。……、

と、仕三はぞッとした。急に全身の神經に針を刺されたやうになつた。同時に彼は恐ろしさて慄えた。
「何だつて……おれは如何したんだ。！」と口の中で言つたが、心では、
「身體が餘程疲れて居る。」と思て、自分で涙ぐんだ。
　そして思ひ付いたやうに急ぎ足になつた。
「歸つて、一時も早く休まう。疲れたんだ。此頃のやうな苦しい心持て生活して居れば疲れるさ……」
と思つた。
　て、自分の家の門まで來て一寸耳をすますやうにして、門を開けた。誰れも人の居ない家のやうに、しんとして居る。と、不思議な不安な感情が踴つたが、耳をすますやうにして入つて行つた。
　すると、臺所口の方から、毓子が時ちやんの手を引いて出て來た。仕三の顏を見ると、毓子はじッとその目を動かさないで見詰めた儘、そこに立ち止まつた。恨んだ、力のない怒を含んだ表情をして、默つて立つて居た。
　女の眠が足りないで疲れて居る顏が、泣いて濡れて見えた。彼はその瞬間に身體に寒さを感じながら、歩き寄つた。
「お歸りなさいまし。」女は夫の顏の皮膚が、蒼く濁つて居るのを見た。そして、群々とそれが烈しくなつた。涙が出て來てしまつた。
「何處に行くんだ？」と、夫の柔かくものを言ふ聲が聞えた。

「あんまり頭が痛いもんですから、風呂にても入らうと思つて……」

住三はその顏をじつと見て居たが、自分でゝ理由が解らないやうにじり〳〵と腹が立つて來た。て、默つて、づつと玄關から上ると書齋に入つてしまつた。

室は丁寧に片付けてある。そこに立つて見ると、机の前に置いてある自分の坐布團が、新しい美しい友染模樣に變つて居た。ふつくりとした厚みが、如何にも柔かく暖かく見えた。彼はその上に乘つて坐つた。そこに誠子が入つて來た。彼は振り返つて見ると、又、女の堅く默つた表情に出會はした。思はず眉の間に皺を寄せた。

「湯には行かないのか?」と聞いた。

「は、お歸りてこざいましたから……」

「僕が?……僕は構はなくつてもいゝ。少し一人で斯うして居たいんだ。」彼は神經的な、苛ら立つた目をした。

「左樣でございますか。」誠子は斯う言つた儘、彼の顏をじッと見て居た。住三は、心がだん〳〵と暗くなつて來るやうであつた。

女の顏を自分のだるい、じり〳〵した心持て烈しく打ちたいやうになつた。

「チョッ!」咀ふやうに舌打ちをした。誠子は漸くそこを立つて言つた。

住三はがつかりしたやうに、その儘着換へもせずに、そこに横になつた。

「あゝあ……おれは混亂して居る」と力無く思つてじつとして居た。

二

その夜は住三は死んだやうに成つて眠つた。

次の朝、目を覺ますと障子に鮮かに日が當つて居た。自分の全く住み馴れた室の中が目に映ると、彼は心底、落ち付いた靜かな心持がした。心の底まで、この鮮かな日の光が惨み渡るやうて、住三は元氣よく床を出た。その顏は今迄の事を何もかも忘れてしまつて居るやうに快活てあつた。

その顏て、誠子にも時子にも快活にものを言つて、會社に出て行つた。

その日は、住三は素直に自分の室に歸つて來た。

落ち付いて晩餐の食卓に向つて坐つたが、長い病氣が癒り始めて來る時のやうな心持がされて居た。彼は周圍を見廻はしては、何か自分の心に、靜かなしんみりとして來るものを見付け出さうとした。て、誠子と顏を見合せた。女の顏には淋しい、濡れた、寒いやうな表情があつた。住三の我を忘れて靜かになつて來た心持が、思はず、苛ら立たうとした。自分て自分の心に欺かれたやうな、嫌な心持がした。て、何とも言はれない恥た、歷ふやうな表情をして、目を反らした。彼はふと食べるものの味が無くなつたやうに感じた。

やがて、彼は又、誠子の顏を正面から見た。そしてふッと

「オイ、笑はないか?」と言つた。女は默つて夫の顏を見返したが、微かに表情がほぐれようとした。

「…………」

「何故默つてるんだ？……」

「…………」

「な……」と重ねて言はうとしたが、女の表情の後に、すぐ涙が隱れて居るのを見ると、自分のこの頃の放埓な爲草が浮に胸んだので、口を噤んでしまつた。

　そして食事を終つて立つて來ながら、彼は、

「あれも厭だ。これもいやだ。」と思つた。書齋に入つてからも、彼は自分の身が落寞とした處に置かれて如何する事も出來ないのを感じた。

　住三にはこの時は世界が暗く、汚れて居た。めちやくちやになつて救ふ事の出來ないものに成つて居た。箱のやうな二階の室で自分の身體は汚れて來て居る。女の汚い衰へた肌から、滲み出す臭が、薄暗い室の中に籠つて居る、その中に彼は浸つて來たのである。それが實に重く身體を疲れさせた、不快なものになつて、今自分の背後に見えて居る。そして、その中から逃げて來た氣で、自分の室に歸つて見ると、その目の前には笑つた顏も見えない。

「これが當然か……さうか！」住三は机に頬をもたせながら、自分を冷笑した。

　そしてその夜も更けて行つた。

　次の日も彼は何事もなく、會社に行き、家に歸つて來た。誠子の顏に、少しづゝ馴れた柔かみが浮ん

て來た。住三も、少しづゝその荒れた心持が落ち付いて來た。水が平準に歸つて行くやうに靜まつて行くのであつた。が、その間に女は一言も夫の行く先きを聞かうとしなかつた。誠子はその機會を見付ける事が出來なかつたのである。夫の顏には、明かに自分の入る事を許さぬ埒を作つて、守つて居るのが見えたからである。

住三は次第に疲れた心持が直つて來た。次の日も、次の日も、外心の無いやうな顏をして會社から歸つて來る。その何事も……初めから、何も起さなかつたやうな顏をして居る夫を見ると、誠子は一方に心が安まつて來るに從つて、悔しいやうな、自分が有るとも無いとも思はれて居ないやうな心持がして來た。泣き度くなつて來た。泣いてその夫の心を掻き破つて、血て二人の心を濯めて、眞底からこの夫に愛されたくなつた。と又、夫の心が全く信じられない、たゞ、ふつと風が息むやうな休息にすぎない事も明かに思はれた。誠子は群々と湧き上つて來るやうな心持に成つて居た。

女の目には、男の心の隙を覗ふやうな、機會さへあれば肉迫して來さうな表情が見えて來た。そして、靜かになつて來ると同時に、住三の胸には心が汚れて疲れて苦しかつたお節の室に對する記憶が、自然と幻が消えるやうに成つて來て居た。

三

一週間ばかりして、或る日會社の門を出て來ると、住三はふいとしたはづみのやうに成つて、赤坂の方に行く電車に乘つた。すると、彼は何とも名の付けやうの無い不安を感じた。暫く忘れて居た毒に近

づいて行くやうな、それに從つてその毒酒の味を自然と思ひ出して來るやうな……彼は强く躊躇するやうな氣持をしながら、電車に乘つて居た。

いつも降りる停留場で降りて、行き馴れた町を歩いて行つた。例の煙草屋の店の前に來ると、道から、少し見える二階の窓に氣を付けて見た。何となく、人氣の無いやうな感じが胸に浮んだので、

「留守か」と思ひながら、店に立つと、店の主婦が此方を振り向いて、

「あら、さあ何卒」と言つて身を開いて通すやうにした。

「居るんですか？」

「えゝ……」

住三は女がまだ二階の巣の中に隱れて居たかと言ふやうな氣持がしながら、梯子を上つて行つた。入口の障子を開けると、室の中で三人の女が、一樣に何が來るかと待ち受けて居るやうな鋭い目をして彼を見た。

住三の顏を見ると、お節はその目を落したやうにして

「まあ……」と言つた。唇の邊を、微に痙攣させたが、立つて、戸棚の中から座布團を出して、丁寧にそれを火鉢の傍に置いた。

「何卒……」と何氣ないやうに言つた。住三も他の女達を憚るやうにして默つて坐つた。すると、二人の女が傍から挨拶をした。住三は見馴れないものを覗くやうに、その顏をそつと見た。二人の女は挨拶

をすると、手持無沙汰らしくお節の傍に坐つた。二人とも、下賤な顔をして居た。圓顔の目尻の濁つた一人の方が、無遠慮に住三の顔を見て居た。住三が顔の表情を崩して、馴れた言葉で話しかけたらば、すぐ、げら／＼笑ひさうに見えた。住三は親しみの無い顔をして默つて居た。

「隨分待ちぼうけさせてね」と、お節が不意に言つた。住三はその顔をちらと見ると、女のかすれたやうな目が自分を見て居たので、

「ハ、、、」と意味も無く笑つた。女は眠むやうな目をして口を噤んだ。

住三はこの女達が坐つて居るのを見ると、不快でたまらなくなつた。て、默つて、又苦い、汚れたものの中に坐つて居るやうな氣持がして居た。と、頰に染が付いて居るやうに赤味がある、瘦せた方の女が、そわ／＼して立ちかけた。

「ちよいと……」とお節を呼んで、耳打するやうな事をして、

「じや、私、又明日來るわ。今の事はそれで可いね」と、頷いて見せた。お節はその顔を見ながらたゞ「うん……」と言つた。その調子が如何にも、この女に聰てものを言ふやうであつた。住三はついお節の顔を見詰めた。

その目を移して、圓顔の女を見ようとすると、女の目が、又覗ふやうに彼を見て居るのに逢つた。住三は目を反らしてしまつた。この無遠慮な目の前に坐つて居るのを思ふと、居たゝまらなくなつて來た。

その時に「じや、私、お暇してよ　お房ちやん、あんたは？」と瘦せた方が言つて、圓顔の女を一寸

突いた。

「私も……電車道まで一緒に行かうね」と言ふと、二人は住三に一寸挨拶をして立つた。そしてお節を見ると、今にもはしやぎ出しさうな目付きをして、無雑作に目禮をしてはしごの方に行つた。住三はじッと自分の不快な心持を堪へるやうにして、二人の後を見送つた。お節は自分をすつかり隠さうとするやうに、取りすました顔をして居ると、後から梯子を降りて居た。圓顔の方が振り返つて、

「あばよ！」と、つい取り外づしたやうに、戯た聲を出した。お節は思はず舌打をした。

二人が行つてしまつてからも、住三は默つて、堅く口を結んで居た。女も何か苦しいやうに、口を噤んで居た。

と、女は低い、沈んだ聲を出した。「何故こんなに來なかつたの？」

住三は苦い、眞面目な顔をした。「別に何故でも無い。」

「でもね、私……」女は媚びと、縋り付くやうな聲で言つたが、住三の心持は何か眞面目に考へて居るやうになつて居た。て、その女の顔をじッと見て居た。

女は、沈んだ寂しい口付きをして居た、幾日も一つ感情に浸つて居た後のやうに、鋭い、筋の立つた表情をして居る。

斯う言つた。「私は、毎日斯うやつてあなたを待つて居たのよ。」

住三は女が涙ぐんで居るやうな様子を見たので、何事か、女の周圍に自分の知らぬ事が起つたのではな

いかと思つた。て腑に落ちないやうな顔をして

「じや、今日來たからい丶じや無いか………」と言つて、暫く相手の顔を見て居たが、「今夜はだから、何處か面白い處へでも行かうよ」

女はものを言つて居る間、佳三の顔を見て居た。つと立つて彼の背を廻つて、窓の處に行つた。

「あ丶……つまんない！」と絞り出すやうな聲で言ふと、身體をねぢらせて、ぶら下るやうに窓に肱をかけた。そしてその上に顔を俯せてしまつた。

佳三は暫くそれを見て居た。そして女は泣いて居るのかと思つた。彼は容易い、眞面目な心持をしてこの日はこ丶に來たので、女が感情を摑んで投げ付けるやうにするのを、すぐには受取れなかつた。で、沈默が少しの間つゞいた。

その中に室が少しづ丶暗く成つて來た。と、女はふと顔を上げた。佳三を振り向いて見ると

「暗くなつたわね……」と言つて、その目でじッと男を見詰めた。そして、ぞろッとした歩き方をして、彼の傍に寄つて來ると、ぴつたりと坐つて、男の膝の上に俯向てしまつた。佳三はかッと心が怒つて來た。女を刎ねのけて立たうとしたが、お節はぐッたりして、疲れ切つたやうになつて居るのを見ると、その儘じり／＼しながら坐つて居た。

やがて、堪へられなくなつて「如何したんだ。」と言つて、女の肩をついた。女は顔を上げて、恨めしさうに彼を見た。その顔が、ぼんやりと彼の目に見えると、佳三は腹の底から苦笑した。

「オイ、もう暗くなるぜ」と言ひながら、女の肩を持つて起さうとした。彈力のある反動が、重くその腕に感じられて、女は力なく又、ぐたりとした。

「燈火、々々……」住三の聲が鋭くなつた。女はそつと顔を上げると、默つて室の中を見廻はした。

「燈火をおつけよ…… 僕は腹が減つた。」

「……何を食べませう？」女は眠りから覺まされたやうな、緩い調子で言つた。

「此處て今夜はお酒をお飮みなさいな……」

住三は唇を嚙むやうにして居たが、急にはつきりした聲て「のまう。だから何か食ふものをさう言つといて……」

すると、女は漸く身體をしやんとさせた。目がうるんで居るやうに光つて見えた。そして燈火もつけないて、梯子を降りて行つた。住三はその輕い足音を聞きながら、闇の中てじッと坐つて居た。

住三は自分の心の矛盾して居るのを鋭く感じて居た。今にもこゝを馳け出して逃げようとするやうに、心の中がむづ〳〵して來た。室は一秒づゝ暗くなつて行く……彼は黑い、何處か家と家との隅にある穴のやうな中に、自分が今、坐つて居るのが、如何にも不思議て、少しも腑に落ちない事のやうに思はれる……住三は思はず立ち上つた。

處に女は音をさせて梯子を上つて來た。手には火のついたランプを持つて居た。その光て二人は顔を見合せた。

ランプを懸けると、女は又倚り掛らうとするやうな、品をして

「如何なすつたの？……」と聞いた。佳三はこの燈火で、今の心持をふと消されたやうに成つて、そこに坐つた。

「早いね。」

「皆、下の女に頼んで來たの、私、今日はじつとしてあなたの傍に居たい！……」

佳三は女の方に身體を向き直つた。

「如何したんだ……一體」と女の方をしげ／＼と見た。

「如何もしない……何だか、私泣き度いのよ」

「いやだな。泣いちやいけないよ……早く酒でも飲むさ。そして少し浮れたまへ。」倒れかゝつて來るものを支へるやうにして言つた。

「あゝ、つまんない！……私はラブがしたいの！」

佳三は破れたやうに笑ひ出した。

「何を言つてるんだ……節ちやんは幾つだ、オイ」

「幾つでもよくつてよ。」女の目はまだ潤んで光つて居た。

やがて、酒も食物も來た。お節は戸棚から食卓を出して、それを火鉢の傍に置いた。そして自分は佳三が坐つて居る傍にひッたりと、身體を寄せて坐つた。甘へるやうに、少し倚りかゝつて居た。

卓の上にはこの近所の魚屋でした料理の皿が三つ四つ並んだ。何處かの家庭で永い間使はれて居たものであるらしく汚れた色をして居る食卓である。住三はそれに向つて居ると、自然と、何處かの貧しい家の中を目の裏に見て居るやうに思はれる。その貧しい家の中で育つたこの女の顔に寂しい、濁つた血の色が見えると思つた。彼はランプの光で見て居る女の顔が憐れに思はれて來た。自分を忘れて、心がその一つの事に集まつて、だん／＼しんみりと考へられるやうに成つて居た。と、女が斯う言ひ出した、

「今日ね、お房ちやんの處に手紙が來ましたの」

その語調に、何處か思ひ入つた處があつたが、住三は氣に止めないで

「お房さんてのは今の圓い顔の人かい？……あれは矢張、會社に出てる人か？……」

「えゝ、三人とも前の會社に居たんですの……そこに、今度新しく入つた人があるのよ。早稻田の卒業生ですの……その人が、お房ちやんに手紙をよこしたんですの。」

「ラブレター？」

「えゝ、それはいゝ手紙なのよ。私、先刻讀んで感じちやつたの……」

「へえ……此處にあるのか？」

住三は何處かで型のやうに若い馬鹿氣た感情を昂らせて居る青年の噂を聞いて、苦笑し度くなつたやうな氣持がした。

「えゝありますの……あゝ、」女は又思ひ出したやうに、輕く吐息をした。

「見せないか」、彼はふと言つた。

「見せるわ……だけど、默つてなくつちやいけなくつてよ。」と言つて、何か躊躇して居た。住三は別に氣乘のしないやうな顏をして、又酒を飮み出した。お節はそれをちらと見ると、

「見せますよ……」と言つて、手を伸ばして、火鉢の彼方側の抽出しを開けて、薄青い封筒に入つた手紙を出した。

「ね、一緒に讀みませう。」と言つて、身體を寄りかゝるやうにした。住三は、まだ氣の無い顏をして、女ぃ手の方に顏だけを向けて見て居た。女は、中から、太い、ぞんざいな字の手紙を出して廣げた。住三の目が自然と、その紙の字を讀んだ。

「世の中が何と言つてもいゝじや無いか。君の身分が卑しいと言つて、別に君が卑下する事は無い。おれを思つてくれ。おれと言ふ男を思つてくれゝば、おれは如何な事でも背負つて行く覺悟だ。男の心は恥と言ふ事に向つては、强い力がある。君がおれを思つてくれて居ると言ふ事を信じさへすれば、おれにはどんな力でも出て來るんだ。……」住三は、ふつと驚かされたやうになつた。

「よくお見せ」と言つて、お節の手から、その手紙を取つた時には、熱心な、一杯に張つた心持になつて居た。何となく溫い、豐な感情が、唇に當つて居るやうで、彼はじッと胸の中から、湧いて來るものがあるやうに思はれた。自然と、その手紙に同感して、純粹な、情愛が胸に滿ちて來た。心持が靜かな泌み入るやうになつてしまつた。

「この手紙を……」佳三は重くるしく、唾を飲み込んだ「先刻居たあの女に來たのか?……。男は、如何な人なんだ?」

「この手紙を書いた人?……お房さんと同年の人なのよ。さつぱりした人なんですの。」

「あの女には過ぎてる……」と佳三ははつきりと言つたが、涙が出て來るやうな氣がした。

「本當ね……お房さんはあれて一度御亭主を持つた事があるんですの。」

「…………」

佳三はじつと考へて居た。心持がすつかり透明になつて居た。そして、その胸にこの女の心を、ひつたりと映して居るやうに成つた。

「さうかなあ……斯んなにも人を思へるかな」と呟いた。と、

「私も、手紙がほしい。」と女が言つた。

「……」佳三は暫く考へて居たが「僕は駄目だよ。もう三十だものな。それに女房も子もあるんだ。とても、こんないゝ手紙は書けないよ。」と言ふと、佳三は自分に對して暗然とした。

「おれはもう駄目さ。こんな素直な心持なんか無くなつちまつてるんだ……」と繰り返して言ひながら、女の肩を抱くやうにした。

「だが、お前は何だつてそんな氣に成つたんだ?……」

「だつて、私この手紙を讀んでたら、もう淋しくつてたまらなくなつてしまつたのよ。」女は訴へるやう

に言つた。住三は女に取り縋られて居るやうな氣持がしながら

「さうかなあ……」と、彼は女の心持に向つて感激して居た。

卓の上の酒は冷えてしまつて居た。二人は思ひ耽けて居るやうになつて居た。住三は酒でかつとなつて居た心持が、靜かになつて居る中に、頭が重くなつて來た。眠りが襲ひかゝるやうに起つて來た。

四

次の日に目が覺ると、住三の枕元にお節が坐つて居た。

「今夜も、もう一晩來て頂戴。」と言つた。住三は目を覺ました瞬間に、如何にも心が落ち付いて居たので。安々と、それを受合つた。そして、仕度をして。會社に出て行つた。

例のやうに、自分の机の前に坐を取ると、彼は頭の中に煙の立ち籠つて居たのが、自然と消えて行くやうであつた。彼は目にがつしりした大きい木の扉を見た。白い壁を見た。そして忙しさうに働いて居る人達を見た。

「夢だ！……」と思はず口走しつた。前の夜、自分の思つた事などは皆夢だ。……それが今、白晝の廣い、晴々した室の中で色がすつかり褪せてしまつて居る。彼は又驚いた。その一言の戯言も言へないやうな心持で、その日を送つた。

午の時になると。彼は廊下の角で、庶務の室田と言ふ同學の男に行き逢つた。

「ヤア」と輕く挨拶をし合つたが、住三の目には生々した小肥りの強く緊張した男の顔が見えた。光つ

て居るやうな、彈力のある皮膚を見ると、彼は突差の間に自分の顏の黃色く汚れて居るのを感じた。そして恥ぢた。

その午後、會社を出ると、住三はすぐ家に歸り度くなつた。が、お節の今朝の顏が氣になつて、種々に思ひ迷つた後で、自棄氣味になつて赤坂に行く電車に乘つた。そして、煙草屋の店まで來ると、苦しい心を無理に押へるやうにして、二階に上つて行つた。女は薄暗い室の中に、當も無い顏をして坐つて居た。

彼の上つて來たのを見たが、他の事でも考へて居るやうに、踴らない黃色い顏をして見せた。そして細帶だけの、だらしの無い姿をして居た。住三はそれを見ると、入口に突立つた儘で、女を見た。

女は、ものうさうに、身體を伸ばして、坐布團を取ると、彼の坐る處に敷いた。彼は默つてそれに坐つた。女はその手で鐵瓶を持ち上げて、急須に湯をさした。女は何にも待つて居た樣子ではなかつた。住三はそれが自分の心に外れたが、却つてうるさくなく、氣輕な心持がされた。

二人は一言も口を聞かないで對ひ合つて居た。

「會社からすぐ來たの？」

お節は暫くたつて口をきいた。上目で男の顏をちらと見るやうにした。口の邊に黑い薄い陰が見える。

住三はまだ默つて居た。嗅ぎ馴れない臭が暗い室の中に一杯になつて居るやうに思はれた。

「如何したんだ？……」とやつと口を切つた。

「今夜は外に出よう。街でも散歩して、何處かで晩餐を食はうや。」
すると、女はだるく身體を動かして、言ひ付けられた儘に、仕度をした。
二人は街に出ると、當もなく歩いて行つた。自然と電車の通りに出たが、それまでには話もしなかつた。
「何處に行く？」住三は仕方なしに聞いた。
「何處でも」女は何にも思つて居ないやうに答へた。
住三は思はず五六歩あるき出した。
「では淺草にでも行くか……彼方に行くと燈火の付く時分だから、丁度いゝだらう……」と言ふと、その儘、そこに來た電車に乘つた。女も續いて乘つた。
電車が上野の下を行く頃に、車の中に燈火が付いた。住三は少し落ち付いた賑かな心持に成つて來た。彼は外の賑かな、種々な音と、燈火のざわ／＼して居るのが、心持よく心に映つて來るのである。
廣徳寺前で降りると、活動寫眞小屋の人波の中に入つて行つた。住三は賑かな明るい中に、紛れ込むやうになつて歩いて居た。雜踏した人の足音と、わや／＼と耳に來る聲の中で、彼は今迄の心持をすつかり忘れたやうに成つて居た。
やがて二人は公園の中の或る小料理屋の狹い室で、對ひ合つて坐つた。
お節は斯う言ふ家に來ると、すつかり取りすましてしまつて、味も品も無い顏をして居る。住三の目

には、たゞ瘦せた、艶の無い光つた顏に小さい目が何の表情も無く、じつとして居るのが見えた。面白味も、艶もぬけてしまつて、何處かそこらの性の知れない女とでも對ひ合つて居るやうな氣持がした、だが、彼は氣が輕いやうな顏をして居た。住三はその日は、お節の室に坐つて、濁つて澱んで居る水のやうに、だん〳〵移つて行く時を過すのを逃げ出して來たので、心持が輕かつたのだつた。彼は、お節のこの味も品もない姿を見て居て、自分の胸には何とも感じなかつた。

やがて、そこを出ると、仲店のまださう更けない賑かな雜踏の中を步いて出て來た。

その時には、住三はこの賑かな中にも飽きて居た。彼は如何かして、この儘女から離れやうと思つて、電車にも乘らずに、並木町の通りを步いて行つた。

「今夜は僕は歸るよ……」住三は不意に言つた。

「何故？……」女はさも〳〵だるさうな調子で言つた。

「何故でも無いが、まあ家に歸らう。では須田町まで送つて上げよう。」

「さう？……泊つてかないの。私、一人で歸るのは嫌だわ……」女はやるせ無ささうに言つた。住三は濁つた沼のやうな女の心持を感じた。そして、力無く步いて居る、その肩の邊が、如何にも淋しく思はれた。

「でも、今日は僕は家に歸る。」と言つた。女が洞穴の中の巢のやうな室に歸つて行くのを心に想像して居たのである。

て、ぶら／＼歩きながら厩橋(むまやばし)の方に行く中に、住三はふつと斯う聞いた。

「節ちやん。これからは如何するんだ？……君は何をして暮すつもりなんだ？」。

「私も、それを考へてるんですの……斯うやつて遊んでたつてつまらないし」

「て、今は如何してるんだ？……金なんかは」「……」女はすぐに返事しなかつた。「今は其方は一寸知つてる人があつて、すけて貰つてるんですが……」

「それは僕もさう思つてるんだが……」住三は女の背後にある男の顔を思ひ浮べて來た。

「それも、何時までもさうしてゝいゝのか？」と聞いた。

「私、兄弟の約束をした人があるのよ。……その」と言ひかゝるのを、住三は遮ぎつて

「それは何でもいゝが……」と言つたが、住三はふと言葉を切つた。心で、おれはこの女と斯う言ふ事を話し合ふ筈では無かつた。と思つたので、調子を變へて

「僕も少し位なら補助するよ。」と言つてしまつた。女は默つて居た。

「では今夜は途中で別れよう。それに僕は少し用もあるし……」

て、話を止めて停留所に急いだ。

住三は、女に別れて來ると、自分が女から逃げて來たやうに感じた。

五

だが、住三は、或る臭ひが、だん／＼身體に滲みて來たやうに、お節の事に心が集つて來るのであつ

た。女の息と、それから、室の色とが一つになつて、自分の心にじつと燒け付いて居るやうに思はれて來た。彼は午后になつて、會社の門を出ると、必ず物足ない淋しい心持が、理由なく心に起つて來る。そして、それと同時に、舌にある濁つては居るが酒の味が殘つて覺えて居るやうに、女の室を思ひ出すのてあつた。

そしては、住三は赤坂に行く電車に乘つてしまふのてある。

二階の一室は、だん〱貧しく成つて來た、お節は「會社」を止めてから、もう三月經つた。室の中がすつかり枯れてしまつたやうに成つて居た。住三はそれに氣が付くと、女の爲めに種々な計畫をし始めた。

女は始終、倦んだ屈託した顏をして日を送つて居た。面白い遊び一つ出來ないて日を送つて居た。住三はこの室に來ると、女と一緒に外に出るのを嫌がつた。そして女の屈託した顏を見ると、胸の中てじつと燒けるやうな顏をして、

「何をさう屈託してるんだ？……何處かに遊びに行き度いのか？」と聞く。

「そりや行き度いわ。」女はそつと笑つたやうな顏をして見せた。

「行けばいゝじや無いか？」

「お金が無いわ。」

「その位な金なら、上げるさ。」

「じや頂戴。ね、今度の歌舞伎に……」

女がこんな事を言つた。すると住三はうなづいて居たが、それをしてやりもし無かつた。彼は心の中で始終、

「この女を如何するんだ？」と言はれる聲があるのを感じた。「一生背負つて歩くつもりか」と言はれるやうな氣がする。彼はお節とも一つ家に住み馴れて居るやうな氣持がされるのであつた。それで、心の中では如何しても考へて決めなければならないやうに思はれて居た。お節は此頃何時來ても、汚れ目の立つた、銘仙の袷を着て居た。室の中にも新しい色をして光つて居るものは一つも無かつた。

この日も、住三が此處に來ると手すさびのやうに成つて居る、煙草の箱には煙草が無かつた。それを見ると、お節はさつと赤い顔をした。

「下に行つて貰つといてよ。」住三は何氣なく言つた。

「でも……」と女は口をつくんでしまつた。住三は妙な顔をして、女を見て居たが、ふと思ひ付いて、金入れを出して、默つて渡した。女はそれを受取ると下りて行つた。

「お前、困るのか？」煙草の袋を持つて、上つて來た女を見ると住三はすぐ聞いた。すると、「えゝ……

……だけど、もうぢきに如何かなるから……」と言つて、女は彼の顔を避けるやうにした。

「それでも困るだらう？……お貸し、金を」と言ふと、女は帯の間から、今の金入れを出した。住三はそれを受取つて、開けて見たが、すぐ眉に皺を寄せた。

「何だもう入つてやしないや。」と自分て呟いた。

「じや、明日如何かしよう。これつぱかりじや仕樣が無い。」と言つて、眞顏になつて女を見た。住三は心の底に腐蝕して來るやうなもののあるのを感じながら、女のこの生活を見て居た。

この春の暮れる時分に、誠子は二番目の子を孕んだ。

住三はこの頃、頭の中が爛れたやうに成つて居る。その爛れた處に、一つ黑い影が映つて、それから腐蝕して行くやうに、お節の事が心に燒き付けられて居た。

そして、彼は次第に少しばかりの友人からも離れて、この女の室と自分の家との間だけて暮して居た。

誠子の顏には、愈々はつきりと陰が付いて來た。夫は、もう如何な事をして居ても、少しも自分に話さない。そして、家に寢ない日が次第に多くなつて來る。その度びに、女の心は新しく失望を感じさせられる、だが、誠子は夫の顏を見ると、何時ても何事も起つて居ないやうに、……外てする事とは、自分と全く關係の無いもののやうな顏をして居るので、何も言ひ出す事が出來なかつた。夫の顏には、二つの面があつて、それを內と外とて、別々に冠つて居るのかと思はれる程、泊つて來る事について、白を切つて居た。

誠子はその夫と、この夜も同じ室に眠つて居た。この夜は、住三が二晩續けて泊つて來た後てあつたので、女は何となく心丈夫に、安心したやうな心持がして床についた。

が、目が冴えて、如何しても眠れなかつた。床の中てじつとして身體を橫にして居ながら、目を覺ま

して居ると、夫は次第に深い眠におちて行くらしい。誠子はそれにじつと耳をつけて居た。すると、自分もついうと〳〵と眠つたと思つた。と、
「節ちやん〳〵〳〵！」と言ふ夫の聲が耳に入つたので、驚いて目が覺めた。
「節ちやん！」夫はさも感情が昂まつたやうな聲をして又呼んだ。
「帶を買つて上げようね……」と言つたと思ふと、寢返りをして、長い、息をついた。誠子ははつと思つた。全身が引き締められたやうで、身體に輕い熱が起つたやうに感じた。
と、住三も目を覺ました。
「誠子、おれは何か言つたか？」と聞いた。
「えゝ……」
「……そうか……」と言つたなりで、住三は口を噤んだ。
「ね、あなた……」誠子は追ひかけて、何か言はうとしたが、住三は
「う、う」とうるささうに答へたので、默つてしまつた。
住三はこの時に、心の底まではつきりとなつた。自分の胸に、お節が腐蝕して居るやうに成つて居るのを、明かに感じた。そして、自分が次第に何かの力で犯されて、爛れて居るのを思つた。彼は心底、自分が悲しいものに思はれて來た。次の日には、しかし又赤坂に行つた。

六

若葉が伸びる頃になつた。

誠子は、頬に熱て乾いた血の色が上つて見えて居た。目が濁つて、瞳がものを見詰める焼點が、何となく一つに集らないで、力の枯れたやうな表情をして居た。家の中が、艶がすつかり無くなつて居るやうになつた。住三は自分の書齋に坐つて居ても、しつとりと落ち付いて、外の或ゆる事を忘れさせて居るやうな心持が無くなつてしまつた。

それに反して、屋根裏のお節の室に、住三の心持が住み付いて來たやうになつて居た。

この頃になつて、住三はお節の室で、折ふし、種々な人に逢つた。

或る時は、二階に上つて行くと、丸髷の壊れかけた引つかけ帶した小柄の女が、窓の下の處でお節と向ひ合つて居て、鼻の小さい、平(ひらつ)たい顔を彼の方に向けた。そして、言葉をとぎらせてしまつた。お節は彼に目禮をすると、その女に小聲で

「いゝんだよ……」と言つたが、女は話をそれなりにしてしまつた。

お節は住三に坐布團を出して、又坐にもどると、何か考へ込んで居る樣子をして居たが、その女に一寸目くばせをしてたつと、二人で上口の處に立つて、十分ばかり囁き話をした。それがすむと、女は降りて行つた。

「誰?」住三は聞いた。お節は男の顔をそつと見て居たが、

「私の姉さん……」と言つて、その瞳を動かさずに、じつと住三の顔を覗つて居た。住三は、それを

見て居て、ふと女の可愛い心持に觸つたやうに思はれた。

「東京に居るのかい？」

「えゝ……四谷に居るんですの。職人の女房なんですもの……」

女は嫌なものを振り返つて見るやうに言つた。

或る時には、四十七八に成る顴骨の大きい、口の廣い、田舍から來たと言ふ女に逢つた。その女と向ひ合つて居ると、お節は如何にも他々しい様子をして居たが、それがお節の生母であつた。その女の事については、お節は堅く口を噤んで居た。

或る時には、その姉も、前に居た友達の女達も交つて居て、外に若い男が二人て、きやつきやつ言つて居る時もあつた。

斯う言ふ人達には、住三は二月に此家に來始めてから、初めの二月許りの間には、一度も逢ふやうな事はなかつた。彼はそれ迄には、お節は全く巣にこもつて居る全く孤獨な獸を見て居るやうな心持がして居た。その誰も知らない巣の中に、種々な人が入つて來るのを感じた。

或る日、例のやうに住三が坐つて居ると、下の主婦が慌だしく梯子を上つて來た。

「井川さん。」と言ふと、何か目くばせをした。お節は立ち上つて、梯子の方に行くと

「あら……あなたてしたの？」と、取りすました聲をした。住三はその梯子の方を見て居た。

と、ずし〳〵音をさせて三十二三の男の顔が上り口に見えた。住三はその顏と見合せると、その突差

の間にふと、兼ねて待つて居た人が、そこに出て來たやうに感じた。
「この男だな…………お節の顔の背に始終立つて居たのは…………」と思ふと、じつとその心が一つのものに集中して來るのであつた。
男は、住三と斜めに向ひ合つて坐つた。身體の肥つた、白い脂の厚さうな顏で、鼻の下に短い髭を生して居る。坐つてからも、住三を憚つて、暫くの間默つて居た。
「お珍らしいわね」
お節もてれかくしにものを言つた。
「あゝ、久しく京都に行つてたもんだから………」
「あらそうですか？……………」
「それて、お土産を持つて來たんだ……………」
そのもの言ふ度に、男の唇の端の處が、ピクピクッと動く……そして、何となしに、住三を尻目にかけて見ようとする。住三は澱んで居たこの室の空氣を俄かに、振動されたやうに思つた。
て、ふとはつきりした聲を出した。
「僕は失敬しませう。節ちやん前島の居た家に行つたら、僕からも宜敷くつて言つて下さい」と、口から出る儘に言ふと、その男に目禮をして立たうとした。心ては發作的ににつと笑ひ度かつた。それをお節は一寸慌てた顏をしたが、落ち付いて

「さうですか。大變、如何も失禮しました。」と言つて、丁寧に挨拶をした。梯子の下まで送つて來ると、住三の袂をしつかり掴んで

「明日！ね、明日の晩きつと」と言つた。住三はたゞ頷いて、外に出た。

歩きながら、彼は口から一句、自分でも分らないがこの心持を表はした言葉が雀躍して飛び出して來さうに思はれた。

七

二三日の間は住三はお節の處に行かなかつた。その中に、又夕方に成ると必ず、そこに來て居るやうに成つた。

この日は日曜日であつた。少し曇つて、雨が來さうであつた。午後になつて、住三は二階に上つて來ると、心が澱み切つて居るやうに何にも鮮かな氣持がなかつた。女は青い顏をして、壁にもたれかゝつて居た。彼が入つて來るのを見ると、神經の疲れて居るらしい目付きをして、じッと見た。住三は女から少し離れた處に座ると、張り合ひの無ささうに、じッとして居た。

「今日は何處かにいらしつたの？」

女が仕方なささうにものを言つた。

「何處にも行かないよ。……何だか、だるくつて不愉快だ。」と言ふと、住三は身體をそこに投げ出して居るやうな心持がして居た。

……二人とも、倦んだ心持がして、そこに座つた儘動かなかつた。暫くすると、お節は「あゝあ……。」と言つて、身體を長くしてしまつた。疊に顏を押し付けるやうにした。その顏を住三の方に向けて、薄目をして居る。

黃昏が迫つて來るのであつた。住三は何時となく、たゞ女の顏をぼんやりと見詰めて居た。女は束髮にした髮が亂れて、ぼらぼらに成つて、それが疊の上に煙が散らかつて居るやうに艶が無かつた。二人は倦み切つて居た。

暫くすると、室は眞暗になつてしまつた。お節は漸く身體を起して、ランプに火をつけた。そして住三の顏を見て居たが、默つて彼の膝の處に座ると、ばたと身體を長くしてしまつた。

住三は、女にもたれかゝられても、その儘にして、ぼんやりして居た。彼はその時に、神經的に不思議な鋭い臭がして來た。狐の毛と皮との奧から滲み出して來るやうな臭である。彼は、それを暫くこらへてじつとして居た。女は死んだやうになつて居た。

彼は、その臭をかぐと、身體に反射的に力が籠つて來た。

不意に膝に倚りかゝつて居る女を、突き飛ばすやうにした。女は驚いて

「何するのよ。」と言つた。彼はそれに應じて「歸る。」と云ふと立ち上つた。

「何故?」女は長くなつた儘て、じつと彼の顏を見て居た。住三はその目までが異樣な光を帶びて居ると思つた。

て、「歸るよ。」とはつきり言ふと、帽子を取つて、急いで二階を下りてしまつた。

その晩、佳三は賑かな町をさまよつて居たが、その獸の巢の臭が、鼻について居てたまらなかつた。

それて、益々疲れ更けてから家に歸つて來た。

家に入ると、誠子は子供の床の中に入つて眠て居た。彼はその枕元に立つて、女の寢顔をつくづく見て居た。暫くその衰へた顔を見て居たが、佳三には寂しさが押しよせて來るやうに思つた。

女を呼んだがすぐは目を覺さないので首筋の處へ手をかけて、搖り起さうとすると、「ひい……」と聲を立てゝ、誠子が泣き出した。

「痛い、々々、」誠子は傷口にても觸られたやうに、身體を慄はして居る、佳三はそれを見て驚いて手を引いた。そしてじつと女の顔を見守つて居た。

と、「あゝ、寒い!」と言つて、女は目を覺ました。佳三の居るのを見ると「あら、あなたてしたか?……私、夢を見てたのだと思つた。」

女の瞳は開いて、力が無い……

(完)



離魂

田村とし子

夕方に、花柳の師匠の家から、今日お久の休んだのを心配して見舞ひを頼んでよこした師匠の言傳に茂吉がよつた。茂吉は門口に立つてゐて中々入らうとしないで、母親のおひろが何か云ふ度に、

「えゝ。えゝ。」

と挨拶をしてゐるのが聞こえた。

お久は、いま床の中で眼を覺ましたばかりだつた。何所か重たい氣分がまだ瞼の上にふさがつてゐて、起きともないのだつたけれども、「それぢやあ、宜しくつて歸そうね。」

とおひろが此所へ聞きにくると、お久は何となく茂吉に逢つて見たくなつて床をでた。

赤のはいつた棒縞の羽織を引つかけて、お久は少しふら〳〵しながら、やつと床を出たやうなあどけない弱々しさを、曳きずつた裾のあたりに見せながら茶の間の方に出た。

茶の間にはもう電氣が點いてゐて、外の明りに壓されて羞らふやうな風情をもつたその薄い光りが、蒼い水の底を透かしてゐるやうな夕暮れの色の鏡のおもてから、お互に靜な色をうなづき合はせてゐた。

お久は其室をぬけて入り口のところへ出て行くと、茂吉は格子の傍に引つ付くやうにして、袂の振りを此方へ向けながら横向きになつて立つてゐた。そうして爪で格子の棧へ渦巻を描くやうな事をしながら、頸を曲げてその自分の貝爪のところをぢつと見詰めてゐるのだつた。

「茂ちやん。今日は。」

お久はがつかりした樣に笑ひながら、胸から先きを前へのめらせて然う聲をかけた。茂吉は矢つ張り爪の先きを格子の棧のところへ當てた儘、顏だけ此方へ向けて、何だか遠慮らしくお辭儀をした。

「どうして病氣になんかなつたんでせう。」

と云つて、考へごとでもする樣にその顏を俯向けて、着物の袵の端を片方の指で摘んだりしてゐた。

どうしても上からないと云ふ茂吉を、お久は女中のおうめにその手を引つ張つて貰つたりして漸く坐敷へ上げた。茂吉は靑い色をした羽織の紐をいぢりながら皆に引つ張られる儘に任せてゐると云ふ樣な、人の玩弄になりつけてる柔らかな物腰てゐた。お久はこの友達のすぐには逃げて行かない用心に、兩方の袖でしつかりと小さな身體を押へてゞも置きたい氣がしながら、病床のその儘な奥の座敷へ連れて來

た。そうして茂吉の指と自分の指を綾にくませながら何と付かず立つたりした。

　おひろが茂吉に

「ゆつくり遊んでおいてなさいな。」

と聲をかけると、茂吉は羽織の襟をこきながら後へ拂つてから、丁寧に兩手を突いてお辭儀をした。

　茂吉は今日喜撰の稽古で、さん〴〵お師匠さんに叱られたと云つた。淺黃繻子の襟の少し出た襟付と、その二た重に筋のついた眞つ白な腮とが可愛らしい態を作つてゐた。そうして、

「えゝ。ほんとにねえ」。

と云ふ返事をする時は、薄い唇の口をわざと大きく開いて、片々の手で一寸自分の頭を撫でるやうな、十二の子供にしては大人染みた所作をした。茂吉は背を屈め込んで、わざとらしく小さく縮こまつて座つてゐるのだつた。

　おうめが來て電氣をひねつて行くと、茂吉はその色白な美しい顏を上げて、電氣の光りを眞面にぢつと見詰めながら、お久の顏を見てにこりとした。

　その鼻の高い、眼に少し險をもつた、引緊つた顏から、この子の癖のだらしなく下唇を下げて笑つた面影が、ふとお久の胸に釣合のとれない様な感じを殘した。お久は然うともはつきりは自分で意識はしないのだつたけれ共、その好い容貌の顏立の中から、何か缺點を見付けたやうな人の惡るい事をして了つた心持がして、お久は茂吉に濟まない事をしたと思つた。それで目を外らして俯向きながら、自分のは

だけた胸の下から桃色の襦袢のはみてたしどけない襟の合せ目を見たり、悪戯のやうにその襦袢の胴をもつと引つ張りだしたりしてゐた。

何となく蒲團の中のぬくもりの甘つたるい匂ひが、まだ自分の身體のまわりに泌みついてゐて、時々それが肌の匂ひと絡みあつてなつかしく仄のりとお久の俯向いた胸の内から通つてゐた。お久はその匂ひを臭ぐと、丁度、たんば鬼灯の坊さんを指の先きで揉んでる時のやうな他愛のない氣になつて、誰にでも甘へつきたい心持になるのだつた。

この頃のお久にはよくこんな事があつた。自分の色の白い、先きの丸い手の指をしみ〴〵と眺めて、自分ながらそれが何とも云へず可愛らしくなつたり、滑つこい柔らかな自分の腕の皮膚などをぢつと何時までも口の中に含んでゐて、その溫い舌の先きの唾に蒸されて發散してくる肌の匂ひを、お久は自分でなつかしいものに感じたりする事があるのだつた。

お久はふいと其樣いたづら事を思ひだしたので、茂吉に極りが悪るくなつて赤い顏をした。

お久はまた自分の指と茂吉の骨つぽい小さな指とを組み合はせて、茂吉の膝の上に自分の肱を突きながら、その濡れた唇の上を、右の人差指の先きで點を打つやうに一寸突いたりした。

茂吉は擽つたかつたと見えて、自分の掌て唇の上を痒そうに擦つてから、あどけない光りを眼の中にいつぱい漂はせて、お久の顏を見まわす樣にその瞳子をくるりとまわすと、瞼毛に小波のやうなしほを作らせて笑ひ顏をした。

「茂ちやん。」

お久は然う呼んで見た。

お久と茂吉は花川戸の師匠の家でも、毎日は顏を合はしてゐないのだつた。それに茂吉は父親の半五郎に連れられて時々田舍へ興行に出かけるので稽古も續けてはこなかつた。師匠へ通ひだすやうになつても茂吉は公園から稽古にくる雛妓たちに交ぢつてゐて、堅氣な娘のお久とは然う馴染みではなかつた。

茂吉は緞帳役者の悴だと云はれてよくみんなに苛められるのだつた。そうして茂吉の身體が何所となく臭いと云つていやがられた。

その臭ひは、丁度夏の頃に腐つた食物に染みてる汗のねばりを思はせる臭氣だつた。張り物の胡粉の臭ひにも似てゐた。お弟子たちは茂吉が傍にくると、わざと袖口で鼻や、口をおさへて笑つた。

「お前さんの身體には何がくつついてゐるんだらうね。」

人の惡るい藝者たちは然う云ひながら、茂吉の裾をまくる樣な惡戯をした。お久もそれを聞いて、茂吉の傍に行つてわざ／＼鼻をだして嗅いて見たりした。けれどもそんな時よりは、その日の都合で一所に稽古に立つてる時などに思ひがけず妙な臭氣が風に伴れて漂つてることがあつた。

「茂ちやんのにほひがする。」

お久は然う思つて茂吉の顏を見るのだつた。お久は別にそのにほひを厭だとも思はなかつた。そうし

てその臭氣のある茂吉の身體に、お久は癇の起つた小供のやうに手を觸れないではゐられなくなるのだつた。

「久ちやん。茂ちやんの臭氣がうつりますよ。」

お久はみんなから然う云はれて、顏を赤くすることがあつた。

茂吉は人の中に交ぢつて物さへ云へば、遣り込められると云ふことを知つてゐた。それを云ひ返して、やんちやを云つても、自分の身分では通らないと云ふ事もちやんと知つてゐた。だから茂吉は、父親の半五郎が人の前に出る時のやうにいつも自分の身を縮め込んで、唯、

「えゝ。えゝ。」

と云ふより他の挨拶をした事がないのだつた。

「おれ達は乞食藝人だ。」

父親に然う云はれる通り、茂吉も自分は乞食藝人の子だと云つて人の前に坐つてゐる樣ないぢらしさを持つてゐるのだつた。幼い頭ではそれ迄判然とは考へてゐるのでもないのだけれ共、少しても退け身のものは直ぐ爪はぢきをしやうとするかうした仲間同士の卑屈な感情が、茂吉を苛め〳〵して、自然と誰にでも媚びつかうとするいぢらしさを、茂吉はその小供らしい無邪氣な心の上に始終漂えてゐるのだつた。

かうして誰の前にても大人しくする樣に、茂吉はお久の前でもいぢらしげな眉付を見せてゐた。お久の

戯れる手の蔭に人形のやうになつてぢつとしてゐた。お久は茂吉の身體の何所に手をやつても、茂吉が體も動かさずに大人しくしてゐるのがおもしろくて仕方がなかつた。そうして、裸にされた人形がまた着物を着せて貰ふまで、横にても仰にても抛りだされた儘になつて轉がつてるのをよいと見付けて、可哀想になつた時のやうな心持て、お久は茂吉の白い額を見てゐた。

「茂ちやんと仲好しになりたいわねえ。」

「えゝ。」

お久は茂吉の顔に兩手をあてゝ、その手と手の間に挾んだ茂吉の頰を、ぢつと締めつけながら、だん〳〵に自分の前へ引きよせてくると、茂吉の額と自分の額とを押付けて見て笑つた。

「ひとが寢そべつてゐるところ、用さあある來とらへと、二階さあ打つちやげて、こりやまあ何たるところだあ。何所もかもお光り申しておしやらくの櫛さあ見るやうに、塗りこべつた簞笥さあ……。」

茂吉は自分の顔を、お久の手で掬はれるやうにされた儘、早口てこんな臺詞を云つた。

お久が笑ひながら手を放すと、茂吉は後へ手を突いて、あたりをきよろ〳〵見廻すやうな仕科をした。

茂吉は思ひだした樣に、袂の中から起き上り小法師を出してお久に見せた。赤い繪の具て目隈をとつた暫の冠りものが目に付くとお久は手をだした。

茂吉は乾きかけた竹の裏の松脂を、自分の息てあたゝめてからそれをお久の膝の前におくと、起き上り小法師はもんどりを一とつ打つて、冠りものゝ取れた下から目玉の大きい小さな張子の役者の顔が、

お久の方を面と向いてひよつくりと現はれた。お久がそれを取上げて暫の冠りものをかぶせてゐる内に茂吉はもう一とつ、今度は傘の冠りものを出してお久にやつた。冠りものを取ると、下から紫の鉢巻をした助六の顔が出た。

お久は代り〳〵幾度も引つ繰り返さして笑つた。竹がもんどりを打つ時に、冠りものゝ取れる拍子につれてかちやと云ふおどけた可愛らしい、惡戯々々した音のひゞくのが、お久には可笑しくて堪らないのだつた。

お久は少し喧噪ぎすぎて、今の笑ひのあと、急に目の端の釣れる輕い目眩ひがした。お久は夜着の厚ぼつたい袖の上に片方の手をづいと延ばして寄つかけると、其の上へ頭を乘せて興ざめた幽な笑ひを殘した目で茂吉の顔を見てゐた。

「上げませう。」

茂吉は然う云つて、起き上り小法師の冠りものをちやんと被せると、それを枕元の藥瓶の乘つてる丸盆の上に二たつ揃へて並べた。茂吉が片手を疊の上に支いて、腰を立てながら片手を前の方へ出した時、お久はその八つ口から手を入れて、雲に龍を墨でだした友禪の襦袢の長い袖を引つ張りだしたのだつた。そうして其の袖を自分の前の方へ手繰つてくると押繪の羽子板を抱くやうにしてしつかりと兩方の袖の中へ抱へこんだ。

「久ちやん。」

茂吉は立つたまゝ然う云つた。お久は蒲團の上に半分身體をのせて突伏してゐた。右の方へ長く流れた袖の振りの蔭から、お久の丸い、人形の土のやうな白さと滑かさを持つた膝頭が少しばかりはみ出てゐた。

「えゝ。」

お久は顔を上げないで返事だけした。横に仆れた島田の前髷がお久の點頭くはづみにがくりと動いた。お久の蒼白い虚弱な體質の血を想はせるやうな、ぞべ糸の様にほそ〳〵した赤い毛が、お久の薄い耳朶の上にかぶさつてゐて、其れがお久の身體の動きと一所におのゝき〳〵した。

「久ちやん。」

茂吉はまたお久を呼んだ。顔を仰向けて、青い色の羽織の紐を茂吉は癖らしくいぢつてゐた。

お久は袖の中から半分顔を上げて、茂吉の方を見た。赤くなつた眼の端が涙を含むほどお久はいきみ笑ひをしてゐるのだつた。

茂吉が歸つてしまつてから、お久はまた床の中に寐てゐた。日本橋の店から歸つてきたお久の父親が、

「久てうや。」

と云つて此室へ見に來た時、お久は電氣の光りが目に泌みて痛いと云つた。父親は電氣の球に淺黄色をした袋を持つてきてかぶせた。

お久はその袋の下に下がつてる赤い色の小さな房を眺めた。その房の陰に茂吉がかくれてゐる氣がして――お久には忘れられなかつた。

櫻の花片が散りながら、重なり合つたりはなれたりする様に、自分の指と茂吉の指が絡んだり縺れたりしてゐる感覺がいつまでもお久の指先の神經にひゞいてゐた。

夜一と夜、溫いやはらかい夜着のうちに、しつくりと包まれてゐたお久の靜な眠りは、丁度、飾り鞠のかゞり糸をだん／＼とほぐし初めたやうに解けてきて、そうして今、自然と目が覺めたのだつた。

目をあくと、お久はすぐ寐坊をしたと思つた。枕元の窓の戶はまだ開けずにあつたし、椽側の戶もこの座敷の前のところだけ二三枚引きのこしてあるので、座敷の內はまだ夜明けがたのやうに薄暗いけれども、何となく、明るい外の光りが遮られた雨戶を通して何んな隙間からでもこの座敷の內を照らさうとしてゐた。

お久は窓の戶の節穴から漏れてくるくれなゐの光りの線を見上げた。そうして急いで起きた。睫毛の長い二た重瞼の上かはが、べにて一とすぢ描いたやうにぽつとりと腫れてゐた。

お久は座敷の隅の衣桁に引かゝつてゐる自分の平常着を外してきて、それを足下におくと、ふわりと寐衣を脱いでしまつた。

うなだれた白い花の蔭を見るやうに、丸い肩から脊へかけておぼろに白い、はつきりしない肉の線が、しばらく薄暗い隅に屈まつてゐたが、やがてその上の半身と下の半身とが紅いものに包まれていつて、そうしてお久の括り腮の下に、折熨斗の合せ目のやうにきつちりと緋縮緬の襟がかさなり合つた頃は、屈んだり延びたりする度に着物の兩方の長い袂が藻のやうに搖いてゐた。

お久は例の板締めちりめんの帶を探したけれども邊りになかつた。お久は其所にかゝつてゐた母親の黑繻子の帶をはづして、それをほそい自分の身體に幾重もまわした。そうして脊中の上の方へちよきつと締め上げてむすんだ。

あかい襦袢の袖が長い着物の袂のなかから落ちてゐた。お久はその袖を振り散らかすやうにして素足で、ぴた〳〵と椽側を踏んだ。椽をまわつて眞つ直ぐに勝手の方へ行かうとしながら、茶の間の前を通つた時障子の硝子から室のなかを覗いて見た。もう髮結が來たのだと見えて、結ひ立ての丸髷を合せ鏡してゐる母親の姿が射し込む日光を遮つた鏡臺の側面から見えてゐた。肩へかけた白い布もとらずに、長い頸脚をあめのやうに捩ぢ向けた母親の肩の恰好がお久の目にうつつた。

「起きられたの。」

母親は優しい聲で然う云つて此方を向いた。水淺黄色のてがらが銀のやうにちらりと光つた。

臺所へ出ると、髪結のお初は女中のおうめの髪をとかしてゐるところだつた。お初は、

「寐坊ですね。」

と云つた。そうしてお久の髪を見た。

「こんだは大層おこわし成さいましたね。」

とも云つたけれども、お久は默つてゐた。お久の島田は横になつて前髷が毛筋で割つたやうに幾つにも割れてゐた。人形振りのお染の頭髪のやうに、結綿にかけた緋鹿の子のきれが片端だけ、綁づいて潰れた髷の上に落ちかゝつてゐた。

お久は今ふいと、寐坊をしてゐた自分を外ち除けにして、てんでに油の匂ひをさせながら自分より先きに髪を結つてしまつたと云ふことが、何となく口惜しく、袂の先きで其邊のものを叩き立てゝもやり度い程に自裂度くなつたのだつた。上手なお初に平氣な顔をして、臭氣のする髪をとかして貰つてゐる下女の蒼く膨れた横顔も、お久は爪彈きしてやりたい様に憎らしかつた。それて態と誰とも口を交かないてゐた。そうして竈の角のところに肱をかはせて、お釜の蓋の上に引窓から落ちてくる日の影が菱形になつて、だんだらを拵へてゐるのを茫然と見詰めてゐた。

その日の影が丁度煠て玉子の黄味をながした様な色だつた。お久はその色をぢつと見てゐるうちに何うしたのか自分の臉の内がはの方でぐる〳〵と何かゝ回轉つたやうな氣がした。それと一所にお久の胸のなかが、何か込みあげてくる様にいつぱいになつた。お久は自分の眼を傍へ移そうと思つて他を見た

そこには竈の磨き上げた銅壺の銅がきら〳〵と光つてゐた。お久はその光りに觸れると、

「あつ。」

と云つて痛いものにでも突かれた樣な叫びを立てゝ、竈の角に突つ伏してしまつた。それを誰も知らなかつた。

「吐きさうなんだよ。おうめ。おうめ。」

二人はその聲に驚いて、同じやうに後を振り向いて見た。お久は立つてゐられなくなつて上げ板の上に坐つてゐた。

おうめは金盥をお久の顏の下に持つてきて、その脊中を叩かうとするとお久はいけないと云つておうめの手を拂つた。金盥のなかには少量の黃いろい水がたまつただけて、外にはなんにも吐かなかつた。

お久はぢつと坐り込んだまゝ、金盥より少し前の方の上げ板の上を見つめてゐた。黑檀のやうに拭き込まれた板の色の、無地の艶が、お久の眼に快さと落着きを投げてゐた。かうして沈つとしてゐる内に今迄の苦しみがその板の色の蔭にだん〳〵と退いてゆくのかとも思はれた。

「ほんとうに眞つ靑ですよ。」

おうめが然う云つた。母親が驚いて臺所に出てきた。お久はまた先刻の寢床まで連れてゆかれて、大切に寢かされてしまつた。おうめが窓の戸を開けはじめた音が、横になつたお久の胸に鋸をあてられる樣に、軋んだいやな響きをかよはせた。

醫者がくるまでお久は何も知らずに眠つてゐた。

わや〳〵と云ふ物音が遠くの方から次第に近づいて來たと思ふやうな夢と現の間に、女の聲の終ひだけをはつきりと意識してお久は目を覺ました。その語尾の響きが目が覺めてからも、ずうんとお久の耳の底をいつまでも搖ぶつてゐた。

母親と若い醫者が、お久の病床の傍に坐つてゐた。そうして醫者の冷めたい手がお久の左の手頸を輕くつかんでゐた。お久は自分の口の中の上顎と、眼の內がはとだけが、火を啣へてゐるやうに熱くなつてゐると思ひながら、醫者に手傳はれて自分の帶をそつと解からうとした。

母親のおひろが、それが自分の帶なのに氣が付くと醫者の後からお久の方を見て笑つたのだつた。お久も少し笑つた。お久には今朝それを締めたときの記憶が、もう二た月も三月も前のことの樣に、遙かなことに思はれてならなかつた。

「あなた位のお年の頃によくある眩暈です。矢つ張り血の道見たいなものなんです。」

然う云ひながらお久の顏を覗き込んで醫者は微笑した。この男の息がお久の頰にかゝつた時、お久は長い睫毛の下でその娘々した眼の光りをおよがした。醫者はお久が何時頃から身體が變つたのかと母親に聞いたりした。

母親のおひろはそれを聞くと自分の事のように顏を眞つ赤にして、小さな聲でそれを又お久にたづね

たりした。お久はあわてゝ袖で顔をかくして默つてゐた。そうして幽に頭を振つた。絹らかい着物をしつくりと重ねた醫者の胸が、仰に寢てゐたお久の顏の前にふさがつた時――、その冷めたさを含んだ絹の表の袂の先きがお久の開いた胸の肌に幽に觸れた時――、お久の神經は糸をひかれたやうに柔らかく震へてゐるのだつた。

この若い醫者が坐を立つた時、お久は急に自分のまわりから賑やかなものを奪つて行かれる樣な心淋しい氣がした。疊を踏んでゆくその眞つ白な足袋の色を、うつとりした眼に懷かしいものを拾ふやうにして一と足づゝ追つて行つた。

お久は物思ひらしくぱつちりと眼を開いて一と所をぢいと見詰めてゐた。好きな役者の美しい扮裝に醉つた瞬間の瞼毛のおのゝきの樣に、その奇麗な眼許が何時までもあこがれの潜みの陰にしばたゝかれた。お久はおうめが來たらひゐきの人の寫眞を集めた寫眞帖を持つてきて貰はうと思つたりした。然う思つた拍子に先刻のおうめの髮の臭ひがまたお久の鼻を衝いて、お久はむかつく樣な厭な心持になつた。

お久はうつら〳〵してゐた。枕元の窓の障子に日がいつぱい射してゐるので、目を閉いてもその日の影が瞼の底にうつつてきら〳〵しかつた。眠りの中までその日の影がさしてくる樣であつた。こがねの樣なその日の色の影が夢の底まで透き通つてきては、暗い眠りをちら〳〵と搖ぶられる樣な輕い妨げをした。お久は落着かない眠りの破れる度に、その日の影がうるさい〳〵と思つた。思ひながら、眩しい

日の影の中に自分の夢の正體を明らさまに見てゐるやうな――赤い色紙をはりつめた中で赤い夢ばかりを見てゐるやうなうつら〱した心持て床の中にゐた。

お久はいまこんな夢を見てゐた。

昨夕茂吉が歸るとき、お久は茂吉の胸を突いて泣かしたことが氣になつて、それをあやまりに茂吉の家へ行かうとして台所から外へ出ると、裏の井戸が例の何倍もの大きさになつてゐてお久には通れないどうしても通ることが出來なくて泣いてる夢だつた。

障子の日影はすつかり消えて、室の中はいつたいに水淺黄色が流れてゐた。窓の外の櫻の花片の一とつ〱から冷めたい息を吹つ込んでくるやうに、夕暮れの薄寒さが室のまはりに泌み入つてきた。衣桁の端に引つかゝつてるお久の羽織裏の紅羽二重の陰にその底冷えの空氣がひそんでゐるかとも思はれるひつそりした室の中に、お久の三味線や、飾り棚の人形がお久の病ひの眠りをめぐつてひそやかな夕暮れの色を含み初めたのだつた。

茶の間で布を切る鋏の音がした。

その途端にお久の目がふと覺めた。そうして又すぐ眠つてしまつた。夜着の襟から横向きに見えてゐるお久の半面は耳の付根まで醉つてる人の樣に赤くなつてゐた。

それが丁度、昨夕茂吉が來た頃の時間だつた。お久はふつと、誰かの手に引き起されて立ち上つたや

うに、夜着を輕く刎ねて床を出た。さうして、

「だあれ。だあれ。」

と云ひながら茶の間の方に出て行つた。薄暗い色のにじんてる長火鉢の傍に、仕事のものが散らかつてゐるばかりで其室には誰もゐなかつた。見えないものを無理に見やうとするお久の眼は、瞳子の開いた樣に据はつてゐた。

お久はぼんやりと鏡の前に坐つた。さうして鏡台の抽斗を開けたり閉めたりした。その時お久の耳に鶏の幾羽も集つた聲が耳を潰されるほどに聞えたのだつた。お久は兩方の耳をおさへながらすつと立つて、台所の方へ出て行つた。台所にも誰もゐなかつた。

お久は手拭かけの横の壁の際にぴたと添つて立つた。さうして水口の方をきよろ〳〵した眼て見た。水口のところは一尺程腰障子が開いてゐた。その時に先刻から其所に立つてゞもゐたらしく、竹の杖のさきと一所に年老つた男の顔がふいと此方を覗いた。お久はその顔を見付けると、

「あたしを呼んだのはこの人だつたんだ。」

と然う思つた。

お久はふら〳〵と其處へ出て行つた。黒い帽子をかぶつた年老つた男の顔はすぐ引つ込んでしまつた。お久はその後を追ふやうにずん〳〵台所の外にはだして出た。

台所の外は三軒の家の台所の庇間になつてゐて、今の男はその塀の傍を彼方向きになつて歩いてゐた。

その男は素足に草履を穿いてゐた。

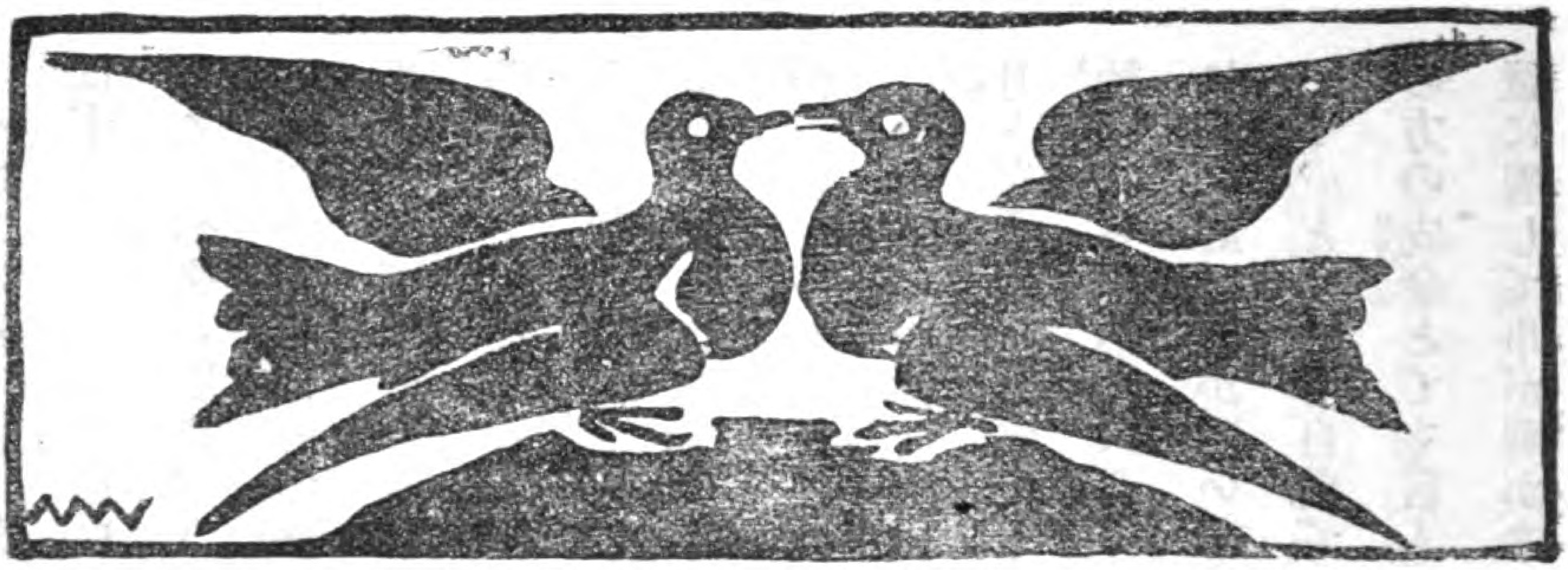
お久は夢中にその男の後を追つて行つた。お久は自分の袖付の上を誰かゞ摘んで、そうして引つ立てられて行くのだと思ひながら二三間先きを歩いて行くその男の後にせつせと從いて行つた。

お久の眼の前に海の水のひろがつてくる樣に、廣い野原が端から端へと擴がつてきた。男の姿は見えなくなつて、いくら歩いても、いくら歩いても、お久の足はだん／＼に後へ退がつてゆくのだつた。後退りしてゆくお久の身體の上に掩ひ被さるやうに、その廣々した野がだん／＼とお久の眼の前に塞つてくるのだつた。………………

いま、台所からお久がはだして外に出た時、母親とおうめは夕食の仕度に其所に立つてゐたのだつた。おうめが聲をかけてもお久は返事もしずに眞つ直ぐに裏の井戸の傍まで行くと、その井戸のまわりをうろ／＼と廻つてゐた。

お久の身體は井戸の前でおうめの手に確かりと抱きすくめられてゐた。

（四月十五日稿）



羽織

小山内薫

澁り〳〵旦那が埼玉へ立つて了ふと、小ひさは直ぐ龜山の所へ電話を掛けました。龜山は次狂言の稽古中で、丁度座の方にゐましたが、電話が掛かると巧みに姿を晦まして、住吉町へ駈けつけました。

貸本屋とメリヤス屋の間の細い路次を這入つて、右つ側の五軒目が小ひさの家です。その途中の左つ側に間口の馬鹿に廣い見番がお關所か何かのやうに控えてゐるのです。龜山は見番の前を如何にも極りが惡さうな樣子をして通りました。箱屋の仙さんと言ふのに聲を掛けられると『いや、どうも。』とさも狼狽したやうに頭を抱へて、逃げるやうに駈け抜けましたが、內心實は極りが惡いのでも、まごついたのでもないのです。龜山の顏には隱しても隱し切れぬ得意の色がありました。

小ひさの家の格子戸を明けて、籐表の雪駄を一足踏み込んだ瞬間に、龜山は得意の頂點に達して、思はずニヤリと獨り笑ひをしました。龜山がこの家へ來るのはこの日が始めてではないのですが、いつでもここへ來る度に、きつと新らしい得意を覺えるのです。

「先づ一座で自前の藝者を色に持つてるのは俺位なもんだらう。丸田がいくら威張つたつて、あいつなあ高が公園地のお茶屋の女中ぢやないか。花山がいくら色師がつたつて、丸抱への年期搾山と來ちやあ、ちよいと世帶染みたおつな遊びも出來まい。先づ俺だね。器量は好しよ、立派に一軒店も張つてるし、旦那は埼玉の歴とした財産家だ。先づ藝者として一點批の打ち所のない女だ。」さういふ女が、自分の爲に旦那を欺して返して、自分の來るのを首を長くして待つてるのかと思ふと、龜山はもう金にも實にも換へ難い或物を摑んだやうな氣がするのでした。

小ひさの得意も龜山に劣らぬものがありました。小ひさは名古屋から「江戸」へ登つて來て、まだ十月とならない藝者でしたが、器量も龜山が思ふ程好くはありませんし、言葉に訛はありますし、まあ取柄と言へば柄が大きくて押し出しが立派だと言ふ位のものですが、何處に好い所があるのか、僅かの內に隨分好い客が附いて、丸抱へて來たのが忽ち叩き分けになり、分けになると間もなく今の埼玉のが附いて、とうとう自前で店を出すやうになり、お酌の一人二人は抱へる身分にもなつたのです、先づ藝者の方の成金とでも言ふべき女なんですね。そこでせめて役者の一人や二人は買はなければ、「江戸」の朋輩に對して巾が利かないとでも思つたのでせう。白羽の矢を立てたのが、中洲の芝居へ出てゐる新派の、

乙部の三枚目で、大工か肴屋でも演ると、ちよいと大向うが唸らうといふ龜山太郎だつたのです。なぜ選りも選つて、鼻の低い、口の大きな、頭の毛の薄い、先づ男として普通以下の器量を持つた龜山に狙ひを附けたのか、それは分かりません。併し、龜山が器量に似合はぬ色男である事は事實で、現に今自分が息子分になつてゐる家の所謂「おつかさん」なる者も、以前は自分の客だつたのです。その關係も最う今は綺麗になつてゐるとか、いやまだ續いてゐるとか、始終仲間の問題になるのでした。小ひさの慧眼は一度か二度龜山を舞臺に見て、早くも彼が稀代の色男たる所以を看破したものと見えます。

龜山が金を使はずに藝者と遊ぶのを名譽としたやうに、小ひさも旦那の金で役者と遊ぶのを名譽としたのです。ですからこの二人が顔を合はしたら最後、近所にゐる者の當てられやうと言つたらありません。時と所とを選ばず、顔と顔を合はした瞬間に、二人は社會に對して無上の權利を感ずるものと見えて人目も恥ぢずに痴態の極を盡すのです。

龜山が格子戸を明けて獨り笑ひをすると、小ひさも長火鉢の前で獨り笑ひをしました。龜山が障子へ手を掛けると、中から小ひさも障子へ手を掛けました。内と外との手は同時に右へ動いて、障子が勢よく明くと、小ひさの顔と龜山の顔とがぶつかりさうにしました。二人は顔を見合はして、同時に又ニヤリとしました。

小ひさは直ぐと龜山を二階へ上げました。旦那の喰べ荒らした膳は早くも綺麗に片附けられて、そこにはもう又新らしいお膳立がしてありました。膳の上の德利と盃と小皿にちよぼッと盛られたこのわた

を見ると、一々それが自分の好みに適つてゐるので、龜山は又ニヤッとしました。

やがて小ひさが上つて來ました。二人は直ぐと盃の取り遣りを始めました。少し醉が廻つて來ると、いつもの癖て、小ひさは國の自慢を始めました。國の自慢と言ふよりは、國にゐた時分の自分の自慢と言つた方が好いてせう。つまり國にゐれば自分は凡そどの位な藝者だと言ふ事を自慢するのてす。龜山は一々小ひさの言ふ事に跋を合はせて、自分が旅て名古屋へ行つた時に、一向客が來ないて、毎日茶屋の二階てきしめんを喰べながら、花ばかり引いてゐた事などを話しました。そして、若しあの時分お前を知つてゐたら、きしめん許りの御厄介にもならないて濟んだらうなどと言ひました。女も、あなたがあたしの土地てそんなに困つてゐたのを、あたしがちッとも知らなかつたのは口惜しい、あたしがその時分あなたを知つてさへゐりやあ、どんな事てもして上げたのにと言ふやうな事を言ひました。

小ひさは龜山に向つて、でも名古屋ぢやあ浮氣をしたんてせうと言ひました。浮氣どころかい、きしめんて五厘花計り引いてゐたんだ。お前こそ向うにやあ好いのが澤山あるんだらう。龜山は斯う言ひました。これが始まりて、話は段々「痴話」といふのに落ちて來ました。二人は手の甲をぶちつこしたり、膝を抓り合つたりして、怪しい笑ひ聲を上げ始めました。

そこへ女中が顏色を變へて上つて來ました。

「大變てすよ、大變てすよ。旦那が歸つて入らつしやいましたよ。」

「旦那が歸つて來たつて。」

「ええ、汽車にお乘り遲れなすつたんですつて。」
「そりや大變だ。」
龜山は顏色を變へました。行きなり二階の窓をガラリと明けて飛び出すと、屋根傳ひに隣りの藝者屋の二階へ飛び込みました。そこは蔦助といふ龜山が知り合ひの老妓の家でした。
小ひさは手早くそこに脫いてあつた鶴の丸の五つ紋の羽織を疊んで、簞笥の中へしまひました。女中は急いでお膳を戶棚の中へ隱しました。
そこへ旦那が上つて來ました。
「天の配劑だね。とう〱乘り遲れたよ。」
「嬉しいわねえ。でも今日急ぎの御用がおありなんてせう。」
「なあに、あすても、あさつてでも構はんのさ。」
旦那は小ひさの顏色に氣が附きました。
「大層好い色だね。」
「今ちよいと一つ稼いて來ましたの。」
「又例の壯俳の所てはあるまいね。」
「冗談言つちや厭てすよ。あんな怪物見たいな奴。」
「さうか。そんなら好いさ。」

と言つて、丁度亀山の羽織の脱いであつた所へ、旦那が又五つ紋の羽織を脱ぎました。

亀山は蔦助の家へ飛び込むと、拜んだりお辭儀をしたりしました。蔦助は隣りの亀山との關係を知つてゐますから、大方(おほかた)を推察して、巧みに帽子や雪駄を取り寄せて呉れました。併し、羽織だけはどうしても取り寄せる事が出來ませんでした。

亀山は幾度も頭を下げて、蔦助の家の裏口から外へ出ました。電車の通る所へ出て、ほッと息をつくと、こんな危い目に會つた事が、なんだか又得意に思はれて來ました。

亀山はその儘家へ歸るのが、つく／＼厭になつて來ました。家へ歸つて、萎びた「おつかさん」の顔を見る事が、甚だしく自分の今の身の上に釣り合はぬやうに思はれたのです。

何處へ行きましたか、亀山はその晩とう／＼家へ歸りませんでした。

あくる朝、小ひさの旦那は愈々今日は歸ると言ひ出しました。小ひさはいそ／＼と着物を揃へたり足袋を出したりしました。そこへ女中が二階から羽織を持つて來ました。

旦那は肌襦袢から長襦袢、下着から着物と、順々に着て、田舍出來らしい恰好の惡い白足袋を穿いて了ふと、立ち上つて後から小ひさに羽織を着せて貰ひました。

旦那は袖に手を通しながら、思はず羽織の紋を見ると、自分の紋の鷹の羽ではなくて、大きく羽根を

廣げた鶴の丸なのです。

「これはなんだ。」

旦那は行きなり肩をゆすつて、羽織を脱ぎ落すと、その大きな白い紋を突き破る許りに人差指て差しました。

一緒の箪笥へ重ねて納つて置いたものですから、女中が忙てゝ龜山の羽織を出して了つたのです。

さあ、それからの悶着と言つたらありませんでした。常から龜山の事を疑つてゐる人が斯う言ふ確な證據を握つたのですから堪りません。小ひさは泣いたり喚いたりした揚句、氣違ひのやうな體裁て家を飛び出して了ひました。淺草の馬道てランプ屋をさせてゐる實の母の所へ逃げて歸つたのです。

その日は丁度龜山の出てゐる芝居の帳元が、何かの義理て久松町の芝居に總見を催す日てした。龜山はなんにも知らずに、友達の所て羽織を借りて、そこへ來てゐましたが、丁度中幕の明いた時分に、茶屋から呼びに來たので、行つて見ると、馬道のお袋が迎ひに來てゐて、これ〳〵斯う〳〵だといふ話なので、びつくりして、帳元に挨拶もせず、直ぐ車で一緒に出掛けて了ひました。

龜山の「おつかさん」は「おつかさん」て、ゆうべ一晩龜山が歸らなかつたので、もう氣が氣てはありません。今日は確に見物て久松町へ行つてる筈だから。一つ捕まへてうんと言つて遣らなきやあと言ふ譯て、丁度龜山が久松町を出た後へ驅けつけて參りました。

「龜山はをりますか。」

「龜山先生ですか。たつた今お歸りになりました。」

「宅へですか。」

「おつかさんが迎ひに入らして、一緒にお歸りになりました。」

「なに、おつかさん。」

「へい。」

茶屋の男は龜山の「おつかさん」を知らなかつたのです。

これはてッきり馬道だなと思ひましたから、龜山の「おつかさん」は直ぐその車で馬道へ駈けつけました。態とランプ屋の五六間手前で車を降りて、そッと店の前まで行つて見ますと、確に見覺えのある籐表の雪駄が土間に脱いであるのです。

障子の中では頻に若い女の啜り泣くやうな聲がします。それをなだめる年寄の聲もします。

「なあに、婆あさへくたばちまへば、きつと一緒になれるんだから。」

と、幾度も繰返して言ふ太い聲は確に龜山でした。

龜山の「おつかさん」は「婆あ」と言ふ言葉を六遍か七遍聞くと、もう堪らなくなつて、

「何が婆あだ。」と言ひながら、店の中へ躍り込みました。

それからの混雜は、丁度ランプ屋が地震にでも會つたやうな騷ぎでした。

○改正定價　金貳拾五錢外に郵税金貳錢（海外郵税拾貳錢但清國を除く）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金壹圓五拾錢	金貳圓拾錢
十二冊	金參圓	金四圓貳拾錢
以上郵税共		

▲但　新年號春秋二期特別號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、即ち一ヶ年通計十五册分の割合なれば一ヶ年分御注文の方は內國は金參圓七拾五錢外國は金五圓貳拾五錢拂込まるべし

送金注意

一郵便爲替　にて御送金の場合は　本鄕西片町十番地反省社　と指定し拂渡局を　東京市東片町局　と指定あれば途中盜取の虞なし

一振替貯金　口座は東京三十四番なり、これにより御送金の方は外に登記料一錢を加えらるべし、然らざれば送金額より差引くにより端金となりて却て面倒となるべし

一郵劵代川　必ず一割增の事

一集金郵便　の便法を利用せらるゝ方は、座ながらにして誌代の拂込をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記集金委託料及送達料金を加えたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし弊社は直ちに其取扱をなすべし

一金一圓迄　金五錢
一金三圓迄　金六錢
一金五圓迄　金七錢
（集金委託料及送達料）

一受領證請求　は必ず返信料金を要す

明治四十五年四月廿八日印刷納本
明治四十五年五月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　藤本兼吉

發行所　東京市本鄕區駒込西片町十番地　反省社
振替口座東京三十四番　電話下谷九一九九　電信略號ハンセイ

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By The Hansei-sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 5.25; Single copy 37 sen including postage. Entered at the Post Office at Los Angels, Cal. U.S.A. as second-class mail matter

明治三十年一月二十九日 第三種郵便物認可 中央公論 第三十七年第五號

MADE IN JAPAN